

香芝市文化財調査報告書

第6集

# 平野2号墳

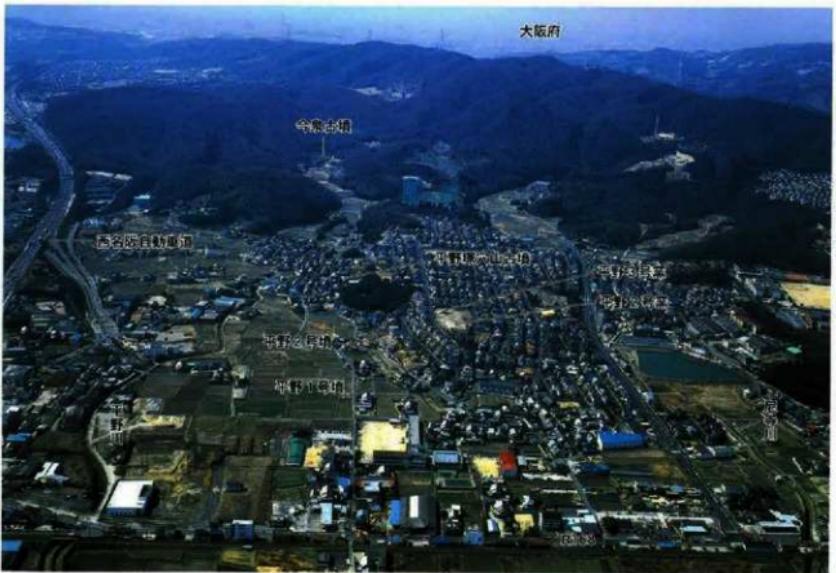
—葛城地域北部における終末期古墳の調査—

平成17年3月

香芝市教育委員会



1. 平野古墳群（平野 1 号墳・平野 2 号墳他）周辺上空の航空写真（南から、上が北）



2. 平野古墳群（平野 1 号墳・平野 2 号墳他）周辺上空の航空写真（東から、上が西）



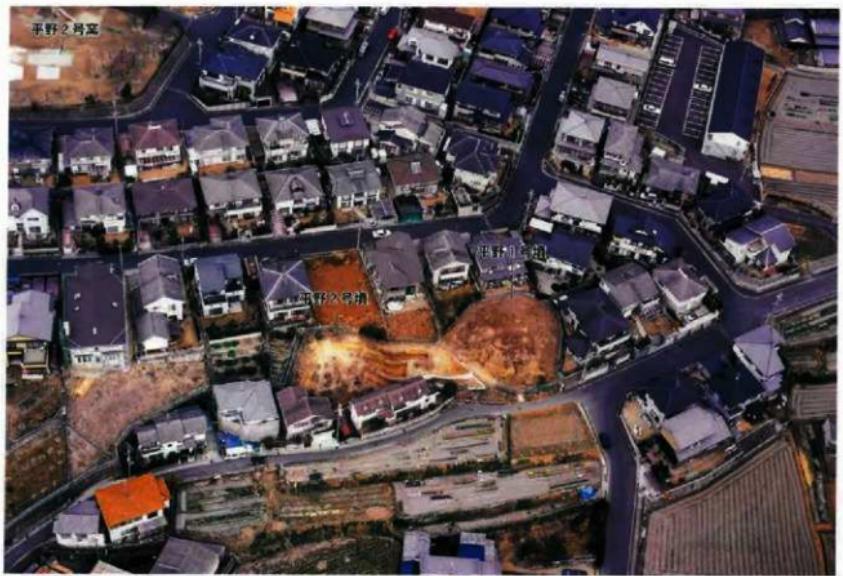
1. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（北東から、上が南西）



2. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）上空の航空写真（南から、上が北）



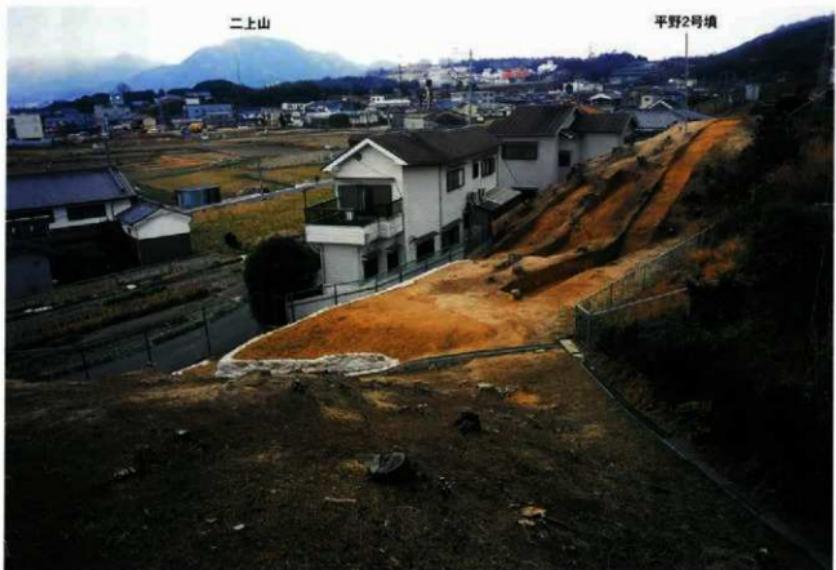
1. 平野古墳群西側付近（平野塚穴山古墳）上空の航空写真（南から、上が北）



2. 平野古墳群東側付近（平野1号墳・平野2号墳）上空の航空写真（南から、上が北）



1. 平野1号墳・平野2号墳上空の航空写真（南から、上が北）



2. 平野1号墳頂部から平野2号墳と二上山を臨む（北東から）



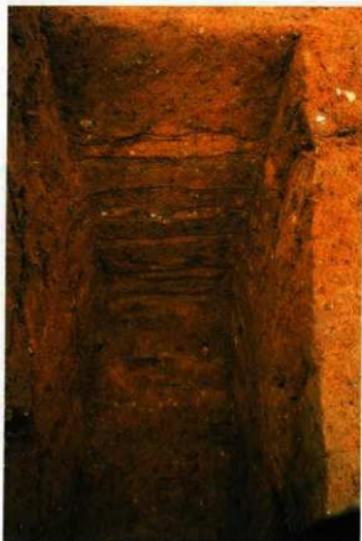
1. 平野 1号墳墳頂部から平野 2号墳を臨む（東から）



2. 平野 2号墳墳丘及び発掘状況（東から）



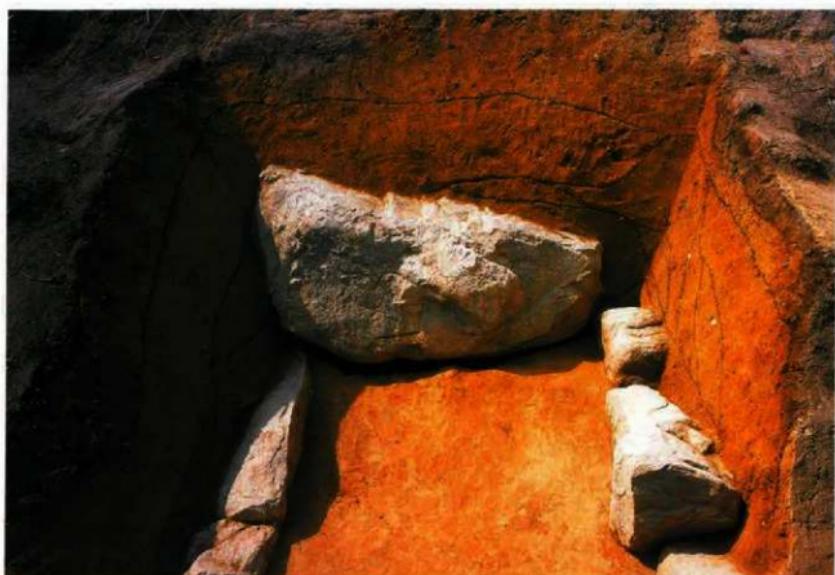
1. 平野2号墳墳丘完掘状況（東から）



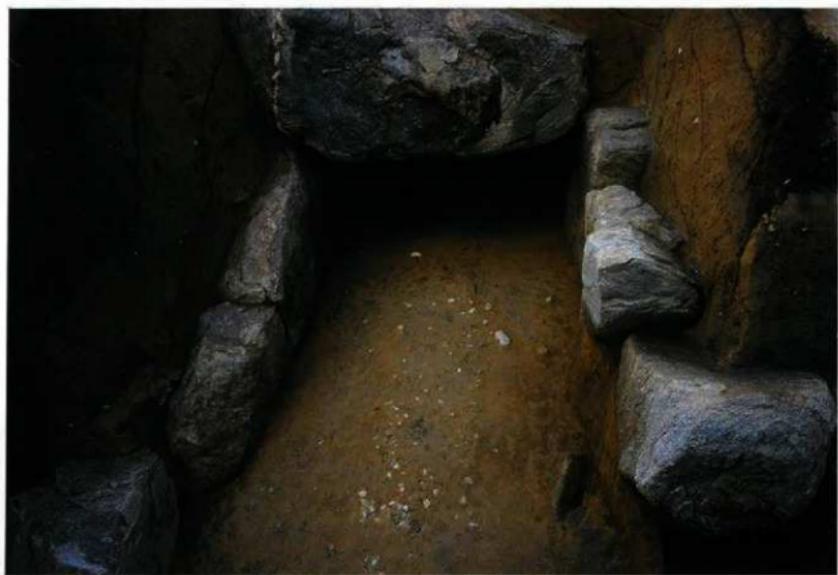
2. 平野2号墳墳頂部の版築状況（東から）



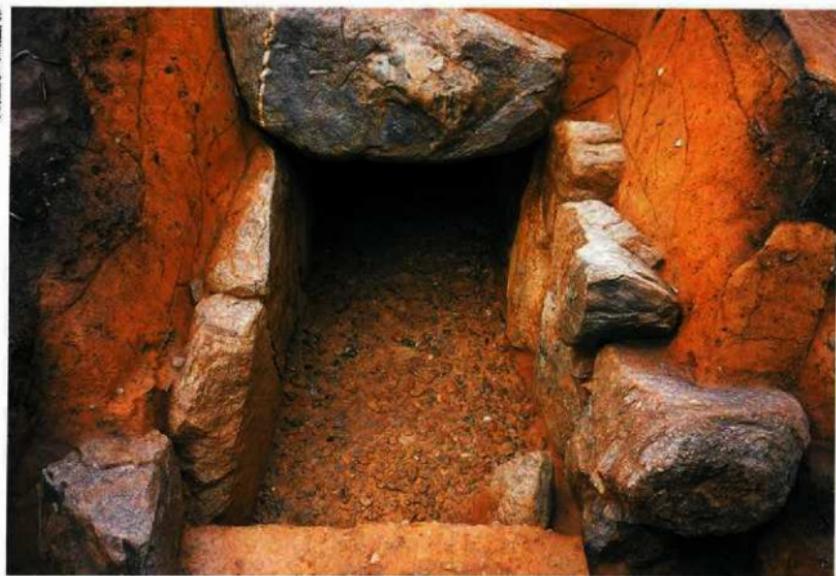
3. 平野2号墳墳丘裾部盛土の堆積状況（東から）



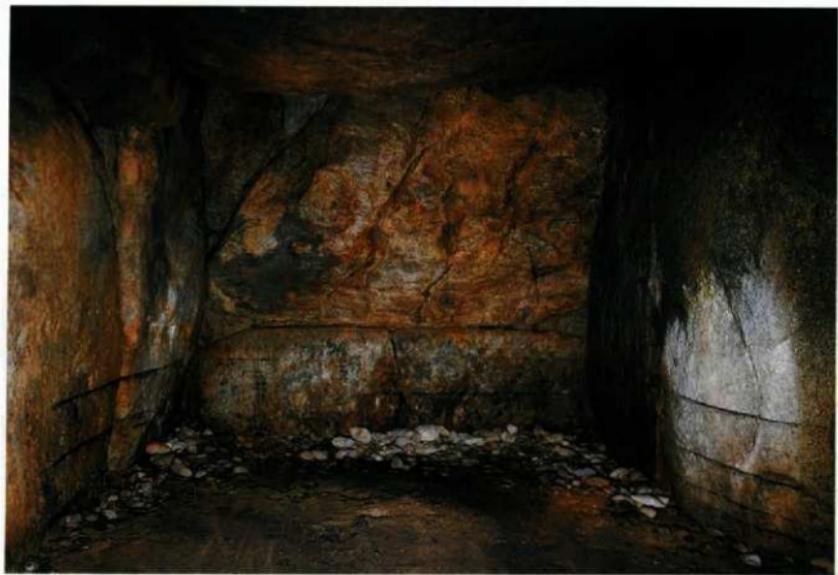
1. 平野 2 号墳横穴式石室検出状況（南から）



2. 平野 2 号墳横穴式石室検出状況（南から）



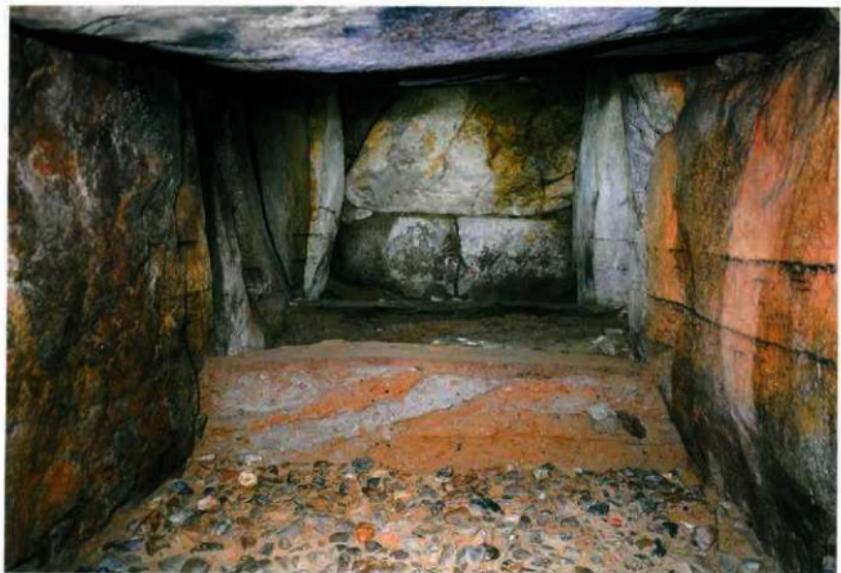
1. 平野 2 号墳横穴式石室完掘状況（南から）



2. 平野 2 号墳横穴式石室進入時の玄室内部の状況（南から）



1. 平野 2 号墳表道付近の土層（セクション B・C・D）堆積状況（南から）



2. 平野 2 号墳玄門付近の土層（セクション C・D）堆積状況（南から）



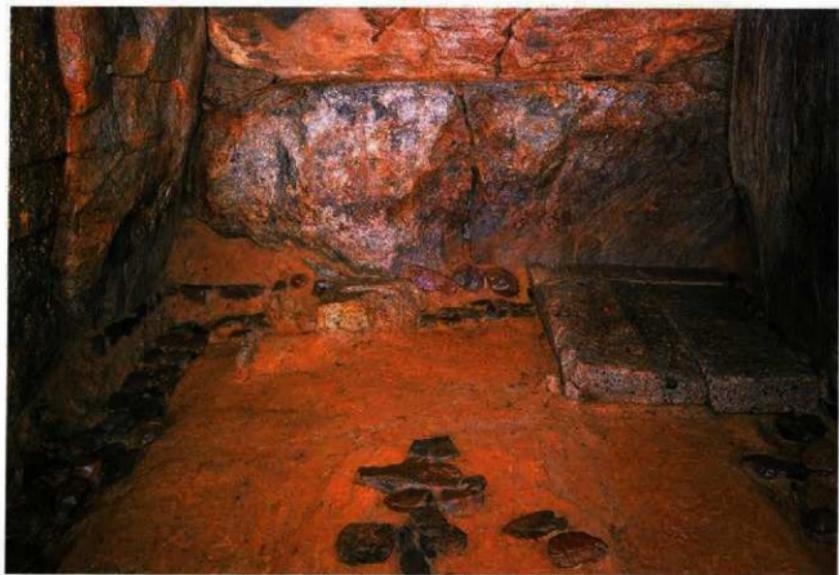
1. 平野2号墳玄室内の土器等出土状況（西から）



2. 平野2号墳玄室内中央部の土層（セクションD）堆積状況（南から）



1. 平野 2号墳玄室内及び奥壁付近の遺物出土状況（南から）



2. 平野 2号墳玄室奥壁付近の凝灰岩敷石と完掘状況（南から）



1. 平野 2 号墳玄室内の棺台基礎と凝灰岩敷石（南から）



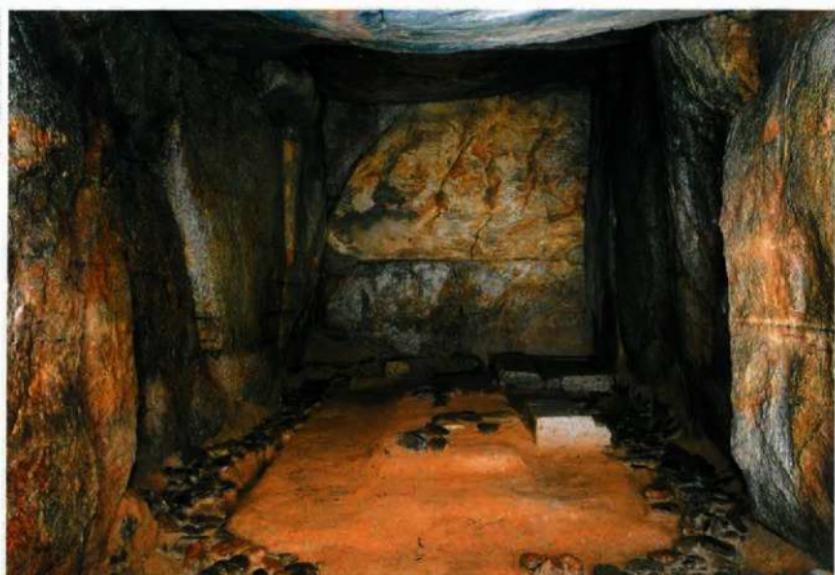
2. 平野 2 号墳右側壁及び玄室奥壁沿いの凝灰岩敷石（南から）



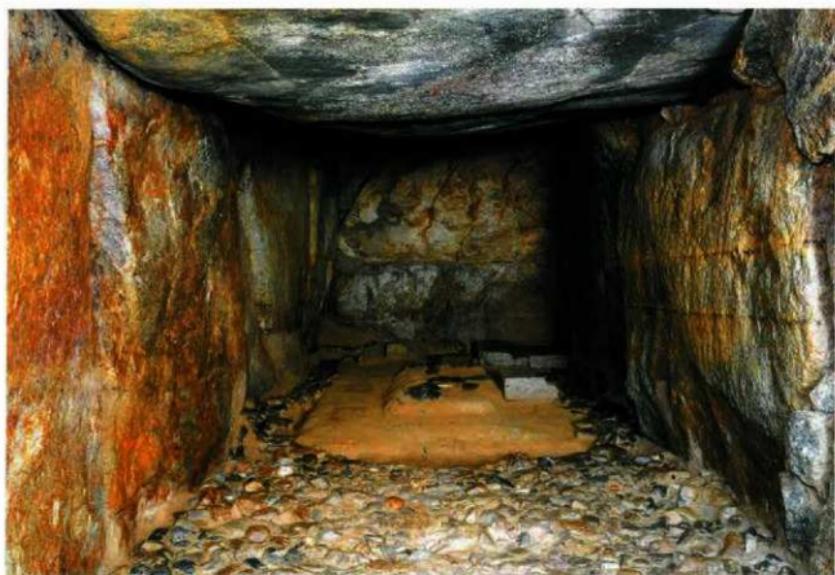
1. 平野2号墳玄室内の遺物出土状況（南から）



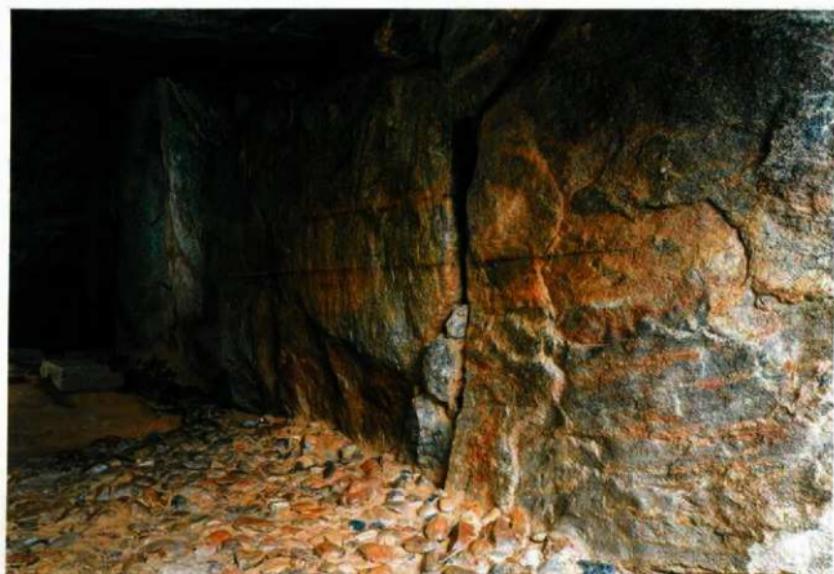
2. 平野2号墳玄室内の完掘状況（南から）



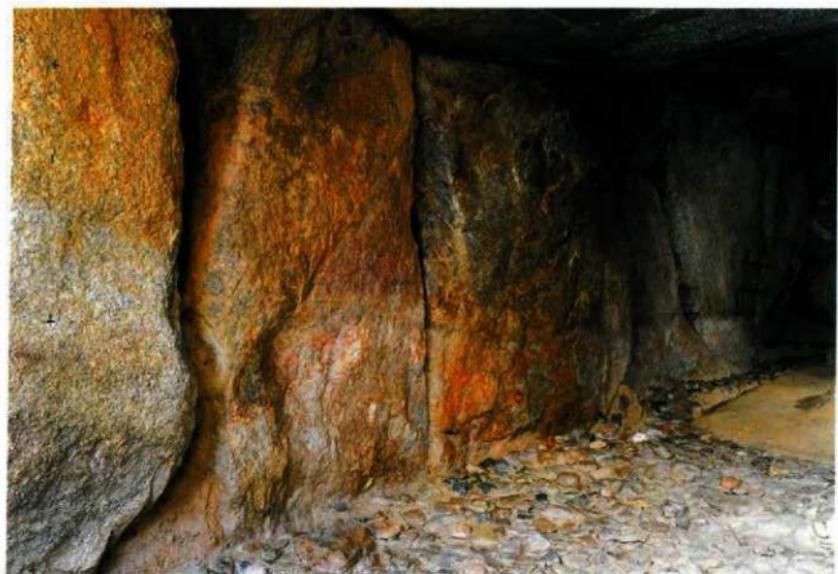
1. 平野 2号墳玄門付近からみた玄室内の完掘状況（南から）



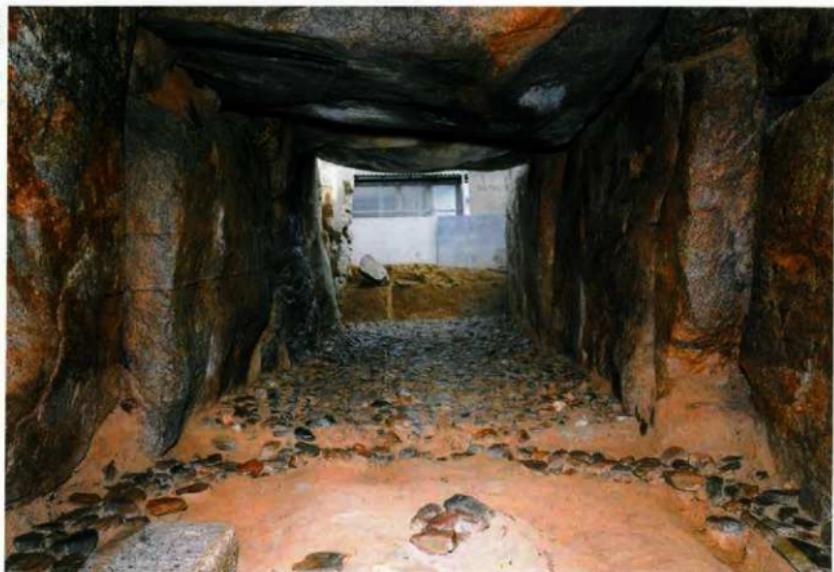
2. 平野 2号墳通路からみた玄室内の完掘状況（南から）



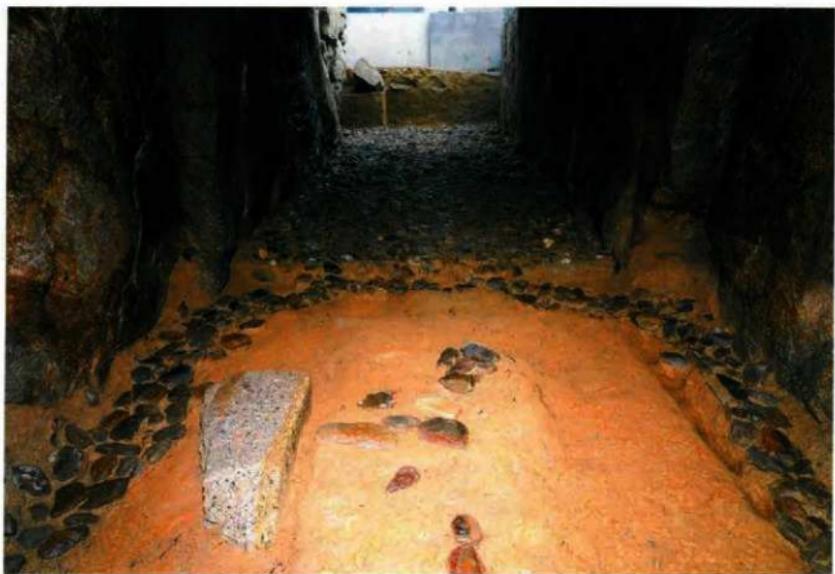
1. 平野 2 号墳玄室漢道右側壁（南西から）



2. 平野 2 号墳玄室漢道左側壁（南東から）



1. 平野 2号墳玄室から漢道を臨む（北から）



2. 平野 2号墳玄室から漢道床面を臨む（北から）

## 序 文

香芝市は奈良県の北西部、奈良盆地の西端に位置し、古代の『万葉集』にもうたわれた二上山を背景に市域が広がっています。

大阪都市圏に接する地理的条件から、現在71,300人を越える人口を擁するベッドタウンとして発展しており、今もなお人口増加の一途をたどっております。

本市は、古くから自然環境に恵まれており、二上山で産出するサヌカイトを利用した石器製作遺跡である二上山北麓遺跡群や飛鳥時代に建立された尼寺廃寺など、多くの貴重な文化財が所在します。

このたび、数ある埋蔵文化財の中でも、平成11年度から平成12年度にかけて国庫補助金事業で範囲確認調査を実施した平野2号墳の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

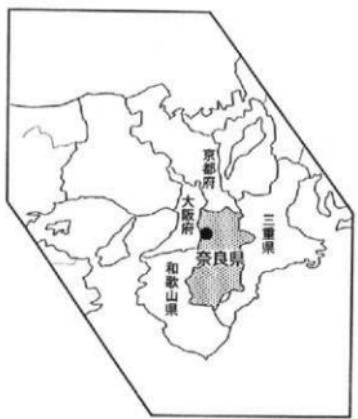
一連の調査では、長らく実態が不明であった平野2号墳が奈良県内でも7世紀代としては屈指の規模を誇る巨大な横穴式石室を持つ終末期古墳であることを確認し、石室内から土製の棺台等の全国的にも珍しい貴重な文化財が出土しました。

平野2号墳の発掘調査にあたりまして、ご協力を賜りました地元の方々をはじめ、報告書作成に際して、ご指導を賜りました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、この報告書が多くの方々の目にふれ、香芝市の文化財に対する理解を深めて頂きますれば幸甚に存じます。

平成17年3月

香芝市教育委員会

教育長 山田 勝治



## 例　　言

1. 本書は平成11年度から平成12年度の2年にかけて、香芝市教育委員会（香芝市二上山博物館）が奈良県香芝市平野1043番地で実施した国庫補助金事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

本書には、平野2号墳の発掘調査報告や平野1号墳横穴式石室の実測成果を始め、平野古墳群の関係資料として、平野塚穴山古墳（国指定史跡）の現況写真や平野古墳群関係文書（平成15年度香芝市指定文化財）の写真を収録・掲載している。

2. 発掘調査は、平成11・12年度国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名：市内遺跡発掘調査

事業者：香芝市

3. 現地調査は下記の組織・体制で実施した。

香芝市教育委員会事務局 生涯学習課 香芝市二上山博物館（館長 石野博信）

第1次調査：平成11年11月11日～平成12年3月10日 調査面積 100m<sup>2</sup>

第2次調査：平成12年7月11日～平成13年3月30日 調査面積 36m<sup>2</sup>

〔調査員〕下大迫幹洋（香芝市二上山博物館学芸員）

〔作業員〕香芝市シルバー人材センター

4. 本書の挿図の座標値は国土座標第VI座標系に基づくものである。また、標高値は海拔高度で示している。

5. 本書の挿図の遺物番号は遺物の種類別ごとに連番で付し、それぞれ、巻末の図版の遺物番号に対応する。

6. 本報告書作成に伴う遺物整理作業をはじめ、遺構や遺物の製図・トレース等の図面作成作業については、遠藤啓輔、金松誠、長谷川透、赤松住奈、有馬絢子、野水宏美の諸氏の協力を得た。

7. 本書の執筆・編集は下大迫が担当した。なお、本書の一部は発掘調査補助員として現地調査に参加した調査関係者によって執筆を分担し、石材の分析については奥川尚氏より玉稿を賜った。執筆分担は下記のとおりで、それ以外の頁は全て編者がおこなった。

第IV章3（3）②・③〔113-115頁〕：長谷川透 第V章1〔131-134頁〕：奥田尚

第VI章2〔167-179頁〕：遠藤啓輔 第VI章4〔193-198頁〕：金松誠

8. 本書の掲載写真のうち、「平野古墳群縦図」（図版85、図版88～94）と平野塚穴山古墳（図版95～100）の全景写真是阿南辰秀氏（阿南写真工房）、平野2号墳棺の受台（図版82～84）は岡村直樹氏（フォトスタジオファーム）の撮影によるものである。それ以外は編者がおこなった。

9. 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録一式及び出土遺物は、香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17-17）で保管・管理している。

10. 調査後の処置として、平野2号墳の出土品のうち、棺台を構成する「埠」9点と「埠の受台」一式については、指定名称「平野2号墳棺台」として平成16年3月20日付で香芝市指定文化財（有形文化財・考古資料）に指定されている。

- 11.これまで平野2号墳関係の調査の概要については、香芝市教育委員会より下記の調査概要報告書等の出版物が刊行されているが、個別の記載事項について異なる点については本書の記載事項・内容が優先する。
- 香芝市教育委員会編 2000 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報13」 香芝市教育委員会  
香芝市教育委員会編 2001 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14」 香芝市教育委員会  
香芝市教育委員会編 2002 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報15」 香芝市教育委員会
- 12.現地調査及び出土遺物の整理、本書作成に際しては、下記の方々より有益な御指導・御教示を頂いた。御芳名を記して感謝の言葉にかえさせて頂きます（50音順、敬称略、所属はいずれも調査当時の所属を表す）。
- 青木勘時（天理市教育委員会）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、猪熊兼勝（橘女子大学）、石田成年（柏原市教育委員会）、泉森峻（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、泉武（天理市教育委員会）、伊藤禪浩（羽曳野市教育委員会）、今尾文昭（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、植野浩三（奈良大学）、梅本康広（向日市埋蔵文化財センター）、太田一宏（河内長野市教育委員会）、太田亮、大塚初重（明治大学名誉教授）、岡林孝作（奈良県立橿原考古学研究所）、奥田尚（八尾市立刑部小学校）、尾山和彦、勝部明生（龍谷大学）、河上邦彦（奈良県立橿原考古学研究所）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、北野耕平（神戸商船大学名誉教授）、小泉俊夫（元香芝市文化財保護審議会会長・奈良県立橿原考古学研究所共同研究員）、小林義孝（大阪府教育委員会）、小浜成（大阪府教育委員会）、神庭滋（新庄町教育委員会・現葛城市教育委員会）、木下亘（奈良県立橿原考古学研究所）、木許守（御所市教育委員会）、木場幸弘（高取町教育委員会）、西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）、坂野平一郎（広陵古文化会会长）、清水昭博（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、白石太一郎（国立歴史民俗博物館）、辰巳和弘（同志社大学）、塚口義信（堺女子短期大学）、寺沢薰（奈良県教育委員会）、中岡敬善、西山要一（奈良大学）、橋本輝彦（桜井市教育委員会）、服部伊久男（大和郡市教育委員会）、林部均（奈良県立橿原考古学研究所）、廣瀬和雄（奈良女子大学）、藤田和尊（御所市教育委員会）、古谷毅（東京国立博物館）、堀田啓一（高野山大学）、松田真一（奈良県立橿原考古学研究所）、樹本哲（大阪府教育委員会）、水野正好（奈良大学）、宮原晋一（奈良県立橿原考古学研究所）、望月幹夫（東京国立博物館）、本村充保（奈良県立橿原考古学研究所）、安村俊一（柏原市教育委員会）、山本彰（大阪府立近つ飛鳥博物館）、山川均（大和郡市教育委員会）、吉岡藤雄、吉村公男（河合町教育委員会）、吉村清平、吉村佳則、和田晴吾（立命館大学）

## 本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	1
1 調査の契機	1
2 調査の経過	2
(1) 調査の経過と発掘方法	2
①第1次調査	
②第2次調査	
(2) 調査後の処置	5
3 調査日誌	6
(1) 第1次調査	6
(2) 第2次調査	9
第Ⅱ章 位置と環境	19
1 地理的環境	19
(1) 地理的環境	19
(2) 地形・地質的環境	20
2 歴史的環境	22
①旧石器時代～縄文時代	
②弥生時代	
③古墳時代	
④古代	
⑤中世	
3 平野古墳群	33
(1) 平野古墳群と周辺遺跡	33
(2) 平野古墳群	34
①平野1号墳（平野車塚古墳）	
②平野2号墳	
③平野3号墳・平野4号墳	
④平野塚穴山古墳	
⑤平野村内の「岩屋」と記された古墳	
4 古記録にみる平野古墳群	42
(1) 平野古墳群に関する文献史料について	42
(2) 顯宗陵・武烈陵の陵墓の比定の変遷について	42
①古代の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵	
②近世の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵（記された年代根拠のある文献）	
③近世の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵（記された年代が不明確な文献）	

④近代の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵

第Ⅲ章 墳丘と埋葬施設	67
1 墳丘	67
(1) 立地	67
(2) 外形	68
(3) 墳丘と石室の関係	68
(4) 墳丘の堆積土と墳丘盛土(墳丘の構造)	70
①墳丘堆積土	
②墳丘盛土(形成層)	
(5) 石室の堆積土	71
2 埋葬施設	72
(1) 石室の概略	72
(2) 玄室の規模・構造	72
①棺台基礎(上台)	
②凝灰岩敷石	
③仕切石状の施設と玄室の閉塞施設	
④排水溝	
(3) 渓道の規模・構造	79
(4) 棺について	80
(5) 築造時期について	80
3 石室内の遺物出土状況	81
(1) 第1遺構面: 表層(石室開口時)の遺物の出土状況	81
(2) 第2遺構面: 炭化物の検出状況	81
(3) 第3遺構面: 玄室内遺物の出土状況	81
第Ⅳ章 遺物	86
1 出土遺物の内訳	86
2 墳丘盛土内・墳丘堆積土出土遺物	86
(1) 墳丘盛土内出土遺物	86
(2) 墳丘堆積土出土遺物	87
①渓道右側壁堆積土出土遺物	
②墳丘斜面堆積土出土遺物	
③墳丘裾部堆積土出土遺物	
3 横穴式石室内出土遺物	90
(1) 横穴式石室内の出土遺物について	90
(2) 古墳に伴う遺物	90
①凝灰岩	

②刀子	
③釣	
④古墳時代の土器	
⑤壇	
⑥棺の受台	
(3) 古墳に伴わない遺物	106
①土器・瓦	
②錢貨	
③鎌	
④米粒状遺物	
 第V章 自然科学分析	131
1 平野2号墳石室石材の石種	131
(1) はじめ	131
(2) 石種の特徴と採石地	131
(3) 石材の使用傾向	132
2 平野2号墳石室内部調査に伴う石室内外の温湿度の変化について	135
(1) はじめ	135
(2) 石室内外の温湿度の変化について	135
(3) まとめ	135
3 平野2号墳石室内部に残る滲水線について	141
(1) はじめ	141
(2) 石室内の滲水線について	141
(3) まとめ	142
 第VI章 平野1号墳の横穴式石室	143
1 はじめ	143
2 横穴式石室	143
(1) 横穴式石室の概要	143
(2) 玄室の規模・構造	143
(3) 芙道の規模・構造	145
3 まとめ	146
 第VII章 考察	147
1 終末期古墳出土の上製棺台について	147
(1) はじめ	147
(2) 塚廻古墳出土縁釉陶棺について	147
①塚廻古墳の概要	

②塚廻古墳縁軸陶棺（棺台）について	
(3) 平野 2 号墳出土棺の受台について	152
(4) 土製棺台の比較・検証	153
(5) まとめ	162
2 平野 1 号墳・平野 2 号墳の築造規格	167
(1) はじめに	167
(2) 平野 1 号墳・平野 2 号墳の石室築造規格	167
①基準長の推定	
②石室築造規格の復原	
(3) 平野 1 号墳・平野 2 号墳の墳丘築造規格	169
①墳丘築造規格の復原	
②平野 1 号墳墳丘と平野 2 号墳墳丘の相互関係	
(4) 平野 1 号墳・平野 2 号墳の使用尺	169
①古墳時代の尺度研究の整理	
②平野 1 号墳・平野 2 号墳の使用尺	
(5) 同時代の古墳との比較	171
①牧野古墳	
②秋殿南（秋殿）古墳	
③平野塚穴山古墳	
(6) まとめ	173
3 平野古墳群の研究	180
(1) 平野 1 号墳と平野 2 号墳	180
(2) 平野古墳群における各古墳の築造時期と変遷	182
(3) 平野古墳群の地域的特質	184
①凝灰岩使用石室の系譜	
②博と棺台	
③漆塗棺	
(4) 平野古墳群の被葬者像について	189
4 平野 2 号墳における石室再利用とその歴史的背景	193
(1) はじめに	193
(2) 当該期における平野古墳群周辺の環境	193
(3) 平野 2 号墳における石室再利用	195
(4) まとめ	196
第Ⅸ章 総括	199

## 図目次

図1 宅地造成前の平野1号墳・平野2号墳の地形測量図（S = 1/2,000）	2
図2 平野2号墳第1次調査発掘調査区位置図（S = 1/400）	3
図3 横穴式石室内発掘調査区配置図	4
図4 香芝市全城図及び平野2号墳位置図（S = 1/60,000）	19
図5 大和・河内の古道	20
図6 香芝市周辺の地質図	21
図7 香芝市及び周辺の遺跡分布図	29
図8 平野古墳群周辺の遺跡分布図（S = 1/20,000）	33
図9 平野古墳群周辺の条里復元図と平野古墳群の分布図（S = 1/6,000）	35
図10 平野古墳群分布図（S = 1/5,000）	36
図11 平野3号墳横口式石槨（S = 1/100）	38
図12 平野塚穴山古墳横口式石槨（S = 1/100）	39
図13 『大和国古墳墓取調書』	60
図14 『山陵絵図』	61
図15 『日嗣御子・御陵』	61
図16 『蘭笠乃志づく』	62
図17 『陵墓図』	62
図18 『御陵所考』	62
図19 『廟陵記』	63
図20 『大和国古墳墓取調書』	63
図21 『諸陵周垣成就記』	64
図22 『日嗣御子・御陵』	64
図23 『陵墓図』	65
図24 『御陵所考』	65
図25 『廟陵記』	66
図26 『大和国古墳墓取調書』	66
図27 平野2号墳の立地と横穴式石室の位置（S = 1/400）	67
図28 平野2号墳の墳丘と横穴式石室（S = 1/200）	68
図29 平野2号墳墳丘断面図（S = 1/200）	69
図30 平野2号墳横穴式石室見通図（S = 1/40）	69
図31 平野2号墳墳丘復原図・調査区土層断面図（S = 1/100）	折込図
図32 平野2号墳横穴式石室内土層堆積状況図（S = 1/40）	折込図
図33 平野2号墳横穴式石室災測図（S = 1/40）	折込図
図34 平野2号墳玄室内平面・断面図（S = 1/30）	76
図35 平野2号墳玄室床面の凝灰岩敷石配置復原図（S = 1/25）	77

図36	横穴式石室内表層（石室開口時）の遺物出土状況図（S = 1 / 30）	82
図37	横穴式石室内炭化物の検出状況図（S = 1 / 30）	83
図38	横穴式石室玄室内の遺物出土状況図（S = 1 / 30）	84
図39	横穴式石室玄室内の遺物出土状況拡大図	85
図40	墳丘盛土内出土遺物（S = 1 / 3）	86
図41	羨道右側壁堆積土・墳丘斜面等堆積土出土遺物（S = 1 / 3）	87
図42	墳丘裾部堆積土出土遺物（S = 1 / 3）	89
図43	刀子実測図（S = 1 / 2）	90
図44	釘実測図（S = 1 / 1）	90
図45	平野2号墳横穴式石室内出土土器1（S = 1 / 3）	91
図46	埠1・埠2実測図及び拓影（S = 1 / 4）	95
図47	埠3・埠4実測図及び拓影（S = 1 / 4）	96
図48	埠5実測図及び拓影（S = 1 / 4）	97
図49	埠6実測図及び拓影（S = 1 / 4）	98
図50	埠7・埠8実測図及び拓影（S = 1 / 4）	99
図51	埠9実測図及び拓影（S = 1 / 4）	100
図52	横穴式石室内の埠接合関係図（S = 1 / 60）	101
図53	平野2号墳棺の受台実測図及び拓影（S = 1 / 10）	折込図
図54	棺の受台接合関係図（S = 1 / 60）	103
図55	平野2号墳出土埠と棺の受台の使用方法と棺の埋葬形態	104
図56	棺の受台の安置状況（S = 1 / 25）	105
図57	横穴式石室内出土土器2（S = 1 / 3）	108
図58	横穴式石室内出土土器3（S = 1 / 3）	109
図59	横穴式石室内出土土器4（S = 1 / 3）	110
図60	横穴式石室内出土土器5（S = 1 / 3）	111
図61	横穴式石室内出土土器6（S = 1 / 3）	112
図62	錢貨拓影（S = 1 / 1）	114
図63	鎌実測図（S = 1 / 2）	115
図64	平野2号墳横穴式石室の石材石種識別図（S = 1 / 80）	134
図65	平野2号墳横穴式石室の温湿度変化（8・9月）	136
図66	平野2号墳横穴式石室の温湿度変化（10・11月）	137
図67	平野2号墳横穴式石室の漏水線	142
図68	平野1号墳横穴式石室（S = 1 / 200）	144
図69	平野1号墳横穴式石室実測図（S = 1 / 40）	折込図
図70	平野1号墳墳丘断面図（S = 1 / 200）	145
図71	塚廻古墳周辺の古墳分布	148
図72	塚廻古墳横口式石槨実測図（S = 1 / 80）	149
図73	塚廻古墳縄釉陶棺実測図	151

図74 平野 2 号墳棺の受台実測図	155
図75 平野 2 号墳棺の埋葬形態想像図	157
図76 塚廻古墳棺の埋葬形態想像図	157
図77 龜田御坊山 3 号墳陶棺の身部 ( $S = 1/20$ )	160
図78 陵山里東下塚古墳	161
図79 平野 1 号墳石室築造規格	174
図80 平野 2 号墳石室築造規格	174
図81 平野 2 号墳床面構築物	175
図82 平野 2 号墳と平野塚穴山古墳	175
図83 平野 2 号墳と平野 4 号墳	175
図84 平野 1 号墳(右)と平野 2 号墳(左)の墳丘築造規格	176
図85 平野 1 号墳(右)と平野 2 号墳(左)の墳丘築造規格	176
図86 牧野古墳墳丘と石室の位置関係	177
図87 秋殿南古墳石室築造規格	177
図88 平野塚穴山古墳石室築造規格	178
図89 平野塚穴山古墳と陵山里東下塚古墳の比較	178
図90 陵山里東下塚古墳石室築造規格	178
図91 平野 1・2 号墳墳丘縦断面合成図 ( $S = 1/200$ )	180
図92 平野 1・2 号墳横穴式石室合成図 ( $S = 1/70$ )	181
図93 平野古墳群における古墳の変遷	183
図94 河内・大和の凝灰岩を使用する終末期古墳の分布	186
図95 墳と土製の棺台を使用する終末期古墳の分布	188
図96 中世の平野古墳群周辺の環境	193

## 別添図目次

- 別添図 1 平野 1・2 号墳調査前の墳丘及び周辺の地形測量図 ( $S = 1/200$ )  
 別添図 2 平野 1・2 号墳墳丘地形測量図・墳丘断面図及び横穴式石室位置図・横穴式石室見通図 ( $S = 1/200$ )  
 別添図 3 平野 2 号墳横穴式石室実測図 ( $S = 1/30$ )  
 ※別添封筒に収納

## 写真目次

写真 1	平野 2 号墳棺の受台復元後の状況	5
写真 2	墳丘の調査状況	6
写真 3	墳丘の調査状況	6
写真 4	墳丘の調査状況	7
写真 5	墳丘南側での羨道側壁検出状況	7
写真 6	墳丘の調査状況	8
写真 7	墳丘の調査状況	8
写真 8	羨道側壁の検出状況	8
写真 9	墳丘南側での天井石の検出状況	9
写真10	天井石・羨道側壁の検出状況	9
写真11	羨道の検出状況	10
写真12	羨道内の調査状況	10
写真13	羨道内の調査状況	11
写真14	羨道内の調査状況	11
写真15	石室内排出上中の遺物選別状況	12
写真16	羨道内の調査状況	12
写真17	玄室内的調査状況	13
写真18	羨道内の調査状況	13
写真19	玄室内的調査状況	14
写真20	玄室内的調査状況	14
写真21	玄室内的調査状況	15
写真22	羨道内の調査状況	15
写真23	羨道内の調査状況	16
写真24	羨道内の調査状況	16
写真25	羨道内の調査状況	17
写真26	報道関係者への記者発表	18
写真27	下田東遺跡採集の押型文土器	22
写真28	狐井遺跡出土深鉢型土器	22
写真29	藤ノ木丁遺跡弥生土器出土状況	23
写真30	別所城山 2 号墳出土札甲	23
写真31	狐井城山古墳	23
写真32	伝今泉出土銀装大刀	24
写真33	下川東古墳出土馬形埴輪	24
写真34	鎌田遺跡建築部材出土状況	24
写真35	高山石切場遺跡石切遺構	24

写真36	高山石切場遺跡出土宝塔未製品	25
写真37	平野5号窯	25
写真38	下田東遺跡出土木製軸（後輪）	25
写真39	尼寺庵寺塔基壇跡心礎と礎石	26
写真40	尼寺庵寺出土舍利莊嚴具	26
写真41	威奈人村金銅製骨藏器	26
写真42	高山火葬墓	27
写真43	下田東遺跡出土人面墨書き土器	27
写真44	下田東遺跡の環濠跡	27
写真45	『御陵之絵図』にみる平野1号墳・平野2号墳・平野3号墳・平野4号墳	37
写真46	『武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』	38
写真47	『顯宗帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』	39
写真48	『平野村絵図』に「岩屋」と記された古墳	40
写真49	『平野村絵図』	60
写真50	『御陵之絵図』	60
写真51	『顯宗帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』	63
写真52	『平野村絵図』	63
写真53	『武烈帝陵牛垣取建等ニ付請書付絵図』	66
写真54	『御陵之絵図』	66
写真55	玄室中央部の棺台基礎	73
写真56	玄室奥壁沿いの凝灰岩敷石	74
写真57	玄室床面の凝灰岩敷石の配列	75
写真58	玄門袖石に残る加工痕跡	78
写真59	仕切石状の加工物の設置痕跡	78
写真60	玄室内の排水溝	79
写真61	米粒状遺物	115
写真62	平野2号墳横穴式石室の玄室側壁・奥壁の滲水線	141
写真63	塚廻古墳縄緑釉陶棺全容	154
写真64	平野2号墳棺の受台全容	155
写真65	アカハゲ古墳の横口式石櫨・奥室床面に付着した漆喰	158
写真66	塚廻古墳の横口式石櫨・前室床面の磚敷	158
写真67	陵山里東下塚古墳石室床面の碑と棺台	161
写真68	石造線刻阿弥陀如来半像	195

## 表目次

表1	香芝市周辺の主要遺跡一覧	28
表2	元禄年間以降の顯宗陵・武烈陵探索・比定の変遷一覧	42
表3	平野古墳群に関する文献史料一覧	43
表4	平野2号墳出土塚の法量一覧	93
表5	平野2号墳棺の受台法量	102
表6	平野2号墳横穴式石室内出土錢貨法量一覧	113
表7	平野2号墳第1・2次調査出土上器等觀察表	120~130
表8	平野2号墳横穴式石室内外の温湿度の月別平均値	135
表9	平野2号墳横穴式石室内調査時の温湿度変化	138~140
表10	国内の漆塗棺一覧	150
表11	塙廻古墳縄袖陶棺と平野2号墳棺の受台の法量等一覧	153
表12	近畿地方の棺台を持つ終末期古墳一覧	159
表13	平野塚穴山古墳基準尺	172
表14	平野山墳群の石室規模の比較	184
表15	茅渟王關係図	190

## 図版目次

- 卷頭原色図版 1 1. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（南から、上が北）  
2. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（東から、上が西）
- 卷頭原色図版 2 1. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（北東から、上が南西）  
2. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）上空の航空写真（南から、上が北）
- 卷頭原色図版 3 1. 平野古墳群西側付近（平野塚穴山古墳）上空の航空写真（南から、上が北）  
2. 平野古墳群東側付近（平野1号墳・平野2号墳）上空の航空写真（南から、上が北）
- 卷頭原色図版 4 1. 平野1号墳・平野2号墳上空の航空写真（南から、上が北）  
2. 平野1号墳墳頂部から平野2号墳と二上山を臨む（北東から）
- 卷頭原色図版 5 1. 平野1号墳墳頂部から平野2号墳を臨む（東から）  
2. 平野2号墳墳丘及び縁検出状況（東から）
- 卷頭原色図版 6 1. 平野2号墳墳丘完掘状況（東から）  
2. 平野2号墳墳頂部の版築状況（東から）  
3. 平野2号墳墳丘裾部盛土の堆積状況（東から）
- 卷頭原色図版 7 1. 平野2号墳横穴式石室検出状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室検出状況（南から）
- 卷頭原色図版 8 1. 平野2号墳横穴式石室完掘状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室進入時の玄室内部の状況（南から）
- 卷頭原色図版 9 1. 平野2号墳漢道付近の土層（セクションB・C・D）堆積状況（南から）  
2. 平野2号墳玄門付近の土層（セクションC・D）堆積状況（南から）
- 卷頭原色図版10 1. 平野2号墳玄室内の土器等出土状況（西から）  
2. 平野2号墳玄室内中央部の土層（セクションD）堆積状況（南から）
- 卷頭原色図版11 1. 平野2号墳玄室内及び奥壁付近の遺物出土状況（南から）  
2. 平野2号墳玄室奥壁付近の凝灰岩敷石と完掘状況（南から）
- 卷頭原色図版12 1. 平野2号墳玄室内の棺台基礎と凝灰岩敷石（南から）  
2. 平野2号墳右側壁及び玄室奥壁沿いの凝灰岩敷石（南から）
- 卷頭原色図版13 1. 平野2号墳玄室内の遺物出土状況（南から）  
2. 平野2号墳玄室内の完掘状況（南から）
- 卷頭原色図版14 1. 平野2号墳玄門付近からみた玄室内の完掘状況（南から）  
2. 平野2号墳漢道からみた玄室内の完掘状況（南から）

卷頭原色図版15 1. 平野2号墳玄室羨道右側壁（南西から）

2. 平野2号墳玄室羨道左側壁（南東から）

卷頭原色図版16 1. 平野2号墳玄室から羨道を臨む（北から）

2. 平野2号墳玄室から羨道床面を臨む（北から）

図版扉 平野2号墳羨道からみた玄室内（合成写真）

図版1 1. 二上山麓を中心とする大阪府と奈良県境付近の航空写真（昭和22年撮影）と東西の主要街道及び遺跡の分布（上が北）

図版2 1. 奈良盆地西部の航空写真（昭和22年撮影）と遺跡の分布（上が北）

図版3 1. 香芝市北部の航空写真（昭和40年撮影）と遺跡の分布（上が北）

図版4 1. 平野古墳群と尼寺北廐寺周辺の航空写真（昭和40年撮影）と遺跡の分布（上が北）

図版5 1. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（昭和38年撮影、上が北）

2. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（平成12年撮影、上が北）

図版6 1. 平野1号墳・平野2号墳航空写真（東上空から、上が西）

2. 平野1号墳・平野2号墳航空写真（南上空から、上が北）

3. 平野1号墳墳頂部より平野2号墳と二上山を臨む（北東から）

図版7 1. 平野1号墳（平成6年頃）の状況（南から）

2. 平野1号墳樹木伐採後・測量時の状況（南から）

3. 平野1号墳横穴式石室現況（南から）

図版8 1. 平野1号墳横穴式石室玄室から羨道を臨む

2. 平野1号墳横穴式石室玄室右側壁（南西から）

3. 平野1号墳横穴式石室玄室右側壁（西から）

図版9 1. 平野1号墳横穴式石室奥壁（南から）

2. 平野1号墳横穴式石室羨道左側壁（北東から）

3. 平野1号墳横穴式石室羨道左側壁（南東から）

図版10 1. 平野1号墳横穴式石室羨道左側壁（北東から）

2. 平野1号墳横穴式石室羨道右側壁（北西から）

3. 平野1号墳横穴式石室羨道右側壁（西から）

図版11 1. 平野2号墳昭和56年当時の状況（北西から）

2. 平野2号墳樹木伐採後・調査前の状況（東から）

3. 平野2号墳調査区全景（東から）

図版12 1. 平野2号墳第1・2・3調査区墳丘の礫集積箇所検出状況（東から）

2. 平野2号墳第1・2・3調査区墳丘の礫集積箇所検出状況（北東から）

3. 平野2号墳第3調査区墳丘裾部の礫集積箇所検出状況（東から）

図版13 1. 平野2号墳第3調査区墳丘裾部の礫集積箇所と土器の検出状況（東から）

2. 平野2号墳第3調査区墳丘裾部の礫検出状況・北壁上層堆積状況（南から）

3. 平野 2 号墳第 3 調査区墳丘部完掘後の北壁上層堆積状況（南から）
- 図版14 1. 平野 2 号墳第 1・2・3 調査区先掘状況（東から）  
2. 平野 2 号墳第 2 調査区墳丘部盛土の状況（東から）  
3. 平野 2 号墳第 1 調査区墳丘墳頂部版築の状況（東から）
- 図版15 1. 平野 2 号墳第 1 調査区南壁土層堆積状況（北から）  
2. 平野 2 号墳第 1 調査区南壁土層堆積状況と墳丘盛土の状況（北東から）  
3. 平野 2 号墳第 2 調査区墳丘部南壁土層堆積状況（北から）
- 図版16 1. 平野 2 号墳第 3 調査区墳丘部北壁の土層堆積状況（南から）  
2. 平野 2 号墳第 4 調査区茨道側壁検出状況（東から）  
3. 平野 2 号墳第 4 調査区茨道左側壁検出状況と土層堆積状況（東から）
- 図版17 1. 平野 2 号墳第 4 調査区横穴式石室検出状況（南から）  
2. 平野 2 号墳第 4 調査区中央部土層堆積状況と横穴式石室検出状況（東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室検出状況（南から）
- 図版18 1. 平野 2 号墳第 4 調査区北壁と天井石上部の土層堆積状況（南から）  
2. 平野 2 号墳第 4 調査区西壁と茨道側壁上部の土層堆積状況（東から）  
3. 平野 2 号墳第 4 調査区東壁と茨道側壁上部の土層堆積状況（西から）
- 図版19 1. 平野 2 号墳横穴式石室検出状況（南から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内進入時の状況・茨道から玄室を臨む（南から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内进入時の状況・玄室から茨道を臨む（北から）
- 図版20 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内部の状況と奥壁付近表面に散乱する砾（南から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁左隅の表面に散乱する砾と土器（東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁付近の表面に散乱する砾と上器（南から）
- 図版21 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内の左側壁に残る漆水線（東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内の右側壁に残る漆水線（西から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内の右側壁に残る漆水線（北西から）
- 図版22 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内調査時、奥壁付近表層の炭化層及び銭貨検出状況（東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内調査時、表層炭化層中の銭貨検出状況（東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内調査時、表層炭化層中の銭貨検出状況（東から）
- 図版23 1. 平野 2 号墳横穴式石室茨道部右側壁付近の埴出土状況（西から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室茨道部右側壁付近の凝灰岩・土器等検出状況（西から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室茨道部右側壁付近の凝灰岩・埴等検出状況（西から）
- 図版24 1. 平野 2 号墳横穴式石室茨道部の土器・凝灰岩等検出状況（西から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室茨道部の埴・土器・凝灰岩等検出状況（西から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室茨道部の埴・凝灰岩等検出状況（西から）
- 図版25 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内の凝灰岩・土器集積箇所検出状況（西から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内の凝灰岩・土器集積箇所検出状況（北から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内の土器集積箇所検出状況（西から）

- 図版26 1. 平野2号墳横穴式石室玄室内の土器集積箇所検出状況（西から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内の土器内面の米粒状遺物の痕跡検出状況（西から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室内の土器内面の米粒状遺物の痕跡検出状況（西から）
- 図版27 1. 平野2号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩・埠等検出状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内の凝灰岩・埠等検出状況（西から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室内の凝灰岩・埠等検出状況（南から）
- 図版28 1. 平野2号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩敷石・埠等検出状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩敷石・埠等検出状況（東から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩敷石・埠・排水溝等検出状況（南から）
- 図版29 1. 平野2号墳横穴式石室羨道内の土層（セクションA）堆積状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室羨道内の土層（セクションΔ）堆積状況（南から）  
3. 平野2号墳横穴式石室羨道内の土層（セクションB）堆積状況（南から）
- 図版30 1. 平野2号墳横穴式石室羨道内玄門付近の土層（セクションC）堆積状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内凝灰岩敷石検出状況及び玄室中央部土層（セクションD）堆積状況（南から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室内棺台基礎検出状況及び玄室中央部土層（セクションD）堆積状況（南から）
- 図版31 1. 平野2号墳横穴式石室玄室内調査過程、凝灰岩敷石・凝灰岩・埠等遺物出土状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内棺台基礎・凝灰岩敷石・排水溝等検出状況（南から）  
3. 平野2号墳横穴式石室完掘後の玄室内全景（南から）
- 図版32 1. 平野2号墳横穴式石室完掘後の玄室内全景（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内中央部の棺台基礎と凝灰岩敷石検出状況（南から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室内中央部の棺台基礎と凝灰岩敷石検出状況（南から）
- 図版33 1. 平野2号墳横穴式石室玄室内中央部の棺台基礎と右側凝灰岩敷石検出状況（西側真上から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室内右側凝灰岩敷石（西側真上から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室内右側凝灰岩敷石（西から）
- 図版34 1. 平野2号墳横穴式石室玄室完掘後の奥壁沿いの凝灰岩敷石・排水溝等検出状況（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室玄室右側奥壁沿いの凝灰岩敷石・間詰石等検出状況（南から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室右側奥壁沿いの凝灰岩敷石・間詰石等検出状況（南から）
- 図版35 1. 平野2号墳横穴式石室玄室右側奥壁沿いの凝灰岩敷石・間詰石等細景（南から）  
2. 平野2号墳横穴式石室奥壁沿いの凝灰岩敷石と排水溝（西側横から）  
3. 平野2号墳横穴式石室玄室右側の凝灰岩敷石配列状況（南から）
- 図版36 1. 平野2号墳横穴式石室奥壁沿いの凝灰岩敷石・間詰石・排水溝等検出状況（東から）  
2. 平野2号墳横穴式石室奥壁沿いの排水溝・間詰石等検出状況（東から）

3. 平野 2 号墳横穴式石室奥壁沿いの排水溝・間詰石等検出状況（南東から）
- 図版37 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩敷石・間詰石・排水溝等検出状況（南から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩敷石・間詰石等検出状況（東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内奥壁付近の凝灰岩敷石・間詰石・排水溝等検出状況（南から）
- 図版38 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内棺台基礎・凝灰岩敷石・排水溝等検出状況（北から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近の凝灰岩敷石の設置痕跡・排水溝等検出状況（北から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近の凝灰岩敷石の設置痕跡検出状況（北から）
- 図版39 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近凝灰岩敷石の設置痕跡検出状況（南から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄門左側壁付近の排水溝・凝灰岩敷石の設置痕跡検出状況（南から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄門右側壁付近の排水溝・凝灰岩敷石の設置痕跡検出状況（南から）
- 図版40 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内左側排水溝（南東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内左側排水溝と棺台基礎・凝灰岩敷石の配列（南から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内左側排水溝と間詰石（東から）
- 図版41 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内右側排水溝（南東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内右側排水溝と棺台基礎・凝灰岩敷石の配列（南から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室内右側排水溝と間詰石（西から）
- 図版42 1. 平野 2 号墳横穴式石室完掘後の状況（南から）  
2. 平野 2 号墳墳丘上から横穴式石室の開口部を臨む（北から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室完掘後の状況・羨道から玄室を臨む（南から）
- 図版43 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道前方部床面の礫（南から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道中央部の床面の礫（南から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近から羨道床面を臨む（北から）
- 図版44 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側壁（東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側壁（南東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近から羨道左側壁を臨む（北東から）
- 図版45 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側壁（東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側壁（東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側壁（東から）  
4. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側袖石（東から）
- 図版46 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁付近から玄室・羨道左側壁を臨む（北東から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近から玄室左側壁を臨む（南東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁付近から玄室左側壁と玄門を臨む（北東から）
- 図版47 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁（南東から）

2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁（東から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁（東から）  
 4. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁（東から）

図版48 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁上部と天井石の架構部と間詰石（南東から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁上部と天井石の架構部と間詰石（南東から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室左側壁上部と天井石の架構部と間詰石（南東から）

図版49 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄門左側袖石と玄門に残る縁込の痕跡（北東から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄門左側袖石に残る縁込の痕跡（東から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄門左側袖石に残る縁込と仕切石の設置痕跡（東から）

図版50 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁（西から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁（南西から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室東側壁玄門付近から羨道右側壁を臨む（北西から）

図版51 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁（西から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁（西から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁（西から）  
 4. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁（西から）

図版52 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁上部と天井石の架構部（南から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁上部と天井石の架構部（南から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁下部の間詰石（西から）

図版53 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁玄門と玄門に残る縁込の痕跡（西から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁玄門に残る縁込の痕跡（西から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁玄門に残る縁込と仕切石の設置痕跡（西から）

図版54 1. 平野 2 号墳横穴式石室羨道から玄室右側壁を臨む（南西から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄門付近から玄室右側壁を臨む（南西から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室羨道右側壁を臨む（北西から）

図版55 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁（南西から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁（西から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁（西から）  
 4. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁（西から）

図版56 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁上部と天井石架構部の間詰石（西から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁上部と天井石架構部の間詰石（西から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁上部と天井石架構部の間詰石（西から）

図版57 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁上部（南から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁下部の基底石（南から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁左側上部の間詰石（南から）

図版58 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室天井石と間詰石（南から）  
 2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁の天井石と間詰石（南から）  
 3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室の天井石と間詰石（南から）

- 図版59 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄室右側壁上部の間詰石と天井石（北西から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁から羨道の天井石を臨む（北から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄室奥壁から羨道の天井石を臨む（北から）
- 図版60 1. 平野 2 号墳横穴式石室玄門右側袖部と玄室右側壁の接合部（北西から）  
2. 平野 2 号墳横穴式石室玄門左側袖部と玄室左側壁の接合部（北東から）  
3. 平野 2 号墳横穴式石室玄門右側袖部（北から）  
4. 平野 2 号墳横穴式石室羨道左側袖部（北から）
- 図版61 平野 2 号墳墳丘盛土内及び墳丘堆積土出土土器
- 図版62 平野 2 号墳墳丘盛土内及び墳丘堆積土出土土器・瓦
- 図版63 平野 2 号墳墳丘堆積土出土土器
- 図版64 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版65 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器・瓦
- 図版66 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版67 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版68 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版69 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版70 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版71 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版72 平野 2 号墳横穴式石室内出土土器
- 図版73 平野 2 号墳横穴式石室内出土銭貨
- 図版74 平野 2 号墳玄室内出土鉄製品
- 図版75 1. 塚 1 2. 塚 1 の黒斑と木目圧痕
- 図版76 1. 塚 2 2. 塚 2 の黒斑と木目圧痕
- 図版77 1. 塚 3 2. 塚 3 の調整痕跡
- 図版78 1. 塚 4 2. 塚 5 の直線状と螺旋状の暗文
- 図版79 1. 塚 5 2. 塚 5 の木目圧痕
- 図版80 1. 塚 6 2. 塚 7
- 図版81 1. 塚 8 2. 塚 9
- 図版82 1. 棺の受台（保存処理前・復元前の状況）
- 図版83 1. 棺の受台（保存処理後・復元後の状況）
- 図版84 1. 棺の受台・第 1 区裏面の成形・調整痕跡  
2. 棺の受台・第 3 区裏面の成形・調整痕跡
- 図版85 1. 「平野村絵図」全容
- 図版86 1. 「平野村絵図」に描かれた平野古墳群  
2. 「平野村絵図」に描かれた平野塚穴山古墳周辺
- 図版87 1. 「平野村絵図」に描かれた「七石」と「岩屋」と記された石室状の構築物（中央）  
2. 「平野村絵図」に描かれた平野 1 号墳（右）・平野 2 号墳（左）
- 図版88 1. 「御陵之絵図」全容

- 図版89 1. 「御陵之絵図」に描かれた平野1・2・3・4号墳
- 図版90 1. 「御陵之絵図」に描かれた平野1号墳（右）・平野2号墳（左）  
2. 「御陵之絵図」に描かれた平野3号墳（左）・平野4号墳（右）
- 図版91 1. 「武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図」全容  
2. 「武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図」の絵図（現在は消滅した平野3・4号墳）
- 図版92 1. 「武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図」の文書
- 図版93 1. 「顯宗帝陵牛垣取建等ニ付請書付絵図」全容  
2. 「顯宗帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図」の絵図（現在の平野塚穴山古墳）
- 図版94 1. 「顯宗帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図」の文書
- 図版95 1. 平野塚穴山古墳遠景（北西から）  
2. 平野塚穴山古墳全景（南東から）
- 図版96 1. 平野塚穴山古墳横口式石槨正面（南から）
- 図版97 1. 平野塚穴山古墳横口式石槨内部を臨む（南から）
- 図版98 1. 平野塚穴山古墳横口式石槨内部（南から）  
2. 平野塚穴山古墳横口式石槨左側壁（南東から）
- 図版99 1. 平野塚穴山古墳横口式石槨内部（南から）  
2. 平野塚穴山古墳横口式石槨右側壁（南西から）
- 図版100 1. 平野塚穴山古墳横口式石槨内部から開口部を臨む（北から）  
2. 平野塚穴山古墳横口式石槨床面（南から）

---

# 本文

---

# 第Ⅰ章 調査の契機と経過

## 1 調査の契機

香芝市では、近年急増する開発行為に対して文化財保護の観点から昭和56年度以来、毎年国庫補助金事業による市内遺跡発掘調査を継続的に実施している。その目的は、各遺跡の実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ収集と自己用住宅建築に對処するためである。

昭和56年度～平成2年度までは旧石器時代を中心とする二上山北麓遺跡群を中心に調査をすすめ、貴重な成果を得た。

平成3年度から平成9年度までは尼寺庵寺（尼寺北庵寺・尼寺南庵寺）の寺域の範囲確認調査を実施し、なかでも、平成7年度に尼寺北庵寺で実施した第10次調査では、日本最大級の塔心礎を検出し、心礎の柱座内から12個の金環や水晶玉4点、ガラス玉3点、刀子1点等の舍利莊嚴具を検出するなど多大な成果を得た。

平成11年度からは3年事業計画で尼寺庵寺の南方約200mの丘陵に所在する平野古墳群中の平野1号墳（これまでの通称として平野車塚古墳と称されているが、本報告書では、以下、平野1号墳と称する。）・平野2号墳の範囲確認調査を計画・実施した。

平野古墳群は、凝灰岩製の切石で構築した横口式石室を持つ終末期古墳として著名な平野塚穴山古墳（国指定史跡）をはじめ、消滅した平野3号墳・平野4号墳の2基の古墳を併せて約6基の古墳からなる古墳群である。同古墳群は、奈良盆地でも数少ない7世紀代に亘って継続して築造された古墳群として、また、横穴式石室から横口式石室への石室の変遷過程を研究する上で重要な古墳群として認識されている。しかし、平野1号墳・平野2号墳は昭和46年に始まった近隣の宅地造成工事や住宅建築に伴って充分な地形測量調査や発掘調査が行われないまま墳丘の大半が破壊されてしまうという憂き日をたどり、既に両古墳の周囲は宅地化されて、からうじて墳丘の約半分を残すのみである。現在も両古墳を取り巻く環境は厳しく、平野1号墳については墳丘の西側の一部や表道周囲の盛土が徐々に流失しており、本市教育委員会としても今後に向けて実態が不明な両古墳の考古学的データを収集する必要性に迫られていた。

事業初年度の平成11年度は、長らく実態が不明であった平野1号墳・平野2号墳の地形測量調査を始めて実施し、詳細な地形測量図面を作成した結果、平野1号墳は、従来から推測されてきたような方墳ではなく、円墳である可能性が強いことが明らかとなつた。

また、平野2号墳については、第1次調査の結果、復元推定直径約26m前後、高さ約6.5mの円墳で、版築技法によって墳丘が構築されていることや墳丘南側で横穴式石室の羨道部の左右側壁の一部を検出するに至り、内部主体部は横穴式石室であることを始めて確認した。これを受けた第2次調査では横穴式石室内部の調査を実施した。

### 註

1) 香芝市教育委員会編 2000 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報13」 香芝市教育委員会

2) 香芝市教育委員会編 2001 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14」 香芝市教育委員会

## 2 調査の経過

### (1) 調査の経過と発掘方法

#### ①第1次調査

前述したとおり、平野1号墳・平野2号墳付近一帯は昭和46年の宅地造成工事に伴い充分な地形測量調査や発掘調査が実施されないまま大規模な地形の改変を受けている。

宅地造成前の昭和46年前後に作成された付近一帯の測量図（図1）は、開発に伴う地形測量図で古墳の測量を主眼として作成された地形測量図ではないが、平野1号墳については古墳墳丘背面の掘削状の痕跡が明瞭に遺存していることがわかる。一方、平野2号墳については墳丘背面の掘削の痕跡はおろか、古墳状の隆起箇所等は全く表現されていない。

それ以前の両古墳をとりまく周辺の詳細な環境については全く不明であるが、後述する江戸時代後期に描かれた『平野村絵図』（図版86-1、87-2）を見る限りでは、両古墳の南方には現在の小道と同じ場所に東西に貫く里道が描かれていることから、江戸時代後期以前に既に古墳南方の里道敷設の際に両古墳とも墳丘南側の狭道部の一部が破壊されていたものと考えられる。

平野1号墳・平野2号墳は国有地内に所在するため、まず、土地を管理する当時の大蔵省近畿財務局奈良財務事務所と協議を行い、平成11年10月1日付香教博第172号で3年間の期間にわたって同国有地内における発掘調査に係わる発掘調査承認願の提出を行った。その後、平成11年10月8日付奈管第441号で同省から発掘調査の承認を得た後、平成11年10月29日付香教博第190号で文化財保護法第98条の第1項の規定による通知を行い、遺跡の範囲確認調査に着手した。

現地調査は、発掘調査に着手する事前準備として古墳の墳丘の詳細なデータを集積するため、

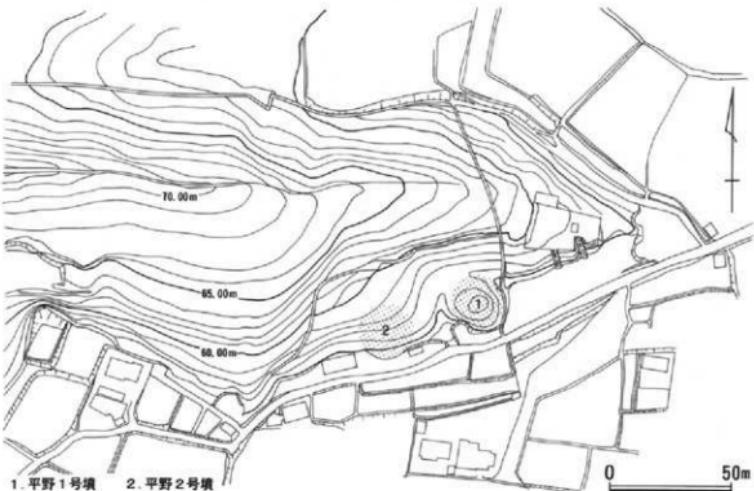


図1 宅地造成前の平野1号墳・平野2号墳の地形測量図 (S=1/2,000)

調査地全面に生い茂った雑木の伐採後、始めて平野1号墳と平野2号墳の墳丘の詳細な地形測量図と周辺の地形測量図を作成した（図2、別添図1）。

当初は平野1号墳と平野2号墳の両古墳の墳丘部の調査を検討していたが、発掘調査に伴う排出土の土置場の問題や調査期間の制約等から、平成11年度の第1次調査では、実態が全く不明な平野2号墳の墳丘の形状や規模・築造時期・埋葬施設等を把握することを主眼として調査を実施した。<sup>1)</sup>

平野2号墳の現況は、墳丘の北側や南側、西側は宅地造成や住宅建築に伴って原形が著しく削平・造成されている。とくに宅地造成の際に古墳墳丘南側と西側が鋭角に削平されおり、法面の勾配が急で、調査により、近接する民家に土砂の落石や崩壊等を及ぼす危険性があった。

このため、発掘方法としては、古墳の西側付近での調査は断念し、唯一、旧地形を把握することができる可能性があり、調査が可能な古墳墳丘の東側に集中して第1調査区（1.5m×22m）、第2調査区（3.2m×8m）、第3調査区（2m×9m）の東西方向の調査区を3箇所（第1・2・3調査区）設定して古墳墳丘の形状を把握することを主眼として発掘調査を実施したところ、弧状に延びる古墳の墳丘及び墳丘裾部を検出した（別添図2、図2）。

また、古墳の石室が推定される墳丘南側には民家が近接しており、調査は困難を極めたが、墳丘の南側に土砂の流入を防止するための板柵を設置後、2.5m×4mの調査区（第4調査区）を設定して横穴式石室の羨道部の検出を主眼として人力による発掘調査を実施したところ、羨道部の左右両側壁を検出するに至り（図版16-2）、これまでの予想通り、埋葬施設は横穴式石室であることを確認した。

平野2号墳第1次調査に伴う現地調査期間は平成11年11月11日から平成12年3月10日まで実施し、実働日数は72日間、最終的な調査総面積は100m<sup>2</sup>に及んだ。

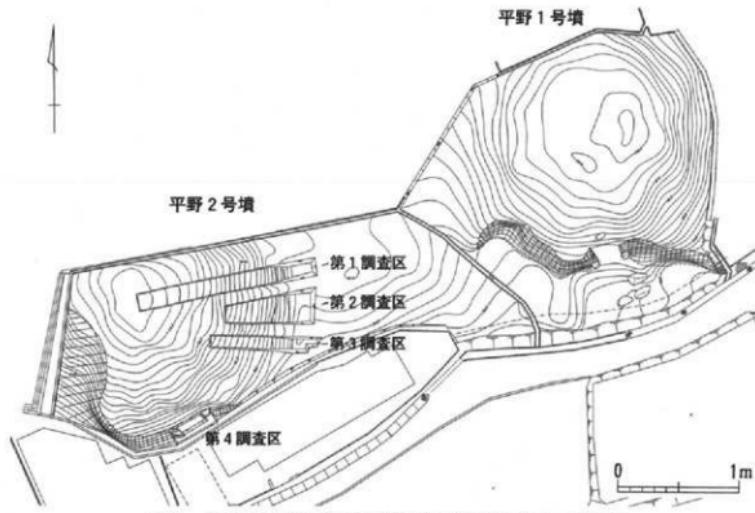


図2 平野2号墳第1次調査発掘調査区位置図 ( $S=1/400$ )

## ②第2次調査

平野2号墳第2次調査では、両古墳の敷地内に生い茂った雑草や根株の除去後、平成11年度の第1次調査時に平野2号墳の墳丘南側の第4調査区内で検出した横穴式石室羨道部の南端と推定される左右両側壁の中心部を主軸として、第4調査区に沿って南北4m×東西3.8mの調査区を1箇所設定して、北方に遺存すると推定される横穴式石室の羨道部の左右側壁や天井石の検出を主眼として人力により発掘調査を実施した。そして、羨道部の左右側壁と天井石の検出状況によって順次調査区域を拡張して行くこととした。調査が進行して行くにつれて羨道部の南端は、左右両側壁が遺存しているのみで羨道の天井石は抜き取られて土砂が床面まで厚く堆積していることが判明した。

本来であれば横穴式石室の羨道部から横位に進入して調査を進めるべきであるが、本古墳の場合、墳丘の南側は民家が迫っており、羨道部から横位に掘削して土砂を搬出することが不可能であったため、墳丘上部の羨道の天井石が欠失する箇所から縦位に掘り下げて堆積土を取り除き、羨道の天井石を検出して侵入可能な状態になった段階であらためて羨道部から横位に侵入して横穴式石室内部の発掘調査を進めることとした。

横穴式石室内部の調査は、石室中央部に南北方向の主軸を設定し、この南北の主軸を介して東西それぞれ1m四方の調査区を合計30箇所設定した（図3）。

調査は、調査区域ごとに地下の堆積層序を重視しながら層位ごとに調査を進め、遺物は出土状況を加味して図面を作成しつつ、各調査区域ごとに出土番号を明記して取り上げた。

なお、各調査区内に堆積していた土砂は、一度、石室外に搬出して、全て3mm四方の網目のトーシで土器や凝灰岩、炭化物、その他の遺物等に分別して土中に含まれる全遺物の採集と選別を行った。

平野2号墳第2次調査に伴う現地調査期間は、横穴式石室の平面図や側面図等の実測図面の作成期間も全て含めて平成12年7月11日から平成13年3月30日までの約130日間を要し、墳丘部及び横穴式石室の調査面積は36m<sup>2</sup>であった。

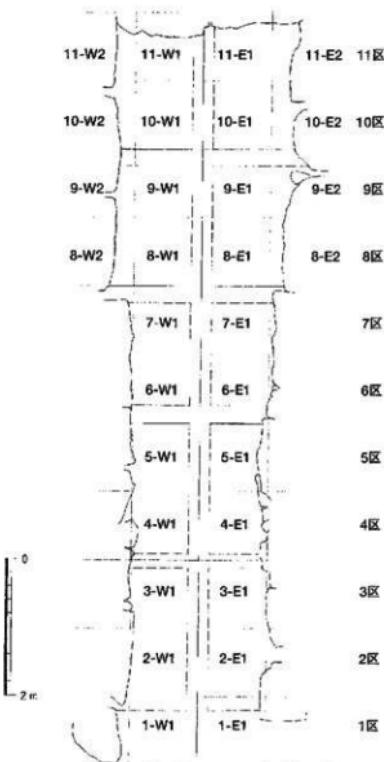


図3 横穴式石室内発掘調査区配置図

## (2) 調査後の処置

平野2号墳で実施した第1次調査と第2次調査から出土した出土品のうち、とりわけ重要な考古資料である埴9点と棺の受台一式は、土製の棺台としては全国でも同じ二上山麓に位置する大阪府南河内郡河南町塚廻古墳出土の縁軸陶棺と平野2号墳出土の棺の受台の2例しかなく、7世紀代に築造された終末期古墳の埋葬形態を研究する上で貴重な考古資料であることから、香芝市文化財保護審議会での審議・答申を受け、平成16年3月21日付けで平成15年度香芝市指定文化財(有形文化財・考古資料)として指定された。

また、平成15年度に本市の事業経費で保存復元処理を実施し、薬剤処理による資料の強化処理と樹脂による欠損部の修復を図り<sup>4)</sup>(写真1)、今後、博物館資料として活用に備えることになった。

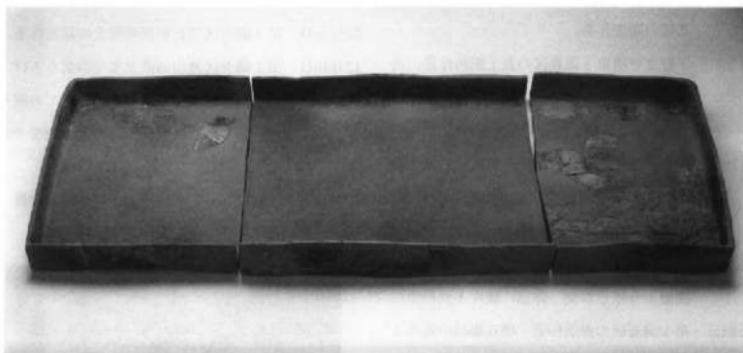


写真1 平野2号墳棺の受台復元後の状況

## 註

- 1) 平野1号墳については、本報告書の作成時点で発掘調査は実施されていないが、平成13年度国庫補助金事業として横穴式石室内部の実測図面の作成を行っており、その成果は下記文献に掲載している。  
香芝市教育委員会編 2002 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報15」 香芝市教育委員会
- 2) 香芝市教育委員会編 2000 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報13」 香芝市教育委員会
- 3) 香芝市教育委員会編 2001 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14」 香芝市教育委員会
- 4) エポキシ樹脂とマイクロバルーンを混合したエポキシワーカブルレジンによる欠損部の修復を行っている。

### 3 調査日誌

#### (1) 第1次調査

平成11年

- 11月11日 二上山博物館から現地へ発掘調査用具一式を搬入。
- 11月16日 平野2号墳の調査区域の設定。平野2号墳・平野1号墳（平野車塚古墳）墳丘部及び周辺の草刈りと清掃。
- 11月17日 平野2号墳の調査区域内及び周辺の木の根茎等の除去作業。
- 11月18日 平野2号墳第1調査区の表土掘削作業。古墳状隆起箇所の裾部を完掘。石野博信館長（香芝市二上山博物館）来訪。
- 11月19日 第1調査区の墳丘頂部から斜面部の表土掘削作業。橋本輝彦氏（桜井市教育委員会）他2名来訪。
- 11月20日 第1調査区の表土層除去作業。墳丘裾部の礫層より須恵器甕（体部）破片1点出土。
- 11月24日 第1調査区の掘削作業。墳丘裾部の礫層より須恵器甕（体部）破片1点が出土。
- 11月25日 第1調査区の掘削作業。第1調査区を東へ1m拡張。笠野毅氏（宮内庁書陵部陵墓課陵墓調査官）、小走公典氏（宮内庁侍従陵墓監区事務所事務官）他宮内庁職員2名来訪。
- 11月26日 第1調査区掘削。調査区東壁・西壁面の整層後、写真撮影。
- 11月27日 第1調査区掘削。
- 11月30日 平野2号墳第2調査区の表土除去作業開始。墳丘裾部の礫層より須恵器破片1点出土。
- 12月1日 第2調査区の表土除去作業。瓦器碗底部（高台付）出土。漢道想定箇所より漢道側壁発見。表層以下検出箇所まで掘り下げ。

- 12月2日 第5・6調査区で漢道側壁の検出作業。第2調査区周溝状遺構の掘り下げ。
- 12月3日 ブレハブ・椅子・机・写真撮影台等の調査用具搬入。遺構検出作業。土砂除去作業。石野博信館長来訪。
- 12月4日 第2・5調査区堆積土の除去作業。隣地への土砂の崩落を防ぐためにフェンス沿いにコンバネを設置する。
- 12月7日 第3調査区堆積土の除去作業開始。
- 12月8日 第3調査区の堆積土の掘り下げ。
- 12月9日 第1調査区墳丘裾部堆積土の除去作業。
- 12月10日 第1調査区地山面直上までの掘り下げ。
- 12月11日 第1調査区墳丘裾部の地山面までの掘り下げ。第2調査区墳丘裾部の地山面までの掘り下げ。
- 12月14日 土糞で区画して排出土の仮置場を設置。



写真2 墳丘の調査状況



写真3 墳丘の調査状況

- |        |  |       |   |
|--------|--|-------|---|
| 12月15日 | 第1調査区壁面の整層・分層作業。地山面までの掘削作業を完了する。   | 1月18日 | 表土除去作業継続。   |
| 12月16日 | 土囊で写真撮影台の足場設置のための基礎（土台）を作る。第5調査区の表土除去作業。                                   | 1月20日 | 表土除去作業継続。   |
| 12月17日 | 第5調査区漢道部の掘り下げ作業。   | 1月21日 | 堆積土除去作業。拡張区拡大設定。  |
| 12月18日 | 第4調査区掘り下げ作業。漢道内の堆積土層中から瓦器碗細片、須恵器細片、土師器細片、瓦片等が出土する。                         | 1月22日 | 拡張区の表土除去作業。   |
| 12月21日 | 第4調査区掘り下げ作業。堆積土中より中世の羽釜の破片や瓦器碗の細片出土。第4調査区の整層、分層及び写真撮影。                     | 1月25日 | 拡張区の堆積土層掘り下げ。宮原晋一氏（奈良県立橿原考古学研究所）、神庭滋氏（新庄村歴史民俗資料館）他3名来訪。 |
| 12月22日 | 第4調査区の掘り下げ作業。土師質の瓦片、瓦器碗細片出土。基準杭の設定。  | 1月26日 | 拡張区の堆積土層掘り下げ。   |
| 12月24日 | 第4調査区の整層完了後、全景の写真撮影。   | 1月27日 | 堆積土層の掘り下げ。  |
| 12月25日 | 第4調査区全景の写真撮影。調査区域をブルーシートで覆って年末年始の作業中断に備える措置を施す。調査用具一式の手入れ作業を行い、年内の日程を終了する。 | 1月28日 | 堆積土除去作業。  |
|        |  | 1月29日 | 堆積土除去作業。  |
|        |  | 2月1日  | 堆積土除去作業。第3・4調査区埴丘裾部の縦層検出作業。                             |
|        |  | 2月2日  | 第1調査区東側拡張区掘り下げ開始。第2調査区堆積土除去作業継続。第3調査区縦層検出作業。            |
|        |  | 2月3日  | 堆積土除去作業継続。  |

## 平成12年

- 1月6日 第2調査区の土層堆積状況及び土囊状の土塊集積箇所の写真撮影。
- 1月7日 第1～3調査区整層後、完掘状況等の写真撮影。泉森岐氏（奈良県立橿原考古学研究所副所長・同附属博物館館長）、勝部明夫氏（龍谷大学教授）、小泉俊夫氏（香芝市文化財保護審議会会長）来訪。
- 1月8日 第1～3調査区整層後、調査区全景等の写真撮影。
- 1月11日 第1～3調査区整層後、完掘状況の写真撮影。拡張調査区の設定。
- 1月12日 拡張区の表土除去作業開始。
- 1月14日 表土除去作業継続。
- 1月15日 表土除去作業継続。



写真4 境丘の調査状況



写真5 境丘南側での漢道側壁検出状況

- 2月4日 堆積土除去作業継続。礫層検出作業。猪熊  
兼勝氏（京都橘女子大学教授）来訪。
- 2月5日 堆積土除去作業継続。礫層検出作業。
- 2月8日 堆積土除去作業継続。礫層検出作業。
- 2月9日 堆積土除去作業継続。礫層検出作業。
- 2月10日 第1～3調査区堆積土除去作業。
- 2月11日 第1～3調査区堆積土除去作業。
- 2月12日 第1～3調査区堆積土除去作業。
- 2月15日 第1・2調査区堆積土除去作業。
- 2月16日 第2・3調査区整層作業後、調査区全景の  
写真撮影。
- 2月17日 調査区全景の写真撮影。
- 2月18日 午前中古墳及び調査区全景の航空写真撮  
影。午後から調査区全景の完掘状況の写真  
撮影。
- 2月19日 調査区全景の完掘状況の写真撮影。
- 2月22日 第1・2調査区整層後、写真撮影。
- 2月23日 第1・2調査区の各所を整層後に写真撮  
影。第1調査区南壁の断ち割り作業開始。
- 2月24日 第1調査区南壁の断ち割り作業継続。墳丘  
の版築層を確認する。
- 2月25日 第3調査区北壁の断ち割り作業開始。一部  
で版築層を確認する。
- 2月26日 第3調査区北壁の断ち割り部の分層、細部  
の写真撮影。
- 2月29日 第2調査区南壁で断ち割り作業開始。第3  
調査区墳丘裾部の堆積土除去作業。
- 3月1日 第2調査区南壁で断ち割り作業継続。墳丘  
裾部の堆積土除去作業継続。
- 3月2日 第2調査区墳丘裾部の堆積土除去作業。
- 3月3日 第2調査区墳丘裾部の堆積土除去作業継  
続。
- 3月7日 第1～4調査区の埋め戻し作業。
- 3月8日 第1～4調査区の埋め戻し作業継続。
- 3月9日 第1～4調査区の埋め戻し作業継続。第3
- 調査区の埋め戻し完了。
- 3月10日 第1～4調査区の埋め戻し完了。二上山博  
物館へ発掘調査用具を搬出後、調査用品の  
洗浄作業を行って今年度の現地調査を全て  
終了する。



写真6 墳丘の調査状況



写真7 墳丘の調査状況



写真8 羨道側壁の検出状況

## (2) 第2次調査

平成12年

- 7月12日 敷地内の草刈り、市清掃局へ雑草の搬出作業。
- 7月13日 敷地内の草刈り、市清掃局へ雑草の搬出作業。
- 7月14日 敷地内の草刈り、市清掃局へ雑草の搬出作業。
- 7月18日 敷地内の草刈り、市清掃局へ雑草搬出作業。午後より古墳墳丘南側の漢道部を被覆する土嚢袋の撤去、搬出作業を行う。午後からピンホールで天井石の有無と位置確認を行う。
- 7月19日 古墳墳頂部の草刈りと石室の主軸設定作業。基準杭を設ける。主軸の杭から東側へ40cm土層観察用のセクションを残して掘削を開始。
- 7月25日 基準杭の設置作業の続きをを行う。
- 7月26日 午前中草刈り。中央の主軸、基準杭を基に調査区を左右に設定する。午後から主軸線より東側調査区の表土・堆積土の除去作業。
- 7月27日 西側調査区、木の根基の除去作業。東側調査区、堆積土の除去作業続行。横穴式石室の天井石の一部を検出する。
- 7月28日 西側調査区、木の根基の除去作業続行。東側調査区、漢道東側壁上面を検出。漢道南側石2個分の天井石が抜き取られているものと推定される。
- 8月1日 西側調査区掘り下げ開始。天井石・漢道西側壁上面を検出する。漢道西側壁は残りが悪く側壁が少し東側に動いている。東側調査区も西側調査区の検出層と同じ高さまで掘り下げる。
- 8月2日 西側調査区は、漢道西側の側壁上面を検出

作業継続。本日中にはほぼ全ての漢道西側壁を検出する。天井石が乗る基部の側壁も大きく東側に動いていることが判明。東調査区は漢道側壁内の堆積土除去作業。東・西調査区の漢道上から若干の中世土器等が出土。石野博信館長来訪。

- 8月3日 上面からの土砂の崩落等を防止するため、東・西調査区の北側を約50cm拡張して法面を削り出し、天井石の露出範囲を10~20cm程度広げる。東・西調査区の側壁を全て検出し、洗浄する。
- 8月4日 東側調査区北側壁面を削り、法面をつくる。東・西調査区とも漢道南側の天井石の抜き取り個所を少し掘り下げる。
- 8月5日 東・西側調査区中央部の土層観察用畦の東壁を整層後、土層堆積状況図を作成する。



写真9 墳丘南側での天井石の検出状況



写真10 天井石・漢道側壁の検出状況

- 8月9日 東・西調査区を整層。午後より東・西調査区の中央セクションベルトの土層堆積状況、東側壁・西側壁の検出状況を写真撮影。土層堆積状況の断面図作成。木場幸弘氏（高取町教育委員会）、穂積裕昌氏（三重県埋蔵文化財センター）来訪。
- 8月10日 東・西調査区の中央セクションベルトの土層堆積状況を写真撮影。その後セクションベルトの除去、掘削作業開始。
- 8月11日 調査区内北壁・東壁・西壁の整層作業。整層と併行して土層堆積状況の分層作業を行う。天井石・側壁の検出状況及び土層堆積状況等の写真撮影。中村一郎氏（奈良国立文化財研究所平城京調査部写真技師）来訪。
- 8月17日 雨天の調査に備え、石室開口部をシートで覆う。
- 8月18日 調査区内及び石室内に水が流入しないようシートで覆う。
- 8月22日 盆休み明けの作業を再開。基準杭を設定。調査区全体を覆うため、ブルーシートで屋根をつくり、土砂の搬出のために一輪車の進入路を作る。調査区中央に土層観察用セクションベルトを幅30cmで設定し、西側から掘削を開始する。坂野平一郎氏（広陵古文化会会長）来訪。
- 8月23日 西側調査区を掘り下げる。Ⅲ層（図32⑧-1層）から瓦器碗の細片、土釜の破片等が出土する。Ⅲ層（図32⑧-1層）とⅣ層（図32⑨-1層）の層境から凝灰岩の破片が1点出土する。漢道西側壁南端付近で試掘を実施。東壁と西壁の土層堆積状況図を作成。
- 8月24日 西側調査区天井石下の堆積土と、東側調査区の堆積土の除去作業。Ⅱ層（図32⑤-2層）の除去をほぼ終える。
- 8月25日 東側調査区の掘り下げ、壁画の整層作業。
- 8月26日 北壁及び西壁の土層堆積状況図を作成。
- 8月30日 調査区域内の整層作業、漢道側壁の洗浄作業。漢道中央部のセクションベルトの土層堆積状況の写真撮影。土層堆積状況の図面作成。
- 8月31日 漢道中央部のセクションベルト堆積状況の図面を作成。その後、土層名を記入。漢道南側の擁壁沿いに排水溝を掘削する。
- 9月1日 昨日の図面の続き。漢道中央部のセクションベルトの土層堆積状況図面を作成。



写真11 漢道の検出状況



写真12 漢道内の調査状況

- 9月2日 美道中央部のセクションベルトの土層堆積状況図面を作成し、層名を記入する。
- 9月6日 美道中央部のセクションベルトの掘り下げ、除去作業は本日中に終了する。セクションベルトⅢ層（図32⑧-2層）より凝灰岩の破片が出土する。
- 9月7日 調査区域内の整層及び美道部左右両側壁の洗浄。美道部南側より写真撮影。また石室内部の写真撮影を行う。美道南側フェンス沿いに排水溝を再掘削し、塩ビパイプを埋める。美道南側に石室内部及び美道の実測用にコンクリート製の杭を新たに埋設、作業を行う。
- 9月8日 調査区域内の整層、清掃。美道部側壁の検出状況の写真撮影。石室内部・美道部の写真撮影。昨日の基準杭から石室奥まで水糸を張り、中央から左右15cmのセクションベルトを設定。石室から美道まで東側の石室立面略圖を作成。フェンス前の草刈、排出土の処理場を設ける。
- 9月9日 石室立面略測図作成。
- 9月13日 本日より美道部の掘り下げを開始する。5区-W1から2区-W1にかけて20cm堆積土を除去する。中世の遺物及び凝灰岩の破片出土。石室立面略測図作成。
- 9月14日 4・5区-W1、2・3区-W1の掘り下げの続き。新たに4区-E1の掘り下げ開始。Ⅲ層（図32⑧-2層）を除去。羽釜の破片等中世土器が出土する。主に、石室内11区（W1・E1）、10区（W1・E1）内の地表面に露出している土器や凝灰岩片の出土状況の写真撮影を行う。本日より石室内の遺物出土状況の図面を作成する。
- 9月15日 石室内の現況での遺物出土状況の図面を作成する。
- 9月19日 3区-E1地区を掘り下げ、また排出土を箇にかけて遺物の有無を確認する。午後から2区-E1の掘り下げ開始。
- 9月20日 午前中平野1号墳墳頂部付近の草刈。午後から2区-E1の掘り下げの続き。セクションベルトから土師質の埴状の土製品が出土する。埴状の土製品の出土状況と石室内部の土器の出土状況等の写真撮影を行う。石室奥壁の立面図の略側図を作成。
- 9月21日 午前中草刈り作業。昨日検出した2区-E1のⅢ層（図32⑧-1層）下、疊層出土の埴状土製品の出土状況の実測図作成。その後、埴状土製品を取り上げる1区-E1・W1の北端部まで拡張して掘る。竪口の土釜の口縁部や瓦器碗の底部（高台）がみられる。石室内の遺物出土状況の図面作成。



写真13 美道内の調査状況



写真14 美道内の調査状況

- 9月26日 午前中墳頂部の草刈り。5区-E1の掘り下げ開始。併行して排出土の撰別作業を進める。区-E1で石室右側壁付近から銭貨(約1/3)を発見する。また5区-E1でも銭貨の断片(1/4)を発見する。
- 9月27日 午前中、墳頂部の草刈り作業。5区-E1を掘り進める。併行して排出土の撰別作業も行う。凝灰岩の細片多数、中世土器が出土。遺物出土状況の図面作成。また、石室略測図に石室材の寸法を計測して記入する。西藤清秀氏、木下亘氏(奈良県立橿原考古学研究所)来訪。
- 9月28日 午前中、平野1号墳(平野車塚古墳)周辺の草刈作業。平野2号墳墳丘部の雨による崩壊箇所の修復作業。なお、排出土から绳文時代の石礫の先端が出土する。午後から5区-E1の掘り下げ。石室内の遺物出土状況の図面作成。書き終えたところからレヴェル入れを行う。
- 9月29日 平野2号墳墳丘周辺の草刈作業、鋼管で道具収納用の小屋を建てて道具を収納する。4区-E1の掘り下げ及び排出土の撰別作業を行う。
- また、石室内部の遺物出土状況図の作成が終わった箇所から遺物の取り上げをはじめる。坂野平一郎氏(広陵古文化会会長)、木場幸弘氏(高取町教育委員会)来訪。
- 9月30日 石室内部の表面に散乱する遺物の出土状況図を作成。図面作成の終わった箇所から順次、遺物を取り上げる。
- 10月4日 石室内に電気の配線後、4区-E1の掘り下げの続。併行して排出土の撰別作業を行う。
- 10月5日 6区・7区-W1の発掘開始。及び排出土撰別作業。石室内部の東・西両側壁の石積
- み状況及び石室内に付着する滲水線の痕跡部を中心に渓門及び奥壁から写真撮影をおこなう。石室内遺物出土状況の図面を作成。
- 10月6日 6区・7区-W1の掘り下げの続。中世の土師皿片や埴土製品2点他凝灰岩細片を検出する。土器等の出土状況や3・4区間の東西方向のセクションベルトの土層堆積状況の写真撮影を行う。遺物出土状況の写真撮影後、出土状況の図面を作成する。その後、土器類のみ取り上げる。石野博信館長、坂野平一郎氏来訪。



写真15 石室内排出土中の遺物選別状況

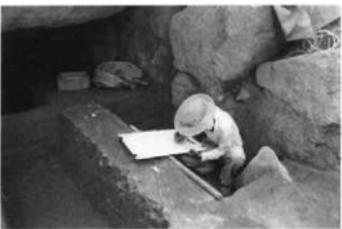


写真16 渓道内の調査状況

- 10月10日 石室内に8~11区の調査区域を設定する。北端に幅25cmのセクションベルトを残す。羨道部6・7区掘り下げ。下位の地点で凝灰岩細片と埴状土製品2点を検出。6・7区の排出土の撰別。10区-W1の掘り下げを開始。瓦器碗口縁細片等出土、炭が多く見られる。
- 10月11日 昨日掘削した10区-W1、6・7区-W1の排出土の撰別作業。昨日検出した凝灰岩細片と埴状土製品の出土状況の写真撮影。出土状況の図面作成。なお、10区-W1南西部より銅錢（永楽通宝）1枚出土。また同層の排出土より銅錢の断片が1点出土する。永楽通宝出土状況の写真撮影。本日より8区-W1の調査を開始。7区-W1の凝灰岩細片と埴状土製品を取り上げる。
- 10月12日 10区-W1の掘り下げの続き。I層（図32⑩層）は炭泥じりの層で中世土器片、瓦器片等が出土する。出土遺物の石等が焼けているのが特徴的である。8区-W1の掘り下げ続き。10区-W1、8区-W1とも排出土の遺物抽出作業も併行して行う。3・4区の土層断面図の作成。岡林孝作氏（奈良県立橿原考古学研究所）来訪。
- 10月13日 9区-W1本日より掘り下げ開始。9区北端セクションベルト付近から銭貨（永楽通宝）1枚、1/3断片出土。坂野平一郎氏（広陵古文化会会长）、清水昭博氏他2名（奈良県立橿原考古学研究所）来訪。
- 10月14日 遺物の撰別作業。銭貨出土状況の図面を作成する。
- 10月17日 8・9・10・11区-W2のI層（図32⑪層）掘り下げ開始。併行して撰別作業を行う。10区-W2より永楽通宝の断片約1/2が見つかる。
- 10月18日 午前中8・9・10・11区-W1・W2の掘り下げ。表土を除去してII層（図32⑫層）の凝灰岩層を検出する作業。また、7区のI層（図32⑩層）を除去して同じく凝灰岩混入層を検出する。午後から6・7区-E1の掘り下げを開始する。宮原晋一氏（奈良県立橿原考古学研究所）他4名、西山要一氏（奈良大学教授）と学生18名来訪。
- 10月19日 6・7区-E1のI層堆積土の除去作業。II層（図32⑫層）で土釜の口縁部と凝灰岩の一部面取り残るものが2点出土。出土状況の図面を作成後、写真撮影。8・9区-W1の中世土器及び凝灰岩の出土状況の写真撮影。10・11区-W1も炭化層の集積状況の写真撮影を行う。6・7区-E1 I層（図32⑪層）の排出土中の遺物の分別収集作業時に銭貨の破片（1/4）が1点検出。



写真17 玄室の調査状況



写真18 羨道内の調査状況

- 10月24日 6・7区-E1Ⅱ層(図32Ⅲ層)の掘り下げ続。地状遺物の散乱、集積層に至る。この遺物を検出する。8区-E1・E2Ⅰ層(図32Ⅲ層)掘り下げ開始。除去は午前に完了。8区-E1北端部に一部炭化物の集積層を検出。9区-E1Ⅰ層(図32Ⅲ層)午後から除去開始。
- 10区-E1Ⅰ層除去作業開始。ほぼ区域全域で炭化物集積層を検出。区の北端部で銭貨1枚を完形で検出。11区-E1Ⅰ層(図32Ⅲ層)、午後から除去開始。各区とも掘削と併行して排出土の分別作業を行う。
- 10月25日 9~11区-E2の各Ⅰ層(図32Ⅲ層)掘り下げ開始。同時に排出土の分別作業。10区-E2鉄片1点、10区-E2鉄片1点出土。また排出土分別時に11区-E1から銭貨1点、10区-E2より鉄片が出土。8~11区-E1、11区-W1、炭化物集積層の整層時に銭貨(1/4)が出土。6・7区-E1の堆状遺物出土状況の写真撮影を行なうが途中で終了。
- 小澤毅氏(奈良国立文化財研究所)来訪。
- 10月26日 8区-E1Ⅱ(図32Ⅲ層)層掘り下げ開始。Ⅲ層(図32Ⅲ層)との層界で土師皿(完形含む)集積箇所を検出。9区-E1Ⅱ層(図32Ⅲ層)での土器集積の検出。10・11区-E1のⅠ層内(図32Ⅲ層)の炭化物集積箇所を除去。午後から10区-E1のⅡ層(図32Ⅲ層)の除去を開始。午前から3区-W1、2区-W1の掘削を開始する。なお、掘削中の全ての調査区で排出土の分別作業を行なう。6・7区-E1の凝灰岩や地状遺物の出土状況の写真撮影を行う。
- 10月27日 9区-E2Ⅱ層(図32Ⅲ層)掘り下げ開始。本日中に除去完了。9・10区-E1Ⅱ層(図32Ⅲ層)で凝灰岩の板石を検出する。
- 3区-E1Ⅲ層(図32Ⅲ層)掘り下げ開始。床面より3cmの地点で止める。4区も同様にⅢ層(図32Ⅲ層)除去。床面直上で止める。2区-E1Ⅲ層、5区-E1Ⅲ層除去開始。各区とも掘削と併行して排出土中の遺物の分別作業を行うが顕著な遺物は出土せず。
- 10月31日 10・11区-E1・E2のⅡ層の掘り下げ続。10・11区-W1Ⅰ層内の炭化物集積層の除去。Ⅱ層の掘削を開始する。11区-W1・2区では凝灰岩の敷石を抜き取っていることが判明。
- 11月7日 10区-W1・W2のⅡ層の掘り下げ続。5区-W1Ⅲ層の掘り下げは午前中完了し、4区-W1Ⅲ層の掘り下げ開始。本日中に4区W1Ⅲ層も床面より2cm上位の地点で完了。8・9区-E1Ⅱ層の凝灰岩の敷石、中世土器群の検出状況の写真撮影。



写真19 玄室内の調査状況



写真20 玄室内の調査状況

- 11月8日 凝灰岩敷石及び詰石等の検出と洗浄作業。  
9区-W1・2Ⅱ層（図32⑧層）の掘り下げ開始。遺物、凝灰岩敷石等の出土状況の図面作成開始。
- 11月9日 8区-W1・2区Ⅱ層（図32⑧層）の掘り下げ開始し、本日中に終了。顯著な遺物は無いが石室側石と凝灰岩の敷石を詰めたと推定される詰石が検出される。排出土中から鉄片3点検出。うち一点は刀子。土層堆積状況の図面作成。
- 11月10日 凝灰岩敷石等出土状況の写真撮影を行う。  
6・7区-W1Ⅲ層（図32⑩層）の掘り下げ開始。排出土中から鉄片等3点検出される。
- 11月11日 6・7区-W1Ⅲ層（図32⑩層）掘り下げる。併行して撰別作業を行う。
- 11月14日 午前中出土遺物収納コンテナ30箱分を博物館収蔵庫へ搬入。セクションベルト除去作業。排出土分別作業中に銅鏡1点（2/3）を検出、銭種は不明。また10区セクションベルトⅡ層（図32⑧層）中より鉄片1点出土。泉森皎氏（奈良県立橿原考古学研究所副所長・同附属博物館長）来訪。
- 11月15日 8・9区南北セクションベルトの除去作業。  
I・II層を本日中に除去完了。遺物分別作業。土層堆積状況の図面作成。
- 11月17日 6・7区-E1Ⅱ層（図32⑩層）の排出土撰別作業中から初めて須恵器の口縁部の破片1点が検出される。
- 11月18日 8区-E1Ⅱ層（図32⑩層）の中世土器集積箇所の整層後、写真撮影。さらに9・8区-W2付近の石室左側壁と隙間に詰められている石の出土状況の写真撮影を行う。  
午後から凝灰岩敷石検出状況の写真撮影。  
遺物撰別作業。
- 11月21日 6・7区-W1Ⅲ層（図32⑩層）を礫の直上まで掘り下げる。6・7区-E1Ⅲ層（図32⑩層）の礫を検出する。4・5区-E1床土を掘削し、礫を検出する。石室内の写真撮影。凝灰岩敷石、埠等の出土状況を写真撮影。香芝市文化財保護審議会委員一行来訪。
- 11月22日 1・2・3区の南北セクションベルトを層位ごとに除去・掘削。併行して遺物分別作業。IV層-3より須恵器坏片1点出土。瓦器混入。IV層-1より瓦器椀の一括品出土。
- 11月24日 遺物分別作業。凝灰岩等収納コンテナ15箱を二上山博物館収蔵庫へ搬入。4・5区南北セクションベルトⅢ層（図32⑧-2層）排出土中から銅鏡（銭文は読めず、不明）完形1点検出。



写真21 玄室の調査状況



写真22 羨道内の調査状況

- 11月28日 4・5区セクションベルトV層（図32⑩層）中より時期不詳須恵器片出土。1・2・3区-E 1 VI層（図32⑪層）（床面直上）の礫の検出作業開始。遺物撰別作業。
- 11月29日 2・3区-W 1 VI層（図32⑫層）礫の検出作業開始。4・5区-W 1 VI層（図32⑬層）礫の検出作業開始。8・9区-E 1 中世土器集積箇所の写真撮影。遺物撰別作業。礫検出作業開始。
- 11月30日 8・9区-E 1 の中世土器集積箇所及び石室内細部のビデオ撮影。礫検出、洗浄作業。
- 12月 1日 床面礫の検出及び洗浄作業
- 12月 5日 床面礫の検出、洗浄作業。漢道側壁の洗浄作業及び漢道付近の清掃作業。遺物出土状況の実測図作成作業の続き。土層堆積状況の図面作成。土層堆積状況実測図作成用の基準線設定。
- 12月 6日 写真撮影を行う。遺物出土状況の図面作成続き。
- 12月 7日 7区-W 1・E 1 のセクションベルト沿いの礫検出作業開始。土層堆積状況及び遺物出土状況の図面作成。
- 12月 8日 3区-E 1・W 1 セクションベルト下VI層（図32⑭層）中の礫の検出作業。6・7区-E 1・W 1 の床面、礫の検出作業。
- 12月12日 床面礫の検出作業続き。遺物撰別作業。整層後土層堆積状況の写真撮影。西藤清秀氏、青柳泰介氏、米川仁一氏（奈良県立橿原考古学研究所）来訪。
- 12月13日 遺物撰別作業続き。セクションベルト除去作業。床面礫層の検出作業。遺物出土状況の図面作成、レヴェル入れ開始。清水昭博氏他2名（奈良県立橿原考古学研究所）来訪。
- 12月14日 遺物出土状況図のレヴェル入れ。礫の検出・洗浄作業。土層堆積状況の写真撮影。
- 12月15日 遺物撰別作業。セクションベルト土層堆積状況の近景及び遠景の写真撮影。セクションベルト除去作業。凝灰岩検出。
- 12月20日 遺物撰別作業。遺物の取り上げ作業。調査区域の再設定。
- 12月21日 石室の実測。遺物撰別作業。掘り下げ作業。
- 12月22日 8区-W 1・W 2 II層（図32⑯層）排出土中から錢貨（2/3）1点（宋錢か？）、鉄片2点が出土する。年末年始の作業中止期間に備える措置を施して年内の調査日程を終了する。
- 平成13年**
- 1月10日 土層堆積状況図面の補足、実測。
- 1月11日 漢道、玄室の南北地区割の設定、1mごとに設定する。礫の検出作業。



写真23 漢道内の調査状況



写真24 漢道内の調査状況

- 1月13日 漢道、玄室の南北地区割の設定を1mごとに行う。
- 1月16日 碓の検出、洗浄作業。西藤清秀氏（奈良県立橿原考古学研究所）、姜秉權氏（韓国・忠南大学校）、崔鍾澤氏（韓国・高麗大学校）来訪。
- 1月17日 セクションベルト除去作業。
- 1月18日 写真撮影。遺物搬別作業。9区セクションベルトI層（図32添層）排出土中より銭貨2枚出土する。小泉俊夫氏（香芝市文化財保護審議会会長）、香芝市二上山博物館友の会ふたかみ史遺会運営委員一行来訪。
- 1月19日 玄室内整層。遺物出土状況写真撮影。遺物搬別作業。寺澤薫氏、松田真一氏、西藤清秀氏、今尾文昭氏、豊岡卓之氏、宮原晋一氏（奈良県立橿原考古学研究所）、神庭滋氏（新庄町教育委員会）来訪。
- 1月23日 玄室内全域の写真撮影。
- 1月24日 遺物出土状況の図面作成。米川仁一氏（奈良県立橿原考古学研究所）、相山林継氏（國學院大學教授）来訪。
- 1月25日 遺物レヴェル入れ。和田晴吾氏（立命館大学教授）来訪。
- 1月26日 レヴェル入れ、遺物取り上げ作業。実測図作成のための石室内割付作業。
- 1月31日 左右側壁沿い、奥壁沿いの排水溝（礫）検出。石室内、漢道部、玄室部の実測図作成のための測線をレヴェルで割付ける。左右側壁割付完了。
- 2月2日 排水溝内の礫の検出、洗浄作業。遺物出土状況の写真撮影。遺物取り上げ作業。その後下位の礫検出作業。
- 2月3日 排水溝内の礫の検出、洗浄作業。遺物出土状況の写真撮影、遺物取り上げ作業。その後下位の礫の検出作業。
- 2月6日 排水溝内の礫の検出、及び排水溝内の堆積土の除去作業。石田成年氏、安村俊史氏（柏原市教育委員会）来訪。
- 2月7日 玄室の南側、玄門付近の東西排水溝及び排水溝中の礫検出、洗浄作業。
- 2月8日 玄室内部全城の整層及び排水溝中の雨水の除去後写真撮影。遺構実測図作成。
- 2月9日 玄室内部の整層及び排水溝中の水の除去作業。写真撮影。遺構実測図作成。
- 2月10日 玄室内部の整層及び排水溝中の水の除去作業。写真撮影。遺構実測図作成。泉森皎氏（奈良県立橿原考古学研究所副所長）他来訪。
- 2月13日 遺構出土状況実測図作成。写真撮影。
- 2月14日 遺構出土状況実測図作成。写真撮影。香芝市文化財保護審議会一行（泉森皎氏、勝部明夫氏、小泉俊夫氏、横山卓夫氏他）来訪。
- 2月15日 玄室内整層、散水、写真撮影。遺構実測図作成。
- 2月16日 玄室内整層、散水、写真撮影。遺構実測図作成。
- 2月17日 玄室内部及び漢道部床面礫の整層、土砂の除去作業。写真撮影。
- 2月20日 玄室内部の整層及び壁面の洗浄作業。写真撮影。遺構実測図作成。
- 2月21日 整層作業、土砂の除去作業。壁面へ水まき。



写真25 漢道内の調査状況

- 写真撮影。遺構出土状況実測図作成。
- 2月22日 美道部付近の整層及び床面襖層に堆積した土砂の除去作業。遺構実測図作成。
- 2月23日 整層作業。写真撮影。遺構検出状況実測図作成。ふたかみ史遊会17名来訪。
- 2月24日 玄室内部の排水溝確認、凝灰岩敷石の実測図作成。
- 2月27日 玄室内部の排水溝確認、凝灰岩敷石の実測図作成。
- 2月28日 玄室内部床面排水溝、襖等の実測図作成作業。
- 3月1日 玄室内部床面排水溝の実測作業。奈良テレビ香芝市アワー制作に伴う取材、収録。
- 3月2日 玄室内面の排水溝の実測図作成。玄室内的整層。写真撮影。
- 3月4日 玄室内床面の排水溝の実測作業。奥田尚氏（八尾市立刑部小学校）来訪、石材の鑑定・注記をして頂く。
- 3月6日 玄室内床面の整層及び排水溝確認の掃除。排水溝襖の写真撮影。坂野平一郎氏（広陵古文化会会长）来訪。
- 3月7日 玄室内側壁の実測図作成。山本彰氏（大阪府近つ飛鳥博物館）、辰巳弘氏（同志社大学教授）来訪。
- 3月8日 玄室内右側壁の実測図作成。本日より平野2号墳調査区域の美道側壁検出状況の実測図面を作成する。木場幸弘氏（高取町教育委員会）来訪。
- 3月9日 玄室内右側壁の実測図面の作成。調査区域の美道側石検出状況の実測図面作成。
- 3月10日 玄室内右側壁の実測図面の作成。調査区域の美道側壁検出状況の実測図面作成。
- 3月11日 現地説明会。
- 3月13日 平野2号墳横穴式石室発見に伴う記者発表。美道部南側の美道側壁、天井石の実測図作成。
- 3月14日 美道部南側の側壁、天井石の実測図作成。
- 3月15日 美道部襖層のレヴェル入れ。写真撮影。
- 3月16日 美道部天井石の実測図作成。
- 3月17日 玄室内部の側壁（東西壁）立面図作成。
- 3月19日 写真撮影を行う。
- 3月20日 写真撮影を行う。
- 3月21日 美道部南側の美道部側壁立面図作成。玄室内部の写真撮影。伊藤聖浩氏（羽曳野市教育委員会）他3名、日本大学大学院生3名、奈良県立橿原考古学研究所員10名来訪。
- 3月22日 美道部南側の美道側壁立面図の作成。写真撮影。
- 3月23日 美道部、床面襖の洗浄後、玄室内部、美道側壁の全景、個別細部の写真撮影。本日より石室、美道部を閉塞するための土糞作り。
- 3月24日 玄室内、美道部床面襖の洗浄。玄室内部、美道部側壁の全景、個別細部の写真撮影。土糞作り。
- 3月27日 土糞作り継続。午後より土糞を入れて埋め始める。
- 3月28日 土糞で埋める作業継続。
- 3月29日 土糞で埋める作業終了。発掘用具・資材等を博物館に搬入、洗浄作業。
- 3月30日 測量道具を博物館へ持ち帰り、今年度の全ての調査日程を終了する。



写真26 報道関係者への記者発表

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 地理的環境

#### (1) 地理的環境 (図4・5、図版1~3、図版85)

香芝市は奈良県の北西部を占める奈良盆地の西部に位置する。第三紀中新世に火山活動が活発であった標高517.2m（雄岳）の二上山の東部一帯に披がる扇状地に中心部が立地する。行政的には、現在、北は北葛城郡王寺町、南は葛城市（旧北葛城郡當麻町）や大和高田市、東は北葛城郡広陵町、同郡上牧町、西は大阪府柏原市や羽曳野市と接する総面積24.23km<sup>2</sup>の町で（図4）、大阪都市圏と接するという地理的条件から、近年、大阪のベットタウンとして人口が急増している。

平野1号墳・平野2号墳を始めとする平野古墳群は、行政的には香芝市北部の香芝市平野1043番地に所在している。江戸時代以前から続く農村集落である平野地区の東側の外れに当たり（図版85）、昭和50年代に開発されて住宅が密集する白鳳台地区との境界に位置している。



図4 香芝市全域図及び平野2号墳位置図 (S=1/60,000)

二上山の南北の麓を辿る東西の峠沿いの道は、地理的環境から大和と河内を結ぶ交通の要衝として重要な役割を果たしてきた（図5）。二上山の北から香芝市域の閑屋越、田尻越、穴虫越があり、葛城市域の岩屋越、竹内越、平石越がある。このうち、後に竹内街道と称される当麻道、竹内峠を越える道は、推古天皇21（621）年条にみえる「難波より京に至るまでに大道を置く」の大通に該当するものと考えられており、飛鳥京と難波津を結ぶ日本最古の官道と認識されている。また、その北方に位置する穴虫越の道は、壬申の乱他、「古事記」や「日本書紀」に頻繁に登場する大坂道と考えられている。大坂道沿いの大坂については、「古事記」崇神紀の「宇陀の墨坂の神に赤色の楯矛を祭り、また大坂の神に黒色の楯矛を祭りたまう」や「日本書紀」天武紀8（679）年の「初めて閑を龍田山、大坂山に置く」等の多数の記事があり、古代から大和に至る玄関口、軍事的拠点と

して重要視されてきたことを物語っている。平城遷都後は難波から平城京へは、北方の大和川付近の龍田越の道が主流となり、竹内越や穴虫越は道としての機能は以前よりも薄らいで行ったが、近世になると、庶民の間に長谷寺詣や金峯山詣、西国三十三ヶ所巡礼や伊勢参りが流行するにつれて、竹内越は二上山麓の他の道に比して最も多く利用されるようになった（図版1）。

## （2）地形・地質的環境（図6、図版2）

香芝市域の地形は、概ね、二上山北麓と明神山南麓の丘陵域から成る西部の丘陵地域（「西部丘陵」）と大和川の一主流である葛下川沿いに形成された沖積低地、二上山麓の緩傾斜扇状地（「二上扇状地」もしくは「畑扇状地」）で構成される中央部の低地（「中央低地部」）、標高65~85mの馬見丘陵の南西部に相当する東部の丘陵地域（「東部丘陵」）に地形区分される（図版2参照）。各所の標高差は42~273mに亘り、奈良盆地の平野部の他市に比して、起伏に富んだ自然環境を形成しているが、近年の大規模開発により、往時の地形や自然環境も大きく変わりつつある。

地質的には二上山周辺と本市域には、基盤である花崗岩の岩盤の上面に二上層群とよばれる二上火山複合体を形成する地層と古大阪層群と呼ばれる大阪平野周辺に広く分布する河や湖に堆積した河湖層が複雑に入り組んで地層が形成されている。平野2号墳を始めとする平野古墳群は、標高274.8mの明神山を頂部として東方へ緩やかに派生する丘陵端部に位置しており、地質的には明神山火山岩と呼ばれる溶岩上部に堆積してできた古大阪層群に立地している（図6）。



図5 大和・河内の古道（註1a文献より転載）

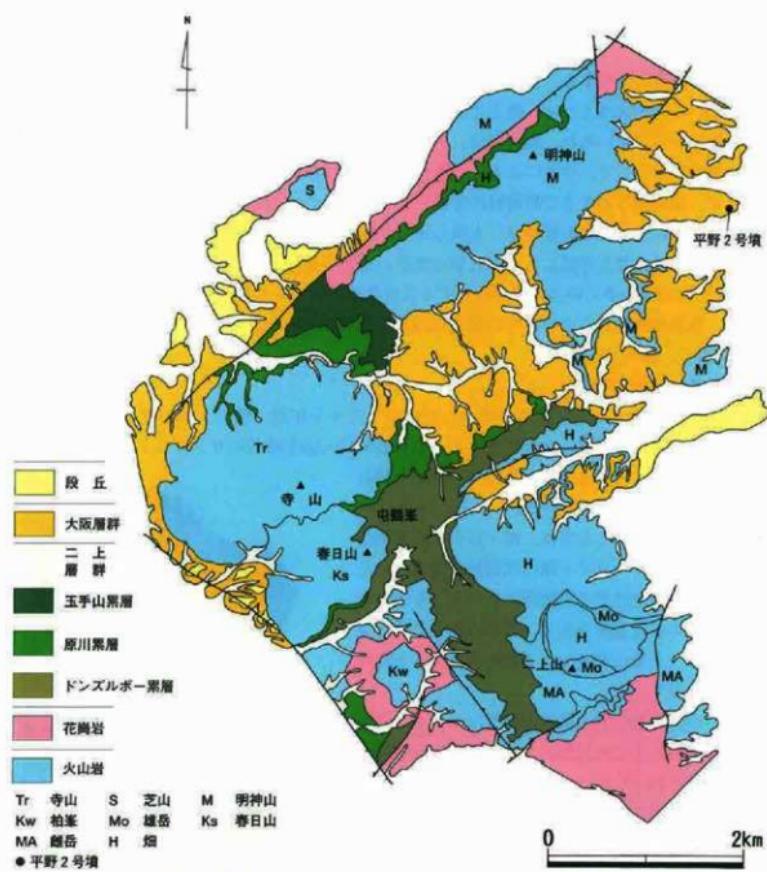


図6 香芝市周辺の地質図（註3文献に一部改変・転載）

註

- a. 岸後男 1970 「古道の歴史」「古代の日本」 角川書店  
b. 堀井甚一郎、和田翠他 1984 「竹内街道（二上山麓の道）」奈良県「歴史の道調査報告書」 奈良県教育委員会
- a. 高垣又太郎 1976 「地形・地質」「香芝町史」 香芝町役場  
b. 横山卓雄 1992 「二上山はこうしてできた」「よみがえる二上山3つの石」二上山博物館展示解説  
香芝市二上山博物館
- 香芝市教育委員会編 2004 「鶴峯莊第1地点遺跡－二上山北麓におけるサスカイト採掘址の調査－」 香芝市文化財調査報告書第5集 香芝市教育委員会

## 2 歴史的環境

香芝市の西部に位置する二上山は、サスカイトと凝灰岩、金剛砂の3つの石を産出することで知られている。サスカイトは、数万年前の旧石器時代からおよそ2千年前の弥生時代に至るまで石器の原料として用いられ、凝灰岩は、古墳時代の石棺や石室を始め、古代の寺院や宮殿の基壇等の建築用部材として、中世には主に層塔や五輪塔等の石塔を構成する部材として重用された。

そして、金剛砂は近年まで研磨材の原料として使用されており、二上山の火山活動によってもたらされたこれらの自然の産物は、人類の知恵と技術の進歩とともに巧みに利用されてきた。

二上山麓には、数万年間にも及ぶ人類の生活の痕跡を物語る数多くの遺跡が残されており、古墳や宮都、社寺等の多くの文化財が所在する奈良盆地の中でもとりわけ特異な様相を呈している。

以下、旧石器時代から中世までの香芝市内及び近隣の主要な遺跡について概観することとする（図7、表1、図版1～4）。

### ①旧石器時代～縄文時代

二上山のサスカイトが利用され始めたのは約2万5千年前にさかのほると推定されている。二上山麓には、現在、70箇所をこえる旧石器時代～弥生時代のサスカイト製石器の原産地として知られている。

旧石器時代の遺跡としては、桜ヶ丘第1地点遺跡<sup>1)</sup>や日本最古級のサスカイト礫の採掘坑が検出された鶴峯荘第1地点遺跡<sup>2)</sup>等の近畿地方を代表するサスカイト製石器の生産遺跡があり、近年の開発に伴う調査でサカイ・平地山遺跡では多数のサスカイト採掘坑が検出されている。

これらの旧石器時代の遺跡が豊富なせいか、継続して奈良盆地の中でも比較的早い時期から縄文時代の遺跡が残されている。

縄文時代の遺跡としては、二上山麓では早期の押圧縄文土器片が出土した桜ヶ丘第1地点遺跡<sup>4)</sup>や前期の北白川下層式の羽状縄文土器片が出土した鶴峯荘第2地点遺跡<sup>5)</sup>等があり、平野部の遺跡としては、早期の高山寺式土器が出土した下田東遺跡をはじめ（写真27）、狐井遺跡第8次調査では縄文時代前期の北白川下層式から中期初頭の大歳山式期の土器（写

真28）や石鎌、石匙、石錘等の石器類のほか、イノ

シシやシカ等の獣骨が大量に出土している。縄文時代後期では磨消縄文土器が出土した磯壁遺跡<sup>6)</sup>や宮滝式土器が出土した瓦口森田遺跡<sup>7)</sup>、晚期の突帯文土器が出土した鎌田遺跡<sup>8)</sup>などが知られ、縄文時代早期から晩期を通して生活の営みの痕跡が見られる。また、近隣の大規模な拠点的な集落遺跡として本市南西の二上山東麓に位置する竹内遺跡（現葛城市・旧當麻町）がある。



写真27 下田東遺跡採集の押型文土器



写真28 狐井遺跡出土深鉢型土器

## ②弥生時代

弥生時代は、石器生産遺跡として二上山麓では前代に統いてサスカイトを原料に石劍や石槍を作成したと推定される田尻峠第1・2地点遺跡やシル谷第1地点遺跡などの石器生産遺跡がある。

平野部で遺構に伴うものとして、藤ノ木丁遺跡第7次調査では落ち込み状遺構（写真29）から手焙形土器2点を含む後期後半の土器が一括出土しており、馬見丘陵西端下位の下田味原遺跡でも流域から後期の土器がまとめて出土している。

これ以外は法楽寺山遺跡等の市内数箇所の遺跡で中期～後期の土器片数点が採集されているのみで、市内の弥生時代の遺跡は少ないが、本市の北東域に隣接する馬見丘陵西端の北葛城郡上牧町字觀音寺山からは、江戸時代の文化年間に葛城地城でも希少な弥生時代中期～後期の小形の袈裟襟文銅鐸が出土している。この觀音山銅鐸は近年、大量の銅鐸等が出土した島根県加茂町加茂岩倉遺跡出土銅鐸の中の1点と同じ鑄型で作られたものであることが判明しており、付近にこの銅鐸を祭器とした相応の弥生時代の集落が存在した可能性が考えられる。

## ③古墳時代

市内には約30基の古墳が確認されている。古墳の分布域は、馬見丘陵南端部と狐井台地、藤山丘陵、志都美丘陵域などの3つの地域に分けられる。

馬見丘陵南端部には前期・中期・後期にかけて市内でも最も多くの古墳が分布している。前期古墳としては、中国製の札甲（写真30）が出土したことで知られる別所城山第2号墳があり、中期の著名な古墳としては、全長約100mの前方後円墳と推定される別所石塚古墳等がある。この他は、木棺直葬の勘平山1・2号墳をはじめ、後期としては凝灰岩の組合式石棺直葬の御坊山第1・2号墳や御坊中1・2・3号墳等の直径10m～20m前後の中小規模の古墳が数基分布している。

また、近年の調査で馬見丘陵東端部下位の低地部に位置する下田東古墳からは巫女形埴輪等の人物埴輪をはじめ、家形埴輪や馬形埴輪（写真33）等の形象・動物埴輪がまとめて出土している。

狐井台地では古墳時代中期後半としては最大級の全長140mの大形前方後円墳である狐井城山古墳（写真31）が所在する。古墳の付近からは家形石棺の蓋石1点や兵庫県の竜山で産する竜山石製の凝灰岩で作られた長持形石棺の蓋石2点が採集されており、このうち、長持形石棺は狐井城山古墳に伴う可能性が指摘されている。



写真29 藤ノ木丁遺跡弥生土器出土状況



写真30 別所城山2号墳出土札甲



写真31 狐井城山古墳

藤山丘陵域を中心とする地域では二上山産の凝灰岩で作られた組合式石棺を直葬した藤山1・2号墳や約5基の古墳から成る北本市古墳群等の中期から後期にかけて小規模な横穴式石室をもつ古墳や石室を持たずに組合式石棺を直葬する小規模な古墳が形成される。また、藤山丘陵の北方の丘陵には上中ヨロリ第1号墳、上中ヨロリ第2号墳<sup>29)</sup>や山口古墳<sup>30)</sup>などがあり、上中ヨロリ第1号墳からは馬具を構成する金銅製の軽金具が出土している。

また、正確な出土地や古墳の埋葬施設等の詳細は不明であるが、同丘陵上からは昭和24年に付近の住民によって、開墾中に飛鳥時代の7世紀中頃と推定される土器とともに大刀（伝今泉出土銀装大刀）1振（香芝市指定文化財）が発見されている（写真32）。

市北部では全長約6mの横穴式石室を持つ古墳時代後期の今泉古墳が単独で見られる他、志都美丘陵域では7世紀代に亘って形成された平野古墳群がある。東から平野1号墳（平野車塚古墳）、平野2号墳、消滅した平野3号墳、平野4号墳、平野塚穴山古墳（国指定史跡）他の約6基の古墳から成り、江戸時代は平野3号墳は武烈天皇陵として、平野塚穴山古墳は顯宗天皇陵として認識されていた。このうち、平野塚穴山古墳は、7世紀後半の築造と考えられる一辺21mの方墳で、主体部は二上山から産出する凝灰岩製の切石を用いた整美な横口式石樋を有する。



写真32 伝今泉出土銀装大刀



写真33 下田東古墳出土馬形埴輪



写真34 錦田遺跡建築部材出土状況



写真35 高山石切場遺跡石切構

この他、平野古墳群の北西の北葛城郡王寺町には全長5.9mの横穴式石室を持つ7世紀初頭の墓造と推定される畠田古墳が単独で立地する。<sup>34)</sup>

古墳時代の集落遺跡としては、藤山遺跡で古墳時代後期と推定される掘立柱建物跡が数棟検出されている以外は集落の痕跡を示す遺構はあまり知られていないが<sup>35)</sup>、葛城市と接する鎌田遺跡の第6次調査では灌漑状遺構を伴う流路跡から古墳時代前期～中期（庄内式期～布留式期）の土器と共に大型建物に伴う建築部材が検出されており（写真34）、付近に大型掘立柱建物跡で構成される大規模な集落の拡がりが予想される。

生産遺跡としては、古墳時代中期頃に至って二上山の産出する凝灰岩は近畿地方を中心に石棺用石材としての需要・利用が始まり、市西部の二上山麓の凝灰岩を主体として構成されるドンヅルボ一層の分布域には中世を中心に古墳時代の可能性のあるものも含めて数箇所で凝灰岩を切り出した石切場跡が分布している。

このうち、開発に伴って数箇所で凝灰岩を切り出した石切場が発掘調査されており、二上山西麓の大坂府側の楠木石切場や椋谷石切場では、石塔の未製品とともに石塔の部材を検出した石切遺構が検出されている。

二上山東麓の奈良県側の穴虫石切場では中世の宝篋印塔の相輪や鉄斧が出土しており、高山石切場遺跡では、五輪塔や層塔、宝塔（写真36）等の中世の石塔類の未製品やこれらの部材を採石した石切遺構をはじめ、数箇所で古墳時代の組合式家形石棺の部材を切り出した可能性のある石切遺構が検出されている（写真35）。

この他にも生産遺跡として平野古墳群と同一丘陵域には古墳時代後期の須恵器や奈良時代の瓦を焼成した7基の窯跡からなる平野窯跡群があり<sup>36)</sup>（写真37）、北葛城地域でも最も古い時期の窯跡として注目されている。

それ以外の古墳時代の特筆すべき遺物として下田東遺跡では、流路跡から5世紀前半と推定される木製の鞍の後輪が検出されており（写真38）、国内における乗馬の普及の初現を検討する上で貴重な資料となる。



写真36 高山石切場遺跡出土宝塔未製品



写真37 平野5号窯



写真38 下田東遺跡出土木製鞍（後輪）

#### ④古代

7世紀以降の古墳以外の遺跡としては、尼寺廃寺跡がある。尼寺廃寺跡は香芝市尼寺に所在する飛鳥時代から奈良時代の寺院跡である。礎石が残る基壇が南北約200m離れて存在することなどから、2つに分かれる寺院跡と考えられている。

尼寺北廃寺（国指定史跡）は、北に金堂、南に塔を配し、それを回廊で囲む東向きの法隆寺式伽藍配置で、塔基壇は高さ約1.4m、一辺約13.6m、金堂は東西約14.7m、南北約16.8mを測る。

回廊は南北約70.8m、東西約44.2mで幅約5.9mを測る。出土した瓦などから7世紀後半に塔から造営が開始されたものと推定されている。

平成7年度の塔跡の調査で、基壇上面から地下約1.2mで日本最大級の規模を誇る約3.8m四方の塔心礎が検出され（写真39）、心礎の柱座内からは、耳環12点、刀子1点、水晶丸玉2点、水晶切子玉2点、ガラス丸玉1点、ガラストンボ玉1点、ガラス小玉1点等の多彩な含利莊巣具（平成14年度香芝市指定文化財）が出土している（写真40）。

また、南方の尼寺廃寺南遺跡では平成16年の発掘調査で塔跡や金堂跡と推定される東西2基の基壇跡が検出されている。塔跡は一辺12.1mで、凝灰岩の地覆石が検出されたことから凝灰岩の壇正積基壇と推定されている。詳細は今後の調査に負うべきところが多いが、現段階では尼寺北廃寺より古い7世紀中頃の創建と考えられている。

このほか、二上山麓には多数の古代寺院が残されており、本市南西の葛城市域では二上山産の凝灰岩製の石仏や埴仏が発見された石光寺や塔と回廊などが検出された加守廃寺などの奈良時代の寺院跡が所在するのを始め、太子町では国内でも珍しい凝灰岩の岩肌を彫り込んだ石窟寺院である岩屋跡や龜谷寺跡がある。

また、二上山麓は主に奈良時代から平安時代の火葬墓が集中する地域として知られており、二上山東側の奈良県側としては、金銅製の骨蔵器に471字の長文の墓誌銘を刻んだ国宝の「<sup>49)</sup>威奈大村金銅製骨蔵器」（写真41）や家形の凝灰岩製の石櫃を外容器とする奈良時代の穴虫火葬墓のほか、本市の南方の葛城市域では金銅製の骨蔵器を有する加守火葬墓などの飛鳥時代～奈良時代にかけての古代の火葬墓が集中して分布している。

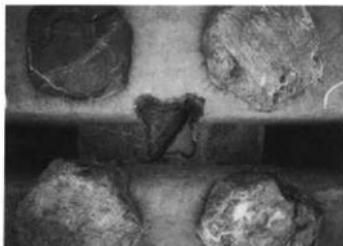


写真39 尼寺廃寺塔基壇跡心礎と礎石



写真40 尼寺廃寺出土含利莊巣具



写真41 威奈大村金銅製骨蔵器

高山火葬墓（平成10年度香芝市指定文化財）では奈良時代の8世紀後半の火葬墓が検出されている。火葬墓は木櫃の中に2点の骨蔵器を納めた火葬墓で（写真42）、2～3人の複数の火葬骨を一箇所に埋葬した火葬墓としては珍しい合葬墓である。和同開称を含む13点の銭貨や用途不明の鉄片のほか、銅製の丸柄や馬具等の鉢形金具が出土していることから、被葬者は下級の官人と考えられる。

生産遺跡としては、近年、馬見丘陵西端の北葛城郡河合町葉井瀧ノ北遺跡<sup>54)</sup>では長屋王邸の所用瓦を焼成した奈良時代の窯跡が調査されており、隣接する北葛城郡上牧町でも数箇所で瓦を焼成した窯跡が確認されている。<sup>55)</sup>

また、下田東遺跡では、近年行われた数次の調査で複弁八弁蓮華文軒丸瓦や四重弧文軒平瓦、鷹尾の他、流路跡から土器に人面を墨描した数点の人面墨書き土器等が出土しており（写真43）、付近に寺院や官衙的な施設の存在が予測される。

#### ⑤中世

穴虫や逢坂を中心とした二上山北麓一帯は、大和と河内を結ぶ地理的環境から、穴虫峠を経て河内へ至る太子道や堺街道、田尻峠を経て河内へ至る長尾街道や伊勢街道などの大和と河内を結ぶ主要街道が縱横に交差しており、古代から大和と河内を結ぶ交通の要衝として重要視されてきた。

中・近世以降もこの地理・地形的環境条件から、軍事拠点として重要視され、二上山麓の街道筋や集落を見下ろす山中には奈良盆地内でも多数の城郭や関連遺構が築造される。

いずれも明確な存続時期や城主、城主の変遷等不明なものが多いため、市内だけでも丘陵地を中心<sup>56)</sup>に在地領主の岡氏の城跡である岡城跡をはじめ、北から送迎山城跡<sup>57)</sup>、七郷山城跡<sup>58)</sup>、木辻城跡<sup>59)</sup>、逢坂城跡<sup>60)</sup>、ヘンモンド城跡<sup>61)</sup>、鈴山城跡など約9箇所で城郭関連遺構が知られており、南方の二上山山頂部では二上山城跡や万歳山城跡、岡城跡等がある。

このうち、鈴山城跡で城郭の調査が実施されており、鈴山城跡では、幅約3～7m、深さ2.8mの断面V字状を呈する14世紀後半の濠跡が検出されている。<sup>62)</sup>

また、平野部の下田東遺跡では造営氏族等の詳細は不明であるが、幅3.6～7.6m、深さ0.65～2m、東西94m（検出長）、南北19m（検出長）の室町時代前期（14世紀後半～15世紀前半）の居館に伴うと推定される方形の環濠跡が検出されている（写真44）。



写真42 高山火葬墓



写真43 下田東遺跡出土人面墨書き土器



写真44 下田東遺跡の環濠跡

表1 香芝市周辺の主要遺跡一覧

番号	遺跡名	種類	時代	遺跡の概要	主な出土遺物
1	手野1号墳(御井山古墳)	古墳	古墳	円墳、径15m、横穴式石室	漆志器、人骨部、漆灰器、壺、板の文瓦、瓦器
2	手野2号墳	古墳	古墳	円墳、径26m、横穴式石室	漆志器、人骨部、漆灰器、壺、板の文瓦、瓦器
3	宇勢3号墳	古墳	古墳	楕円大石室(手野3号墳)、前方後方とも削減	漆志器、漆塗籠形埴輪、金環、中空瓦、瓦
4	手野塚山古墳	古墳	古墳	方墳、径15m、横穴式石室	漆志器、漆塗籠形埴輪、金環、中空瓦、瓦
5	紀念金塚寺	寺院跡	奈良	伽藍・平安	瓦器、瓦器、吉備切妻共作
6	紀念城跡	寺院跡	奈良	伽藍・中興	瓦器、瓦器、須志器、人頭瓶、古事記、古巾、漆器瓶
7	平野1~5号墳	古墳	古墳	古墳・五輪式	漆志器、瓦
8	今泉古墳	古墳	古墳	円墳、径10m、横穴式石室	漆志器、瓦
9	三瀬山古墳等	城跡	中世	瓦器、空器	
10	七條山城跡	城跡	中世	瓦器、空器、土器	
11	今泉遺跡	敷石地	绳文	敷石地	壳形石器
12	上中ヨリ1号墳	古墳	古墳	方墳、径15m、横穴式石室(第2号墳)	漆塗籠形埴輪
13	山古墳	古墳	古墳	円墳、径10m、横穴式石室	
14	山古墳	古墳	古墳	円墳、径10m、横穴式石室	
15	浦原塚	古墳	古墳	椭円、宮内庁管轄、内墳?	
16	西吉野谷跡山古墳	斜坡丘陵	弥生	集落・生活	朱漆木製漆器
17	弘前跡	古墳	古墳	段築式堆積物、壇、土坑	漆器、漆志器、粘土質陶器
18	新庄1号墳	古墳	古墳	新庄大冢形石棺	瓦器、古巾
19	感化池2号墳	古墳	古墳	椭円式石室形埴輪墓	土面器、須志器、瓦器
20	赤山古墳群	古墳	古墳	前方・馬蹄形、内墳、径3~5m、横穴式石室	
21	足利山古墳	古墳	古墳	馬蹄形	兔生土器、石器、石器
22	宇田東遺跡	集落跡	绳文~中世	斜坡丘陵地盤、疏水、井、7	绳文土器、斜坡丘陵、漆志器、灰瓦、漆志器、漆志器、人面彫刻土器、漆志器、漆器瓶
23	上川東古墳	古墳	古墳	軸2式古墳、頂径21m、調査	円筒埴輪、武人形埴輪、女形埴輪
24	新木ノ木古墳	集落跡	弥生~古墳	斜坡丘陵、土坑、溝	兔生土器、土器、漆志器、漆志器、石器
25	越山森田遺跡	集落跡	绳文~古墳	斜坡丘陵、土坑、足跡群	绳文土器、石器、瓦器、灰瓦、漆志器、土器
26	鳴山第1・2号墳	古墳	古墳	1号、径10m(第1号)、径15m(第2号)、木棺直葬	
27	足利山古墳	古墳	古墳	円墳、径10m、木棺直葬	绳文器、骨玉、残刀、鉄劍
28	茅山山古墳	古墳	古墳	円墳、径630m	
29	鶴山城跡(鶴山遺跡)	城跡	旧石器、古墳	斜坡丘陵、土坑、墓、古刀、鐵劍、刀劍、漆器	土器器里、丸漆器、漆器、白器、漆志器、ナイフ形石器
30	山古墳	古墳	古墳	前方後円墳、傾斜長約42m	石器
31	別所城山第1号墳	古墳	古墳	立派式・壇、壇径45m	管玉
32	東別所城山第2号墳	古墳	古墳	円墳、径20m、壇一部	札形、曲角削器、残刀、鉄劍、漆器
33	猪所石塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、復元埴生石塚約100m、斜土壁	瓦器、埴生石
34	掛井城山古墳	古墳	古墳	斜坡丘陵、頂上径40m、墳頂部約85m、東方斜面約10m、瓦器、外堀	長方形石器(特定文化財)、家形石器、埴輪
35	船井遺跡	集落跡	绳文~平安	溝	绳文土器、弦纹土器、石器、石器、石器、石器
36	難波遺跡	集落跡	绳文~平安	旧河岸、浅炒青器、水槽	绳文土器、弦纹土器、古刀・古劍、漆器形埴輪
37	難波遺跡	集落跡	绳文	散布地	绳文土器、石器
38	西院城跡	城跡	中世	小字名「西ノ城」、「アタミ」等あり	绳文4号晩土器全削製作窯跡(付近)
39	高木村墓	火葬墓	奈良	火葬墓	火葬器
40	高木火葬墓	火葬墓	奈良	木棺内「アラカバ骨董手筋の品」	火葬器、須志器、石器火葬器、宝鏡残片
41	古山不切道遺跡	生遺跡	中世	縄文器群石面跡	灰烬、須志器、石器火葬器、宝鏡残片
42	火焚火葬跡	火葬墓	奈良	火葬墓	绳文火葬形埴輪器、土器
43	火焚火葬跡	生遺跡	中世	斜坡丘陵石面跡	石材片、盒状灰烬、灰陶器
44	田中野2号古墳	生遺跡	奈良	石器灰烬跡、サスカイ火葬灰	灰陶器火葬、砾石灰烬器、水器、石器灰烬
45	田中野3号古墳	生遺跡	奈良	石器灰烬跡	灰陶器火葬、砾石灰烬器、砾石灰烬、灰陶器
46	シリ谷第1号古墳	生遺跡	奈良	绳文~平安	サスカイ火葬灰跡、火葬灰器、始良T字火葬器、砾石火葬器
47	難波古出山古墳	生遺跡	奈良	門石器、砾石	ナイフ形石器、圓底青瓷、織文土器
48	鳴尾在第2地在	牛糞堆跡	旧石器	斜坡石器群、二軒	ナイフ形石器、黑曜石器、水器、石器
49	坂ノ丘第1地在	牛糞堆跡	旧石器~奥系	坂ノ丘、精石、山田山、園野石器群	ナイフ形石器、黑曜石器、石器
50	岡城跡	城跡	土器	石器、灰烬、井戸	土器、罐
51	御守寺跡	寺院跡	奈良	奈良・平安	人、罐
52	加守金剛寺跡	墳墓	奈良	火葬器	金剛副合鐵鎧
53	上山城跡	城跡	奈良	壘垣以降	桶
54	羽尾跡	古跡	奈良	石窟寺跡	漆器
55	古谷寺跡	寺院跡	奈良	石窟寺跡	上・中型石塔(高さ5.5m)、斜面石器
56	万葉山城跡	城跡	奈良	跡	土器、砾石、圓底青瓷、瓦器、ガラス玉
57	萬谷山古墳	古墳	古墳	方墳、径27m、横穴式石室	土器器、漆志器、瓦器、石器
58	石光寺	寺院跡	奈良	寺院跡	瓦器、砾石、圓底青瓷、瓦器、ガラス玉
59	当麻寺	寺院跡	奈良	寺院跡	瓦
60	竹内酒跡	集落跡	绳文~平安	生居跡、土器帯、堅石遺跡、酒	绳文土器、斜坡丘陵、石器、瓦器



図7 香芝市及び周辺の遺跡分布図

註

- 1) 松藤和人 1979 「二上山・桜ヶ丘遺跡－第1地点遺跡の発掘調査報告－」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第38冊 奈良県教育委員会・橿原考古学研究所編
- 2) a. 奈良県立橿原考古学研究所編 1985 「昭和59年度鶴峯莊第1地点遺跡第1次発掘調査概報」香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所  
b. 香芝町教育委員会編 1990 「昭和60年度鶴峯莊第1地点遺跡第2次発掘調査概報」香芝町教育委員会
- 3) 香芝市教育委員会編 2004 「サカイ遺跡・平地山遺跡の発掘調査」「平成15年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会」奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 4) 前掲註1文献
- 5) 香芝市教育委員会編 1990 「平成元年度鶴峯莊第2地点遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会
- 6) a. 小泉俊夫 1980 「押型文土器を出土した香芝町下田東遺跡（一）」『青陵』第46号  
b. 青田宇太郎 1929 「大和下田村出土の縄文式土器に就いて」『考古学雑誌』第19巻第4号 日本考古学会
- 7) 香芝市教育委員会編 1994 「狐井遺跡（第8・9次調査）」「香芝市埋蔵文化財調査概報2」香芝市教育委員会
- 8) 松本俊吉 1956 「先史時代の人々」『大和下田村史』下田村役場
- 9) 香芝町教育委員会編 1989 「元日森田遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会
- 10) 香芝市二上山博物館編 1992 「石器のあるさと二上山－縄文・弥生時代のサスカイトー」「二上山博物館常設展示図録」香芝市二上山博物館
- 11) 松田真一 1989 「竹内遺跡」「奈良県遺跡調査概報1988年度」奈良県教育委員会・橿原考古学研究所編  
佐々木好直 1990 「竹内遺跡」「奈良県遺跡調査概報1989年度」奈良県教育委員会・橿原考古学研究所編  
関川尚功 1992 「竹内遺跡」「奈良県遺跡調査概報1991年度」奈良県教育委員会・橿原考古学研究所編他
- 12) 香芝町教育委員会編 1989 「田尻峠－中和幹線事業にともなう発掘調査概報－」香芝町・香芝町教育委員会
- 13) 奈良県立橿原考古学研究所編 1982 「香芝町シリ谷第1地点遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1981年度」香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 14) 香芝市教育委員会編 1994 「藤ノ木丁遺跡第7次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2」香芝市教育委員会
- 15) 下大迫幹洋 2001 「香芝市藤ノ木丁遺跡出土の手焙形土器について」「みずほ第36号」大和弥生文化の会
- 15) 湯本整 2002 「下田味原遺跡第1次」「奈良県遺跡調査概報2001年度」奈良県立橿原考古学研究所
- 16) 香芝市教育委員会編 1997 「法楽寺山遺跡第1次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報8」香芝市教育委員会
- 17) 小泉俊夫 1977 「先史時代」「上牧町史」上牧町役場
- 18) 烏根県教育委員会・加茂町教育委員会編 2002 「加茂岩倉遺跡」烏根県教育委員会・加茂町教育委員会
- 19) 泉森政 1976 「古墳時代」「香芝町史」香芝町役場
- 20) 白石太一郎ほか 1974 「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会

※近年では斜縁二神二獸鏡の神像部の破片が採集されている。

- 21) 前掲註19・20文献
- 22) 前掲註19・20文献
- 23) 前掲註19・20文献
- 24) 前掲註19文献
- 25) 香芝市教育委員会編 2003 「下田東遺跡－五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う平成13・14年度発掘調査の成果－」 香芝市都市整備部区画整理課、香芝市教育委員会、香芝市二上山博物館
- 26) a. 泉森政 1976 「古墳時代「香芝町史」」 香芝町役場  
b. 香芝町教育委員会編 1986 「昭和60年度孤井城山古墳外堤第4次調査概報」 香芝町教育委員会
- 27) 前掲註19文献
- 28) 前掲註19文献
- 29) 香芝町教育委員会編 1986 「旭ヶ丘I」 香芝町旭ヶ丘土地区画整理事業組合
- 30) 前掲註19文献
- 31) 下大迫幹洋 1999 「伝今泉川土銀装大刀復元品製作報告書」「ふたかみ7-1997(平成9年度香芝市二上山博物館年報・紀要)」 香芝市二上山博物館
- 32) 前掲註19文献
- 33) 泉森政他 1977 「竪田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 34) 西藤清秀・大西貴夫 1998 「高田古墳」「王寺町文化財調査報告書第1集」 王寺町・奈良県立橿原考古学研究所
- 35) 香芝町教育委員会編 1991 「藤山遺跡発掘調査概報」 香芝町教育委員会
- 36) 香芝市教育委員会編 1992 「鎌田遺跡」 平成4年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 37) 奥田尚・増田一裕 1979 「古代の石切場跡その1」「古代学研究」第91号 古代学研究会  
奥田尚・増田一裕 1981 「古代の石切場跡その2」「古代学研究」第95号 古代学研究会
- 38) 井上智博・山本美野里 1998 「楠木石切場遺跡発掘調査報告書」 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 39) 木嶋崇晴・木田奈都子 2000 「椋谷石切場跡-南阪奈道路建設に伴う凝灰岩石切場跡の調査-」 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 40) 松田真一 1982 「穴虫石切場遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1980年度」 奈良県立橿原考古学研究所
- 41) a. 香芝市二上山博物館編 1996 「高山火葬墓・高山石切場遺跡」 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館  
b. 下大迫幹洋 2001 「8奈良県高山石切場遺跡」「日引第1号」 石造物研究会  
c. 下大迫幹洋 2002 「二上山東側(香芝市)の石切場について」「二上山凝灰岩の石切場と石造物-牛產地と消費地-」 石造物研究会
- 42) 千賀久 1983 「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1982年度」 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 43) 香芝市教育委員会編 2005 「下田東遺跡 五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う平成15・16年度発掘

- 調査の成果」】香芝市都市整備部区画整理課・香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 44) 香芝市教育委員会編 2003 「尼寺廃寺Ⅰ」 香芝市教育委員会  
保井芳太郎 1932 大和上代寺院志 大和史学会
- 45) 香芝市教育委員会編 2004 「尼寺廃寺南遺跡(尼寺廃寺第19次調査)」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報17」  
香芝市教育委員会
- 46) 河上邦彦 1992 「当麻石光寺と弥勒仏概報」 奈良県立橿原考古学研究所・吉川弘文館
- 47) 近江俊秀他 1993 「加守寺院跡第1・2次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1992年度」 奈良県教育委員会
- 48) 堀江門也 1991 「岩屋」「図説日本の史跡古代2」 同朋舎出版
- 49) 堀江門也 1991 「鹿谷寺跡」「図説日本の史跡古代2」 同朋舎出版
- 50) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 「日本古代の墓誌」 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
- 51) 綱干善教 1959 「北葛城郡香芝町穴虫火葬墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第12号 奈良県教育委員会
- 52) 鳩田暁 1956 「北葛城郡当麻町大字加守金剛骨壇出土地」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第9号 奈良県教育委員会
- 53) 前掲註41a 文獻
- 54) 吉村公男 2005 「栗井瀧ノ北遺跡・舟戸・西岡遺跡」河合町文化財調査報告書第17集 河合町教育委員会
- 55) 綱干善教 1962 「北葛城郡上牧村下牧瓦窯跡」「奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報15」 奈良県教育委員会
- 56) 香芝市教育委員会編 2005 「下田東遺跡(五位堂区画4次)の発掘調査」「平成16年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料」 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 57) 村山修三他 1980 「日本城郭体系10」 新人物往来社
- 58) 金松誠 2003 「大和送迎山城に関する一考察」「ふたかみ12-2002(平成14)年度香芝市二上山博物館年報・紀要-」 香芝市二上山博物館
- 59) 金松誠 2004 「七郷山城」「図説近畿中世城郭事典」 城郭談話会事務局
- 60) 前掲註57文献
- 61) 香芝市教育委員会編 2000 「逢坂城跡第1次発掘調査報告書-中和幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」「香芝市文化財調査報告書第2集」 香芝市・香芝市教育委員会
- 62) 前掲註57文献
- 63) a. 奈良県立橿原考古学研究所編 1985 「昭和59年度鈴山城跡・鈴山遺跡発掘調査概報」 香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所  
b. 下高大輔 2004 「鈴山城」「図説近畿中世城郭事典」 城郭談話会事務局
- 64) 前掲註57文献
- 65) 村田修三 1987 「万歳山城」「図説中世城郭事典」2 新人物往来社
- 66) 前掲註63a 文獻
- 67) 香芝市教育委員会編 2004 「下田東遺跡(五位堂区画3次)の発掘調査」「平成15年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料」 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会

### 3 平野古墳群

#### (1) 平野古墳群と周辺遺跡 (図8・9、巻頭原色図版1~3、図版4・2~5)

市域北部の平野古墳群周辺の古墳としては、平野古墳群の西方約1kmの丘陵に直径15m、高さ3mの円墳で、全長6.15m、玄室長3.85m、玄室幅2mの両袖式の横穴式石室を主体部とする今泉古墳<sup>1)</sup>がみられるのみである。また、市外では平野古墳群の北方約1kmに直径15mの円墳で全長5.9mの横穴式石室を持つ7世紀初頭の築造と推定される畠田古墳（北葛城郡王寺町）が所在する程度で、古墳時代を通じて古墳の数は極めて少ない地域である（図8、図版3）。

古墳以外の遺跡としては、古墳群の北東約200mに7世紀後半の創建と推定される尼寺北廃寺跡<sup>2)</sup>や7世紀中頃の創建と推定される尼寺廃寺南遺跡<sup>3)</sup>が所在しており、また、生産遺跡としては、平野古墳群の同一丘陵上に重複するかのように平野窯跡群が所在する。昭和56年に奈良県立橿原考古学研究所によって合計5基の窯跡が確認され、公園内に保存された2・3号窯を除く1・4・5号窯の3基の窯跡の発掘調査が実施されている。1・4号窯が須恵器窯、5号窯が瓦窯で、いずれも地下式の有段登窯を持つ。須恵器を焼成した1・4号窯ではTK-209型式の須恵器が主流であることから、この時期に生産が始まったものと推定されている。須恵器の流通範囲等は不明であるが、5号窯で焼成された瓦は、北東約200mに位置する尼寺北廃寺に供給されたものと考えられている（図8・9、図版4）。

このように、市北部域には7世紀代に突如として奈良県内でも屈指の規模を誇る終末期古墳や古代寺院が造営されており、平野古墳群と尼寺廃寺跡について、造営氏族を含め、その盛衰に密接な関係があるものと考えられている。

1. 平野1号墳 2. 平野2号墳 3. 平野3号墳  
4. 平野4号墳 5. 平野5号墳 6. 滅滅古墳  
7. 平野1号窯 8. 平野2号窯 9. 平野3号窯  
10. 平野4号窯 11. 平野5号窯 12. 畠田古墳  
13. 今泉古墳 14. 尼寺廃寺南遺跡 15. 尼寺北廃寺  
16. 木辻跡 17. 迷遊山城跡 18. 武烈天皇塚  
※○印は消滅した遺跡であることを表す。

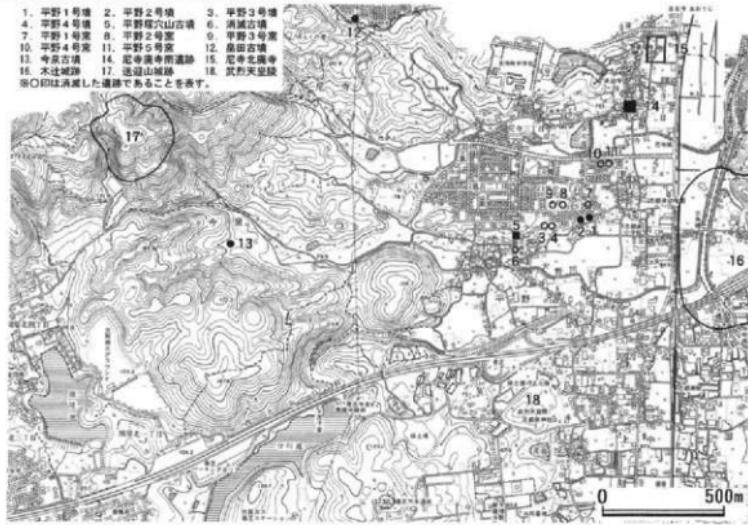


図8 平野古墳群周辺の遺跡分布図 (S=1/20,000)

## (2) 平野古墳群（図9、図版4・5）

平野古墳群は、明神山（標高274m）の北西から南東方向へ舌状に緩やかに派生する標高60m前後の低丘陵上に立地している。丘陵の東側は大和川の支流である葛下川、北方は尼寺川、南方は葛下川の支流である平野川によって三方は囲されており、江戸時代後期の『平野村絵図』にも見られるように（図版85-1）丘陵下の北東に下之寺地区と丘陵下の南方の平野地区に数十軒からなる江戸時代から続く集落が営まれている（図9、図版4・5）。

古墳群の北方と西方は丘陵の山並を背に東方は馬見丘陵の山並によって視界が遮断されるが、南西方向から南東方向のみ視野が開けており、二上山や金剛・葛城山の山塊を望むことができる。

古墳群は丘陵の南東斜面を中心に東西約300mの範囲にわたって消滅した古墳もあわせて約6基の古墳が分布していたことが推定されている。丘陵東側の丘陵末端部の古墳群の東端に平野1号墳があり、心々距離にして約20mの間隔をおいて西方に平野2号墳が築造されている。

古墳群のほぼ中央部に平野3号墳（現在は消滅）と平野4号墳（現在は消滅）があり、西端には二上山の産出する凝灰岩の切石を使用した横口式石室として著名的な平野塚穴山古墳（国指定史跡）が築造されている。また、江戸時代後期に記された『平野村絵図』（図版85-1）には平野塚穴山古墳の南方に「岩屋」と記された石室状の構築物1基と古墳の石室材の残骸と推定される「七石」と記された石材状の石材が描かれており（図版86-1・2、図版87-1）、付近に石室を持つ古墳が存在していたことがわかる。

地元に江戸時代の絵図や文書が数巻残されており、『御陵之絵図』（図版88-1）から平野1号墳や平野2号墳は「御廟所」と記されていることから天皇陵に準じる古墳として認識されていたことがうかがえる（図版89-1、図版90-1）。また、『武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』（図版91-1・2、図版92-1）から平野3号墳・平野4号墳は武烈天皇陵として、『顯宗帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』（図版93-1・2、図版94-1）から平野塚穴山古墳は顯宗天皇陵として描かれており、平野古墳群の中の平野塚穴山古墳や平野3号墳・平野4号墳が明治22年に現在の陵墓に治定されるまでは天皇陵やそれに準じる扱いをうけていたことがわかる。

明治年間では、明治5~21年に大阪造幣局で化学兼冶金技師として勤務する傍ら、日本の古墳に興味を持ち、始めて科学的な視点で古墳の調査を実施するなど日本考古学の草創期に多大な影響を与えたことで知られるイギリス人ウイリアム・ガウラント氏が奈良県内や大阪府内の著名な古墳を中心に訪れ、日本の古墳では最古の写真となる貴重な写真を残している。本市を含む北葛城地域では平野塚穴山古墳へ来訪して3枚の写真を撮影しているが、他の古墳のように彼の著作論文にも紹介されることなく、写真も未発表のままであった。

学史的には大正3年の佐藤小吉氏による報告以降、平野古墳群の中では、平野塚穴山古墳が最も学界に広く知られるようになり、昭和2年に考古学雑誌で京谷康信氏が珍しい漆喰上板（凝灰岩）使用の石室として紹介しており、森本六爾氏が大陸磚椁墳との関係を指摘したという談話を記している。また、昭和12年には島本一氏が松香石（凝灰岩）を使用した石室構造の特異性や棺材として乾漆棺（夾紵棺）が使用されていた可能性を指摘している。

昭和47年の乱掘の事後処置として、平野古墳群の中で初めて実施された平野塚穴山古墳の発掘調査を契機に、その被葬者像を始め、長らく実態が不明であった古墳群の研究が進められることになった。



図9 平野古墳群周辺の条里復元図と平野古墳群の分布図 ( $S=1/6,000$ )

### ①平野1号墳（平野車塚古墳）（図10、写真45、図版7～10）

平野古墳群の中でも最も東側の丘陵の東端部に構築された古墳である（図10）。平野村に残る江戸時代後期の『御陵之絵図』に横穴式石室の石材らしきものが描かれていることから（写真45、図版88-1・89-1、図版90-1）、少なくとも江戸時代から石室が開口していたものと考えられる。同絵図には天皇陵としての記述はないが、後述する西側に隣接する平野2号墳と同様に「御廁所」と記されており、少なくとも江戸時代には村人から天皇級の人物の墳墓として認識されていたことがうかがえる。

古墳の現況は、航空写真からもわかるように、北と東の二方は既に宅地化しており、南側の渓谷部付近や墳丘の一部が土砂採集によって削平されて墳丘は著しく崩壊している（巻頭原色図版3-2、4-1、図版6-1・2）。

地形測量調査前までは、一辺20m、高さ3.5mの方墳と推定されていたが、平成11年度に実施した地形測量調査から方墳ではなく、復元推定直径24～26m前後の円墳と推定されるに至った。

主体部として、墳丘の中心からやや南側に南北方向に開口する全長（残存長）9.2mの横穴式石室が構築されている。

玄室は、幅2.8m、長さ3.5mで、現在の堆積土床面からの高さは約2mを測る。玄室は、主として比較的面の整った花崗岩の巨石を横位に使って2段積で構築しており、2石目で内傾へ緩やかに内傾させて持ち送りを行っている。天井には2枚の巨石を架構しており、左右両側壁の隙間には小石を詰めている。奥壁は、2段積みで幅2.8m、高さ0.6mの巨石1石を基底石として据え、その上に高さ1.2m、幅1～1.5m前後の方形の石を左右に積んで内傾させて積み上げており、上



図10 平野古墳群分布図 ( $S=1/5,000$ )

下段の石の隙間に花崗岩の粉末を詰めている。

羨道部は、長さ5.7m、幅1.8mで、現状の床面の堆積土からの高さは1.5mを測る。比較的面の整った花崗岩の巨石4枚を縦位に並べ、天井には2枚の巨石を架構している。

石室の平面觀は玄室と羨道の中軸線が合致せず、玄室を古墳の中心と見ると、玄室に対して羨道がやや西偏したアンバランスな様相を呈している。<sup>13)</sup>

玄室の平面規格は高麗尺の長さ10尺×幅8尺に設計して構築されたことが想定されており、また、石室の平面形態が正方形に近いことや奥壁・玄室・羨道の側壁の石積技法から7世紀前半に築造された古墳と考えられている。

## ②平野2号墳（図10、写真45、巻頭原色図版5～16、図版11～60）

平野古墳群の中でも東側の丘陵の南東斜面、平野1号墳から心々距離にして約20m西方に築かれている（図10）。

平野村に伝わる江戸時代後期の『御陵之絵図』に横穴式石室の石材らしきものが描かれているが（写真45、図版88-1・89-1、図版90-1）、今まで石室は完全に埋没して地表面には露呈しておらず、内部主体や形態等は全く不明であった。平野1号墳と同様に同絵図には天皇陵としての記述はないが、「御廟所」と記されており、少なくとも江戸時代には村人から天皇級の人々の墳墓として認識されていたことがうかがえる。

古墳の北方・西方・南方は宅地造成によって既に削平されて住宅が建ち並んでおり（巻頭原色図版3-2、4-1、図版6-1・2）、かろうじて墳丘の東側のみが旧地形を止めている。調査前の地形測量調査に伴う木々の伐採前は見通すことが困難なほど雜木や雜草が生い茂って地表面には落葉が厚く堆積しているため、長らく外観では地表面から石室に伴う石材等を確認することができなかつたが、現況地形から直径20m前後、高さ3m前後の円墳と推定してきた。<sup>14)</sup>

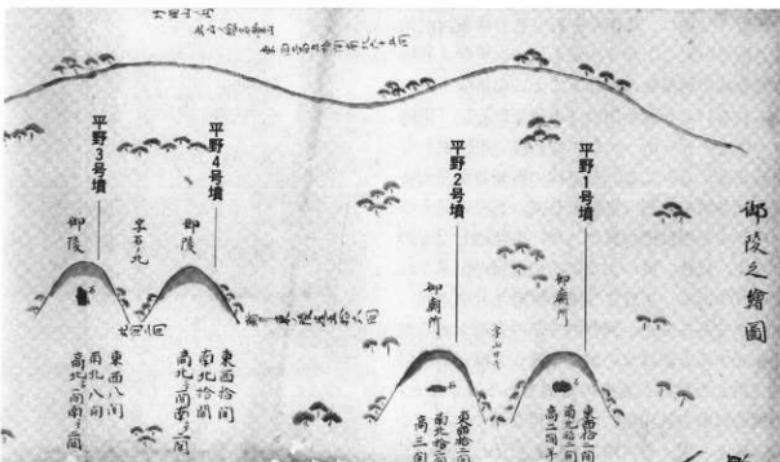


写真45 「御陵之絵図」にみる平野1号墳・平野2号墳・平野3号墳・平野4号墳

③平野3号墳・平野4号墳（図11、写真46、巻頭原色図版2-2・3-1、図版88~92）

平野3号墳・4号墳は、平野古墳群のほぼ中央部に所在する。現在は消滅したが、かつて平野村の東側に鎮座する杵築神社の北東に所在した古墳である。

平野3号墳は、江戸時代には武烈天皇陵とみなされており、江戸時代後期の『御陵之絵図』には「東西八間、南北八間、高北ニテ一間南ニテ二間」と記されている（図版88・89、90-2）。文化4（1807）年の『武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』では玉垣を巡らし、墳丘中央部に「石長四尺、一尺五寸」と記された石室の石材らしき構築物が描かれている（写真46、図版91）。昭和37年頃からの土取り等の開発によって墳丘の大半は破壊され、僅かにその痕跡を残すのみである。杵築神社の境内には二上山産の凝灰岩の石材が散乱しており、泉森岐氏の復元により、凝灰岩の規格や規模から全長（外形）2.84m、幅（外形）1.74m、高さ（外形）1.58m前後の小規模な横口式石槨と推定されている（図11）。現在、確認できる平野古墳群の古墳の中では最も石室規模が小さく、石室が小形化していることなど凝灰岩使用石室の中でも新しい要素がみられることから、平野塚穴山古墳よりも後出する古墳と考えられる。

平野4号墳は、『武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図』の他、江戸時代の陵墓図では武烈天皇陵の東側の墳丘として描かれており、その規模は、江戸時代後期の『御陵之絵図』に「東西拾間、南北拾間、高北ニテ一間、南ニテ二間」と記されている（図版88・89、90-2）。現在では消滅して実態は不明であるが、破壊時に残されていた花崗岩から主体部は横穴式石室の可能性が指摘されているが、詳細は明らかではない。

平野3号墳は、絵図から石室状の構築物が確認されていたことがうかがえるが、平野4号墳は石室状の構築物の存在を伝える記事は1件も見られない。元禄年間の『山陵記録』に「御陵ニヶ所之内壹ヶ所へハ御車葬候様ニ申傳候」とあることからみても、石室状の構築物が見える平野3号墳を武烈天皇陵として、石室の見えない平野4号墳はその御輿（車）を埋納したものと考え、以後、後の文献にその情報が伝承されたようである。平野3号墳と平野4号墳が同一の古墳であるのか、別個の2基の古墳であるのか確認する方法はないが、平野3号墳が凝灰岩を使用した横口式石槨の古墳であるとすると、時期的に前方後円墳には成り得ないことなどから、人々、別々の古墳であった可能性が強いものと考えられる。

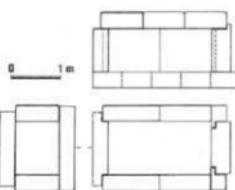


図11 平野3号墳横口式石槨（S=1/100）



写真46 「武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付絵図」

④平野塚穴山古墳（図12、写真47、巻頭原色図版2-2-3-1、図版93~100）

平野塚穴山古墳は、西方へ緩やかに延びる丘陵中腹の南側斜面に立地している。江戸時代後期の『顯宗帝陵生垣取建等二付請書付絵図』他の絵図には古くから石室が開口する様が描かれており、江戸時代には第23代顯宗天皇陵として取り扱われている。

古墳の墳丘は一部削平されているが、一辺18m、高さ4m前後の方墳と推定されている。主体部は、玄室に短い羨道が付く南に開口する横口式石槨で、全長4.47m、玄室長3.5m、玄室幅1.5m、玄室高1.76mを測る（図12）。石槨全体を二上山で産出する凝灰岩の切石を組み合わせて構築した横口式石槨で、報告書では切石の規格から唐尺で作られた可能性が強く、7世紀後半から末頃の築造と考えられている。昭和47年の乱掘の事後処置として実施された緊急発掘調査では、石槨内から金環1点や中空玉1点をはじめ、銅鏡と推定される破片を含む銅製品の破片11点が出土している。

その他、植物性の麻で作った編物を芯にして漆で塗り固めた漆塗籠と布を芯にして漆で塗り固めた夾紵の2種類の漆塗製品の破片が出土している。<sup>17)</sup>これらの漆塗製品の一方は棺材で他方は副葬品を収納するための容器とみるか、両者とも蓋と身一对の棺材とみるか、あるいは、別個の2個体分の棺材とみるか、研究者により見解が分かれているが、塚廻古墳の例から一对の棺材とみる方が自然な解釈のように思われる。

平野塚穴山古墳は、天武・持統天皇陵や高松塚古墳等の7世紀後半に盛行する飛鳥地域の凝灰岩で構築した終末期古墳の転機・先駆形態として位置付けられることが多い。また、百濟後期の王陵と推定されている大韓民国忠清南道扶余郡の壁画古墳として著名な陵山里古墳群の東下塚古墳との石室構造の類似性が指摘されている古墳の一つであり、終末期古墳を研究する上で重要な要素・鍵を握る古墳である。



写真47 「顯宗帝陵生垣取建等二付請書付絵図」

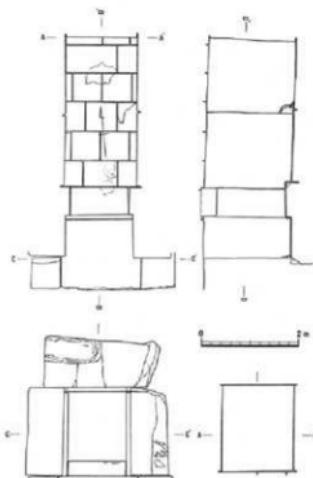


図12 平野塚穴山古墳横口式石槨 (S=1/100)

##### ⑤平野村内の「岩屋」と記された古墳（写真48、図版85・86、87-1）

地元に残る戸時代後半と推定される『平野村絵図』には平野塚穴山古墳の南側約5mに「岩屋」と記された巨大な石室状の構築物1基が描かれており、さらに「岩屋」の南方周辺の街道沿いに古墳の石室材の残骸と推定される「七石」と記された石材が描かれている（写真48、図版85・86、図版87-1）。これらの石材は、ともに古墳の石室材の断片と推定され、平野1号墳、平野2号墳、平野3号墳、平野4号墳、平野塚穴山古墳の現在知られている5基の古墳以外にも付近に巨大な石室を持つ古墳が存在していたことがうかがえる。

現在、平野地区には「岩屋」と記された石室状の構築物は遺存していないが、集落の街道沿いに「七石」と呼ばれる石材が残されている。この「七石」については、地元に残る民話を収録した『香芝町史』には「街道筋の七石の一つを割ろうとして穴をあけてハッパをかけた人があった。その人は病気になり、その翌年に死んだ。それがために誰もさわらなくなつた……。」などの怪奇な伝承を残しており、その際のものかどうかは不明であるが、現況では石材を割るために穿たれた矢穴の跡が残されている。後述する元禄10~11（1697~1698）年に記された『山陵記録』には既に「七石」の記述があることから、元禄年間には既に『平野村絵図』に描かれた絵図に近い状態であったことがうかがえる。

「岩屋」と記された石室状の構築物の一部と「七石」と呼ばれる石材が同一の古墳の石室の部材であるのか、それとも、もともと、2基の別の古墳の石室材であるのか、「岩屋」と「七石」の関係については不明と言わざるを得ないが、絵図に示された位置的な関係から、同一の古墳の石室に使用されていた石材であった可能性が強い。

石室材の岩種は不明であるが、『平野村絵図』（写真48）を見る限りでは、石材は平野塚穴山古墳の石室のような整美な切石風の石材ではなく、石材は自然石風に描写されていることから、硬質の石材が使われた可能性が強い。また、石室の形態については、平野古墳群では、平野塚穴山古墳や平野3号墳の横口式石室には凝灰岩が使用されており、平野1・2号墳などの横穴式石室には花崗岩系統の石材が使用されている傾向があることから、「岩屋」と記された古墳の石室は横穴式石室と推定される。



写真48 「平野村絵図」に「岩屋」と記された古墳

註

- 1) 泉森皎 1976 「古墳時代」『香芝町史』 香芝町役場
- 2) 西藤清秀・大西貴夫 1998 「畠田古墳」「王寺町文化財調査報告書第1集」 王寺町・奈良県立橿原考古学研究所
- 3) 香芝市教育委員会編 2003 『尼寺廬寺Ⅰ』 香芝市教育委員会
- 4) 香芝市教育委員会編 2004 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報17』 香芝市教育委員会
- 5) 千賀久 1983 「北葛城郡香芝町平野塚群発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1982年度」 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 6) 伊達宗泰 1967 「古墳・寺・氏族」「古代学論叢」 木永先生古稀記念会
- 7) 泉森皎・猪熊豪勝 1977 「畠田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳」 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第32集 奈良県教育委員会
- 8) 上田宏範他 2003 「ガウランドが撮った日本の古墳」「ガウランド 日本考古学の父」 朝日新聞社 42頁  
※上記の文献にガウランドが撮影した平野塚穴山古墳の写真フィルムは、他の日本の古墳を撮影した写真フィルムとともに大英博物館に所蔵されていることが記されている。
- 9) 佐藤小吉 1914 「佐藤委員報告－平野の古墳－」『奈良県史跡勝地調査会報告書』第2回 奈良県教育委員会
- 10) 京谷康信 1927 「珍しい漆喰土製の櫛」『考古学雑誌』17卷10号 考古学会
- 11) 島本一 1937 「平野古墳に於ける内部構造に就いて 乾漆製棺の存在を論ず」『大和志』4卷6号 大和国史会
- 12) 前掲註7文献
- 13) 前掲註1・7文献  
香芝市教育委員会編 2002 『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報15』 香芝市教育委員会
- 14) 前掲註1・7文献
- 15) 前掲註7文献
- 16) 前掲註7文献
- 17) 前掲註7文献
- 18) 前掲註7文献  
香芝市二上山博物館編 2002 『二上山麓の終末期古墳－平野古墳群と尼寺廬寺跡－』香芝市二上山博物館 第18回特別展図録 香芝市二上山博物館・香芝市教育委員会  
※漆塗籠と夾紵の2種の漆製品を共伴する事例は、全国でも平野塚穴山古墳と大阪府塚越古墳の2例のみである。北野耕平氏は塚越古墳から出土した漆塗籠棺と夾紵容器の2者について、夾紵容器の厚さが薄いことなどから、漆塗籠棺が棺の身部で夾紵容器が棺の蓋として使用されていた可能性を指摘している。平野塚穴山古墳では漆塗籠と夾紵を別個の2棺とする説があるが、スペース的に同時に2棺が並列して安置されたとは考え難く、また、2回埋葬も考え難い。  
私は、平野塚穴山古墳の場合も塚越古墳と同様に漆塗籠棺が身で夾紵棺が蓋として2者の漆塗製品が対として使用されていたものと考えている。
- 19) 乾健治 1976 「伝説」「香芝町史」 香芝町役場
- 20) 伏山自出雄・廣吉壽彦編 1994 「元禄年間山陵記録」 (財)山良大和古代文化研究協会

## 4 古記録にみる平野古墳群

### (1) 平野古墳群に関する文献史料について（表3）

平野村に所在する古墳のうち、幕末まで平野塚穴山古墳は第23代顯宗天皇陵、平野3号墳は第25代武烈天皇陵として比定されていたこともあって、表3のとおり、江戸時代の元禄年間以降、特に陵墓としての視点からみた複数の史料や絵図が残されている。地元の平野村にも『平野村絵図』(図版85～87)、『御陵之絵図』(図版88～90)、「武烈帝陵生垣取建等ニ付諸書付絵図」(図版91・92)、「顯宗帝陵牛垣取建等ニ付諸書付絵図」(図版93・94)等の江戸時代の平野古墳群の状況を知る上で貴重な史料が残されている。以下、平野古墳群関係の史料の一部を掲載するとともに江戸時代以降の顯宗陵・武烈陵の陵墓の比定の変遷について概観しておきたい。

### (2) 顯宗陵・武烈陵の陵墓の比定の変遷について（表2）

「延喜式」では顯宗天皇が「傍丘磐杯丘南陵」、武烈天皇が「傍丘磐杯丘北陵」として両者とともに葛下郡に所在することが記されている。「延喜式」以来の調査記録である元禄9(1696)年の松下見林による『前王廟陵記』では、顯宗陵・武烈陵について「いまだ詳らかならず（「あるいはい、平野村と」）」として所在地は不明ながらも「平野村」である可能性を記している。元禄10(1697)年の幕府による元禄期の陵墓探索・修陵の成果について記した細井知慎の『諸陵周垣成就記』では、顯宗陵を「葛下郡片岡平野村」、武烈陵を「葛下郡片岡平野村片岡山」と記しており、概ね、元禄年間は「平野村」の平野塚穴山古墳と平野3・4号墳を比定していたことがうかがえる。享保期の陵墓探索・修陵に関するものとして、享保21(1757)年の並河永による『大和志』では、顯宗陵を「昔在今市村」、武烈陵を「在葛下郡平野村」と記しており、南陵の顯宗陵の所在地を「平野村」の南方の「今市村」に所在する古墳に比定している。また、文化5(1808)年の蒲生君平による『山陵志』では顯宗陵を「陵家村」、武烈陵を「築山村」の古墳に比定している。特に文化年間以後は陵墓に対する関心の高まりとともに複数の研究者によって検討が行われ、多くの書物が著されるが、これらの書物の中には「平野村」に所在する平野塚穴山と平野3・4号墳が東西に並立して南北陵にならないことなどの矛盾点から、人和高田市「築山村」を中心に平野村以外の南方の古墳へ比定地が変わっていく。史上最大規模の修陵である文久期の陵墓探索・修陵に大きな影響を与えた文久年間(1861～1864年)の谷森善臣とその著『山陵考』では、顯宗陵と武烈陵は両者ともに不明扱いになっており、結局、歴代の陵墓治定の中でも新しい明治22(1889)年6月になってようやく顯宗陵は香芝市北今市の現陵墓に治定されるに至り、北陵とされる武烈陵も北方に位置する香芝市今泉の現陵墓に治定されたようである。

表2 元禄年間以降の顯宗陵・武烈陵探索・比定の変遷一覧

天皇名 (延喜式陵墓名)	前王 廟陵記	諸陵周垣 成就記	徳川実紀	大和志	日嗣御子 御陵	山陵志	打墨綱	山陵考
	1696年 元禄9年	1698年 元禄11年	1699年 元禄12年	1736年 享保21年	1780年 安永9年	1808年 文化5年	1818年 嘉永元年	1860年代 文久年間
武烈天皇 (傍丘磐杯丘北陵)	不詳 あるいはい う平野村と	片岡山	片岡山	平野村	平野村 宇岩ノ北 二ツ山	築山村 の古墳	築山村 城山	不詳
顯宗天皇 (傍丘磐杯丘南陵)	不詳 あるいはい う平野村と	平野村	片岡 平野村	今市村 宝永期崩壊	平野村 字石上	陵家村 の古墳	池田村 二児山	不詳

表3 平野古墳群に関する文献史料一覧

## ①古代の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵

No	文献名	編・著者名	西暦	年号	絵図	備考
1	古事記	太安万角	712	和銅5	無	
2	日本書紀	舍人親王他	720	養老4	無	仁賢紀元年十月条、雄略紀二年十月条
3	延喜式	藤原時平・忠平	927	延長5	無	卷之廿一 諸陵塞
4	扶桑略記	隼円	不明	平安末期	無	

## ②近世の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵（記された年代根拠のある文献）

No	文献名	編・著者名	西暦	年号	絵図	備考
5	和州田跡南孝	林宗甫	1681	延宝9	無	
6	前王廟陵記	松下見林	1696	元禄9	無	
7	諸陵周匝成就記	細井廣澤	1698	元禄11	無	
8	山陵繪図	不明	1699	元禄12	有	絵図のみ
9	元禄年間山陵記録	三井左衛門	不明	元禄年間	有	元禄10~11(1697~1698)年にかけての調査執務記録、絵図存在の記載有り、但し原小未確認
10	今泉村諸色明細帳写	不明	1724	享保9	無	
11	大和志	並河水	1736	享保21	無	
12	山陵繪図	不明	不明	享保年間	有	絵図のみ
13	日本書紀通訳	谷川土清	1762	宝曆12	無	
14	日副御子 御陵	伊勢平賀貞武	1780	安永9	有	絵図中の文草を記載
15	大和名所同会	秋里源夕	1791	寛政3	不明	
16	古事記伝	本居宣長	1798	寛政10	無	
17	顯宗帝陵生垣取廻等 二付諸書付絵図	平野村文書	1807	文化4	有	平成15年度香芝市指定文化財、個人蔵
18	武烈帝陵生垣取廻等 二付諸書付絵図	平野村文書	1807	文化4	有	平成15年度香芝市指定文化財、個人蔵
19	山陵志	蒲生君平	1808	文化5	無	
20	帝陵圖記	不明	1813	文化10	不明	
21	行燈帳	北浦定政	1848	嘉永元	有	
22	廟陵記	西村長門守	1849	嘉永2	有	
23	聖蹟圖志	平坂氣齋	1854	嘉永7	有	『陵墓一兩抄』の付図、絵図のみ
24	山陵考略	山川正貫	1855	安政2	無	
25	幽籟乃志づく	谷森善臣	1857	安政4	有	安政4(1857)年の測査記録
26	御陵筆記	(鶴木政孝)	1859	安政6	有	『鶴木文書律令雜記』安政6己未年九月記、著者不確定
27	山陵考	谷森善臣	不明	文久年間	不明	文久2(1862)年にはほぼ完成か
28	山陵圖絵	不明	不明	幕末期	有	
29	御陵之餘図	平野村文書	不明	幕末期	有	平成15年度香芝市指定文化財、個人蔵
30	平野村松園	平野村文書	不明	幕末期	有	平成15年度香芝市指定文化財、個人蔵

## ③近世の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵（記された年代が不明確な文献）

No	文献名	編・著者名	西暦	年号	絵図	備考
31	陵之記	不明	不明	不明	不明	
32	御陵記	不明	不明	不明	不明	
33	陵墓図	不明	不明	不明	有	
34	御陵所考	不明	1697~1808?	元禄10~文化5?	有	元禄10(1697)年の調査時に作成された絵図の写本
35	平野村筆	不明	不明	江戸期?	無	

## ④近代の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵

No	文献名	編・著者名	西暦	年号	絵図	備考
36	山陵記	宮城三平	1879	明治12	無	幽幽室藏版
37	大和国古墳墓取調書	野沢潤清	1893	明治26	有	
38	日本書紀通訳	飯田武輔	1902~1909	明治35~42	無	
39	明治天皇紀	宮内庁	1968~1977	昭和43~52	無	明治22(1889)年、明治26(1893)年の紀事

## ①古代の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵

### 1. 古事記〔712（和銅5）年、太安万侖〕

（顯宗）天皇御乍參拾壇歲。治天下八歲。御陵在片岡之石坏岡上也。

…小長谷若雀命（武烈天皇）、坐長谷之列木官、治天下捌歲也。此天皇、无太子。故、爲御子代、定小長谷部也。御陵在片岡之石坏岡也。

### 2. 日本書紀〔720（養老4）年、舍人親王証〕

（仁賢紀元年十月条）冬十月丁未朔己酉、葬弘前天皇子傍丘磐杯丘陵。是歲也、太歲戊辰。

（經体紀二年十月条）二年冬十月辛亥朔癸丑、葬小泊瀬稚鶴鷦天皇子傍丘磐杯丘陵。

### 3. 延喜式（卷二十・諸陵寮）〔927（延長5）年、藤原時平／藤原忠平〕

傍丘磐杯丘南陵。近飛鳥八鈞宮御宇顯宗天皇。在和泉國葛下郡光城東西二町。南北三町。陵戸一帳。守戸三烟。（中略）

傍丘磐杯丘北陵。泊瀬列城宮御宇武烈天皇。在大和國葛下郡光城東西二町。南北三町。守戸五烟。

### 4. 扶桑略記〔平安末期、皇円〕

（顯宗天皇）…葬于大和國葛下郡傍丘磐杯丘南陵。高三丈。東西二町。南北三町。

（武烈天皇）…葬于大和國葛下郡傍丘磐杯丘北陵。高二丈。方二町。

## ②近世の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵（記された年代根拠のある文献）

### 5. 和州旧跡圖考〔1681（延宝9）年、林宗甫〕

顯宗天皇陵 人皇廿四代顯宗天皇は、傍丘磐杯南陵、大和國葛下郡にあり。並びに又は片岡石上陵とも、古事記又は片岡磐築岡上陵ともいへり。並びに御宇三年四月、八鈞宮にして崩御なり給ひしを、仁賢天皇元年十月に此陵にかくし奉る。日本紀延宝七年迄凡一千百九十三年か。

武烈天皇陵 人皇廿六代武烈天皇、傍丘磐杯丘北陵、大和國葛下郡にあり。並びに御宇八年十二月に別城宮にして崩御なり給ひしを、經体天皇二年十月、此陵にかくし奉る。日本紀延宝七年迄凡一千百七十四年歟。

### 6. 前王廟陵記〔1696（元禄9）年、松下見林〕

（顯宗天皇） 傍丘磐杯丘南陵は、近飛鳥八鈞宮に御宇す顯宗天皇にして、大和國葛下郡にあり。光城東西二町、南北三町、陵戸一帳、守戸三烟〔延喜諸陵式〕。古事記にいわく、片岡の石坏の岡の上と。今、按するに、傍丘と片岡とは同じ。磐坏の岡は、今いまだ詳らかならず〔あるいはいう。平野村と。〕

（武烈天皇） 傍丘磐杯丘北陵は、泊瀬列城宮に御宇す武烈天皇にして、大和國葛下郡にあり。光城東西二町、南北三町、守戸五烟〔延喜諸陵式〕。古事記にいわく、片岡の石杯の岡と。今、按するに、磐杯の丘北陵は、いまだその地を詳らかにせず〔あるいはいう。平野村と。〕

### 7. 諸陵周塙成就記〔1698（元禄11）年、細井廣澤〕（図21）

顯宗 同國葛下郡傍丘磐杯丘ノ南ニ葬ル

磐杯丘と巾所不相知候同郡片岡平野村ニ陵有之候

武烈 同國同郡同所ノ北ニ葬ル

同郡片岡平野村片岡山ニ陵有之候

### 8. 山陵繪圖〔1699（元禄12）年、福・著者不明、絵図のみ〕（図14）

### 9. 山陵記録〔元禄年間、下井与左衛門〕

・元禄第十丁丑年九月七日之夜 京都所司松平紀伊守ヨリ書帖到來、此節御奉行内田轉左衛門守政大和國守

社順見ニ出留守居飯塚彌兵衛内見ス之ヲ、國中山陵之事也、依之以飛脚注進ス、守政葛下郡良福寺村ニテ八日ノ暮方ニ披見、翌九日午時過ニ南京ノ廳ニ歸宅

山陵御書付之趣

(中略)

顯宗 葛下郡傍丘磐杯丘ノ南ニ葬ル

武烈 同郡傍丘磐杯ノ丘北ニ葬ル (後略)

・ (葛下郡ヘノ題状)

(中略)

顯宗 同國同郡傍丘磐杯丘南ニ葬ル

武烈 同國同郡傍丘磐杯丘ノ北ニ葬ル

(中略)

右天皇之御廟所葛下郡之内ニ有之由ニ候間、猶致吟味書付之候而來ル十二日迄之内ニ特參可申候、此書付之外ニ茂御廟所有之候ハ、別紙ニ書付是亦可致持參候、若致不吟味ニ候ハ、可爲越度候、以上

九月九日

・覺

字草之類

一 武烈天皇御陵 但前々より村入申付置候、

通り六拾四間

御塚

高サ四間半

東西拾壹間

御塚上平ニ御座候、

南北拾壹間

・ 此御塚石室ニ而御座候、南ニ口御座候、上下兩側ともに切石何レ茂みかきたる青白色ニ御座候、

高サ七尺三寸五分

人口 橫幅七尺八寸五分

奥ニ而横幅九尺貳寸餘

奥行貳丈五尺四寸

・ 御塚之上を何ヶ年以前ニ掘候哉、御塚之頂上を掘やね石兩側之石切取候様ニ相見江やね石ニのミ跡相見江申候、頭上掘明候ハ東西三間、南北二間半程御座候、

・ 御陵山之廻り池又ハ瑞籬等茂無御座候、

・ 御陵山ハ松木之立木有之野口村支配ニ仕下菊等茂仕候、

・ 御陵山之年貢九升七合八勺ニ而御座候、則植村右衛門佐方江納申候、

・ 御陵山ハ山之中ニ御座候、

・ 御陵山江野口村家居より方角西ニ當り道法貳町拾四間御座候、

・ 檜隈大内と申所字又ハ近在ニ茂不承候哉と御吟味被爲成候得共、毛頭不奉存候、檜前村と申村御座候、此檜隈限村より御陵江之方角丑ニ當申候、道法凡拾町斗御座候、御尋之儀此村ニも當リ候哉と書付上候、檜隈安古ノ國檜隈坂合と申所不奉存候、

一 村高百三拾八石貳斗  
右之通少茂相違不申上候、以上  
元禄十丁廿年九月十六日

植村右衛門佐領地  
高市郡野口庄村屋 墓右衛門  
同村年寄 佐次兵衛

南都  
御奉行所様

・覺

字右上

一 廉宗御陵山 但顯宗之御廟と申傳候、然共體成儀不奉存候、

東西拾貳間

御陵丸山 南北拾三間 横回り四拾間

高サニ面四間

北ニ面貳間

一 御陵山之南表ニ塚穴之口御座候、四方共ニ棘石ニ面御座候、

奥行壹丈五尺

右塚穴 幅四尺八寸

高サ五尺七寸

石厚サ貳尺五寸

蓋石ノ厚サ三尺

一 右之御塚南西之角何レ之比か土少崩レ申ニ付穴之口あらハレ見江中候故、此度石之寸尺取申候、

一 御陵八片岡山之内堂山ニ面字石之上と申山之中ニ御座候、

一 御陵之場所計ハ除地ニ面御座候、

一 御陵廻リ堀籠并池掘切茂無御座候、

一 御陵山ハ草芝ニ面下刈仕候程之芝ニ面無御座候、北原ノ麓ニ小松少御座候、

一 御陵江ハ平野村家織方角北ニ當リ申候、

一 傍丘磐杯丘と申處又ハ字ニ茂御座候哉と御尋被爲成候得共曾而不奉存候、村ニ面も吟味仕候得共不奉存候、此御陵より道法三四町未申ニ當リ平野村領はつれニ字岩かどと申田山御座候、此岩かどよりハ御陵方角並寅ニ當リ申候、

一 御陵之近邊東南ニ七つ石とも七ついわとも申大石七つ御座候、

一 御陵より四拾間東ニ邊御之井と申三尺四方之井御座候、

一 村高四百貳拾八石三斗壹升三合

此内七斗五升小物成高

右之通少茂相違不申上候、以上

元禄十丁廿年九月廿四日

本多能登守領地  
葛下郡片岡平野村

庄屋 嘉左衛門  
同村年寄 治右衛門  
同村年寄 佐右衛門

南都

御奉行所様

・覺

字引之北

一 武烈御陵 但武烈御廟所と申傳候得共體成義不奉存候、

此御陵同所東西ニ貳つ御座候、

内

東西拾間

東方御陵ハ南北拾間 根廻り三拾貳間

高サ南ニ面貳間

北ニ面壹間

東西八間

西方御陵ハ南北八間 根廻り貳拾五間

高サ南ニ面貳間

北ニ面壹間

右御陵相ノ間數ハ貳間御座候、

一 御陵二ヶ所之内壹ヶ所へハ御市幕候様ニ申傳候、

・ 御陵山廻リニ瑞籬又ハ池茂無御座候、

・ 西の方御陵頂上亦赤土ニ面御座候故、乍々雨にうたれ候ニ付石少頗れ見江中候、如何様之石ニ面御座候哉不奉存候、石ハ練石之様ニ相見江中候、御陵ニツ共ニ頂上ハ赤土ニ面御座候、

・ 二ヶ所之御陵之麓ニ小松少御座候へ共下刈なとも不仕候、

・ 右貳ヶ所之御陵ハ除地ニ面御座候、

・ 御陵山八片岡山之内堂山ニ面字石之北と申候山之内ニ御座候、

・ 御陵江平野村家居より方角ハ子升ニ當り道法九拾間御座候、

・ 傍丘磐杯丘と申所御吟味被爲成候得共、存たるもの無御座字ニ茂承不申候、此陵より道法四町程未申ニ當り平野領はつれニ字岩かどと申田山御座候、此岩かどより御陵ハ丘賓ニ當り申候、

・ 村高四百貳拾八石三斗壹升三合

内七斗五升小物成高

右之通少茂相違不申上候、以上

元禄十四丁丑年九月廿四日

本多能登守領地  
島下郡片岡平野村

庄屋 嘉左衛門  
同村年寄 治右衛門  
同村年寄 佐右衛門

南都

御奉行所様

- ・ 九月廿日ヨリ繪師三郎左衛門ニ繪圖調サセ十月四日迄ニテ仕舞候、
- ・ 十四帝ト御分最初京都へ被遣之、此子細ハ村々ヨリ此陵ハ何之天皇ト背ヨリ申傳フト天皇ノ御名正シク極メテ手形ニ書載タル分也、一帝々々村々ノ手形ノ文言を御フマヘテ御了簡出來也、
- ・ 人和國御陵付覺

(中略)

- ・ 顯宗天皇 御陵之書付并繪圖 一枚
- ・ 武烈天皇 御陵之書付并繪圖 一枚
- ・ (中略)

攝宗天皇 御陵

- ・ 大和國葛下郡片岡平野村ノ北字片岡山ニ葬奉ル、顯宗天皇ノ御陵ト申傳候、但御書付ニ出申候磐杯ノ丘ト申所知レ不申候、
- ・ 御陵山高サ南ニテ四間、北ニテ武間、東西拾二間、南北拾三間
- ・ 御成山芝草、但小松所々ニ御坐候、
- ・ 御陵山ニ瑞籬無御坐候、
- ・ 御陵山無年貞地ニテ御坐候、
- ・ 御陵山江平野村家鏡ニテ御坐候、
- ・ 木多能登守領地葛下郡片岡平野村高四百貳拾八石三斗一升三合ノ所

武烈天皇 御陵

- ・ 大和國葛下郡片岡平野村ノ良字片岡山ニ葬奉ル、武烈天皇御陵ト申傳候、但御書付ニ出申候磐杯丘ト申所知レ不申候、
- ・ 御陵山高サ南ニテ二間、北ニテ一間山根廻リ五拾七間
- ・ 御陵山小松所々ニ御坐候、
- ・ 御陵山ニ瑞籬無御坐候、
- ・ 御陵山ニ無年貞地ニテ御坐候、
- ・ 御陵江平野村家居ヨリ道法九拾間
- ・ 木多能登守領地葛下郡片岡平野村高四百貳拾八石三斗一升三合ノ所

(中略)

- 右十四帝陵繪圖并由緒書帳 九月廿六日出來未ノ刻京都御所司松平紀伊守殿江宿綱飛脚を以被遣候、(後略)
- ・ 十一月二日被仰出候ハ陵場所可致吟味之旨京都松平紀伊守殿ヨリ申來候間、場所江可罷越ト也、自江戸到來御書付之趣

覺

- ・ 神武 総統 安寧 錄徳 孝憲 開化 仁成務 神功 顯宗 武烈 壘武 稔徳  
後醍醐

右十四帝陵之場所檢分被申付坦申付候支度可被致候、其所ニより垣之致方或ハ廻ニ溝を付可然所も可有之候哉、檢分之上了簡可被申聞候事

・ 陵山年貢地或ハ小物成場向後ハ除地ニ可罷成候、領主又者御朱印地寺社領等高之内ニ候ハ、替地被下ニ而可有之候間遂吟味可被申聞候事

・ 陵山木之枝を伐下奉ニ刈候事向後ハ可為停止候間、左様ニ被相心得若障候諱も可有之候哉遂吟味可被申聞候事

以上

・ 孝靈天皇陵 垂仁天皇陵 成務天皇陵 神功皇后陵 聰宗天皇陵 武烈天皇陵 桑德天皇陵  
右七ヶ所檢分

齊藤只右衛門

上楚勘右衛門

福井理左衛門

正岡兵左衛門

・ 十一月十四日 十四帝山陵垣繪圖出來、京都所司松平紀伊守殿江被遣之、

・ 大和國御陵垣就被仰付候窓之覺

(中略)

一 聰宗天皇 垣之積并繪圖 壱枚

一 武烈天皇 垣之積并繪圖 壱枚

・ 聰宗天皇御陵

一 垣惣廻リ四拾間、此分垣被仰付可然哉と奉存候、此垣之外廻リ道ニ而御座候、

一 外二人組候山も無御座候間、溝者付ケ不申而茂苦ケ開鋪哉と奉存候、

・ 武烈天皇陵

一 垣惣廻リ五拾七間、此分垣被仰付可然哉と奉存候、右之場所御陵山之根廻リニ而御坐候、

一 御陵廻リ山共人組御座候間廣三尺、深三尺計ニ溝付ケ可然哉と奉存候、

・ 武烈天皇陵

一 垣惣廻リ五拾七間、此分垣被仰付可然哉と奉存候、右垣ノ場所御陵山之根廻リニ而御坐候、

但最前奉窓候惣廻リ之溝相除申候、

此書付者溝除繪圖調直シ造候様ニ松平紀伊守殿被仰聞候付、十一月廿一日ニ差越申候、

・ 武治帝御陵竹垣拾九ヶ所御曹請之覺

(中略)

一 聰宗帝丸御垣長延四拾間 但除地

本多能登守殿御領地

鳥下郡 平野村

右御曹請四月二日朝ヨリ取掛、同三日ハツ過ニ相仕通申候、

・ 武烈帝丸御垣長延五拾七間 但除地

本多能登守殿御領地

同郡 同村

右御曹請同三日七ツ時ヨリ取掛、同四日、同五日之晝迄ニ相仕廻、即日三室村江籠越申候、此問道四  
リ半餘

・ 齋陵垣御入用御勘定目録

(中略)

一 順宗天皇

葛下郡

垣高六尺

平野村

惣題四拾間

柱栗丸太長九尺、木口三寸、頭巾頭ニメ掘込三尺五尺間ニ立、扣杭栗丸太長五尺、木口貳寸、三尺掘込、柱一本横ニメ一丈間ニ立、扣竹目通五寸廻り折懸ヶ、跡先兩方ニ長三寸ノ釘四本打、菱垣ニメ一間ニ竹十八本宛、目通五寸廻り、横竹三通、目通五寸廻り柱毎ニ長三寸ノ釘打、上下貳通歛繩ニテ結切、打様竹三通、目通六寸廻貳ツ割ニメより當菱臺ツ挟ニ蕨繩ニ面結切、入口臺ヶ所しほり戸門開キ長六尺、幅五尺、竹目通五寸廻り

代銀三百貳十六匁貳分四厘

但一間ニ付銀八匁一分五リン六毛

一 武烈天皇

葛下郡

垣高六尺

平野村

惣通り五十七間

柱栗丸太長九尺、木口三寸、頭巾頭ニメ掘込三尺五尺ニ立、扣杭栗丸太長五尺、木口貳寸、三尺掘込柱壹本  
接ニメ一丈間ニ立、扣竹目通五寸廻り折懸ヶ、跡先兩方ニ長三寸ノ釘四本打、菱垣ニメ一間ニ竹十八本宛、目通五寸廻り、横竹三通、目通五寸廻り柱毎ニ長三寸ノ釘打、上下貳通歛繩ニ面結切、押縁竹三通、目通六寸廻貳ツ割ニメ外ヨリ當菱、ツ挟ニ蕨繩ニ面結切、入口臺ヶ所しほり戸片開長六尺、幅五尺、竹目通五寸廻り

代銀四百八拾四匁八分九リン貳毛

但一間ニ付銀八匁一分五リン六毛

10. 今泉村諸色明細帳写〔1721(享保9)年、編・著者不明〕

一 郷上　　老人

但シ片岡殿より代々之郷上ニ面候

顯宗天皇　御陵御園舎之奉願屏中候  
片岡山　　武烈天皇

11. 大和志〔1736(享保21)年、並河永〕

傍丘磐杯丘ノ南ノ陵　顯宗天皇○皆在今市村ニ宝永年間陵崩遂ニ為民居、傍丘磐杯丘ノ北ノ陵　武烈天皇○在平野村

12. 山陵絵図〔享保午間、絵図のみ〕

13. 日本書紀通証〔1762(宝曆12)年、谷川士清〕

(顯宗天皇) 傍丘磐杯丘陵　式曰南陵在葛下郡即今市村寶永午年陵崩遂為民居。

(武烈天皇) 傍丘磐杯丘陵　式曰北陵。在葛下郡。即平野村。

14. 日嗣御子　御陵〔1780(安永9)年、伊勢平藏貞丈〕(図15・22)

(図面)

第廿四代　顯宗天皇御陵　字石上　延喜式人和國葛下郡傍丘磐杯南陵　山高南ニテ四間　北ニテ二間　塚穴口鉢迄五間・一尺五寸　奥行・一丈五尺　幅四尺八寸　高五尺七寸　石厚二尺五寸　蓋石厚三尺　本多能登守領地　葛下郡平野村

第廿六代 武烈天皇御陵 宇岩ノ北 御陵ニツ山 延喜式大和國葛下郡傍丘磐丘北陵 一ツハ武烈ノ御陵  
一ツハ同御車埋候ト申傳候 山ノ頂上ヨリ墳マテ五間五尺 同五間二尺五寸 檻垣廻り五十七間 本多能  
登守領地 大和國葛下郡平野村 高四百廿八石三斗一升三合

15. 大和名所図会〔1791（寛政3）年、秋里湘夕〕

顯宗天皇 平野村にあり。字石上。『陵考』に曰く、高さ四間、廻四十間。

武烈天皇陵 平野村にあり、字は塚山。『陵考』に曰く、高さ五間、根廻三十四間。

16. 古事記伝〔1798（寛政10）年、本居宣長〕

○片岡は、上に出ツ、〔伝廿一の六十葉〕 ○右環岡〔山印木又一本などに、環岡の二字を脱せり、今は真福寺本延佳木に依れり、〕書紀仁賢卷に、元年冬十月丁未朔己酉、葬弘財天皇于傍丘磐杯丘陵、諸陵式に、傍丘磐杯丘南陵、近飛鳥八鈞宮御宇顯宗天皇、在大和國葛下郡、兆域東西二町、南北三町、陵戸一烟、守戸三烟とあり、〔南陵とは、後に北陵もある故に云り。〕大和志に、傍丘磐杯丘南陵、昔在葛下郡今市村。寶永年間、陵崩遂為民居と云り、〔いとも畏きわざなりけり、或書に、平野村にありと云、又成書に、平野村の北に在、字片岡山と云など云るは、武烈天皇の御陵か、まぎらはし、なほよく尋ねべし。〕

（中略）

○片岡石环岡、昔紀蘇軒巻に、二年冬十月辛亥朔癸丑、葬小泊瀬稚鷗天皇于傍丘磐杯丘陵、諸陵式に、傍丘磐杯丘北陵、泊瀬列城宮御宇武烈天皇、在大和國葛下郡、兆域東西二町、南北三町、守戸五烟とあり、大和志に、在葛下郡平野村と云り、〔或書に、字石の北と云、又成書に、字片岡山と云。〕

17. 顯宗帝陵生垣取建等ニ付請書付繪図〔1807（文化4）年、平野村文書〕（写真51、図版93・94）

右繪面之通

顯宗帝陵、當村正業寺西之方ニ有米候處、亨保年中御改之上、御敷地廻り四拾間竹垣被 仰付、御高札御渡被成下候處、其後者御高札等朽損、御垣ひ垣も無之等兩ニ相成在之候處、此度御改之上御高札御渡右<sup>左</sup>地廻り間數通、竹垣又者生垣に而も都合方に御団ひ垣等村方より取建、永久亡失不仕様取斗危株無之様仕、御高札朽損其外品替之儀者、早速御当地御役所様江御断可申上旨被仰渡奉提候、依之御請書奉差上候所如件

和州葛下郡平野村

文化四年卯四月

庄屋 佐右衛門

門 仁左衛門

18. 武烈帝陵生垣取建等ニ付請書付繪図〔1807（文化4）年、平野村文書〕（写真53、図版91・92）

右繪面之通

武烈帝陵、當村氏神より東之方氏神山ニ在米候處、亨保年中御改之上御敷地廻り五拾七間竹垣被仰付、御高札御渡被成下候處、其後者御高札等朽損、御垣ひ垣も無之等兩ニ相成在之候處、此度御改之上御高札御渡右敷地廻り間數通、竹垣又者生垣ニ而も都合方に御団ひ垣等村方より取建、永久亡失不仕様取斗危株無之様仕、御高札朽損其外品替之儀者、早速御当地御役所様江御断可申上旨被仰渡奉提候、依之御請書奉差上候所如件

和州葛下郡平野村

文化四年卯四月

庄屋 佐右衛門

門 仁左衛門

### 19. 山陵志〔1808（文化5）年、蒲生君平〕

顯宗陵在傍丘磐杯曰南陵。諸陵式。傍丘磐杯南陵。兆域東西二町。南北三町。磐杯。傍丘南端也。

武烈陵乃其北祖並。曰北陵。諸陵式。傍丘磐杯北陵。兆域東西二町。南北三町。〔按〕磐杯之名久喪之。今傍丘之間。以磐字尋磐石之處。卒無有之。更因音考索。凡磐祝觀音通用。磐無船之類。祝而神之也。古半記。石作達作石作達。覺字是衍。耳石之音往。從人日本文者也。磐杯蓋壽藏。取其名於祝而榮之。今傍丘南端為圓莊。片岡別莊名也。有榮山村。其南為陵家村。而南北各存古墳因以為榮山是磐杯省聲。而杯更為榮也。陵家以磐宅族戶名之。今檢之。即北陵甚高莊。武烈之葬陵。其修可想。而南陵。乃平地之所築。頗卑小。顯宗之有天下也。躬行儻不亦其驗乎。史記。歷史傳。張湯謂為茂陵弱。治方中漢書音義曰。方中律上土作方也。莫林曰。天子御律。律作殿濟之。故詩方中。山是觀之。古時木朝亦尚有然者歟。可以考驗矣。○大和史。以北陵為孝停昌之墓。諸陵式。茅渟皇子墓。在葦田池。並即傍丘北陵也。非此也。

### 20. 帝陵圖記〔1813（文化10）年、編・著者不明〕

顯宗天皇御陵 大和國葛下郡平野村。本多能登守領分。諸陵式為和泉者誤。

武烈天皇御陵 大和國葛下郡平野村。本多能登守領地。高四百二十八石三斗一升三合。御陵二、一ハ御陵。一ハ御車ヲ埋候ト申伝候。

### 21. 打墨絵〔1848（嘉永元）年、北浦定政〕

武烈式傍丘磐杯北陵榮山村にあり山陵志に榮山村ハ磐杯ノ磐ヲハフキテ掘出ト云シ成ベシト云リ宇城山とよふ▲平野村ニ宇坂ト呼ブ武烈度トイアンドソハ帝陵ノ形ナシ

顯宗式傍丘磐杯南陵武烈陵の南に反ふ字二子兒山とよふ其他ハ池田村▲平野村ニ宇坂ノ北トヨフ顯宗陵ト云フアレド陳製時代ニアタラズ

### 22. 瞬陵記〔1849（嘉永2）年、西村長門守〕(図19・25)

二十四代 顯宗帝 諱雄計皇子尊在位三年四月一日崩于八釣宮、葬傍丘磐杯ノ丘ノ南陵、天皇近飛鳥八釣ノ官御宇在大和國葛下郡、兆域東西二町南北三町守戸五烟、古事紀曰片岡之石坏岡上、今接傍丘片岡ト同今不詳、或平野村、

大和國葛下郡平野村林山之門山頂調有之、南ノ方入口ニテ奥方土ニテ理リ不相見候、惣山草芝生有之、北之方一段低キ所東之方正来寺ト申有之、右調此之廻り先年竹垣被仰付候由、只今無之

二十六代 武烈天皇 諱小泊雅鶴鶴尊在位八年冬十二月一日崩于列城宮、葬傍丘磐杯ノ丘ノ北陵、天皇泊瀬列城宮御宇在大和國葛下郡、兆域東西二町南北三町守戸五烟、古事紀曰片岡之石坏岡、今接磐杯丘北陵、未詳其地或云平野村、

大和國葛下郡平野村氏神山之頂有之、惣山之内ニ西之方陵山ニテ調口石と相見石理リ、東之方仰車塚ニテ双方共地形高並有之、二ヶ所一團ニ先年竹垣被仰付候山、只今無之、雜木ハ氏神社用二用、平野村之内ニセツ石と申大石七ツ有之候、先年玄龜ニテ割候得共血出候由ニテ、只今烈石ニ赤筋相見被申候、

### 23. 墓蹟図志〔1854（嘉永7）年、平塚瓢齋、絵図のみ〕

### 24. 山陵考略〔1855（安政2）年、山川正宣〕

顯宗陵 大和

式、傍丘磐杯ノ丘南ノ陵、顯宗天皇、在大和國葛下郡 ○当麻寺の東北に在、池田村に属す、字二兒山と云、又其南に陵家といへる村有、陵ノ裔にや不詳 ○又閑屋越の麓、平野村にも 帝陵、字岩北と云家あれども、地勢判に叶はずとぞ、大和志云、顯宗陵、昔在今市村、寶永中廢殿為民居、云々、これ恐らくは廟の墓なるべし

武烈陵 人和

式、傍丘磐杯ノ丘北ノ陵、武烈天皇、在大和國葛下郡 ○顯宗陵の北榮山村に在、榮山は、磐杯の異號、字城山

と云、當中奥跡などなしにや。此陵南陵にくらぶれば、甚壯大なり、二帝の事迹想像すべしと云、貴造年を經し少は、青銅に見へたり。○また平野村に、車家と呼處を、帝陵といへども、形状甚しからず、一塚山

## 25. 蘭笠乃志づく [1857 (安政4) 年、谷森善臣] (図16)

今泉村をへて、平野村にいたる。村の東ノ端に正樂寺あり。その前を猶西にゆきて、道の右に登る路あり。此路を北に登りて、右のかたにめぐり、四十間許なる円塚あり之を塚穴といふ。塚のすそを南へめぐれば、南むきて石櫛の口顕はれたり。其口の広さ四尺五寸五分、高さ四尺二寸、奥へ深さ九尺九寸一分余、みな煉石にて作る。横三枚づゝ、大井三枚、奥一枚、櫛の口を塞ぎたりし石は尖せて無し。御棺を居たりし所には石を敷て床としたり。

今見えたる所、大よそ右のごとし。此塚を顯宗天皇の傍丘ノ磐坏ノ丘ノ南ノ陵に充たるは、いかにぞやおほゆる。そもそも此石櫛の内のさまをかくしも岡ける故は、あまたある古塚どものなかには、發けて石櫛の内のさまよく知らるゝも多かれど、自然なる石もて造立たるが多くて、拙き筆には絵にも写得がたく、写したりともその制様をよく心得らるばかりには写得がたきを、たゞこの石櫛は煉石の作り石にて小やかに細しく造りてあれば、圖にも写しやすく、そを見むにも心得やすかるべくて、かくはものしつ。慈ての陵墓の石櫛のさまも、大き小さき造ひこそあれ、その制様の人體は推量らるればなり。ついでに云はん、大きな石櫛どもは、入口の隧道は狹く長く、蓋低く、室内にいたりていと広く寛かに、蓋いと高きぞ。此陵の北後より東にゆけば、正樂寺にいづ。寺よりまた東に、此村の童土神牛頭天王社あり。此社より丑寅の方なる山腹にいたく荒たる古塚あり。塚ふたつ西東に雙びたるがごとくにも見ゆれども、よく見れば、もとは一の塚にて、西のかた御在所にて凹く、東の方は崖にて方なりけんを、甚く壊れて円と方との間の底き所もいと低くなりて、二つ雙べる塚のごとくは見ゆるにぞありける。さる例ほかの古塚にもあることなり。西なる塚の上の南よりに、大石の方顕はれて見ゆ。すべての塚のめぐり百間余りあるべし。此塚の字を右ノ北といひ、又車塚とも、昔はいへりしか。此あたりの山の字を片岡山といふとぞ。こを武烈天皇の傍丘磐坏丘ノ北陵に充たるもおぼつかなし。かの塚穴とは西東にありて、北陵南陵とはいひがたくなん。社のかたにくだりて、畔つたひに南に出て、畠ノ裏中筋などいふ村をへて、上里にて大道にいはず。高村しも田河、原口、別所など過て、岡山を越えてゆく。道の北にも南にも古塚あまた見ゆ。岡をくだれば六道やまといふ村あり。此村より北東へかけて広せの郡、南西へは猪窓下郡なりとぞ。道の南なる池のみぎはを伝ひて、南にくれば、すなはち筑山村にきぬ。この家立より西南の岡すそに城山とよぶ大塚あり。御在所円く、まへ方にて、松茂り、めぐりの崩に水あり。塚中に置路戎のかたにありて、御在所の左の後に通る。御在所の順例さまに窟みあり、塚のうへ所々に瓦片の破片みゆ。塚のすべての大引き、法花寺村なるウハナベばかりやあらん。大和志の或説に、此城山を茅渟皇子の片岡葦田墓に充たるは、当たらざるべし。山陵志には、傍丘磐坏丘ノ北陵は武烈天皇に充たり。此處より細き山煙をへだてゝ、南に二兒塚あり、城山と同じさまにて小さきが、丑寅のかたに向へり。頂すこし窟み、松など疎らに生ひたち、めぐりに堀の跡残れり、山陵志に傍丘磐坏南陵に此塚を充て、其南は陵家村なるよしに記せれど、今陵家村とよぶ村はなし。遙かに東南のかた竹ノ内越の南にあたる丘塚村を幸強たる説なるべし。(中略) わすれたり、顯宗天皇の陵を、大和志には、平野の南なる今市村に有て、寛永の比陵崩れて民の家屋となれりし趣、記せるを、彼辺にて尋もし見もしてましを、むなしくも行きすぎつることよ。

## 26. 御陵筆記 [1859 (安政6) 年、橋本政孝? (編・著者不明)]

○武烈　△御城山　郡山篠塚山村　大谷村　高井領野口村　入組　郡山領葛下郡篠塚山村  
皇子皇子之塚敷　ナワ引廻り十四間

廿八日 査見何ひ相済、夕前染山庄村屋喜兵衛宅へ着、□□北花内差支度ニ就高田へ遷らすして、北花内迄行と一り余り之遣ニ付、差支度ニ八里過ル、依而北花内の至を止メ、二児山之御城山ヲ見何相并し、御所明ニ而差し詰リニ治定いたし、印状を以北花内へ断ニ別飛脚遣し、御所明ヘも差支度申付候段、印状を以申造ス、朝六ツ半出立。

廿九日 今日快晴 ヲ、ヒ街道、此道□北へ行者二児山也、

竹内より初瀬迄六里 十二三丁

○顯宗  $\triangle$ 二児山 無年賃地 葛下郡池田村

東嶺凡高壹丈五尺、廣東面三拾九間、南北同斷、西嶺凡高式丈、廣東面六間三尺、南北六間三尺、屋根翫引  
凡間五間五尺、西嶺之旁ニナワ引十八間、

市場 五勺

土庫 方

ト条木伐荒ス由、

後 松平時之助領分

顯宗  $\triangle$ 石上 葛下郡平野村

御石室アリ、奥行凡二間余り

石北ニ引続少し南歟

前 松平時之助領分

武烈  $\triangle$ 石北 葛下郡平野村

牛頭天皇アリ

七時過、染山村より半リ斗り落モ雨止ム、

## 27. 山陵考〔文久年間、谷森善臣〕

傍丘磐杯丘南陵 顯宗天皇の御陵なり、大和国葛下郡片岡の磐坏丘に在るべきを、今その御在所詳ならず。旧説、平野村人家の北上なる宇を石ノ上とよぶ。南面の小円墳に、鐵石もて造れる石都の口露出たる古墳を、此御陵に当たれど、その制作の形状を見るに、其御時代の陵制に叶はず、また磐坏丘北陵に当たる石ノ北とよべる処も、古墳にてはあれども、その在地寅のかたに当たりて、北南に相対はず、東陵、西陵といふき地勢なれば、南陵北陵には當かたくやあらむ。また大和志に此御陵を、在今市村、宝永年間山陵崩、遂為民居といえるは、今其地に就て見るに、北今市村人家の東に字を的場とよびて、夷子社を祀れる所、これ古陵なりと云伝へたりという。さて村人のかたるをきけば、元様のころまでは、この今市村の家居は、高村の南のかた、石橋ある北方に、今は古屋敷とよぶ處、街道の両側に家立ありしを、その敷地よき田となるべき地なるに依て、人々そをあたらしみて、西ノ方なる下畠の地へ、家ども移建て、もとの家地は田になつたり。その時、この的場といふ処に古塚あり、芝山にて、上に桜木生ひ、その本に夷子社、小社にてありしを、其社大きく造立むと、村人かたらひ合せて、その古墳を掘りたりしに、大石積<sup>ツチ</sup>て造れる石窟の内に鍊石にて造れる石棺あり、劍、また長き太刀、くさぐさの金もの瓦器などもありしを、石は破取て石垣につみ、又社壇打殿の下などにも用ひたるが、今にある有なり。その劍、くさぐさの物は上中に粗みて、今も社壇の下の土中にありぬべきなりとかたりき。されば、この夷子社の地、古墳には違あらじを、实に此御陵なりとは、謹には定がたし。若これ實に南陵ならむには、今泉村なる清水八幡宮ノ森の北に、東面にて前に堀などめぐれる古墳、それ北陵に當るべきか。すべてこの今市村の地、一堆の岡山なれば、磐坏丘にあらざるか、猶よく

尋ねべきなり。さて又、山陵志の説に、池田村なる二児山を南陵にあて、築山村の城山を北陵に当たれど、二児山は平地に在て、古事記に石垣岡上也とあるに合はず、又この二児山は、その周圍わづかに百五間余り、城には三百六間あり、実に三分一にて、北陵に相対せず、又その在所も万歳荘内にて、片岡莊に程遠ければ、築山村を磐坏山の略称にて、片岡の磐坏なりとも思はず。その南なる領家村を陵家の誤として、陵戸を宅をもて名くなど云へるも強説ならずや。この外、孤井村に周囲に掘めぐれる大古墳あり、その南良福寺村にも大なる古墳ありて、其間三町許、北南に相対へり。されども此辺は、当麻の衛とよびしわたりにて、片岡の池にあらず。また片岡の地ならむと思はるゝ所にては、下山村の西北に石が峰とよべる丘山、先年石棺を掘出たりといひ、今市村の辺に古墳あまたありといひ、今泉村西の山に、石榔先牛頭山たる古墳ありなどもいへど、正しく磐坏岡の南北陵に相当るべき古墳は、まだ見得がたくこそありけれ。猶その地に就て委しく考明らむべきことなり。そもそもこの御陵のことの古書に見えたるは、まづ日本紀に、葬于傍丘磐坏丘陵とみえ、古事記に、御陵在片岡之石坏ノ岡上也とみえ、延喜式に、傍丘磐坏丘ノ南陵、近飛鳥八鈞宮御宇、顯宗天皇、在大和国葛下郡那城東西二町、南北三町、陵戸一烟、守戸一烟とみえ、扶桑略記に傍丘磐坏丘南陵（高三丈、東西二町、南北三町）など見えたり。

傍丘磐坏丘北陵 武烈天皇の御陵なり、大和国葛下郡片岡の磐坏丘にあるべきを、今その磐坏丘知られざれば、御陵も又詳ならず。旧説には、平野村堂山にて字を岩ノ北とよべる所なる由いへれど、南陵に当たる石上とよべる古墳は、申ノ方に當りて、東西陵とはよぶべけれど、南北陵とはよび難き地勢なり。又この岩ノ北の河山の東北の山端にも、又古墳あれど、是も又東西とはいふべく、南北陵とはいひがたし。又山陵志の説には、築山村なる城山とよべる大古墳を、此御陵に当たれど、其地片岡庄を離れて、万歳荘にあり、かつ南陵に当たる二児山は平地にありて、石垣岡上（古事記）とも云がたかれど、二陵ともに實には当りがたきなるべし。又大和志の説の如く、今市村夷子社の古墳を南陵に当れば、清水八幡宮の北なる古墳、北御陵に当るべけれど、其も遙に定がたし。猶よく考明らむべきことなり。此御陵の事の古書に見えたるは、日本紀に、葬于傍丘磐坏丘陵とみえ、古事記に、御陵在片岡之石坏岡也とみえ、延喜式に、傍丘磐坏丘北陵、泊瀬列城宮御宇、武烈天皇、在大和国葛下郡。那城東西二町、南北三町、守戸五烟と見え、扶桑略記に、傍丘磐坏丘北陵（高二丈方二町）など見えたり。

## 28. 山陵圖絵〔幕末期、編・著者不明、絵図あり〕

第廿四代 顯宗天皇 和州葛下郡平野村林山ノ内、頂ニ洞アリ、南ノ方入口奥ノ方埋之不見

第廿六代 武烈天皇 和州葛下郡平野村氏神山ノ頂ニアリ、西ノ方陵山ニテ洞口石ト相見、東ノ方御車塚ニテ双方其地形高ク並アリ、平野村ノ内七ツ石ト申大石七ツアリ、先年玄翁ニテ割候共血出之由今黒石ニテ赤筋相見ユ

## 29. 御陵之絵図〔幕末期、編・著者不明、絵図のみ〕(写真50・54、図版88~90)

## 30. 平野村絵図〔幕末期、編・著者不明、絵図のみ〕(写真49・52、図版85~87)

### ③近世の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵（記された年代が不明確な文献）

#### 31. 陵之記〔年代・編・著者不明〕

顯宗帝 大和国葛下郡平野村林山の内、山頂洞有之。南の方入口にて、奥の方大ニ埋り不押見ヘ候。惣山、草柴生ヘ有之。北の方一段低キ所、東の方正樂寺と申有候。石洞の遙り、先年竹垣被仰付候。只今無之。

武烈帝 大和国葛下郡平野村氏神山の頂之。惣山の内西の方、陵山にて洞口、石と相見石埋り。東の方御車塚ニ面、双方其地形高、並有之。一ヶ所、一團、先年竹垣被仰付候由。只今損無之。

### 32. 御陵記〔年代・作者不詳〕

顯宗 大和國葛下郡傍丘磐坂上南葬。御付札本多唐之助知行所。此陵大和國葛下郡平野村有之、除地ニテ字石上と申し候。御付札の通本多唐之助知行所ニ而御座候。

武烈 大和國葛下郡傍丘磐杯丘所ニ葬。御付札本多唐之助知行所。此陵大和國葛下郡平野村有之。除地ニテ字石ノ北と申。御付札の通、本多唐之助知行所ニテ御座候。

### 33. 陵墓圖〔年代・編・著者不明、絵図のみ〕(図17・23)

顯宗天皇陵圖 陵在大和國 添下郡平野村、本多氏之封内、式所謂傍丘磐杯丘南陵、俗稱日石山、一云傍丘磐杯丘南陵、在今市村、寶永中後崩遷為式居

武烈天皇陵圖 陵在大和國葛下郡平野村、本多氏之封内、俗曰冢山傍、所謂傍丘磐杯丘北陵、陵有二相傳、口一是弗所、一是一方與

### 34. 御陵所考〔内田傳左衛門、1698（元禄10）年を複数名書き〕(図18・24)

顯宗天皇 葛下郡傍丘磐杯丘南陵、陵所同平野村ノ北ニアリ、字片岡山ト云、傍丘磐杯ハ今知レス  
今市村ニアリ隣廟ヲ爲民居

(貼紙)

又名片岡塚傍岡上陵、又名片岡石上陵字石ノ上、垣四十間廻除地平野村土祖神ノ地ニ在、此陵昔ハ今市村ニ有之カ、宝永四年ノ大地震ニ陵崩テ其跡ハ民屋トナレリ、此陵今市ニ在之故、南北ノ方角能叶ヘリ、今此村ニ在所ハ武烈帝之陵ヨリハ辰巳ニ當レリ、アマツサハ此陵ト云ハ必陵ニ非ズシテ寄ニ赤ハケノ小山、高サ三尺斗、二三間廻ノ砂山也、

今市村ハ武烈帝ノ陵ヨリハ南東ニ當テ丁町ハガリにして、右者北ノ方角能カナヘリ、以上名字、恐々敬白、  
土祖神ノ地ノ地ハ北ノ陵カ

(絵図面内)

顯宗天皇 字石上、高四間、根廻四十間、垣廻四十三間

東北

武烈天皇 葛下郡傍丘磐杯丘北陵、陵所同平野村ニアリ、字片岡山

(絵図面内)

武烈天皇 字塚山、御陵高五間、根廻三十四間、垣廻三十六間

(貼紙)

字岩ノ北垣五十七間廻除地平野村ニアリ

### 35. 平野村郷〔年代不詳（江戸期か）、編・著者不明〕

\* 順宗天皇  
御陵 武烈天皇  
(中略) 式ヶ所

一 七ツ石と申田之中ニ御座候

### ③近代の史料にみる顯宗天皇陵と武烈天皇陵

#### 36. 山陵記〔1879（明治12）年、宮城三平〕

大和國葛下郡

二十三世 顯宗天皇 雄計又來目種子尊三年四月廿五日崩薨三十八歳 池出村字二兄山傍丘磐杯南陵に高き丘、一方は池なり未定

二十五世 武烈天皇 小泊瓶稚鷦鷯尊八年十二月八日崩御五十七歳 築山村宇城山傍丘磐杯北陵池上ヨリあり

37. 大和国古墳墓取調書〔1893（明治26）年、野瀬竜潜〕（図13・20・26）

第六六九号 葛下郡志都美村大字平野 字上山 第千五十二番 一古墳墓反別四畝歩 官有地

第六七〇号 葛下郡志都美村大字平野 字上山 第千四十四番 一古墳墓反別七畝七歩 官有地

（前略）第六百六十八号、葛下郡志都美村大字平野字上山又ハ土屋ト呼フ民家ノ北邊ニ接近セリ、漢道ハ破壊セラレ玄室ノミ残存ス、室内ノ西壁井ニ天井トモニ練石ヲ以テ築ク、構造宏大ナルニ非レトモ町重ナリ、土中石棺ノ埋藏アルモノ、如ク地ヲ叩ケバ空洞ノ響アリ、單入ハ武烈帝御陵ト云ヘリ、然レトモ該御陵ハ大字今泉ニ御治定アリ、又タ墓山ニモ傳説地アレハ此地ハ他ノ皇族ノ御墓ナラント考フ、松下見林ガ前王廟碑記ニ、傍丘磐杯北陵未詳其地或云平野村大和志ニ在平野村ト、大和名所圖會ニ平野村にあり冢塚山ト、水島永政ガ、山臨志ニ平野村の山林にあり小丘ニツアリハ御車を収めし所といふト、日本書紀通證ニ或曰北陵在葛下郡即平野村ト、此等ノ文ハ皆此塚ヲ指シタルカ如シ、又タ北浦定政ノ打墨縄ニ、平野村ニ字東塚ト呼フ武烈陵トイアレト帝陵ノ形ナシトアリ、是或ハ築山ナル傳説地ヲ御陵ト確メンカ爲ニヤアラン歟、本塚如此傳説アルモノニ付充分保存セラル、ヲ必要ト認ム

38. 日本書紀通證〔1902（明治35）年～1909（明治42）年、飯田武郎〕

○傍丘磐杯丘陵。熟田木・秘閣本及旧事紀・延喜式には、丘を丘とあり。集解には改めたり。秘閣本には磐杯二字なし。諸陵式に、傍丘磐杯丘南陵。近飛鳥八鈞宮御宇顕宗天皇ナリ。在大和国葛下郡。光城東西二町。南北三町。陵ノ一塚。守戸三塚。記伝云。源流とは。後に北邊もある故に云へり。大和志に。傍丘磐杯丘南陵。昔在葛下郡今市村。宝永年間陵廟為民居と云り。記伝云。威成乎平野村にありと云。又或清乎平野村の北に在。字片岡山と云ふと云。武烈天皇の實陵か。まきらはし。なほよくゆみへしといへり。

39. 明治天皇紀〔1889（明治22）年、1893（明治26）年の記事〕

明治二十二年 六月

三日 是れより先、條約改正の議起るに際し、伯爵伊藤博文以爲らく、萬世一系の皇統を奉戴する帝國にして、歴代天陵の所在の未だ明らかならざるものあるが如きは、外交上信を列國に失ふの甚しきものなれば、速やかに之れを検覈し、以て國體の精華を中外に發揚せざるべからずと、廟議亦之れを可とす、仍りて諸議助是立正聲を京都府及び奈良・山口二縣に差遣し、天皇・皇親・后妃等の陵墓所在の明らかならざるものを探討せしむ、正聲之れを舊記に徵孝し、實地に檢覈し、其の實を得、歸りて覆奏する所あり、乃ち之に據りて、是の日京都府に於て葛野郡宇多野村光孝天皇後田邑陵・同郡同村上天皇村上陵・愛宕郡鹿ヶ谷町冷泉天皇櫻木陵・葛野郡宇多野村圓融天皇後村上陵・同郡大北山村三條天皇北山陵・同郡同村二條天皇香隆寺陵・愛宕郡勝林町順徳天皇大原陵・紀伊郡東福寺山上仲恭天皇九條陵・同郡壠内村光明天皇大光明寺陵・龜野郡花岡村尊稱皇后統子内親王・山門瓦陵・宇治郡宇治村應神天皇皇子菟道稚郎子宇治墓・奈良縣に於て葛下郡今市村顯宗天皇傍丘磐杯丘南陵・同郡今泉村武烈天皇傍丘磐杯丘北陵の所在を検定し、其の兆域を定め、修善せしむ、尋いで七月二十日京都府愛宕郡淨土寺町後一條天皇御火葬所を以て、同天皇菩提樹陵と定め、又同二十五日崇峻天皇倉拂岡上陵の所在を改め、奈良縣上市郡倉橋村崇峻天皇御位牌殿地所及び十二社神社境内を併せて同天皇陵と爲し、又山口縣下官幣中社赤間宮境内御影堂舊地を安德天皇阿彌陀寺陵と定め、同宮境内平家塚と稱する石塔を同陵付属として之れを保存せしむ、

・明治二十六年 二月

九日 （前略）顯宗天皇陵以下新定十三陵工事竣工したるを以て、義に修繕竣工して、未だ奉告の儀の行は

れざる綏靖天皇陵以下七陵と共に、其の地に就き各々修復奉告祭を挙げさせたまはんとし、掌典岩倉具綱を勅使として之に參向せしめたまふ、又孝明天皇の山陵修復に観慮淺からざりしを思召され、特に後月輪東山陵に奉告祭を行はしめたまふ、具綱、三月二日安徳天皇陵より始め、逐次其の祭典を修し、三月三十一日孝明天皇陵を以て之れを了り、歸京復命す。

#### 註

- 1) 『平野村絵図』、『御陵之絵図』、『武烈帝陵生垣取建等ニ付諸書付絵図』、『顯宗帝陵生垣取建等ニ付諸書付絵図』は、指定名称「平野2号墳柏台」(有形文化財・考古資料)とともに指定名称「平野古墳群関係文書」として平成16年3月26日付で香芝市指定文化財(有形文化財・古文書)に指定されている。
- 2) 顯宗陵と武烈陵については、表3掲載史料をはじめ、下記の文献を参考にした。  
外池昇 1997 「幕末・明治の陵墓」 吉川弘文館  
茂木雅博 1990 「天皇陵の研究」 同成社  
茂木雅博 2002 「日本史の中の古代天皇陵」 廉友社  
森浩一編 1996 「天皇陵古墳」 大巧社  
堀田啓一 1987 「天皇陵治定の変遷」[特集 天皇陵と宮都の謎]歴史読本臨時増刊 新人物往来社  
堀田啓一 2001 「日本古代の陵墓」 吉川弘文館  
水野正好編 1993 「天皇陵総覧」歴史読本特別増刊・事典シリーズ第19号 新人物往来社

#### 表3の出典・文献

1. 倉野憲司・武田祐吉 1958 「日本古典文学大系1 古事記 祝詞」 岩波書店 334-335頁
2. 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守 1996 「新編日本古典文学全集 日本書紀2」 小学館 258・296頁
3. 正宗敦夫他 1978 「覆刻日本古典全集第2期14巻 延喜式」 現代思潮社 163頁
4. 黒板勝美 1932 「國史大系 扶桑略記・帝王編年記」 國史刊行会・吉川弘文館 22・24頁
5. 奈良県史料刊行会編 1977 「奈良県史料1 大和名所記」 奈良県史料刊行会 215・216頁
6. 遠藤鏡雄 1974 「史料天皇陵」 新人物往来社 41-42頁、112・125頁、その他資料編より
7. 高野和人 1999 「天皇陵絵図史料集」 青潮社 17・56頁
8. 泉森皎・猪熊兼勝 1977 「竜田御坊山古墳 平野塚穴山古墳」 奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第32集 奈良県教育委員会 95-102頁、その他園版
9. 秋山日出雄・廣吉壽彦編 1994 「元禄年間山陵記録」 (財)山貞大和古代文化研究協会 4・11頁、40-42頁、66-71頁、86頁、94-95頁、118-120頁、166-167頁、174-175頁、206頁、208-209頁、236-237頁
10. 香芝町史調査委員会 1976 「香芝町史 史料編」 香芝町役場 784-785頁
11. 並河永 1987 「大和志・大和史料」 臨川書店 155頁
12. 前掲8文献に同じ
13. 小島憲之 1978 「日本書紀通證」 臨川書店 1338・1370頁
14. 前掲7文献に同じ。150-154頁
15. 前掲10文献に同じ。832-833頁
16. 本居宣長 1932(初版1903年)「古事記傳」 吉川弘文館 2151、2155-2156頁

17. a. 前掲 8 文献に同じ。図版32左（絵図のみ）  
b. 香芝市二上山博物館 2005 「ふたかみ13-2003（平成15）年度香芝市二上山博物館年報・紀要」  
香芝市二上山博物館 27頁
18. 前掲 8 文献に同じ。図版32右（絵図のみ）。前掲17b文献と同じ。28頁
19. 前掲 6 文献に同じ。22-23頁その他
20. 前掲 8 文献に同じ
21. 斉藤忠 1979 「日本考古学史資料集成」 吉川弘文館 210-212頁
22. 末永雅雄 1982 「皇陵古図集成 8 瞿陵記」 青潮社 17-19頁
23. 前掲 6 文献に同じ。資料編より
24. 山川正宜 1921 「山陵考略」 池田史談會 10-11頁
25. 前掲10文献に同じ。821-826頁
26. 橋本政孝 1859 「橋本家文書律令雜記」 奈良縣立奈良図書館所蔵
27. 前掲10文献に同じ。829-831頁
28. 前掲 6 文献に同じ。資料編より
29. 前掲 8 文献に同じ。図版31下。前掲17b文献と同じ。25頁
30. 前掲 8 文献に同じ。図版31上。前掲17b文献と同じ。26頁
31. 前掲 8 文献に同じ
32. 前掲 8 文献に同じ
33. 前掲21文献に同じ。200-201頁
34. 末永雅雄 1983 「皇陵古図集成 4 御陵所考」 青潮社 10-11頁、50-53頁
35. 前掲10文献に同じ。778-779頁
36. 宮城三平 1879 「山陵記」 大橋知伸 奈良大学図書館所蔵
37. 野瀬竜游 1985 「大和古墳墓取調書」（附）由良大和古代文化研究協会 668-670頁
38. 舛田武郎 1981 「日本古紀通釋」 冬至書房新社 2522-2590頁
39. 宮内庁 1968-1977 「明治天皇紀 第七卷」「明治天皇紀 第八卷」 吉川弘文館（七卷）279-281頁、（八卷）200頁

（凡例）

- 原史料に抹消した箇所がある場合には、抹消した文字の下傍に、印を付け、なお訂正した文字があれば、これを上傍に記した。また、抹消して判読不可能な箇所は■で示した。
- 本文中、文意が通じない箇所には（ママ）、それが推定できるものには（○○）、なお疑問の残るものには（○○カ）、脱字があると判断される箇所には（○○脱カ）とそれぞれ上傍に注記した。
- 虫損、破損、汚損などで判読不可能な箇所は、□で示した。



写真49 「平野村繪図」(図版85~87)

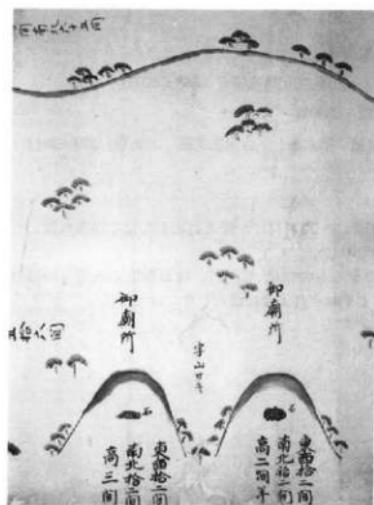


写真50 「御陵之繪図」(図版88~90)

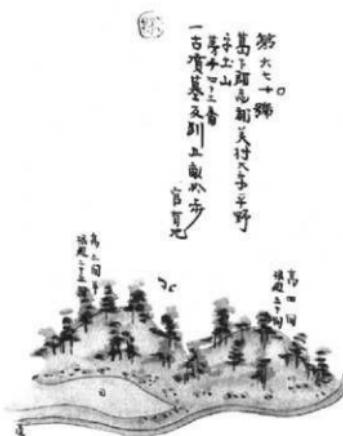


図13 「大和国古墳墓取調書」

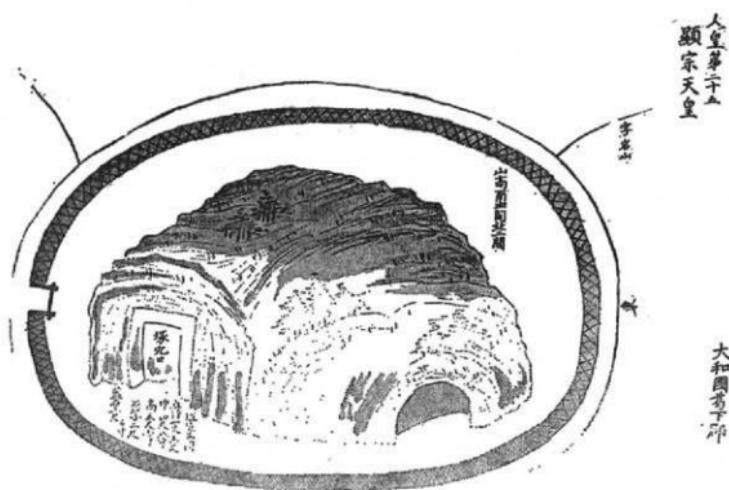


図14 「山陵絵図」

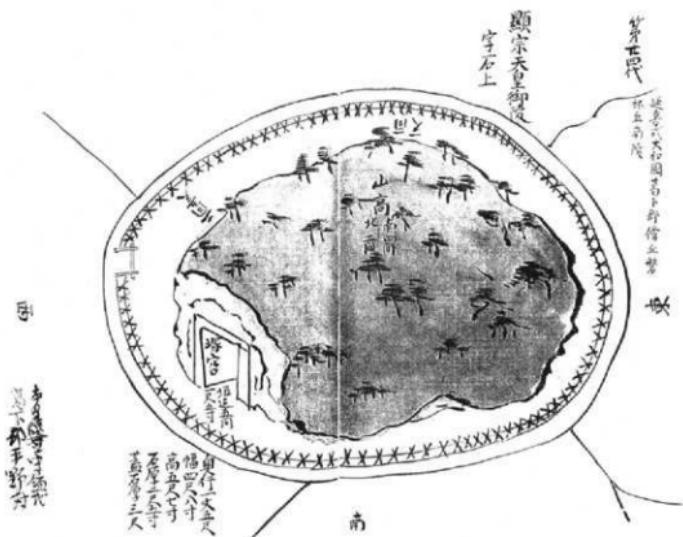


図15 「日嗣御子 御陵」

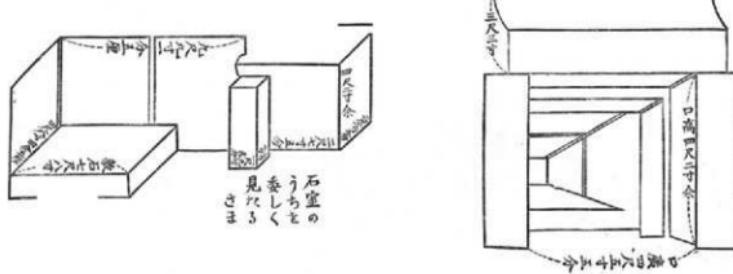


図16 「蘭笠乃志づく」

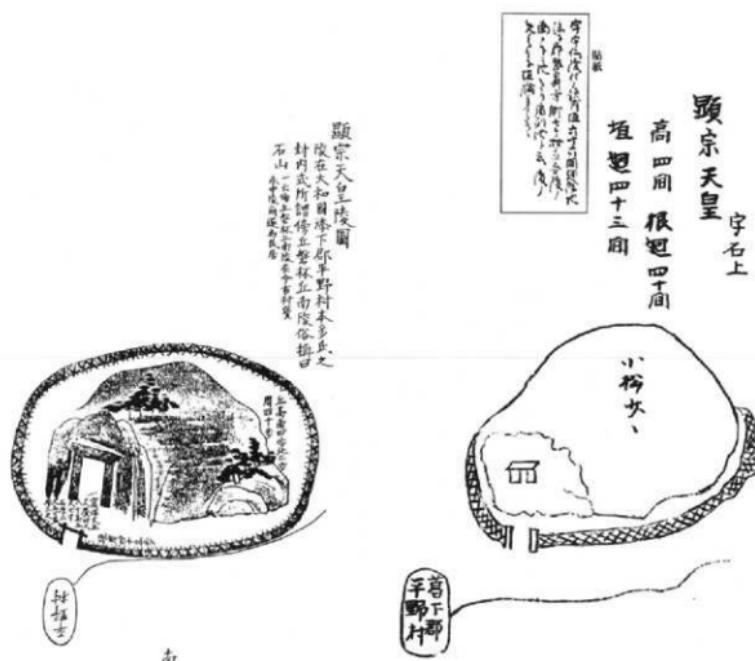


図17 「陵基図」

図18 「御陵所考」



写真51 「顯宗帝陵生垣取建等二付請書付繪図」  
(図版93・94)



写真52 「平野村絵図」(図版85~87)



図19 「廟陵記」



図20 「大和國古墳墓取調書」

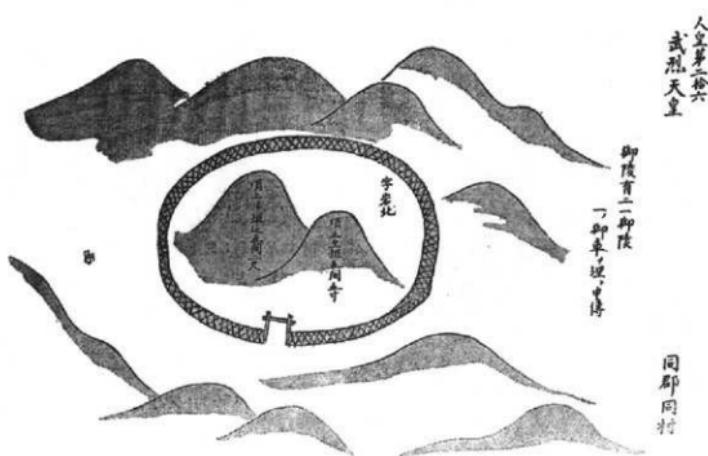


図21 「諸陵周垣成就記」

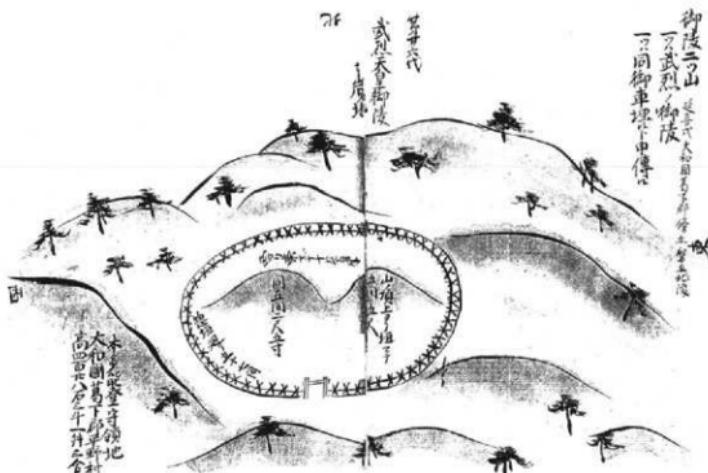


図22 「日洞御子 御陵」



七  
圖23 「陵基図」

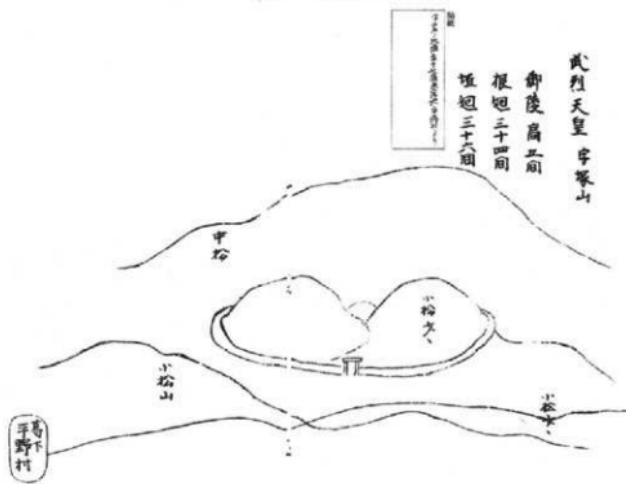


圖24 「御陵所考」



写真53 「武烈帝陵生垣取造等二付請書付絵図」  
(図版91・92)



写真54 「御陵之絵図」(図版88~90)



図25 「廟陵記」

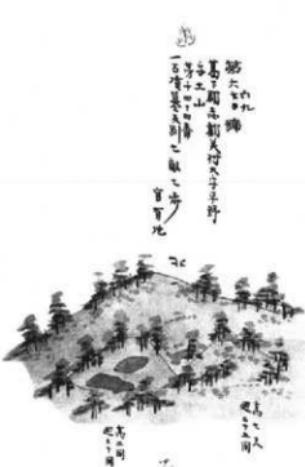


図26 「大和國古墳墓取調書」

## 第三章 墳丘と埋葬施設

### 1 墳丘

#### (1) 立地 (図27)

平野2号墳は、明神山(273.7m)から南東方向へ緩やかに派生する標高66~85m前後の丘陵の南東斜面に立地している。古墳の北方と東西は丘陵尾根によって視界が遮られるが、南西には二上山や金剛葛城山系の山塊が広がり、南東方向には奈良盆地東南部の山並を望むことができる。古墳背面北側での丘陵頂部の標高は約65mで、約59mに古墳の墳頂部が、裾部は約53mに築かれている。丘陵下位の水川の標高は47mであることから古墳の墳頂部からの比高差は12mを測り、現況でも丘陵下位から古墳を見上げると横穴式石室が開口する様は、かなり巨人で威圧感を感じる。

平野2号墳を始め、平野古墳群中の他の古墳も丘陵の最高所に立地するのではなく、丘陵の頂上からやや下った丘陵尾根中腹に築造されている。平野1・2号墳や平野塚穴山古墳の現存する平野古墳群の古墳の全ての石室は南東方向へ開口していることから、古墳の占地としては南東方向に派生する丘陵のあえて南東斜面を指向して古墳を占地しているということが指摘できる（図27、巻頭原色図版2-2・3-2、図版5）。

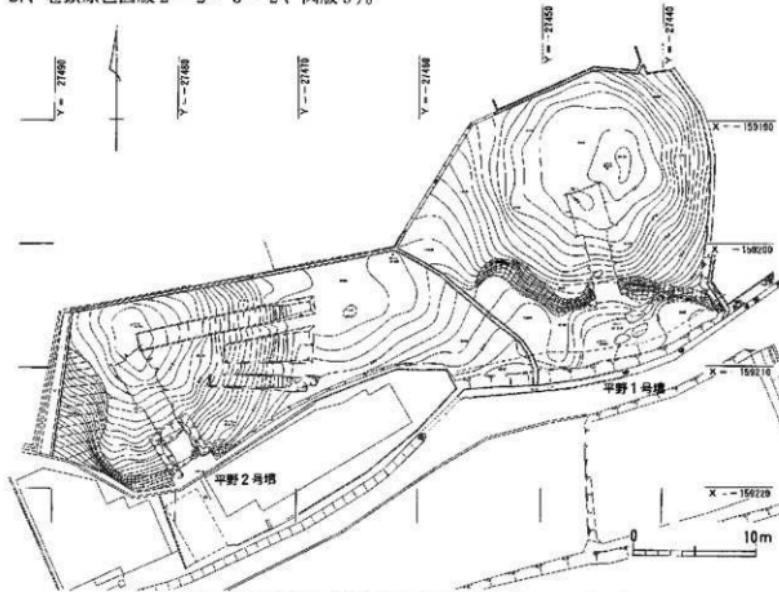


図27 平野2号墳の立地と横穴式石室の位置 (S=1/400)

## (2) 外形 (図28・31)

平野2号墳の墳丘北側は宅地造成されており、また、墳丘西側は削平されているために古墳墳丘部の東西、あるいは、墳丘部の南北のそれぞれ対称地に調査区を設定することができず、墳丘の東側のみの限られた箇所での調査であったが、墳丘部に設定した第1・2・3調査区の調査により、復元推定直径26m前後、高さ6.5m前後の2段築成の円墳と推定される（図28・31、別添図2、巻頭原色図版4-1・6-1）。

## (3) 墳丘と石室の関係 (図28・29)

石室は横穴式石室で古墳の墳丘の中心部よりやや南側に配されている（図28・29）。墳頂部の標高は59.7m、墳丘裾部の標高は53.2mで、墳丘の高さは6.5mを測る。石室の床面は墳丘裾部とほぼ同じ標高53.1～53.5mに築かれており、標高55.6～55.7mに玄室天井部が架構される。これより上部には層厚約1.6mにわたって版築技法によって盛土が施されて墳丘が構築されている。

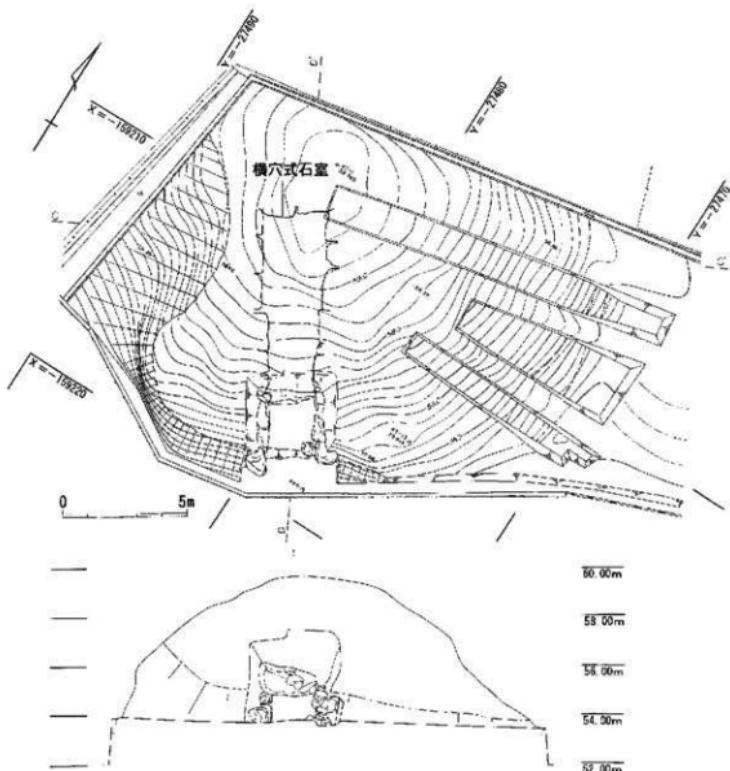


図28 平野2号墳の墳丘と横穴式石室 (S=1/200)

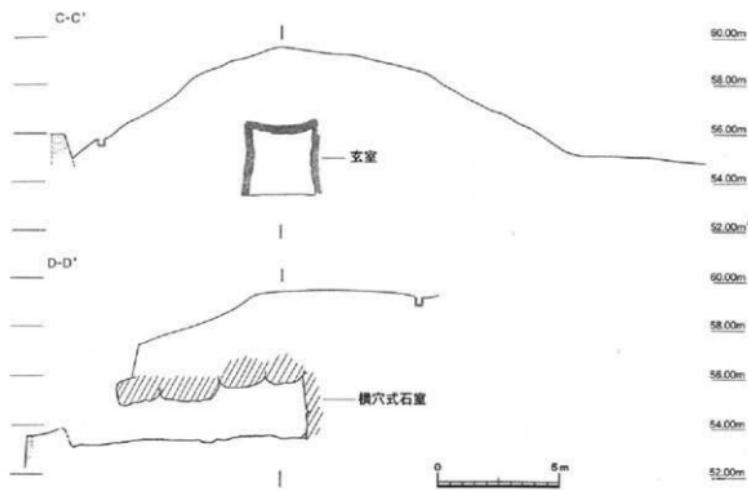


図29 平野2号墳填丘断面図 ( $S=1/200$ )

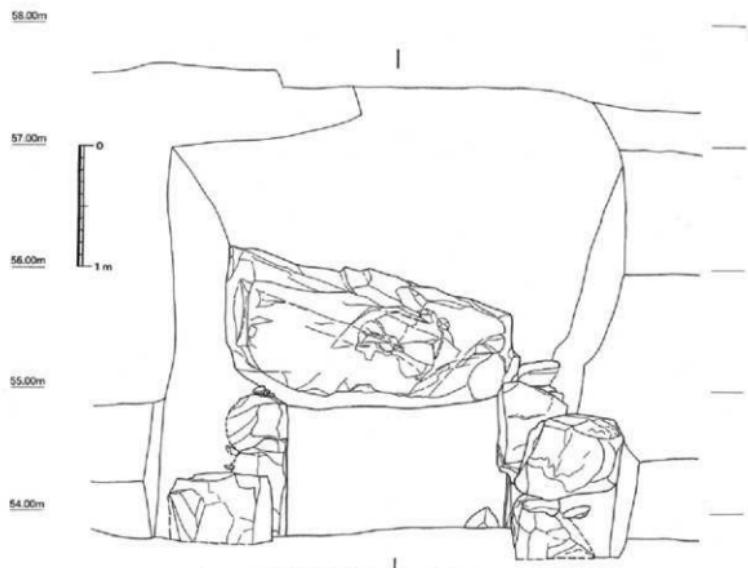


図30 平野2号墳横穴式石室見通図 ( $S=1/40$ )

#### (4) 墳丘の堆積土と墳丘盛土（墳丘の構造）

調査区の層序は、基本的に墳丘に堆積した堆積土層と墳丘を形成する墳丘盛土層の大別して2者に分けられる。以下、墳丘堆積土と墳丘盛土（形成層）の2者に分けて概観する。

##### ①墳丘堆積土（図31、図版12～16）

墳丘の堆積土は、墳頂部では表土直下約10cmで墳丘の盛土層（版築土層）の⑯層（黄褐色砂質土層）となるが、墳丘裾部では予想以上に後世の客土層等が厚く堆積しており、表土の①層（暗灰色砂質土層）から墳丘裾部の付近一帯の基盤層である⑮層（明褐色砂質土層）までの深さは第3調査区で1.2m、第1調査区では1.7mで、必然的に丘陵地形に沿って北方から南方へ向かうにつれて堆積土は厚くなる（図31）。このうち、②層（黄色砂質土層）、③層（褐色砂質土層）、④層（暗褐色砂質土層）は、近年の宅地造成に伴って丘陵の上方から流入した客土層と推定され、古墳より丘陵の上位に築かれた平野窯跡群の須恵器焼成窯や瓦焼成窯に由来すると推定されるTK-209型式期の6世紀後半の須恵器片や奈良時代の瓦片を少量包含している。

墳丘中位に堆積する⑨層（暗灰褐色砂質土層）には、第1調査区から第3調査区にかけて5cm前後の小石や礫を含む層域があり、礫が墳丘部を弧状に取り囲むように分布していた（巻頭原色図版5-2、図版11-3、図版12-1・2）。また、第2・3調査区の墳丘裾部の⑧層（黄褐色砂質土層）上面で礫の集積箇所を検出したため（図版12-3、図版13-1・2）、この礫と墳丘との関係を探るために礫層の検出作業を行った。礫は第1調査区では散在的であったが、とくに第3調査区の墳丘裾部に多く集積しており、礫層中から瓦質土器や瓦器梶の破片等の中世土器が出土したことから（図版13-1）、墳丘は中世に再利用されている可能性が持たれた。このため、墳丘調査としては、古墳築造当初のものではないが、一度、この層域での精査・検出を行い、写真撮影及び記録面の作成後、この礫を除去して⑯層（茶褐色砂質土層）、⑯層（明褐色砂質土層）上面で本来の古墳築造当初の墳丘裾部を検出した（図版13-3、図版15、図版16-1）。

##### ②墳丘盛土（形成層）（図31、巻頭原色図版5・6、図版14・15）

調査地付近一帯の地山は⑮層（明褐色砂質土層）で、この⑮層の上位に⑭層（茶褐色砂質土層）と⑯層（黄褐色砂質土層）が堆積して古墳の墳丘盛土を形成している（巻頭原色図版6-1・6-3、図版14-1・2、図版15）。

墳丘の構築方法は、地山の⑯層（明褐色砂質土層）を整形した後、層厚約1mにわたって⑯層（茶褐色砂質土層）を整地土層として敷き詰め、その上に層厚約1mにわたって⑯層（黄褐色砂質土層）を版築技法により築き固めて墳丘が構築されていることが推定される（図版14-2、図版15-2）。この⑯層の版築土は、厚さ約10cm前後の赤褐色粘質土層と厚さ約2cm前後の黄色砂質土層（微砂～細砂層）の2層の互層で形成されており、やや保湿性のある赤褐色粘質土層が黄色砂質土層に挟まれるようにして築き固めて形成されている（図31、巻頭図版6-2、図版14-3）。⑯層（黄褐色砂質土層）下位の平坦面の上面には、墳丘2段目のテラスを被覆するかのように層厚約50～90cmにわたって粘質気味の⑯層（灰褐色砂質土層）、⑯層（灰褐色砂質土層）、⑯層（明灰褐色砂質土層）が堆積する。当初は、遺物は出土せず形成時期が不明であり、また、墳丘西方での調査が不可能で墳丘の段築が確認できなかつたため、墳丘盛土の一部と解釈したが、前述したように⑨層（暗灰褐色砂質土層）の礫が墳丘部を弧状に取り囲むように分布していることから、⑯～⑯層は古墳築造当初の盛土ではなく、後世の二次的な客土で中世の石室及び墳丘の

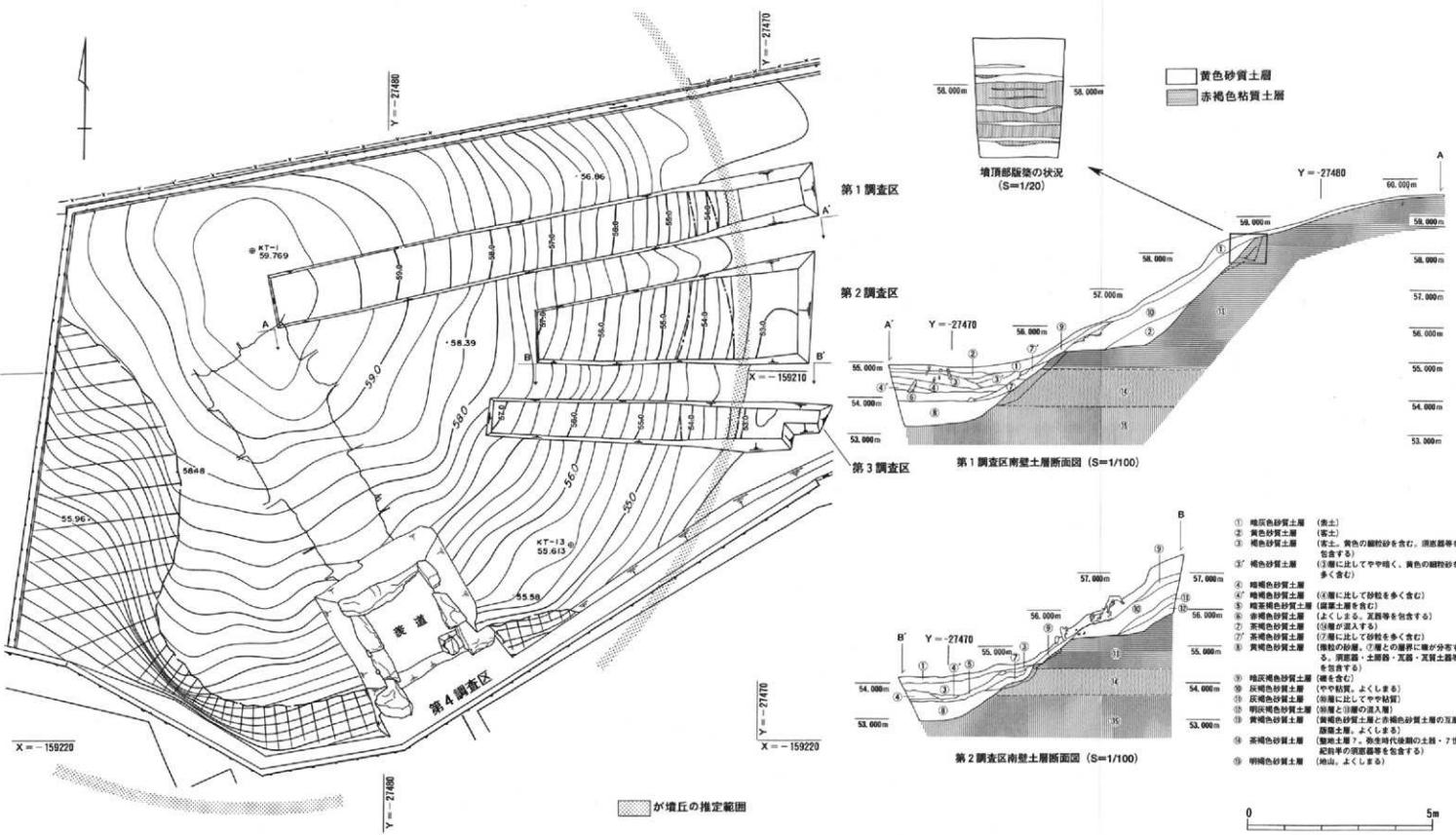
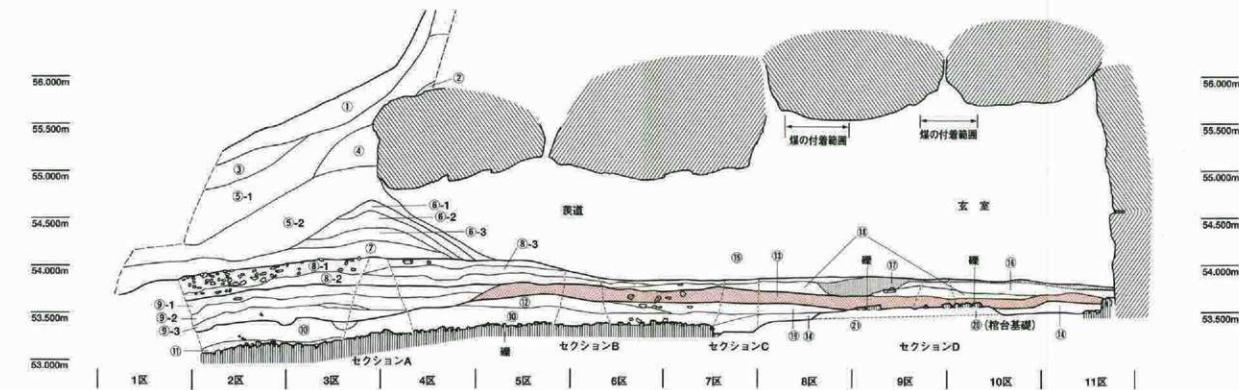


図31 平野2号填埋地復原図・調査区土層断面図 (S=1/100)



- ①暗灰色砂質土層(灰土、漬糞土層)  
 ②赤褐色砂質土層(白埴壇の底盤土層)  
 ③暗灰色砂質土層(1層の生層の混合層)  
 ④赤褐色砂質土層(白埴壇の底盤土層)  
 ⑤明褐色砂質土層(廐入土、漬糞土上の赤褐色粘質土層をブロック状に含む)  
 ⑥明褐色砂質土層(廐入土、⑤-1層に比して漬糞土の赤褐色粘質土層を多量に含む)  
 ⑦黄褐色砂質土層  
 ⑧-1暗褐色砂質土層(2cm~10cmの厚さを多量に含む、よく緑まる、⑦層との層界に瓦器塗・鉢袋等出土)  
 ⑧-2暗褐色砂質土層(⑧-1層と同じだがやや弱い、⑧-1層の層間に凝灰岩粒を含む、磚・瓦器塗等出土)  
 ⑧-3暗褐色砂質土層(⑧-1層と同じだがやや弱い、⑧-1層の層間に凝灰岩粒を含む、磚・瓦器塗・鉢袋等出土)  
 ⑨-1灰褐色砂質土層(全体的に微量の炭粒を含む)  
 ⑨-2灰褐色砂質土層(全体的に微量の炭粒を含む)  
 ⑩-3灰褐色砂質土層(黄褐色砂質土層混入、微量の炭粒を含む、須恵器坏身・瓦器塗等出土)

- ⑪灰褐色砂質土層(火や粘質、よく緑まる、黄褐色砂質土層混入、瓦器塗等出土)  
 ⑫灰褐色砂質土層(火や粘質)  
 ⑬灰褐色砂質土層(火や粘質)  
 ⑭赤褐色砂質土層(築山である丘側の赤褐色土層を含みほんと凝灰岩片や凝灰岩粒で構成される層、瓦器塗等の土器を多量に含む)  
 ⑮赤褐色砂質土層(火や粘質、やや強まる、漆灰岩合む)  
 ⑯黄褐色砂質土層(火や粘質、やや強まる、漆灰岩合む)  
 ⑰黄褐色砂質土層(10mの範囲が火や粘土によって形成された流入土層)  
 ⑱褐褐色砂質土層(瓦器塗等の土器が火や粘土によって形成された流入土層)  
 ⑲褐褐色砂質土層(瓦器塗等の土器が火や粘土によって形成された流入土層)  
 ⑳炭化物層(全て炭化物で構成される層、瓦器塗等出土)  
 ㉑灰褐色砂質土層(質的に生層と同質であるが、漆灰岩に比して凝灰岩粒は少ない)  
 ㉒赤褐色砂質土層(質的に生層と同質であるが、漆灰岩に比して強いてある⑮層の赤褐色土を多く含有する)  
 ㉓赤褐色砂質土層(棺台基礎土層)、漆灰岩と細かな凝灰岩粒の混合層)  
 ㉔赤褐色砂質土層(築山、砾石、火や粘土、漆灰岩等の土器が火や粘土によって形成された流入土層)  
 ㉕明褐色砂質土層(対応する)

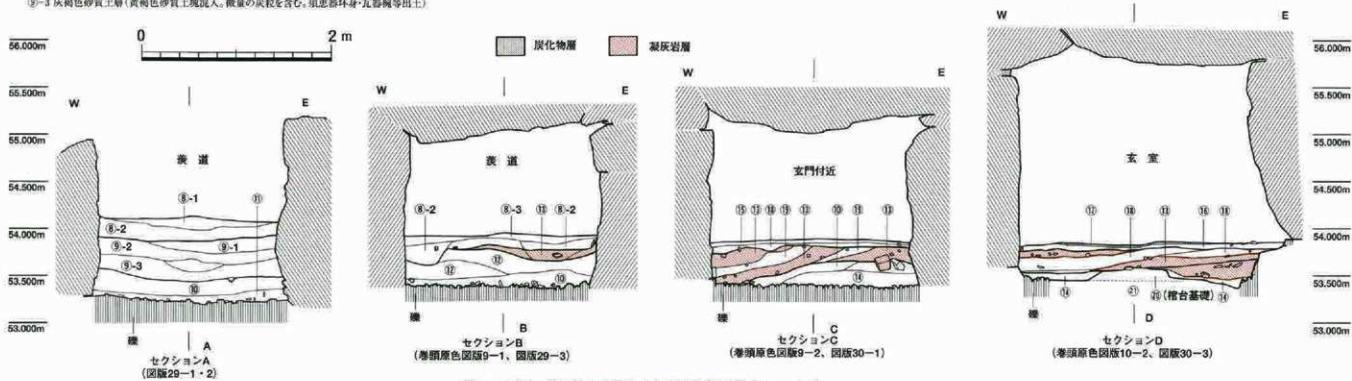


図32 平野2号墳横穴式石室内土層堆積状況図 (S=1/40)

再利用時に形成された可能性が考えられる。

#### (5) 石室の堆積土 (図32、巻頭原色図版9、巻頭原色図版10-2、図版29・30)

横穴式石室の堆積土は、天井石が架構されていない羨道前方部の1~3区の堆積層である①層~⑦層と羨道中央部から玄室の堆積層である⑧層~⑯層の大別して2者に識別・分離される。

①層~⑦層は石室開口部の埋没過程で形成された堆積層で、①層以下、赤褐色粘質土層と黄色砂質土層の互層で構成される墳丘版築土の崩壊土を混入する④・⑤層と、墳丘上方から流入して開口部直下に堆積したと推定される⑦層に分けられる。④・⑤層の堆積状況から石室開口部は、自然堆積とするよりも時を経ずして一機に人為的に埋められた可能性がある。

⑦層(灰褐色砂質土層)を除去した時点で層の上面に礫を多量に含み固く締まった⑧-1層(暗灰褐色砂質土層)が現れ(巻頭図版7-2、図版19-1)、大局的に見て、この⑦層と⑧-1層の層界で堆積層が明瞭に分かれることが識別できた。この礫を含む⑧層の上面で、平面精査を行い、玄室内に進入して内部の現況を確認したところ、玄室中央部から奥壁付近にも同様の礫が散乱しており(巻頭図版8-2、図版19-2)、出土土器から⑧-1層が玄室表面と同時期に形成された層域であることが確認できた。特に層の上位は堅く締まっていることから、この層域で一定の期間石室が開口しており、人が頻繁に出入りしていた形跡がうかがえる。さらに墳丘部中位で検出した図31⑨層(暗灰褐色砂質土層)の礫と墳丘裾部の図31⑩層(黄褐色砂質土層)上面で検出した礫は羨道部の⑧-1層と玄室表面の礫層と関連するものと考えられ、中世に石室と墳丘が一体となって再利用されていた可能性がある。

玄室内部の堆積土は、⑯層(暗灰色砂質土層)、⑰層(炭化物層)、⑯層(灰褐色砂質土層)、⑮層(灰色凝灰岩粒層)、⑯層(赤褐色粘質土層)の大別して5層に識別・分離される。玄室床面の地山は⑰層(赤褐色砂質土層)で玄室表面から床面までの堆積土は約30~40cmを測る。

表面には玄室中央部と奥壁付近を中心に礫が集中して分布しており(図36、巻頭原色図版8-2、図版19-2、図版20)、礫を除去すると、玄室中央部から奥壁を中心に全て炭化物で構成される⑰層(炭化物層)が検出された(図版22)。炭化物層の下層も炭化物粒を含む⑯層(暗灰色砂質土層)が広がっており、⑯・⑰層を中心て永楽通寶等の他、数種類の銭貨が出土している。

⑯層(灰色凝灰岩粒層)は、地山の赤褐色砂質土を部分的に含み、大半が凝灰岩の破片や粒で構成され、層厚約15cmを測る。⑯層は、玄室から羨道中央部まで延びており、床面に敷かれていた凝灰岩の敷石が抜き取られて外部に搬出する際に形成された層域と解釈できる。この層域では、棺台を構成する部材である塙や棺の受台をはじめ、中世の土器等が多数出土しており、特に玄室右側壁付近から中世の土器が集中して出土している(図38・39、巻頭原色図版10-1、図版25)。

⑯層(赤褐色砂質土層)は、地山の赤褐色砂質土層を主成分として凝灰岩粒を含む層域である。もともとは、凝灰岩の敷石の高さを調節するために整地された層域と考えられる。

玄室内は、度重なる石室の再利用による搅乱のため、同一個体の土器が各層域からまたがって出土したり、上層と下層で土器の帰属時期が逆転して出土するなど、玄室の搅乱が著しく、純粹な古墳時代の層域は認められなかった。図32のセクションC・Dの⑯層のように、床面にかけて斜位に堆積するなど(巻頭原色図版9-2・10-2、図版30)、明らかに人為的な堆積状況を示しており、中世の石材抜き取り時や石室の再利用時に壮絶な規模で石室の改変が行われていたことを物語っている。

## 2 埋葬施設

### (1) 石室の概略（図33、別添図3、巻頭原色図版8-1）

平野2号墳の主体部は、南西方向に開口する両袖式の横穴式石室である。石室は墳丘のやや南側に構築されており、開口方向は南東方向で主軸は国土座標北に対して西に31度振れを持つ。

横穴式石室は玄室、羨道から成り、玄室は完存しており、玄室・羨道ともそれぞれ天井石も遺存している。現在残る羨道左側壁の1石目を羨門とみるとかどうかは解釈が分かれるところではあるが（図版42-1・2、図版44-1）、これを先端部とみると羨道右側壁の1石目を除いて遺存状態は比較的良好ということになる。石室の全長（残存長）は約10.6mで、玄室長約3.8m、幅約2.5m、高さ約2.2mで、羨道（残存長）約6.8m、幅約2.0m、高さ約1.5~1.7mを測る（図33、別添図3）。

### (2) 玄室の規模・構造（図33）

玄室の規模は、長さ約3.8m、幅約2.5mで、床面の凝灰岩敷石からの高さは玄室1石目の側壁上面で約2.0m、奥壁に接する玄室3石目の側壁上面で約2.4mを測る。玄室は左側壁の玄門よりの1石目が上下2段積で構成される他は、左右両側壁とも3石で構成される。玄室は基本的に左右両側壁とも花崗岩の巨石3枚を縱位に使って、ほぼ垂直に立てて雄大な石室を構成しているのが特徴的であり、比較的、正方形に近い平面形態を成している。玄室を構成する石材は自然石が使用されているが、側壁の接合面は適度に整合するように加工されており、表面も石材によってはある程度平滑になるように加工された痕跡が見られる。

玄室左側壁は、1石目は2段積みで、下段は縦約1.4m、横幅約0.95~1.35m、上段は縦約0.7m、横幅約1.05mを測る。2石目は縦約2.05m、横幅約1.5~1.8m、3石目は2石目との側壁の接合面をほぼ垂直に加工した縦約1.85~2.2m、横幅約1.0mの巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てている（図版46・47）。

玄室右側壁は、3石とも全て1石で構成される。1石目は縦約2.05m、横幅約1.3~1.7m、2石目は縦約2.15m、横幅約0.95~1.05m、3石目は2石目の側壁との接合面を垂直に加工した縦約2.3m、横幅約0.9~1.05mの巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てている（図版54・55）。

玄室は1・2石目とも石材の大きさが異なるため、1・2石目の接合部で左右両側壁の目地は合致しないが、奥壁に接する左右両側壁3石目の石材の規模はほぼ等しく、2・3石目は目地が通るように設計・設置されている。

玄室奥壁は、2段積みで、下段の基底石は高さ約0.9m、幅約2.4~2.6mの花崗岩の巨石を直立に立て、上段には高さ約1.4m、幅約2.4mの花崗岩の石をやや内傾させて積んでいる。奥壁上段の左側の隙間や上下段の石の左右両方の隙間も隙間の形状に合った石材を間詰め石として詰めており、上下段の石材の僅かな隙間には花崗岩の粉末を詰めて充填している（図版57）。

玄室の天井には長さ約1.6~1.8m、幅約2.5m以上の緩く湾曲した花崗岩の巨石2枚を横架している（図版58）。左右両側壁の天井石の高さを水平に調節するためか、玄室空間の奥行きを広く見せるために意図的な行われたのかどうかは不明であるが、玄室左右両側壁2石目と3石日の上部には、高さ約20cm程度の石を縦ぎ足して天井を高めており、天井部の断面形状は階段状を呈する（図版56-1・2）。

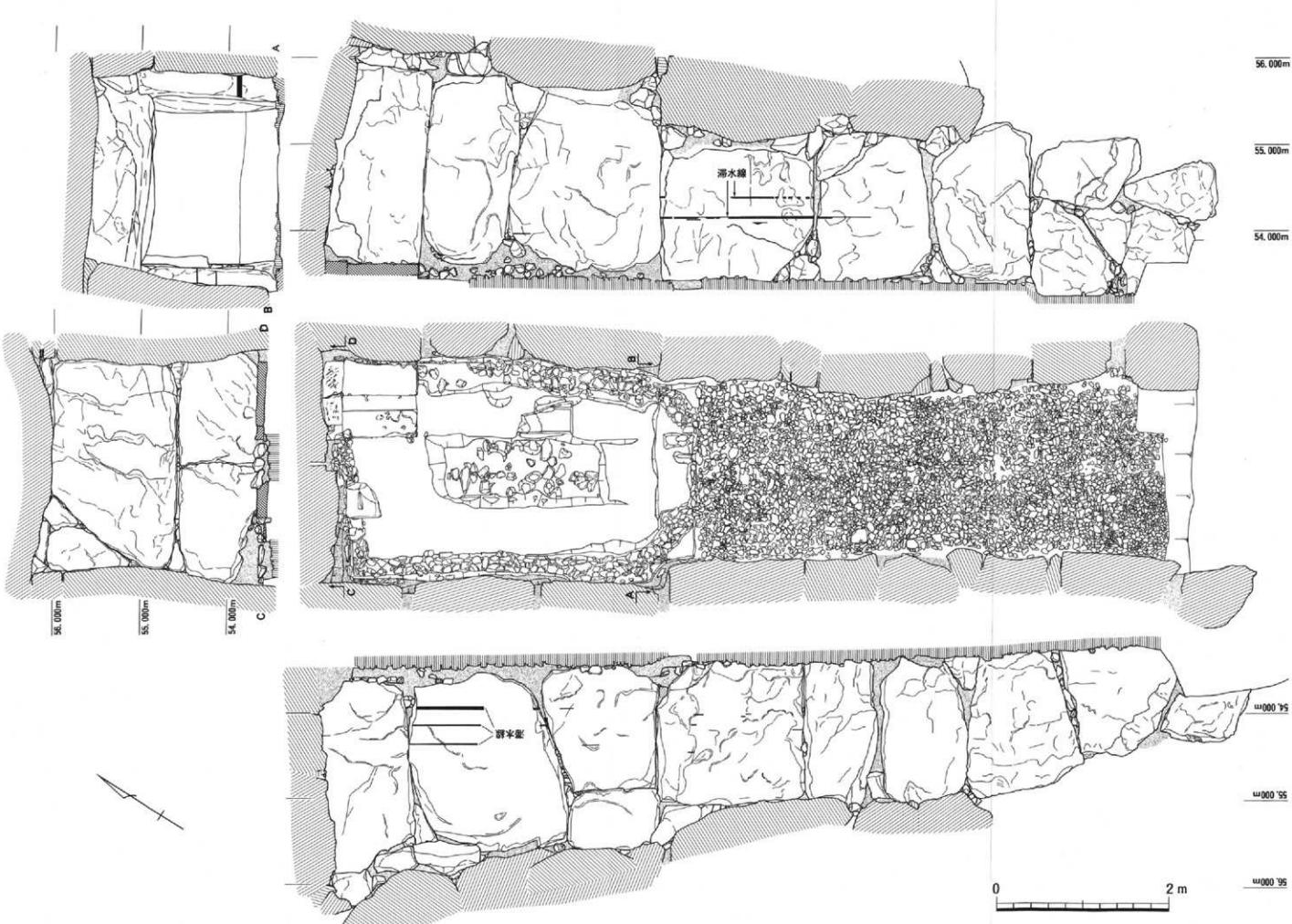


図33 平野2号墳横穴式石室実測図 (S=1/40)

①棺台基礎（土台）（図34、写真55、巻頭原色図版12-1、図版31・32、図版33-1）

玄室の軟質の堆積土を除去すると、玄室の床面中央部には地山の図32②層（赤褐色砂質土層）の上面に地山と同じ赤褐色砂質土層の土質と凝灰岩の碎片で比較的強く焼き固めて構築した突出部が設けられていることが確認された（写真55、巻頭原色図版12-1、図版31・32、図版33-1）。突出部の長さは、上辺180cm、下辺210cm、幅は上辺60~65cm、下辺75~82cmで、床面からの高さは12cmを測り、平面形態は長方形を呈する。突出部の断面は台形状を呈し、床面の標高は左右側壁沿いに設けられた排水溝へ向かうにつれて緩やかに傾斜して行く。突出部の上面には部分的に15~25cm前後の扁平な安山岩の礫が置かれており、礫が置かれていた痕跡を示す窪みが数箇所で検出されたことから、突出部の全面に礫が敷かれていたものと思われる（写真55、巻頭原色図版12-1、図版32-3、図版33-1）。この突出部は、玄室内での検出位置や大きさから棺を置くための棺台、あるいは、棺台を置くための基礎（土台）に相当する部分と推定される。

棺台基礎は1基のみであることから、もともと、当初から単体埋葬を意図して設計・構築されていたものと考えられる。

②凝灰岩敷石（図34・35、写真56・57、巻頭原色図版11・12・14、図版32~37）

玄室内の3箇所で凝灰岩製の切石が現位置で床面に敷き詰められた状態で遺存していた（図34、図版31、図版32-1・2）。玄室左側の奥壁沿いに敷かれたS-1（巻頭原色図版11・12-1、図版34-1、図版36-1・3、図版37）や棺台基礎の東辺に接して敷かれたS-7（写真55・57、巻頭原色図版12・13・14、図版31~33、図版35-3、図版38-1）の大部分は後世の石材抜き取り時の破損により原形は止めていなかったが、玄室北東の奥壁及び右側壁沿いのS-2~S-6は原位置で原形を止めた状態で検出された（巻頭原色図版11・12、写真56・57、図版34・35）。

このうち、唯一規格のわかるS-2は、長さ85.8cm、幅48.7cm、厚さ13.3cmを測り、幅30cm、高さ2cmの突出部を作り出している。このS-2に接して北側の奥壁にはS-4~6が、S-2と東側の右側壁沿いにはS-3が敷かれている。S-3の側壁に接する東側は側壁の曲面に整合するように加工されており、さらに、このS-3と右側壁との間の隙間を埋めるように偏平な安山岩の石が間詰石として縦位に詰められていた（写真56、巻頭原色図版12-1、図版34・35）。

S-2と同様の突出部を持つ敷石は、南方のS-7にもみられる。S-7は、残存長65.0cm、残存幅37.0cm、厚さ15.2cmを測り、幅29.0cm、高さ2cmの突出部を作り出している（図版32・33、図版35-3）。玄室内におけるS-7とS-2の突出部の高さは、ほぼ水平で（図34、写真57）、



写真55 玄室中央部の棺台基礎

いずれの敷石も下面には凝灰岩の粉末を含有する地山の赤褐色砂質土層の土を敷いて敷石上面での高さが揃うように調節している。

これらの玄室内に敷かれた凝灰岩敷石 S-1～7は、全て二上山麓の大坂府南河内郡太子町牡丹洞付近で産出する凝灰岩の岩質に類似しており、当地で採石されたものと推定される。凝灰岩敷石 S-2とS-7の突出部の位置が南北につながって揃うことや（写真57、図版35-3、図版41-2）玄室左右両側壁に沿って玄室内の数箇所で部分的に凝灰岩敷石との隙間を詰めるための安山岩の偏平な間詰石が原位置で遺存している箇所があること（図版34-37）。また、前述したとおり、玄室内の排水溝の配置状況から床面に凝灰岩等の切石を敷設するための暗渠排水溝として計画的に配置されていることなどから、これらの凝灰岩敷石は、追葬等の2次埋葬時や後世の祭祀的行為等に伴う何らかの事情による石室の再利用時に玄室内に棺材として遺存していた組合式石棺材等を転用して再設置したものではなく、築造当初から計画的に棺台基礎の周囲を囲むように玄室内全面に敷き詰められていた可能性が強いものと考えられる。

凝灰岩敷石の敷設順序としては、最初に棺台基礎（土台）の周囲・縁辺部にS-2やS-7のような突出部を持つ切石を棺台基礎と平行するように敷いてから、S-3のような切石を側壁や奥壁との間に壁面の凸曲に合わせて整合するように石室内で加工・調整しながら設置したものと考えられる。唯一規格のわかるS-2の敷石の規模を1単位にして玄室内に復元・配置すると図35に示すとおり、仕切石も含めて合計22枚程度の凝灰岩の切石が玄室の床面全面に敷き詰められていたことが推定される。

近畿地方の終末期古墳で横穴式石室や横口式石槨の床面に方形状に加工した切石を敷く例としては、横口式石槨では、横口式石槨状の磚積石室を持つ7世紀中頃と推定される磚槨墳の奈良県桜井市舞谷3・4号墳<sup>4)</sup>や奈良県桜井市花山西塚古墳<sup>5)</sup>では奥室や羨道の床面に奈良県宇陀郡榛原町で産出する榛原石と称される板状の石材を敷いており、7世紀後半と推定される大阪府南河内郡河南町塚廻古墳<sup>6)</sup>や同町アカハゲ古墳<sup>7)</sup>でも羨道や前室床面に磚状に加工した榛原石を敷いている。

また、7世紀中頃と推定されている大阪府羽曳野市鉢伏山西峰古墳<sup>8)</sup>では横口式石槨の前室床面上に二上山の凝灰岩の切石を敷いており、7世紀後半から7世紀末頃と推定される平野塚穴山古墳<sup>9)</sup>や高市郡明日香村東明神古墳<sup>10)</sup>では玄室床面を含む横口式石槨を構成する部材の全てに二上山の整美な凝灰岩の切石を使用している。



写真56 玄室奥壁沿いの凝灰岩敷石 (S-2~6)

横穴式石室の床面に切石を敷く例として、6世紀末頃と推定される奈良県天理市タキハラ3号墳では玄室の床面全面に磚状に加工した砂岩の切石が敷く例があり<sup>11)</sup>、7世紀後半と推定される大阪府柏原市安堂第6支群第3号墳では玄室床面の棺を置く部分に限って二上山の凝灰岩の切石が敷かれている。凝灰岩の切石は木棺の棺敷、あるいは、棺台として使用されていたものと考えられることから、横穴式石室としては、機能的にも安堂第6支群第3号墳が平野2号墳と唯一の類似造構であるということができるが、切石は方形を指向しているものの、不揃いで整美なものではなく、時期的にも後出することから平野2号墳の事例の粗型とは考え難い。

従って、現在までのところ、平野2号墳以外に横穴式石室の玄室の床面全面にわたって凝灰岩の切石を敷く例はなく、また、棺台基礎と共に玄室床面の敷石の一部に突出部を設ける例もみられない。このような突出部を持つ凝灰岩敷石の持つ意味については、S-2とS-7の突出部を備えた敷石が棺台基礎の周間に限って敷かれていることや棺台基礎と平行して設置されていること、また、棺台基礎の上面に敷かれた礫の高さと突出部を持つ凝灰岩敷石の突出部上面の高さがほぼ同じであることなどから、当初から棺台の一部として棺台を高く演出するための装飾的な効果と玄室内での排水処理上の効果も兼ね備えて設置されたものと推定される。

平野古墳群では、平野2号墳の玄室床面に凝灰岩の切石が使用されるのを初現として、以後、平野塚穴山古墳や平野3号墳では横口式石槨の受容とともに石室全体に二上山産の凝灰岩で構築した凝灰岩使用石室に移行する。平野塚穴山古墳の石室の形態は大韓民国陵山里東下塚古墳を粗型とすることが指摘されているが、石室材として凝灰岩の導入に際して直接的には平野2号墳の横穴式石室の玄室床面全面に凝灰岩を敷き詰めた石室構造が何らかの影響を与えた可能性があり、平野2号墳の石室構造には凝灰岩使用石室の先駆形態として重要な要素が秘められている。

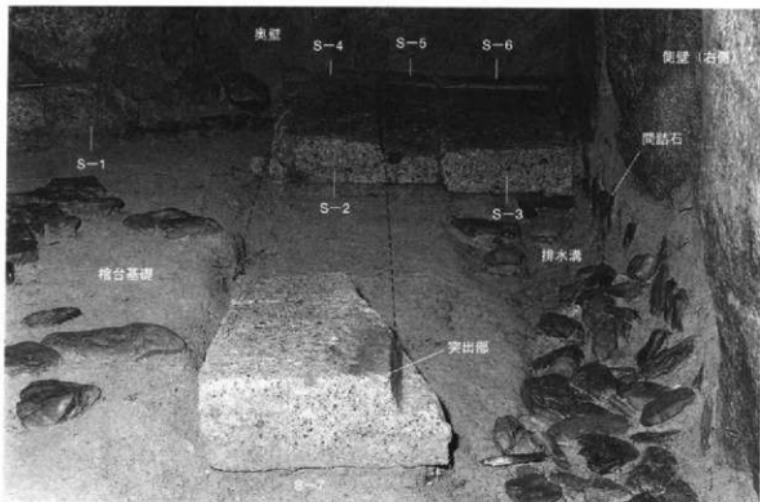


写真57 玄室床面の凝灰岩敷石の配列

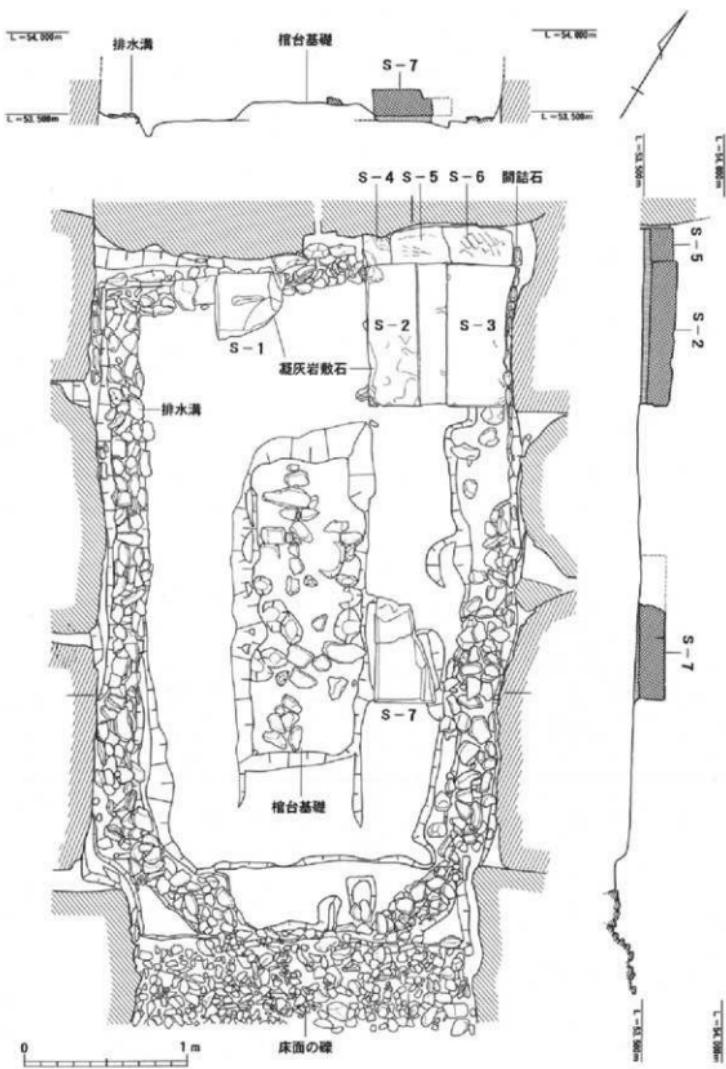
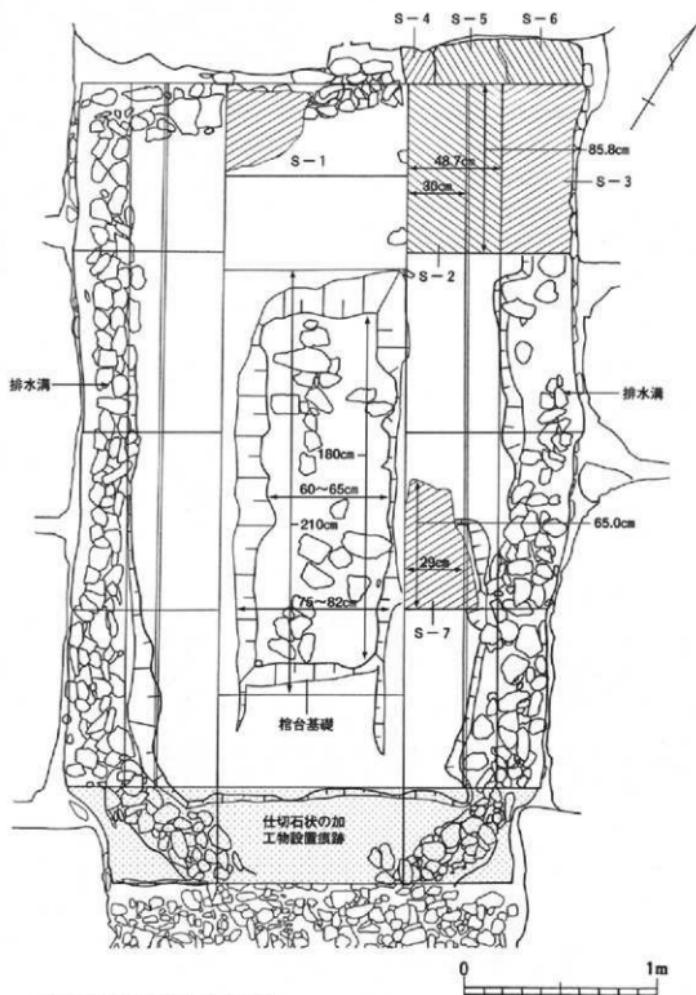


図34 平野2号填玄室内平面・断面図 (S=1/30)



\*斜線は現存する凝灰岩敷石を表す。

実線は凝灰岩敷石S-2の大きさを基準にした玄室床面の凝灰岩敷石の配置復原図を表す。

図35 平野2号墳玄室床面の凝灰岩敷石配置復原図 (S=1/25)

③仕切石状の施設と玄室の閉塞施設（図版38、図版39-1、図版49、図版53）

羨道床面の疊層の上面からは羨道を閉塞するための土の塊や閉塞石等の石室を閉める閉塞施設は検出されなかったが、羨道と玄室境界の玄門付近で全体的に長方形の細長い延石を設置したと推定される長辺約190cm、短辺約50cm前後の痕跡が検出された（図34・35、写真59、図版38、図版39-1）。基底部に凝灰岩の細片が付着・集積していたことから、玄室床面の敷石と同様に二上山産の凝灰岩と考えられ、玄室と羨道を仕切る仕切石、あるいは、扉の下部にあたる闕石状の施設の存在が考えられる。

これに対応する天井部での加工痕跡はみられなかったが、この床面の痕跡と対応するかのように羨道の側壁に当たる玄門部の左右両袖石には、不整形ながらも、ほぼ縱方向に延びる深さ約0.5~1cm程度の浅い縦り込み状の加工痕跡がみられるところから（写真58、図版49・53）、凝灰岩製か木製か材質は不明であるが、玄室を開閉する装置として、何らかの扉状の閉塞施設が設置されていた可能性が考えられる。



写真58 玄門袖石に残る加工痕跡



写真59 仕切石状の加工物の設置痕跡（破線の範囲）

#### ④排水溝（図版38～41）

排水溝は、棺台基礎を取り囲むように玄室の左右側壁と奥壁に沿って環状に巡らされ、玄門の仕切石想定地よりやや南側付近で一条に連結して羨道中央部に配される。排水溝は、幅25～30cm、深さ5～15cmで、断面形状は皿状ないしはU字形を呈する。排水溝全面には棺台基礎に敷かれた蹠よりもやや小さい15cm前後の偏平な安山岩の蹠が敷かれている。

主体部が横穴式石室で家形石棺

を棺材とする古墳の玄室の排水溝は、1棺の単体埋葬の場合、玄室中央部の家形石棺の周囲に沿って環状に配され、羨道部に排水するのが一般的であるが、当古墳では左右両側壁と奥壁に沿って垂直に掘削されており、箇所によっては側壁の基底部より下位の深さまで達している。玄室の床面全面に凝灰岩の切石を敷くことや棺台基礎との関係から玄室の雨水や湧水等を効率的に玄室外へ排水するためにこのような特異な暗渠排水溝の配置になったものと考えられる。

#### （3）羨道の規模・構造（巻頭原色図版8-1・15・16、図版43～45、図版50～52）

羨道規模は、全長（残存長）約6.8m、幅約2.0m、高さ約1.5～1.7mを測る。墳丘南側とともに先端部が削平されているため、全容は不明であるが、左側壁の側壁の石の規模や傾斜から勘案すると、本来は左右両側壁とも6石で構成されているものと考えられる。

左側壁は6石が遺存する。1石は高さ約1.05m、幅1.0m、2石は高さ約1.25m、幅約1.3m、3石は高さ約1.6m、幅約0.85～1.35m、袖石にあたる4石は高さ約1.65m、幅約1.0mの花崗岩の巨石3枚を垂直に立てて構築している（巻頭原色図版15-2、図版44・45）。

右側壁は、先端部の6石のうち1石が抜き取られて遺存していないが、5石が遺存する。1・2石目2段積みで、上下段とも高さ約1.5m前後、幅約1.1m前後のやや小さめの花崗岩を垂直に立てている。3石めは高さ約1.85m、幅約1.15m、4石目は高さ約1.65m、幅約1.3m、袖石にあたる5石めは高さ約1.55m、幅約1.75mの花崗岩の巨石を垂直に立てて構築している（巻頭原色図版15-1、図版50・51）。左右両側壁の石材は、自然石を使用しているが、表面に一部加工痕跡を残す箇所が認められることから、表面をある程度平坦に加工していたことがうかがえる。羨道部の1石から5石めまでは左右両側壁の目地は微妙にずれており、合致しないが、6石めの袖石は左右両側壁ともほぼ同じ規模で、石の継ぎ目はほぼ垂直に加工されており、目地が通るように設置されている。天井には玄門袖石を含め3石分にかかるように長さ約1.7～2.2m、幅約2.2m以上の平坦な花崗岩の巨石2枚をほぼ水平に横架している。羨道の床面全面には約10cmの小蹠が層厚約10cmにわたって敷き詰められており（巻頭原色図版8-1・16、図版42・43）、少量の凝灰岩の破片が混入している。床面は、羨道の端部から玄室に向かうにつれて標高が高くなり、玄門付近と羨道の南端部、羨門付近での標高差は約30cmを測る（図33）。



写真60 玄室内の排水溝（玄室奥壁から）

#### (4) 棺について

発掘当初は玄室内から出土する凝灰岩の断片が全て家形石棺等の石棺材の断片と推定していたが、石棺の特徴を示す部材と推定されるものは皆無であったことから、これらの凝灰岩の断片は玄室床面に敷かれていた敷石であると判断するに至った。また、後述する棺台としての使用用途が考えられる場と棺の受台の存在や詳細な帰属時期は不明で断定はできないが、2点の釘などから、玄室内に納められた棺は石棺ではなく、木棺等の有機質の棺と考えられる。この他、漆を塗布した籠棺等の漆塗棺の可能性も考えられるが、遺別時においても漆膜片は確認できなかった。

#### (5) 鑄造時期について

石室内部からは帰属時期の明確な土器や副葬品等が出土していないため、古墳の明確な鑄造時期は不明であるが、後述するように、僅かな須恵器の破片や石室の形態等から、東に隣接する平野1号墳よりもやや新しい7世紀中頃の鑄造時期が考えられる。

#### 註

- 1) 奥田尚氏の御教示による。なお、石室の石材の岩種については、第V章で同氏の考察を掲載している。
- 2) 奥芝2号墳では、鎌倉時代に祭祀施設として石室を再利用時に玄室内中央部床面に組合式石棺の石棺材を分解して敷き詰められていたが、ただ、石棺材を敷いただけのものであり、再設置にあたって整美な加工は施されていない。詳細は下記文献による。  
泉森皎・河上邦彦 1972 「宇陀福地の古墳・榛原町福地奥ノ芝古墳発掘調査報告書」奈良県文化財調査報告書第17集 奈良県教育委員会
- 3) 棺台基礎の上面には棺台を構成する部材として地や棺の受台が設置されていた可能性が強いことから、棺台基礎の上面に床面と同様に凝灰岩の切石を棺台として設置していた可能性は低いものと考えている。
- 4) 林部均他 1994 「奈良県桜井市舞谷古墳群の研究」奈良県立橿原考古学研究所・藤原墳研究会・財團法人由良人と古代文化研究協会
- 5) 泉森皎 1982 「飛鳥・磐余地域の終末期古墳と寺院跡」奈良県文化財調査報告書第39集 奈良県立橿原考古学研究所
- 6) 北野耕平 1980 「金象嵌文大刀」「日本古代の国家と宗教」上巻 吉川弘文館  
北野耕平 1985 「考古編」富田林市史 第1巻 富田林市役所  
香芝市二上山博物館編 2002 「二上山麓の終末期古墳と古代寺院・平野古墳群と尼寺廃寺跡」香芝市二上山博物館
- 7) 前掲註6文献
- 8) 伊藤聖浩 2003 「鉢伏山西峰古墳」「羽曳野市内遺跡調査報告書-平成5年度-」羽曳野市埋蔵文化財調査報告書50 羽曳野市教育委員会
- 9) 泉森皎 1984 「竜田御坊山古墳付 平野塚穴山古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32番 奈良県教育委員会
- 10) 河上邦彦 1999 「東明神古墳の研究」高取町文化財調査報告第18冊 高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 11) 河上邦彦 1976 「天理市石上・豊田古墳群Ⅱ」奈良県文化財調査報告書第27集 奈良県立橿原考古学研究所
- 12) 安村俊史・石田成年 1986 「高井田遺跡Ⅰ」柏原市文化財概報1985-VII 柏原市教育委員会
- 13) 前掲註9文献

### 3 石室内の遺物出土状況

石室内の調査は堆積層序を考慮しつつ、遺物の分布密度等を中心に何らかの變層となる層域の検出状況に応じて面的に広げて遺構の検出と遺物の採集を行った。最終的な玄室床面の完掘に至るまでに①表層（石室開口時）の第1遺構面（図36）、②炭化物の層域が分布する第2遺構面（図37）、③中世土器が集中して検出された第3遺構面（図38・39）の大別して3面が認められ、当該層域において遺物の出土状況の図面を作成した。石室内の出土遺物の組成等の詳細は第Ⅳ章で触れるとして、以下、石室内における遺物の出土状況について概観する。

#### （1）第1遺構面：表層（石室開口時）の遺物の出土状況（図36、図版19-2・3、図版20）

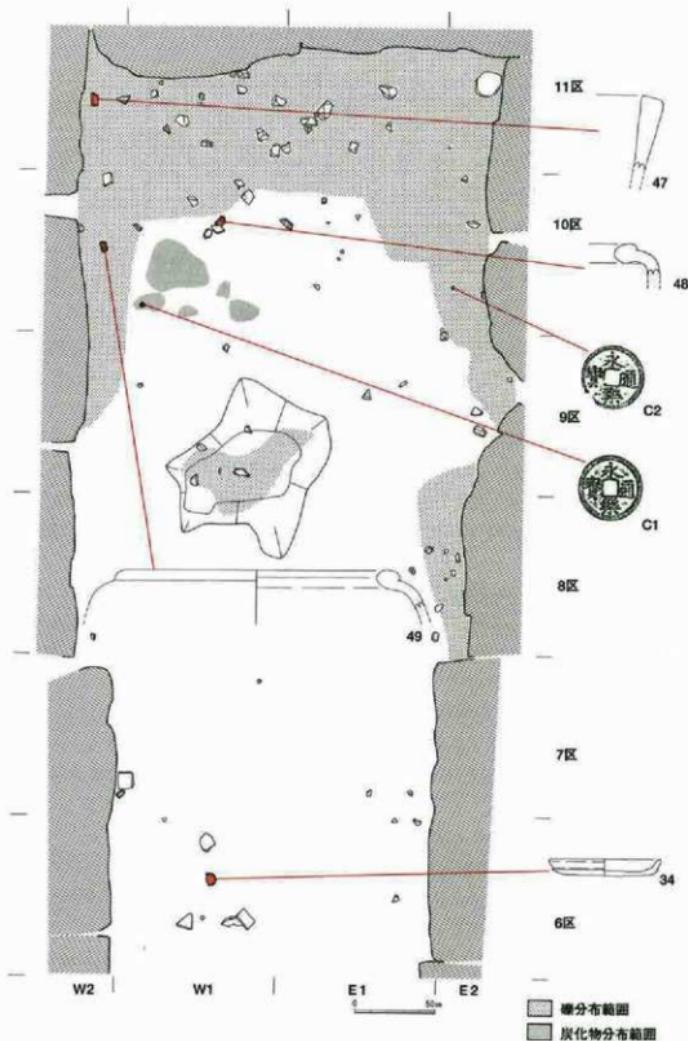
最初に玄室内部に進入した時、表層には玄室の奥壁付近を中心に約2～5cmの大きさの礫が集積しており、土器や瓦片等が散乱していたため（巻頭原色図版8-2、図版19-2、図版20）、現況の記録として石室開口時の表層の遺物の出土状況の図面を作成した。礫は玄室奥壁の11区と9・10区の左右両側壁沿いの他、玄室中央部よりやや南よりの8・9区の交差点付近に集中して分布しており、焼けた痕跡のあるものもみられた。漢道部の⑧層（暗灰褐色砂質土層）も土釜・瓦器碗等の上器とともに同様の礫を大量に含む礫層で構成されており（巻頭原色図版7-2、図版19-1）、礫が質的に同様のものであることや出土遺物から、ほぼ同時期に形成された層域と考えられる。この表層に散乱していた上限を示す上器や錢貨の帰属時期から、15世紀頃に何らかの事情で11世紀以降継続して統けられてきた石室や墳丘の再利用が終わり、石室が埋没したものと推定される。

#### （2）第2遺構面：炭化物の検出状況（図37、図版22・23）

礫を除去すると、玄室中央部から奥壁にかけて炭化物を集積する⑭層（炭化物層）の分布層域が広がったため、この炭化物層の検出を主眼として面的に追う形で検出した。この層域は層中に炭化物を含む層域で、土器（図版23-2・3）をはじめ、壇1の破片（図版23-1・75）や表層と同様の永楽通寶を含む錢貨（図版22）が出土しており、時期的には表層（石室開口時）の形成時期とさほど変わらない時期に形成された層域と考えられる。炭化物層は礫の分布域を避けるかのように玄室中央部よりやや奥壁付近の10・11区を中心に分布しており、炭の分布域の真上の天井石には数箇所で黒い煤が付着していた。炭化物が火葬墓等の墓に伴うものか否か、用途は不明であるが、中世に火を焚く何らかの祭祀的行為が行われていた可能性がある。

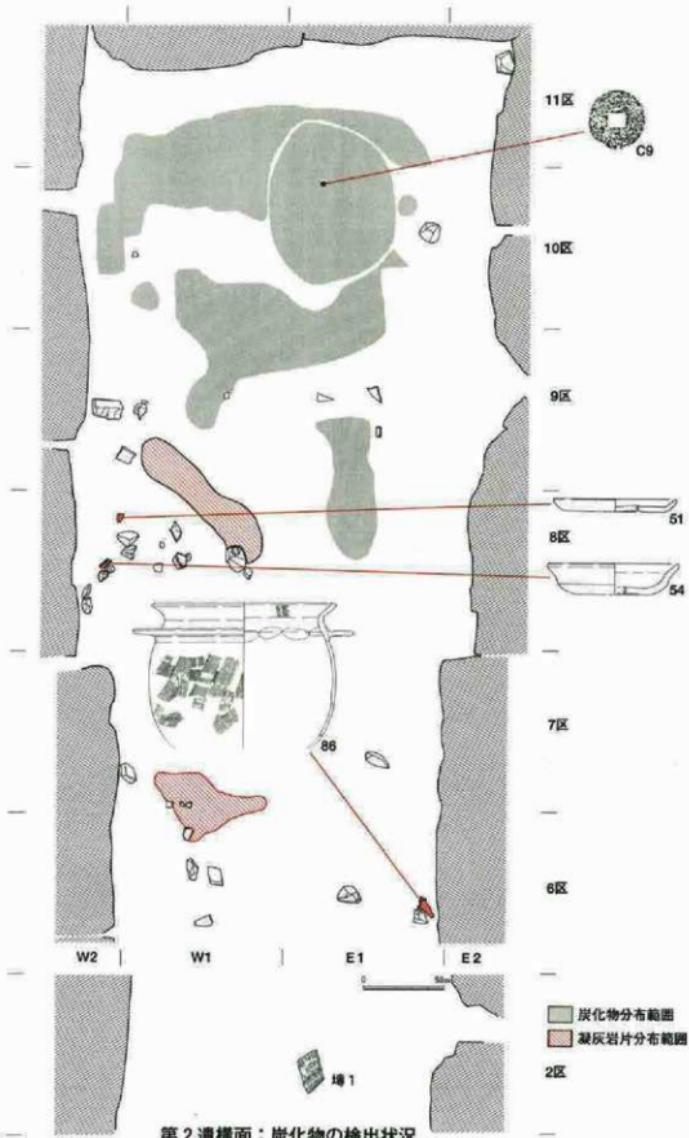
#### （3）第3遺構面：玄室内遺物の出土状況（図38・39、巻頭原色図版10-1・11-1、図版24-28）

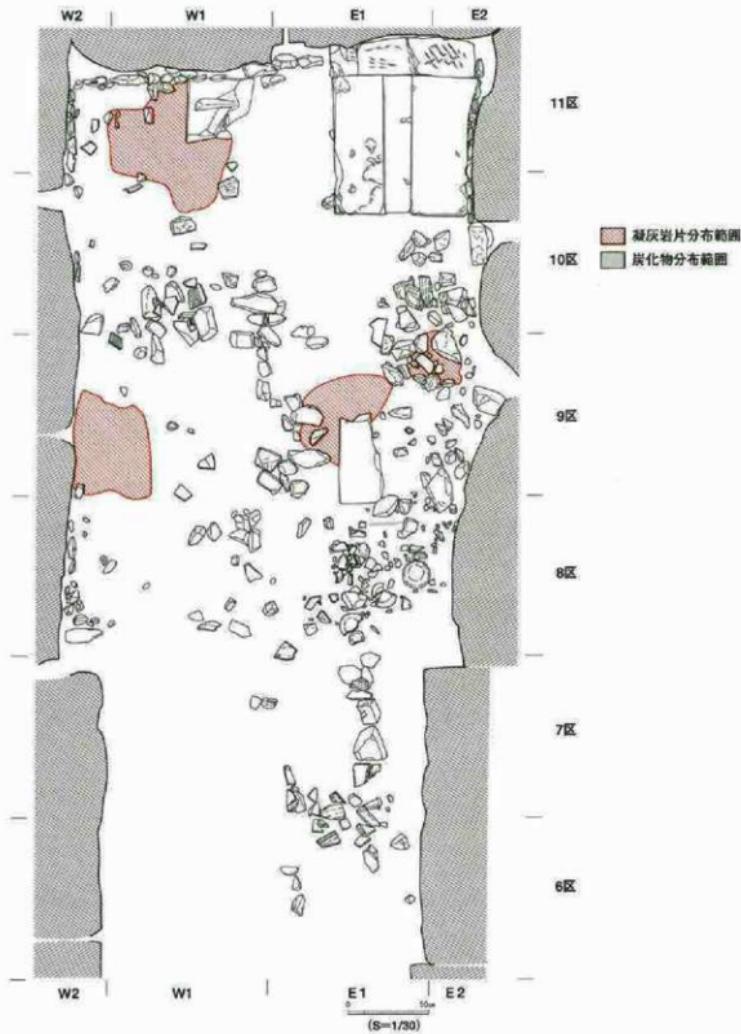
⑭層（炭化物層）を除去すると、地山の赤褐色土塊を含み、ほとんど凝灰岩粉碎片や凝灰岩粒で構成される⑯層（灰色凝灰岩粒層）となる。玄室中央部柏台基礎右側と奥壁の3箇所で玄室床面に敷かれていた凝灰岩の敷石の表面が検出され、ほぼ、このレベルで玄室の堆積土の中でも最も多い上器や壇、棺の受台の破片等が出土している。特に玄室右側壁沿いの8区-E1を中心に完形品も含めて11世紀から12世紀中頃の上器が集中して出土した（図38・39、巻頭原色図版10-1、図版25-26）。このうち、3点の土師皿が伏せられた状態で一括出土しており（図版25-3）、しかも、内面からは米粒状遺物が出土していることから（図版26-2・3）、何らかの祭祀的行為に伴うものと考えられる。⑯層は、玄室床面に敷かれていた凝灰岩敷石が抜き出された際に形成された層域と推定され、第1・2遺構面よりは古い12世紀中頃に形成された層域と考えられる。



第1遺構面：表層（石室開口時）の遺物の出土状況

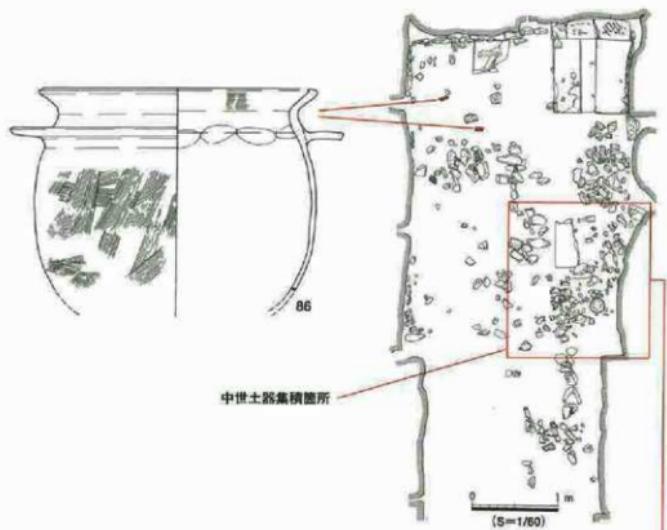
図36 横穴式石室内表層（石室開口時）の遺物出土状況図（S=1/30）





第3造構面：玄室内遺物の出土状況

図38 横穴式石室玄室内の遺物出土状況図 (S = 1 / 30)



8区-E1 中世土器集積箇所拡大図

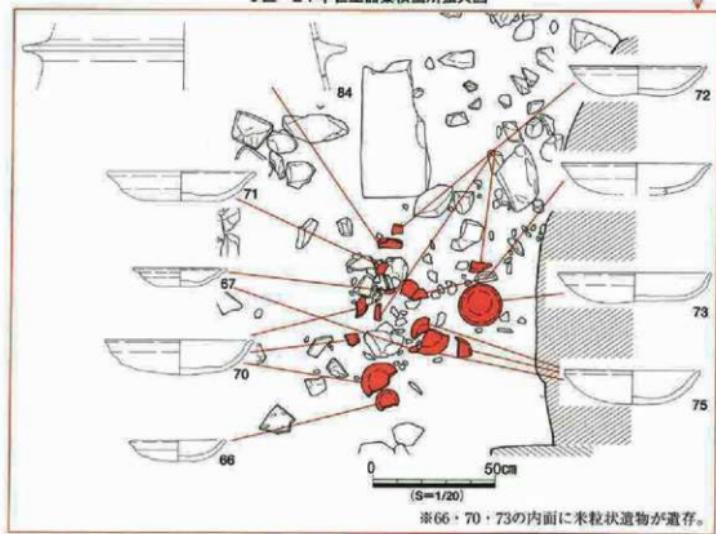


図39 横穴式石室玄室内の遺物出土状況拡大図

## 第IV章 遺物

### 1 出土遺物の内訳

墳丘部で実施した第1次調査と横穴式石室内部で実施した第2次調査では、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦、錢貨、サスカイトなど弥生時代から室町時代にわたる多種類の遺物が出土している。

墳丘部で実施した第1次調査では、墳頂部や墳丘斜面の堆積土層中からの出土遺物は少なく、第1～3調査区の墳丘裾部からは比較的多くの土器が出土している。また、第2次調査では、横穴式石室内からも多く土器や瓦が出土している。

出土上器や瓦の計測値等の詳細については、「表7 平野2号墳第1・2次調査出土上器等観察表」に委ねるとして、以下、出土上器のうち、図示可能な遺物の概要について、墳丘盛土内・墳丘堆積土出土遺物、横穴式石室内出土遺物に分けて概観することとする。

### 2 墳丘盛土内・墳丘堆積土出土遺物

#### (1) 墳丘盛土内出土遺物(図40、図版61、図版62-6～7)

墳丘盛土内出土遺物とは墳丘を形成する墳丘盛土内のうち、⑯層(明褐色砂質土層)の地山を除く⑮層(黄褐色砂質土層)と⑯層(茶褐色砂質土層)から出土した土器で(図40)、古墳墳丘の築造時期を把握する上で重要な遺物である。

1は、須恵器杯蓋である。口径11.1cm、器高3.2cmを測る。口縁部は内外面ロクロナデ、天井部はヘラ切り後未調製で、胎土に砂粒を多く含む。

2は、須恵器杯蓋である。全体的に器壁が薄い精良品である。

3は、破片のため須恵器の杯身か杯蓋か判然としないが、杯身として掲載する。復元口径10.3

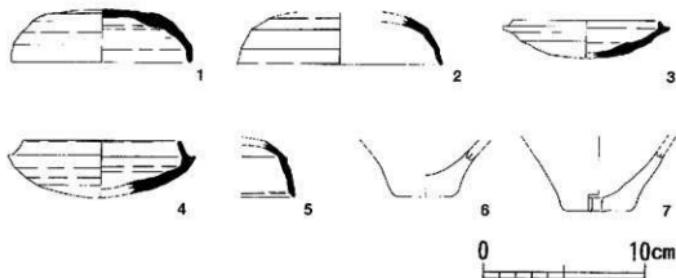


図40 墳丘盛土内出土遺物(S=1/3)

cm、残存高2.3cmを測る。焼成が弱く黄褐色の土師質を呈し、胎土に砂粒を多く含む。摩滅のため調整は不明である。飛鳥I～II型式期の範疇に収まるものと推定される。

4は、須恵器杯身である。復元口径11.0cm、残存高3.3cmを測る。口縁部は内外面ロクロナデ<sup>11</sup>、胎土は精良で青灰色を呈する。土器の形態からTK-209型式期に比定される。

5は、須恵器杯蓋の口縁部の破片である。細片であるため全容は不明であるが、口縁部の形態から出土した須恵器の中では最も時期が古いMT-15型式期に属するものと推定される。2次の客土層である⑩層（灰褐色砂質土層）から出土していることから古墳に伴う可能性は低く、丘陵上方からの混入品と考えられる。

6・7は、弥生時代後期に属するV様式系統の壺か鉢の底部である。6は、壺の底部で底部径4.2cmを測る。褐色を呈し、底部内面にハケ調整の痕跡がみられる。7は、有孔鉢の底部と思われる。底部径4cmを測り、底部に直径0.6cmの穿孔を施す。当丘陵では始めての弥生時代の土器であり、丘陵上に弥生時代の遺跡の広がりが予想される。

1・3・4は、埴丘築造に伴う整地土層と考えられる⑪層（茶褐色砂質土層）から出土しており、下限を示す3の須恵器の年代観から7世紀前半以降の築造時期が考えられる。

#### （2）埴丘堆積土出土遺物（図41-8～11、図版61-8、図版62-9～12、図版63）

埴丘堆積土出土遺物とは埴丘南側の第4調査区で検出した羨道右側壁1石目の上下2段積で構成される側壁の下段の石材抜き取り穴の堆積土から出土した遺物と、埴丘斜面と埴丘裾部の堆積土から出土した遺物のことと指している。

##### ①羨道右側壁堆積土出土遺物（図41-8・9、図版61-8、図版62-9）

8は、3と同様、破片のため須恵器の杯身か壺蓋か判然としないが、杯身として掲載する。復元口径10.2cm、復元器高3.0cmを測る。青灰色を呈し、胎土は良好であるが、焼成時のひずみがみられる。形態的には3とほぼ同型式で、飛鳥I～II型式期の範疇に収まるものと推定される。

9は、須恵器壺の体部の破片である。外面に平行叩き目、内面に同心円文の叩き目を施す。

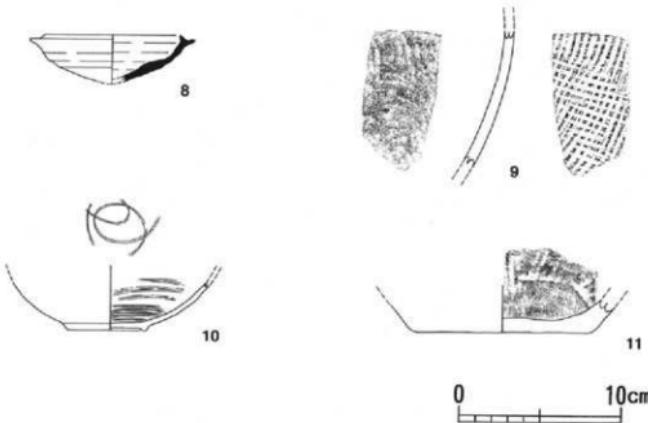


図41 羨道右側壁堆積土・埴丘斜面等堆積土出土遺物（S=1/3）

### ②墳丘斜面堆積土出土遺物（図41-10・11、図版62-10・11）

墳丘斜面堆積土出土遺物とは墳丘斜面の堆積土である⑨層（暗褐色砂質土層）から出土した上器である。墳丘斜面に斜面を弧を描くように取り凹むように疊が分布しており、10・11はこの疊の分布域から出土している。中世に石室内部とともに墳丘が何らかの事情で再利用されていた可能性があり、古墳墳丘の再利用の時期を検討する上で貴重な資料となる。

10は、瓦器椀である。底部径4.8cmを測る。内面に密なヘラミガキ調整を施し、底部内面の見込み部に螺旋状の暗文がみられる。

11は、瓦質擠鉢の底部である。復元底部径10.1cmを測る。底部内面に6条／2.5cmの刻線を施す。

### ③墳丘裾部堆積土出土遺物（図42-12～18、図版62-12、図版63-13～18）

墳丘裾部堆積土出土遺物とは、主に墳丘裾部に厚く堆積した堆積土である⑩層（黄褐色砂質土）他、墳丘裾部の堆積土から出土した遺物のことを指している。墳丘部の調査の中でも墳丘裾部の堆積土から最も多くの遺物が出土しており、古墳の上方に所在する平野窯跡で焼成されたと推定される溶着した須恵器や奈良時代の瓦片等が含まれることが特徴的である。平野窯跡で焼成された須恵器はTK-209型式期が中心で、それ以降の須恵器の型式はみられないため、TK-209型式期より次型式以降の須恵器については古墳に伴う可能性が強いものと思われるが、個別の土器について、窯跡からの出土品か古墳に伴うものか識別することは難しい。

12は、奈良時代と推定される須恵器の軒平瓦の破片である。凸面に網目状痕がみられる。

13は、須恵器壺の底部と推定される。底部径7.8cmを測る。底部外面上には自然釉と砂粒が溶着して付着している。このような資料は、通常、窯跡や窯跡付近でしかみられない遺物であり、12と同様に北方の丘陵に所在する平野窯跡で焼成されたものと考えられる。

14は、須恵器壺の体部の破片である。内面は同心円文の叩き目があり、外面には平行叩き目が施されている。墳丘裾部の表層から出土しており、古墳に伴うものか、上方の平野窯跡に伴うものか判断はできない。

15は、瓦質土器の底部である。底部径11.6cmを測る。

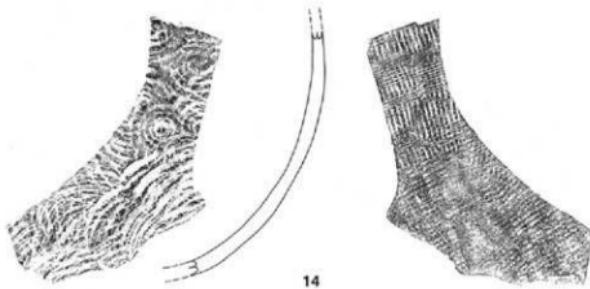
16～18は、土師器羽釜の口縁部である。16は、復元口径20.8cmを測る。口縁部を内傾・屈曲させ、口縁端部を外方に折り返しておさえて成形した菅原編年大和II型に相当するもので、14世紀中頃から15世紀中頃の所産と推定される。17は、復元口径30.6cm、18の復元口径は30cmを測る。17の鐸は欠損するが、18とも黄褐色を呈し、砂粒を多く含む同種の土釜である。両者とも口縁部は外反し、端部を内側へ折り返して成形しており、肩部下方に鐸の痕跡である低い微隆起線状の突帯をめぐらす。菅原編年の大和B1・B2型でも末期の大和B2型に相当するもので、14世紀中頃から15世紀前半の所産と推定される。

#### 註

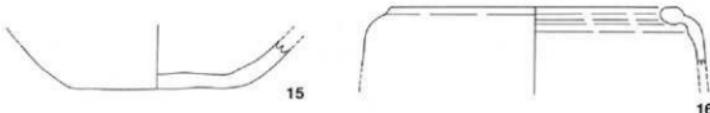
- 1) 古代の土器研究会編 1992 「古代の土器 I 都城の土器集成」 古代の土器研究会
- 2) 田邊順三 1966 「陶邑古窯址群 I」 平安学園考古学クラブ
- 3) 手賀久 1983 「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1982年度」 奈良県立歴史考古学研究所
- 4) 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集



自然釉と砂粒 13

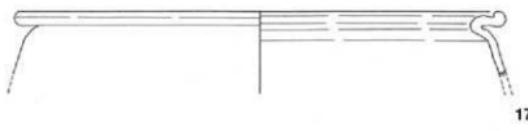


14

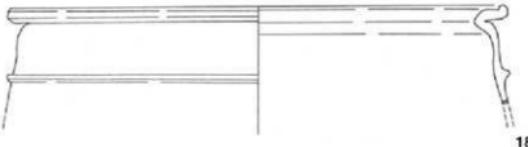


15

16



17



18



図42 墳丘裾部堆積土出土遺物 (S=1/3)

### 3 横穴式石室内出土遺物

#### (1) 横穴式石室の出土遺物について

中世頃に玄室内に設置されていた凝灰岩の敷石が何らかの理由で僅か数枚を残して徹底的に玄室内から抜き出されており、玄室床面の最下層まで中世の瓦器楕片が混入している状況で、純粹な古墳時代の遺物を含む層は検出されなかった。

横穴式石室の出土遺物の大半は玄室の床面に敷かれていた凝灰岩の破片で占められ、それ以外は中世における横穴式石室の再利用時の産物である土器や錢貨等が多數を占める。

いっぽう、古墳に伴う遺物と推定されるものは、極めて少なく、須恵器の破片数点の他は、刀子の断片1点の他、用途不明の鉄片数点に過ぎないが、特筆すべき遺物として棺台を構成する部材として使用されていた土師質の埠と棺の受台がある。

以下、古墳に伴う遺物と古墳に伴わない遺物の2者にわけて横穴式石室の出土遺物について概観する。

#### (2) 古墳に伴う遺物

##### ①凝灰岩

出土遺物の中では通常法量の遺物箱に換算して約130箱分にも及ぶ多量の凝灰岩の破片や粉碎片が出土している。原形を保つものはほとんどなく、10cm前後の破片が多く見られる。当初は石棺材の破片と見ていたが、整理が進行するにつれ家形石棺の部材と確認できるものはないことがら、これらの凝灰岩の破片は玄室の床面全面に敷かれていた凝灰岩の敷石の部材と考えられる。

##### ②刀子(図43、図版74- I 1)

石室内から出土した鉄製品の中でも確実に古墳に伴うと推定される唯一の鉄製品である。全容は不明であるが、刃部の大きさから大刀とは考え難く、おそらく、刀子の断片と推定される。

刀子は残存長3.5cm、刃部幅2.5cm、棟幅0.5cmを測る。全体的に鉄錆に覆われており、遺存状態は良くない。

玄門付近(8区-W1)の凝灰岩抜き取り時に形成されたと推定される⑩層(灰色凝灰岩粒層)から出土している。

##### ③釘(図44、図版74- I 2)

玄室内的炭化物を含む⑯層(暗灰色砂質土層)から出土した2点の釘のうちの1点である。鉄製の釘で、全長1.7cm、厚さ0.3cmを測る。全体的に錆の進行が著しく、また、釘の下部は欠損しているため、全容を知ることはできないが、釘の頂部は端部を直角に折り曲げた逆し字形を呈する。

形状からでは中世の可能性もあり、確実に古墳の木棺等の棺材に伴うものであるという断定はできないが、とりあえず、古墳時代の木棺に伴う可能性のある遺物として古墳に伴う遺物の中に含めておく。

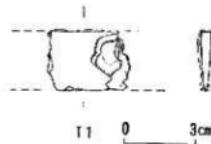


図43 刀子実測図 (S=1/2)

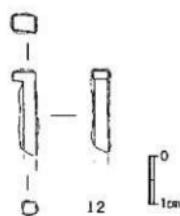


図44 釘実測図 (S=1/1)

④古墳時代の土器（図45、図版64、図版65-27）

古墳時代の土器として、數十点の須恵器が出土している。いずれも細かな破片であり、全容をとどめるものはないが、出土品の中から図示可能な土器のみ掲載することとする。

19~22は、須恵器杯身と推定される。全て玄室内ではなく、羨道からの出土品である。19が玄門よりの⑬層（灰色凝灰岩粒層）から出土している他は、20~22は、羨道部でも先端部に当たる1・2区内の中世土器を混入する⑧層（暗灰褐色砂質土層）から出土している。

いずれも口縁部の破片で、口縁部は内傾しながら短く立ち上がる。灰色から青灰色を呈し、焼成は良好である。形態的には飛鳥Ⅰ~Ⅱ型式期の範疇に収まるものと推定される。

23は、須恵器の杯身か杯蓋か判然としないが、杯身の底部として掲載しておく。24は、TK-209型式期の須恵器杯蓋の天井部と推定される。上記の須恵器に比して器壁が厚く、異質であり、出土層位からみても丘陵上方の平野窯跡群の須恵器窯からの混入品と推定される。

25~27は、須恵器甕の体部の破片である。いずれも内面は同心円文の叩き目が施され、外面は格子状の叩き目が施される。25・26は、羨道部先端の⑧層（暗灰褐色砂質土層）から出土しており、27は、玄門付近の最下層である⑩層（灰褐色砂質土層）から出土している。

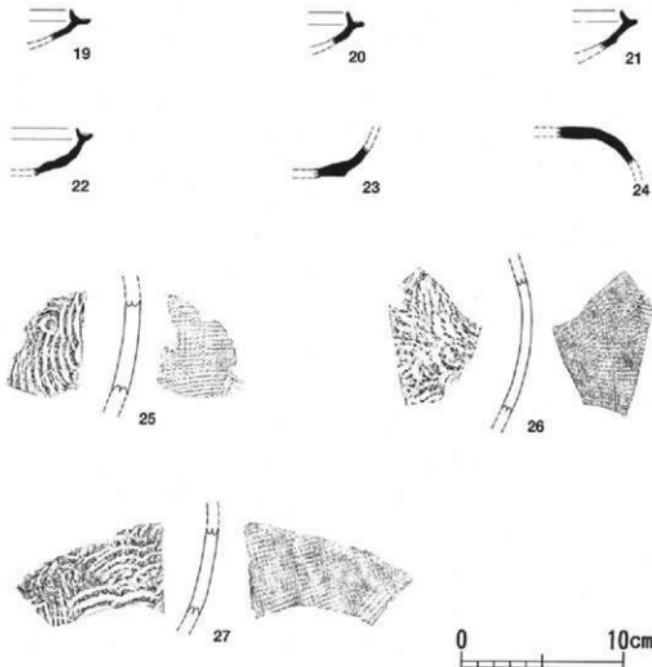


図45 平野2号墳横穴式石室内出土土器1 (S=1/3)

##### ⑤ 塚（図46～52、表4、図版75～81）

石室内からは塚や棺の受台の破片が出土している。凝灰岩の破片とともに散乱した状態で出土しており、原位置を保って出土したものは1点も認められなかった。全体的に石室内での出土位置は、希に羨道先端部の右側壁付近の1石目付近から出土したものもあるが（図版23-1）、玄室内や玄門付近での出土数が最も多く、基本的に羨道の南端に向かうにつれて出土量は少なくなる傾向がある（図52）。

塚は、厚さ1～2cm未満の薄い平板状を呈する素焼きの土製品である。全て破片の状態で数十点が出土している。ほぼ全容をうかがい知れるものは塚1と塚3の2例のみであるが、形状は、総じて長方形を指向するものと推定される。断面形態は、両面とも平坦なものが多いが、一方は平坦で、他方は僅かに弧状に膨らむものがある。いずれも赤褐色の土師質を呈する精良品で、砂粒も少なく、上師質でも比較的硬質に焼成されている。

塚は、全体的に両面とも比較的丁寧なハケ調整やナデ調整を施して面を整えているが、塚の中には部分的に成形時の木目（板目）压痕や焼成時の黒班が遺存するものがみられる（図版75・76）。また、偶然に残されたものか、意図的に施されたものは不明であるが、塚5のように飛鳥時代の土師器の坏身等にみられるようなヘラ状工具による螺旋状ないしは、直線状の暗文を施すものがみられる（図版78-2・79-2）。

復元作業の結果、表4のとおり、塚1・塚3の2点の塚で長辺（縦）と短辺（横幅）の大きさ・形状ともほぼ全容を復元することができた。塚1は、短辺約21.1cm、長辺約46.0cm、厚さ約1.0～1.7cmを測り（図版75）、塚3は、短辺（残存値）約21.6cm、長辺約47.5cm、厚さ約1.2～1.5cmを測る（図版77）。これ以外に、長辺までは復元できなかったが、短辺を把握することができたものが7点認められ、塚1・塚3を併せて合計9点の塚の短辺の規模が判明している。

この短辺の大きさから、塚は、ある程度の規格に基づいて作られている可能性が強く、短辺の大きさから分類すると短辺21～24cmのA類（塚1～塚4）、短辺18～19cmのB類（塚5～塚7）、短辺14～17cmのC類（塚8・塚9）の便宜上3つに分類できる。

9点の塚のうち、短辺の最も短いC類（幅14～17cm）は2例と少ないのに対して、短辺の長いA類（幅21～24cm）とB類（幅18～19cm）が7例であることから、A・B類が主流であることがうかがえる。長辺の不明な7点の塚は、例えば、塚5・塚6のように短辺の大きさに関係なくほぼ完形品の塚1・塚3の長辺に近い約46.0cmに近い残存値を示すものがあることから、いずれの塚も長辺は46.0～47.0cm前後で、長辺の大きさがほぼ統一されていた可能性がある。

棺台基礎の上面に何点の塚が使用されていたか正確な点数は不明であるが、塚の長辺（縦）を46.0～47.0cm、塚の短辺（横幅）をA～C類の最小値と最大値の14～24cmを基準にすると、上辺長さ180cm、上辺幅65cmの棺台基礎の表面積を満たすには、一重敷として、縦約4枚×横約4枚の合計約16枚程度の塚が必要になると推定される。

終末期古墳から出土する土製の塚は、国内では、東は栃木県から西は岡山県まで全国で約25例が知られており<sup>6)</sup>、そのうちの約半数の10例が二上山西麓から南西麓の南河内地方の終末期古墳から出土している。いずれも内部主体としては横口式石槨が圧倒的に多く、比較的、横穴式石室は少ない傾向がある。

表4 平野2号墳出土壙の法量一覧

掲載番号 図版番号	長辺・長さ(cm) 現存値<復元値>	短辺・幅(cm) 現存値<復元値>	厚さ(cm)	分類	特徴等
壙1 図版75	46.0	21.1	1.0~1.7	A	ほぼ完形。赤褐色で土師質。長方形状を成す。成形時の木目圧痕や焼成時の黒斑を残す。
壙2 図版76	21.4 <46.0>	22.7	1.2~1.4	A	赤褐色で上師質。成形時の木目圧痕や焼成時の黒斑を残す。
壙3 図版77	47.5	21.6 <24.0>	1.2~1.5	A	ほぼ完形。赤褐色で土師質。長方形状を成す。焼成時の黒斑を残す。内外面ともハケ調整。
壙4 図版78-1	27.8 <46.0>	23.5	1.1~1.4	A	赤褐色で上師質。焼成時の黒斑を残す。内外面ともハケ調整。
壙5 図版78-2 図版79	43.4 <46.0>	18.0	1.0~1.5	B	赤褐色で土師質。長方形状を成す。成形時の木目圧痕や焼成時の黒斑を残す。部分的に螺旋状の暗文を施す。内外面ともハケ調整。
壙6 図版80-1	41.8 <46.0>	18.5	1.5~1.7	B	赤褐色で土師質。長方形状を成す。成形時の木目圧痕や焼成時の黒斑を残す。内外面ともハケ調整。
壙7 図版80-2	25.0 <46.0>	17.8	1.4~1.8	B	長方形状で赤褐色の上師質。焼成時の黒斑を残す。内外面ともハケ調整。
壙8 図版81-1	33.3 <46.0>	16.7	1.1~1.8	C	赤褐色で上師質。長方形状を成す。焼成時の黒斑を残す。内外面ともハケ調整。
壙9 図版81-2	16.0 <46.0>	14.8	0.8~1.5	C	赤褐色で土師質。成形時の木目圧痕や焼成時の黒斑を残す。

※A類：短辺（横幅）21~24cm、B類：短辺（横幅）18~19cm、C類：短辺（横幅）14~17cm

※長辺の復元値は約46.0cmとする。

原位置を保って出土する例が稀なため、古墳ごとに壙の使用用途が解明された例は少ないが、古墳から出土する壙の使用用途について、国内では壙積石室等を構成する部材をはじめ、床敷や棺敷（棺台）、石棺周囲の問詰用材、閉塞施設等が考えられるほか、終末期古墳に使用される壙のルーツと推定される朝鮮半島では大韓民国忠清南道公州市熊津洞古墳等の事例から暗渠排水溝の蓋等の多岐にわたる使用用途が考えられる。<sup>6)</sup>

横穴式石室から出土した壙の使用用途としては、泉州丘陵に所在する大阪府堺市牛石13号墳や牛石14号墳等の壙積で構築された石室を持つ古墳以外は、6世紀後半と推定される栃木県真岡市神宮寺塚古墳では玄室内の床敷として、7世紀中頃以降と推定される大阪府茨木市初田1号墳では床敷や棺台に使用していたものと推定されている。<sup>11)</sup>

平野2号墳から出土した埴は、後述するように、出土数や形状、他の古墳の類例から、棺や後述する棺の受台の高さを調整するための棺敷等の棺台の一部としての使用用途が考えられ、具体的な使用用途としては、玄室中央部に設置された棺台基礎の上面に敷かれていた可能性が高い。

平野2号墳と同様に埋葬施設内の床敷や棺台を構成する部材として使用されたと推定される事例としては、初田1号墳、大阪府高槻市阿武山古墳<sup>15</sup>、兵庫県三田市青龍寺裏山古墳<sup>16</sup>、大阪府羽曳野市鉢伏山西峰古墳<sup>17</sup>等があげられる。このうち、棺台としての使用例を確実にうかがえる唯一の事例として、阿武山古墳では、埴を漆喰で固めた棺台の上に夷狩棺が原位置で安置された状態で検出されている。

全国的に多くの埴が使用されている南河内地方の一上山麓の終末期古墳に伴うものとしては、大阪府南河内郡河南町一須賀古墳群<sup>18</sup>、大阪府富田林市南坪池古墳<sup>19</sup>、大阪府富田林市お龜石古墳<sup>20</sup>、大阪府南河内郡太子町仏陀寺古墳<sup>21</sup>、鉢伏山西峰古墳<sup>22</sup>、大阪府羽曳野市觀音塚上古墳<sup>23</sup>、大阪府羽曳野市小山古墳<sup>24</sup>、大阪府柏原市誉田山15号墳<sup>25</sup>等があげられる。

太子町を中心とする南河内地方では、仏陀寺古墳出土埴のような、須恵器で同心円文叩きを施した埴が多くみられ、寺院から出土する埴との関係を示す見解もある。<sup>26</sup>

平野2号墳から出土した埴と比較・検討するため、一上山麓を中心とする大阪府内の終末期古墳から出土した埴を観察したところ、大阪府内の主な終末期古墳から出土する埴は、大別して、須恵質ないしは、土師質で比較的硬質に焼成された厚さ2~5cm前後の厚いタイプの埴と土師質で赤褐色を呈する厚さ1~2cm前後の薄いタイプの埴の2者に分類することができる。

2種類の埴のうち、大半は前者が古め、後者は、平野2号墳を含めて、鉢伏山西峰古墳、觀音塚上古墳、小山古墳、誉田山15号墳等の5例が認められる。一般的な傾向として、厚いタイプの埴は薄いタイプの埴に比して大きさや形状等の規格性が高く、両面とも平坦で、整ったものが多いため、薄いタイプの埴は、一定の規格性は認められるものの、形状や大きさが不揃いな場合もみられ、特に、両面とも平坦に仕上げられていない傾向があることが指摘できる。

鉢伏山西峰古墳の埴は、長辺17cm前後、短辺5cm前後の小形品が中心で、短冊形と方形を呈する埴の2種類に分けられる。厚さが1cm以内の極めて薄いものが多く、色調や焼成状況は平野2号墳出土埴と類似するものの、規格や形状はやや異なる。

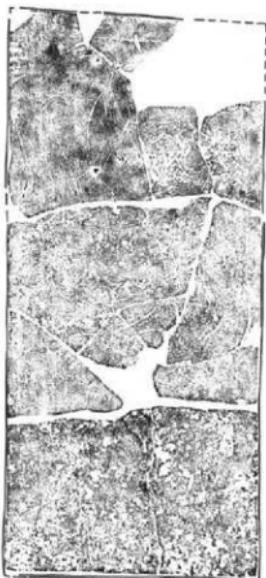
誉田山15号墳の埴は、長方形は短辺11~19cm前後、長辺20~28cm前後、厚さ1cm前後、正方形は短辺19cm前後、長辺21cm前後、厚さ1cm前後、小判形は短辺11cm前後、長辺31cm前後、厚さ0.5cm前後で、この他にも扇形など数種の規格・形状の埴がある。色調・焼成とも平野2号墳出土埴と類似しており、数種の埴の中でも、特に長方形形状を呈する埴については、短辺の規格や色調・焼成とも平野2号墳出土埴と類似している。

また、小山古墳から出土した数点の埴は、長辺は不明であるが、短辺20cm、厚さ2cm程度の長方形の板状を呈する埴が中心で、規格や形状をはじめ、色調や焼成状況も含めて現在の時点では平野2号墳から出土する埴と最も類似している。

このことから、近畿地方の終末期古墳から出土する埴の中でも、とくに、土師質で赤褐色を呈する厚さ1~2cm前後の薄いタイプの埴は、羽曳野市の飛鳥千塚や周辺地域を中心に分布する傾向があり、平野2号墳の埴は、一上山麓を中心とする南河内地域の終末期古墳との何らかの関連性がうかがえる。



場1



0 10 20cm



場2



図46 場1・場2実測図及び拓影 ( $S=1/4$ )

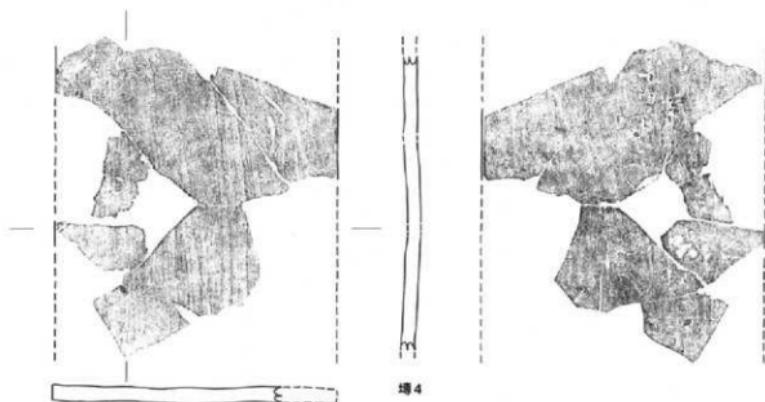
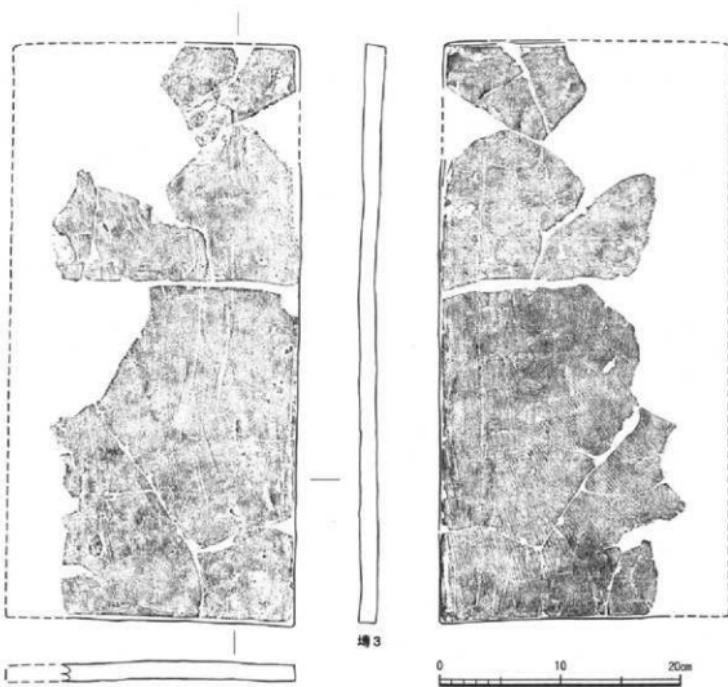


図47 墳3・塚4実測図及び拓影 ( $S=1/4$ )

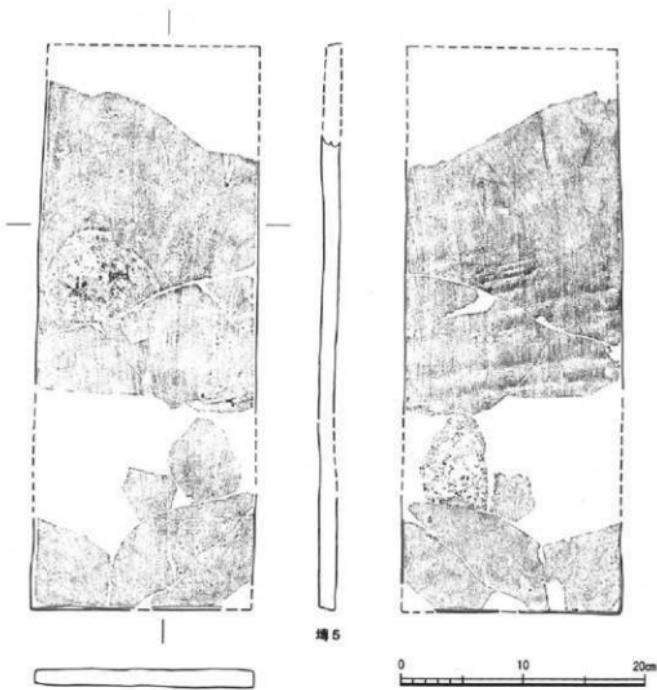


図48 塚5実測図及び拓影 ( $S=1/4$ )

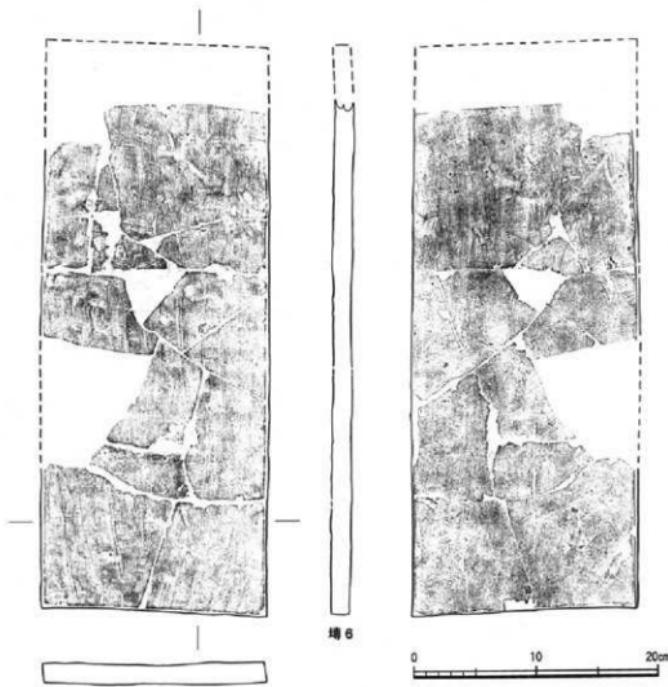


図49 墓 6 実測図及び拓影 ( $S=1/4$ )

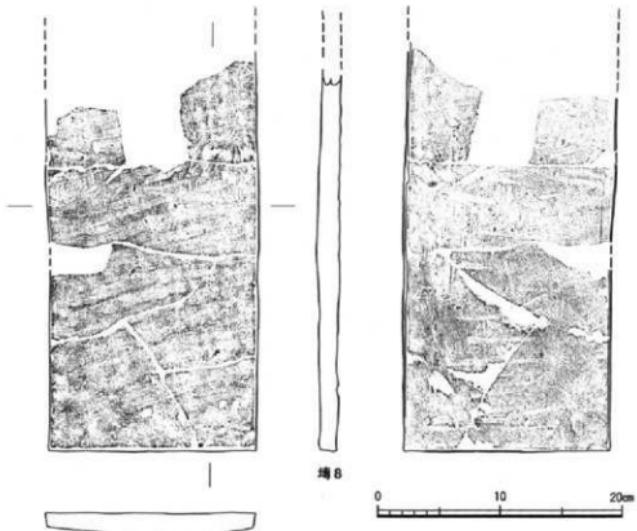
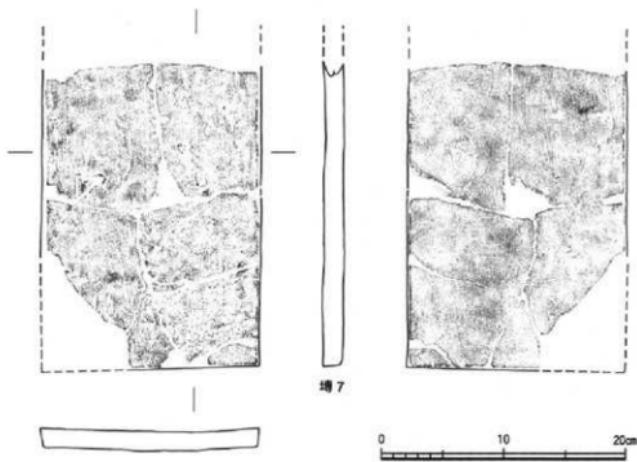


図50 場 7・場 8 実測図及び拓影 ( $S=1/4$ )

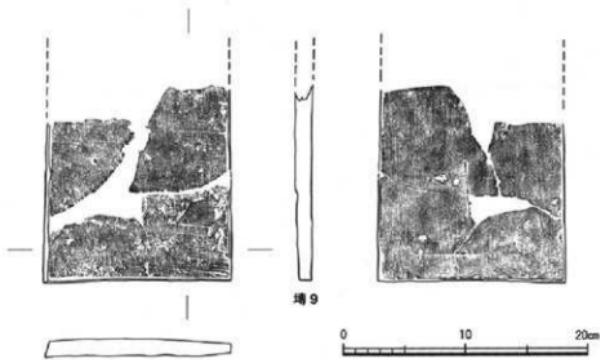


図51 墓9実測図及び拓影 ( $S=1/4$ )

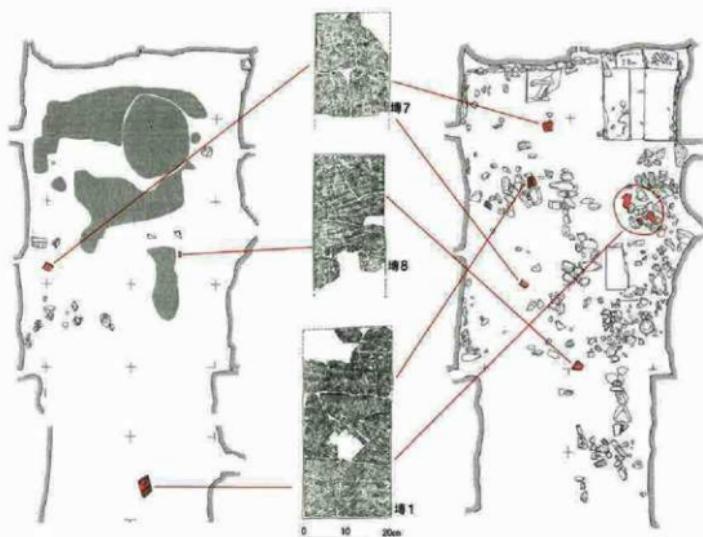
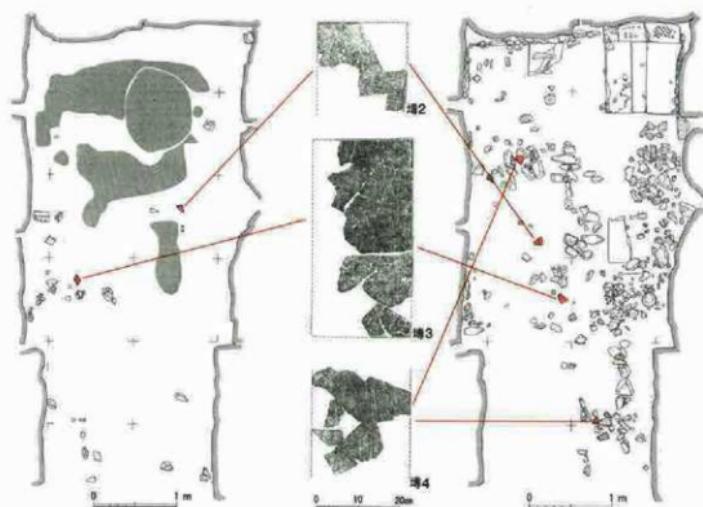


図52 横穴式石室内の埴接合関係図 ( $S=1/60$ )

⑥棺の受台（図53・54、図版82～84）

表5 平野2号墳棺の受台法量

長辺 (長さ)	短辺 (幅)	高さ		底面厚さ	側面厚さ
		内法	外法		
<184>	<72>	8	9.8	1.2～2.2	1.2～2.2

※単位はcm。<>値は復元値を表す

棺の受台の石室内での出土位置は、埠と同様に全体的に玄室内や玄門付近での出土数が最も多く（図54）、峠道の南端に向かうにつれて出土量は少なくなる傾向がある。

棺の受台の破片は、通常の破片の他に、大別して一辺に側面を持ち、L字形を呈するものと、一方の端部が面取りされた破片の2者に分けられる。これらの破片を繋ぎ合わせると、第1区のような三辺は側面を持ち、一辺は側面を持たずに端面を持つ49.5×72cmの大きなひとまとまりの部材を復元することができた（以下、第1区と呼ぶ）（図53、図版82～84）。

この他にも面取りした端面を持つ破片と面取りした端面を持つ側面の破片が複数認められることから、棺の受台は、第1区のようなまとまりを一単位として大別して3つの単位・部材を組み合わせて構成されており、3つに分割して成形・焼成されていたものと考えられる。

棺の受台は、欠失した部位もあるため、完全に復元できた訳ではないが、規格が判明した第1区や面取りした端面を持つ側面の部材を元に復元すると、第1区は長さ49.5cm、幅72cm、第2区は長さ79.5cm、幅72cm、第3区は長さ55.0cm、幅72cmとなり、全体としては、長さ（長辺）約184cm前後、幅（短辺）約72cm前後、内法の高さ約8cm、外法の高さ約9.8cm、長短両側辺とも厚さ約1.2～2.2cm、底板厚さ約1.2～2.2cmの長方形の箱形を呈する土製品に復元できる（図53、図版83）。

全体的に赤褐色の土師質を呈する精良品で、調整手法は底面及び長短両側辺の内面は全体的にハケやナデ調整が施され、長短両側辺の外外面には幾重にも丁寧なヘラ磨きを施して光沢感を増している。いっぽう、底部外表面（裏面）と推定される面は、全体的にヘラケズリが施されているものの、部分的に成形時の布目圧痕を残すなど未調整箇所を多く残しており、部分的に表面には見られない焼成時の黒斑がみられる（図版84）。この未調整を多く残す面が表面、すなわち、棺台の上（表）面と解釈することも不自然であることから円状の盆状を呈する浅い箱型の土製品として認識するに至った。

平野2号墳の棺の受台と形態的に最も類似するものとしては、二上山西側の平石谷に所在する大阪府南河内郡河南町塚廻古墳から出土した緑釉陶棺があげられる（図73、写真63）。

塚廻古墳は、横口式石槨を主体部とする7世紀中頃の築造と考えられる終末期古墳で、棺材として漆塗籠棺と夾紵棺の2種類の漆塗棺を一対として使用されていたものと考えられている。緑釉陶棺は、長さ1.9m、幅72cm、高さ21cm、側辺厚さ2.3～2.7cm、底面厚さ2.7～3cmを測る。長方形の棺身状を成す土製品で、一体成形されており、身部の漆塗籠棺と夾紵棺の外容器、すなわち、棺台として石槨内の奥室中央部に安置していたものと推定されている。<sup>31)</sup>

平野2号墳の棺の受台の用途については、玄室中央部の棺台基礎より一回り小さめの規模で棺身状に復元することができたことや同様の形態を持つ塚廻古墳緑釉陶棺の使用例から、木棺等の棺を収納するための外容器、棺台の可能性が強いものと考えられる。

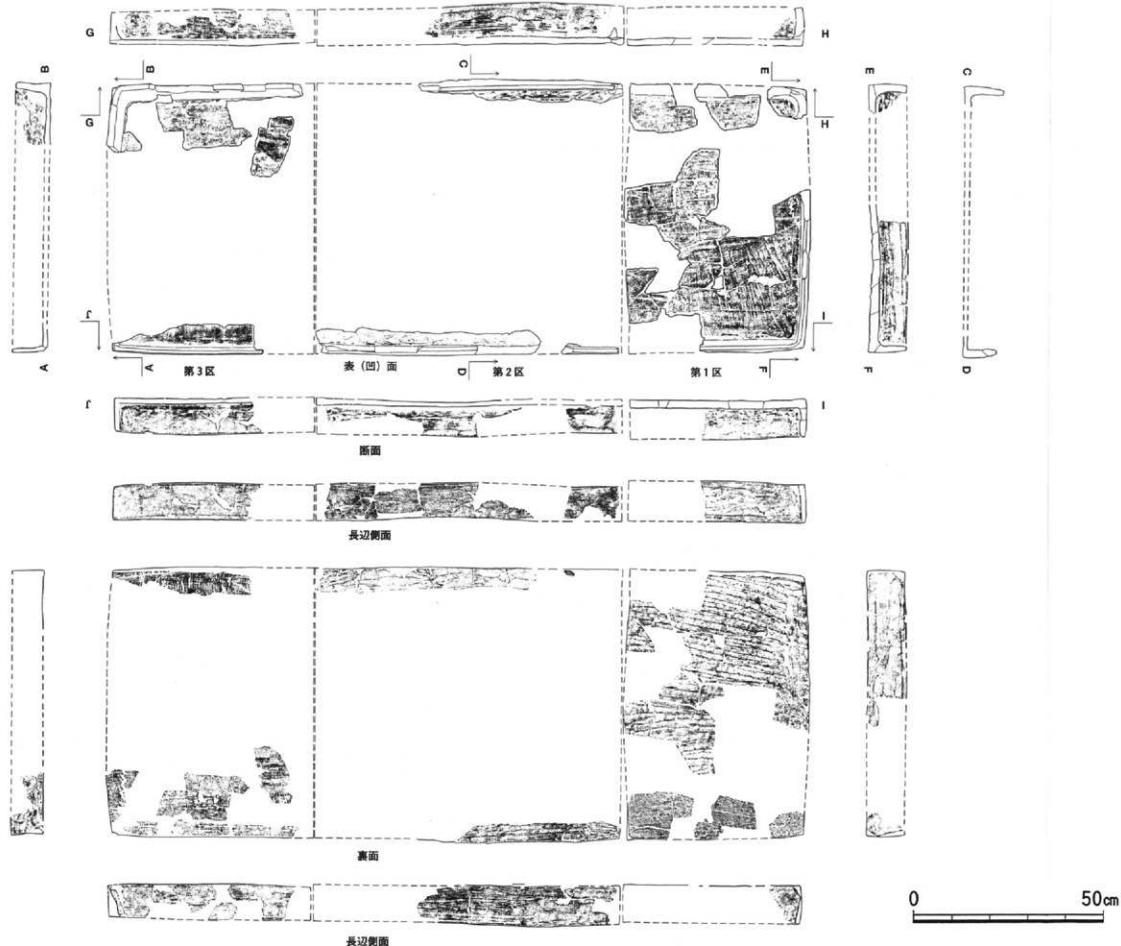


図53 平野2号墳墳の受台実測図及び拓影 (S=1/10)

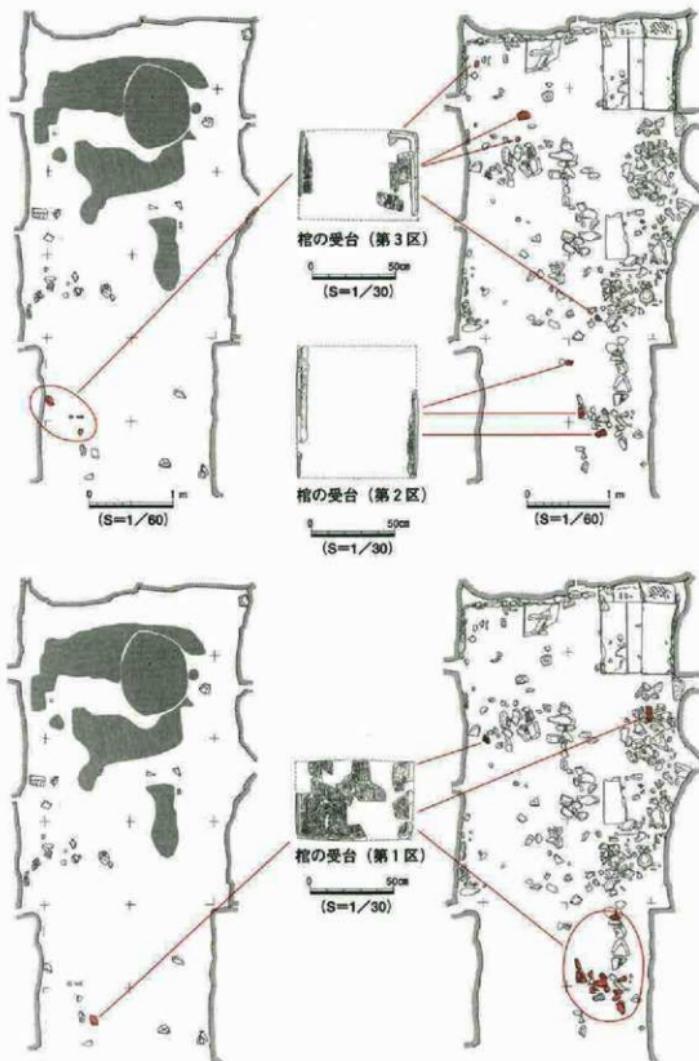


図54 棚の受台接合関係図 ( $S=1/60$ )

### 【塙と棺の受台で構築した棺台について】(図55・56)

棺の受台の唯一の類例である塙廻古墳では、土製の塙は出土していないが、奈良盆地東部山間地帯の室生村を中心に産出する流紋岩質溶結凝灰岩の一種で、桜井市域や飛鳥地域の7世紀代の磚榔墳等の古墳の石室材や寺院の基壇の石材として多用されることで著名な方形で磚状を呈する榛原石（室生火山岩）が縁袖陶棺の棺敷として使用されていたことが推察されている。

平野2号墳出土棺の受台が玄室中央部に土と凝灰岩の碎片で構築された棺台基礎と同等の規模に復元することができたことや塙廻古墳縁袖陶棺と磚の使用例から、棺の受台は、木棺等の有機質の棺を保護・収納するための外容器として、塙は、棺の受台の高さを調節するための棺敷と考えられ、両者がセットになって棺台を構成する部材として使用されていたものと推定される。

塙と棺の受台の具体的な使用方法としては、図55・56に示すように、玄室の床面中央部に構築された棺台基礎（土台）の上面に塙を敷き、塙の上に棺の受台を安置していたものと推定される。

塙と棺の受台は、胎土や色調、焼成状況等が極めて類似しており、また、規格や形状も密接な関わりがあることから、両者とも何らかの規格にもとづいて製作されている可能性が強く、両者は共に棺を安置するための棺台を構成する部材として共通の製作工人により計画的に製作されたものと考えられる。

塙と棺の受台の関係については、規模が判明している塙の中でも一番大きい規格である長辺（継）46.0～47.0cm前後、短辺（横幅）21～24cmのA類の塙を基準にすると、長さ（長辺）184cm×幅（短辺）72cmの大きさの棺の受台の底面積を充當するように敷設するには、A類の塙を棺の受台と平行して継位に1枚ずつ1重敷に並べた場合、継4枚×横3～4枚で合計約12～16枚程度の塙が必要となる。塙は一枚敷か二枚重ねて敷かれていたのか不明であるが、実際には棺の受台の規模・形状に合うように、先に分類したA～C類をはじめ、数種類の規格の塙を巧みに組み合わせて敷設されていたものと推定される。

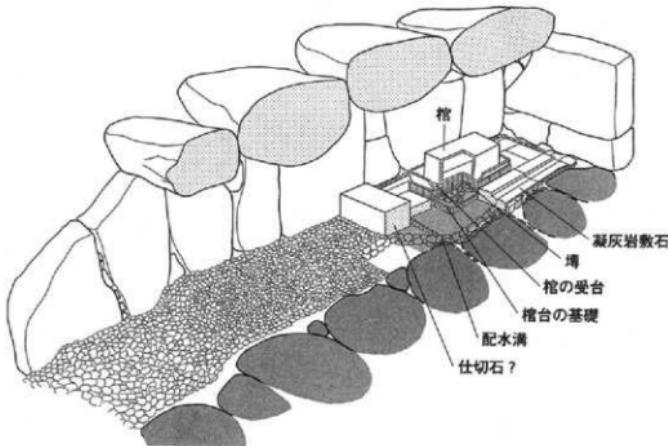


図55 平野2号墳出土塙と棺の受台の使用方法と棺の埋葬形態

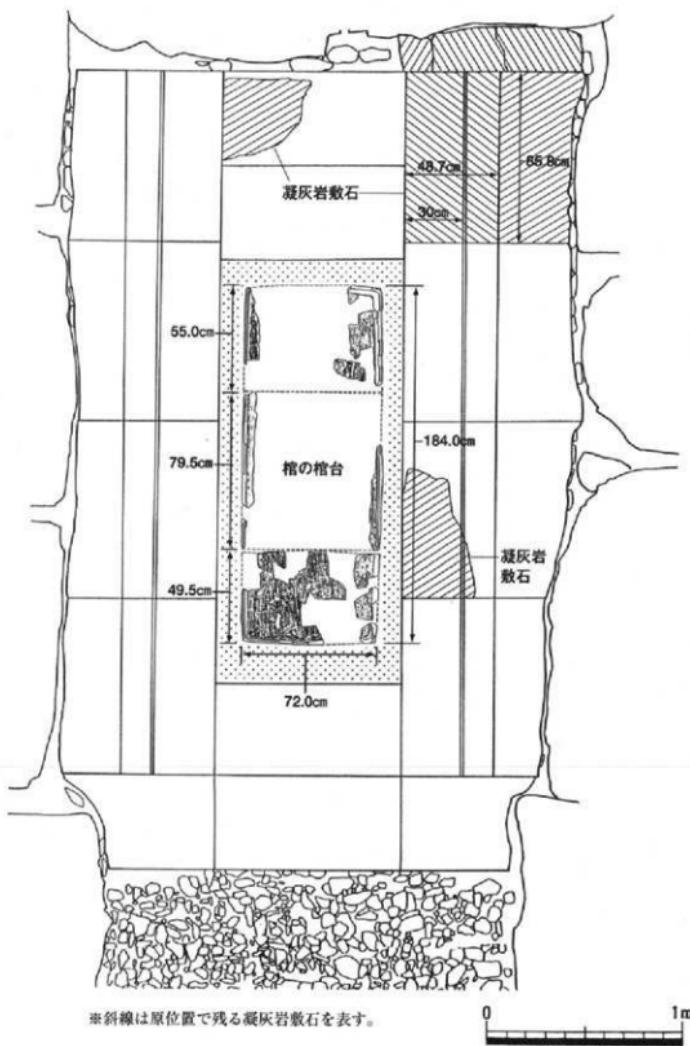


図56 棺の受台の安置状況 (S=1/25)

### (3) 古墳に伴わない遺物

横穴式石室内からは、古墳時代以外の遺物として11世紀後半から15世紀にわたる多数の中世の土器や錢貨等が出土している。以下、古墳に伴わない出土遺物について概観する。

#### ①土器・瓦 (図57~61、図版65~28~33、図版66~72)

中世の土器は、石室内のほぼ全域にわたって分布していた。土器の種別は、瓦器壺や羽釜、土師皿等の通常の日常雑器で、中でも、圧倒的に土師皿が多く、玄室右側玄門付近の8区-E1では土師器を中心とし、完形品を含む多数の中世土器の集積箇所がみられた。計測値等の詳細は表7に委ねるとして、以下、横穴式石室内部から出土した土器等について出土箇所ごとに概観する。<sup>39)</sup>

#### 【狭道部を閉塞する堆積土（流入土）出土土器】(図57、図版65)

28は平瓦である。凸面に格子状引き目を残す。29は土師器皿である。28・29ともに狭道を閉塞した流入土の中でも上層の③-2層（明褐色砂質土層）から出土した。

30は瓦器椀である。口縁端部に沈線を施し、内外面ともミガキ調整を施している。川越編年の大和型瓦器椀III-A新相に相当し、12世紀末から13世紀初頭の所産と推定される。

31~33は瓦質上釜である。いずれも口縁部は内傾し、肩部に幅の狭い鈎をめぐらす。口縁部から鈎部にかけて3条の凹線をめぐらし、31・32の口縁端部には沈線が施されている。菅原編年の和泉D1型ないし河内D1型に相当し、いずれも14世紀後半から15世紀前半の所産と推定される。30~33は、狭道部を閉塞した流入土の中でも下層の⑦層（灰褐色砂質土層）から出土した。

#### 【狭道内堆積土出土土器】(図58、図版66・67)

34~41は土師皿である。34・35は口縁部が外傾して立ち上がり、胴部と底部の境に稜線がみられる。37・38は口縁端部に水平面を成形して口縁端部を上方へ跳ね上げた“て”字状口縁の土師皿である。34~36・38・39は玄門付近の表層である⑯層（黄褐色砂質土層）から、37は⑰層（灰褐色砂質土層）から出土しており、いずれも12世紀中頃から13世紀代の所産と推定される。

42は青磁碗の口縁部である。外面に蓮華文の文様の一部が見られる。43は瓦器椀である。口縁端部に段状の沈線を施し、内面には渦巻状のミガキ調整が施される。川越編年の大和型III-E型式に相当するもので、14世紀前半の所産と推定される。凝灰岩の敷石を抜き出した時に形成されたものと推定される⑬層（灰色凝灰岩粒層）から出土した。

44は土師器釜である。内縁する口縁部を有し、口縁端部は外方に折り返した菅原編年の大和H1型に相当するもので、15世紀代の所産と推定される。42・44は狭道中央部の⑧-3層（暗灰褐色砂質土層）から出土した。

#### 【玄室内堆積土出土土器】(図59~61、図版68~72)

45は“て”字状口縁部に成形するタイプの中でも末期の土師皿である。46は瓦質上釜の口縁部で、二箇所に焼成前に穿たれた穿孔がみられる。47は瓦質円形浅鉢の口縁部の破片である。

48・49は土師器釜の口縁部である。口縁端部は外方に折り返して段状に成形している。菅原編年の大和H1型に相当し、14世紀後半から15世紀前半の所産と推定される。

45~49は玄室内の表面に疊と併せて散布していた土器で（図版20）、その中でも最も新しい48・49は石室再利用の最終年代を検討する上で貴重な資料となる。

50~54は土師皿である。50・51は胴部と底部の境に稜を成形する皿で、53・54は口縁部が外傾状の直線的な立ち上がりを持つ皿である。52は⑮層（灰褐色砂質土層）から出土している。

55は瓦質播鉢の底部である。底部内面に5条の条線がみられる。焼成不良で土師質を呈する。  
56は瓦質の浅鉢形火鉢である。口縁部外面の区画帯にスタンプ文が押印されている。

57・58は瓦器碗である。57は緩やかに内済する体部を有し、口縁部内面の端部に一条の沈線を施す。内面は密なミガキ調整を行い、内面の底部には平行線状（直線状）暗文を施す。川越編年のI D～II A型式期に相当し、11世紀末頃の所産と推定される。⑩層（灰褐色砂質土層）から出土した。58は瓦器碗底部の破片で内面に螺旋状暗文の一部がみられる。

59は瓦質の土釜である。口縁部は内傾し、肩部に上方へ立ち上がる幅の狭い鶴をもつ。

50・51、53～56、58・59は、炭化物とともに中世の上器や永楽通寶等の銭貨を含む⑯層（暗灰色砂質土層）から出土している。

60～76は土師皿である。土師皿は口径8～11cm前後、器高1.5～2cm前後の小形品と口径14～15cm前後、器高2.5～3cm前後の大形品に分けられる。60・63・64・65は外傾状に立ち上がる口縁部を有し、口縁部と底部の境に稜を成形する小形の土師皿で、67は“て”字状口縁の土師皿である。69は口縁部が内済状に丸みを持って立ち上がり、底部の中央は窪みを持つ。70～76は口縁部が外傾状の直線的な立ち上がりを持つ皿で、口縁端部は外反する。

66・67・70・71・72・73・75の土師皿は、8区-E1の⑬層（灰色凝灰岩粒層）と⑯層（灰褐色砂質土層）の中世土器が集中して分布する土器集積箇所から出土したもの（図39、図版25）、概ね、12世紀中頃の所産と推定される。中でも66・70・73は伏せられた状態で出土しており、土器の内面全体に米粒状遺物が充満していた（写真61、図版26）。

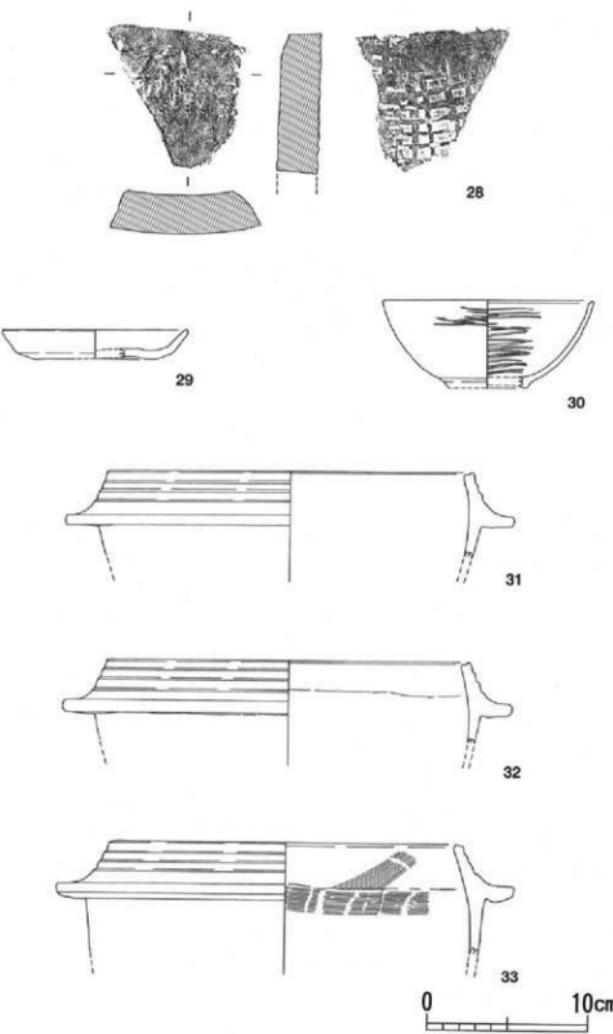
77～79は瓦器碗である。77・78は内面に粗いミガキ調整が施されているが、外面の調整はみられない。78の口縁部の沈線は施されておらず、瓦器碗の中でも退化的傾向を示す川越編年の大和型III-Eに相当する。凝灰岩を含む⑯層（灰褐色砂質土層）から出土している。79は内外面ともにやや密なミガキ調整を施している。77・78よりも先行する川越編年の大和型III-A古相に相当し、12世紀中頃から後半の所産と推定される。⑯層（暗灰色砂質土層）から出土した。

80・81は瓦器碗の底部である。低い逆三角形の高台を持ち、見込み部に渦巻状の暗文を施している。炭層を含む⑯層（暗灰色砂質土層）から出土した。82は土師皿である。口縁部が外傾状の直線的な立ち上がりを持つもので、胴部と底部の境に稜を成形している。

83～86は土師器釜である。84・85は口縁が欠落のため口縁の形態は不明であるが、83・86ともに口縁部は「く」の字形に外反させ、口縁端部を内側に折り返すタイプで、肩部上方に鶴をめぐらす菅原編年の大和B1型に相当する。83は12世紀中頃から13世紀前半に、86は肩部に幅の広い鶴を持つなど古い要素がみられることから11世紀代の所産と推定される。83～86は8区-E1の⑬層（灰色凝灰岩粒層）と⑯層（灰褐色砂質土層）の中世土器集積箇所から出土している。

漢道・玄室内の堆積土から抽出して図化した土器合計53点の器種の内訳は、土師皿32点、土釜9点、瓦器碗8点、その他4点であり、圧倒的に土師皿が多い。また、8区-E1の中世土器集積箇所では总数18点のうち、土師皿が13点、瓦器碗1点、土釜4点で、土師皿が最も多い。

これらの器種のうち、最も完存率が高いのは土師皿で、瓦器碗や土釜は破片ばかりで原形を保つものは1点もみられなかった。瓦器碗と土釜の使用用途は不明であるが、土師皿の一部については、灯明皿として使用されていた痕跡を示すものと米粒状遺物の容器として使用されていたものの2者が確認できた。とくに後者は、石室内で行われていた祭祀行為に伴う可能性がある。



後道部を閉塞する堆積土（流入土）出土土器

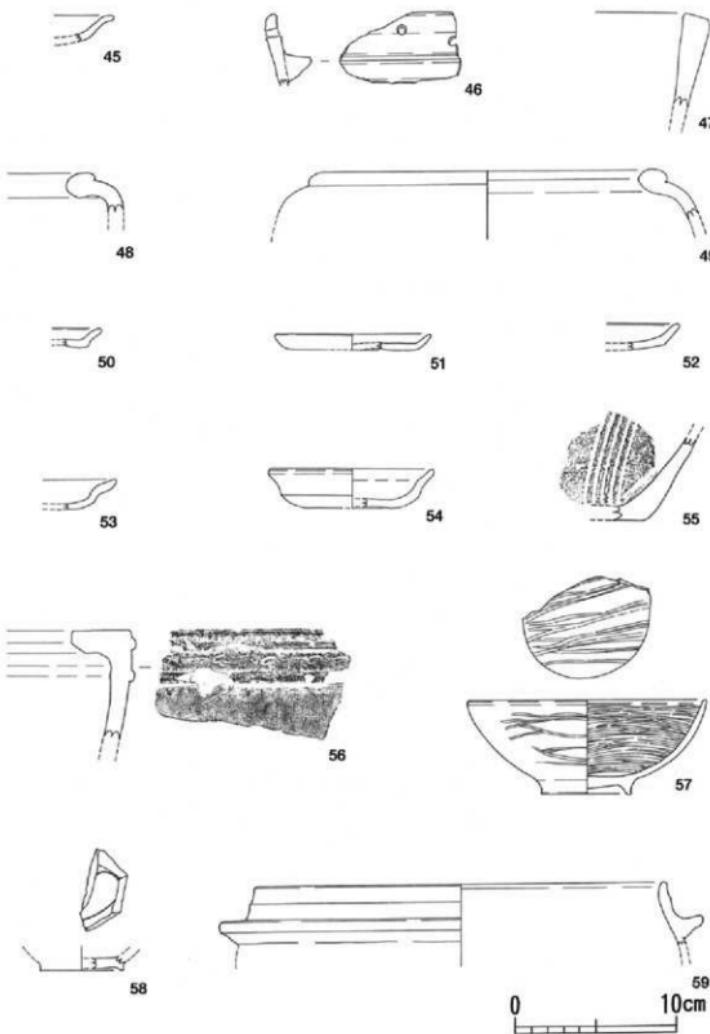
図57 横穴式石室内出土土器 2 (S=1/3)



0 10cm

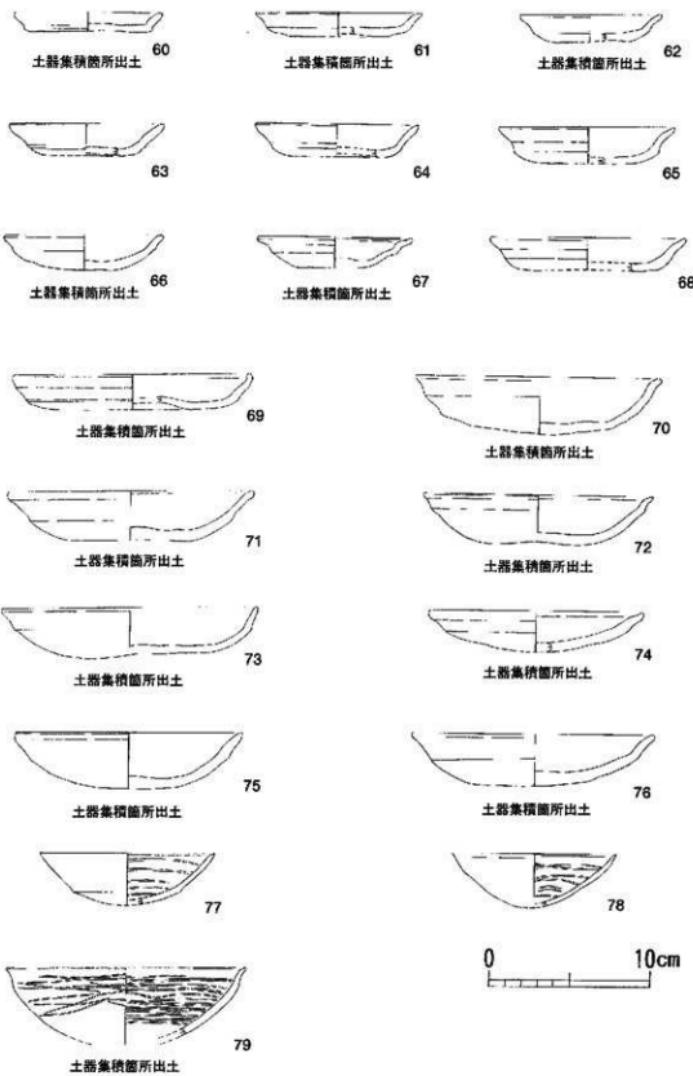
表道内堆積土出土土器

図58 横穴式石室内出土土器3 (S=1/3)



玄室内堆积土出土土器

図59 横穴式石室内出土土器4 (S=1/3)



玄室内堆積土出土土器

図60 横穴式石室内出土土器 5 (S=1/3)

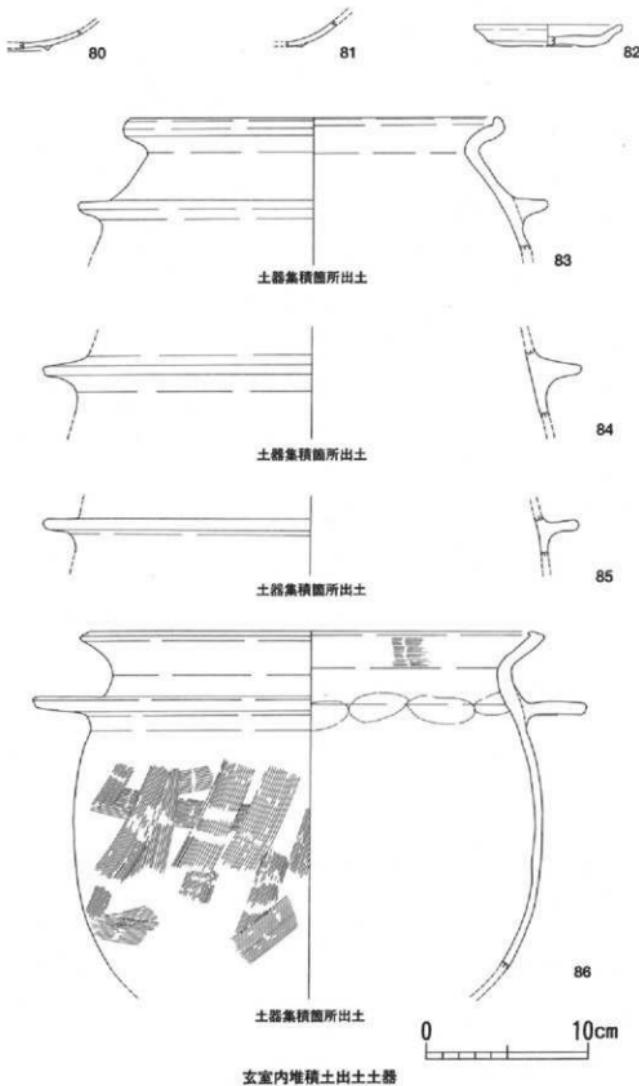


図61 横穴式石室内出土土器 6 (S=1/3)

## ②銭貨（図62、表6、図版73）

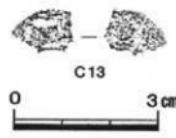
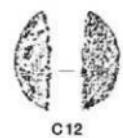
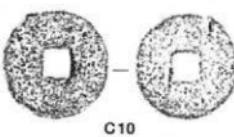
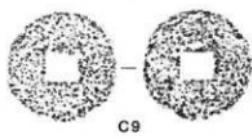
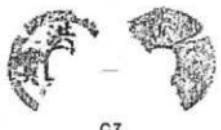
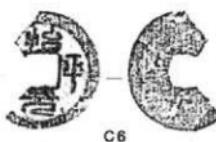
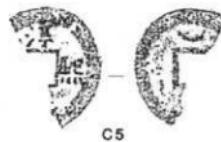
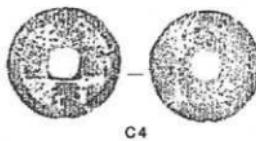
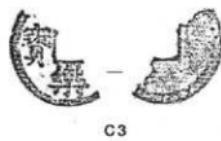
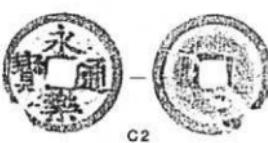
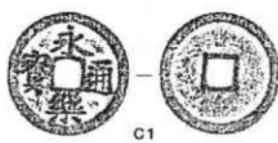
玄室の中央部より北方の奥壁にかけて、深い所では約10cmにわたって炭化物層（図32-⑦層）が堆積しており、炭層の分布範囲を中心に破片も含めて銭貨約13枚が出土した（図版22）。銭貨は、いずれも遺存状態は良くないが、表6のとおり、すべて銅銭であり、銭種は、永樂通寶、淳熙元寶、治平元寶、洪武通寶、政和通寶、無文錢の6種類が確認できる。

C1、C2、C3は永樂通寶である。初鑄年が1408（永樂6）年の明銭である。C4は表面の磨滅が著しいため銭種は判読できないが、篆書体による「元寶」の字を読み取ることができる。C5は淳熙元寶である。初鑄年が1174（淳熙元）年の南宋銭である。書体は真書であり、背面に弧状の「月」が表現されている。C6は治平元寶である。初鑄年が1064（治平元）年の北宋銭で書体は篆書体である。C7は洪武通寶と推定される。初鑄年が1368（洪武元）年の明銭である。C8は政和通寶と推定される。初鑄年が1111（政和元）年の北宋銭である。C9~13は輪や郭の痕跡がないため判然としないが、無文錢と推定される（図62、図版73）。

しばしば、古墳の石室内から銭貨が出土する事例がみられる。当古墳では、銭貨は炭化物を含む層域を中心に出土していることから、火葬墓に伴う可能性があるが、人骨や木棺材等の墓の痕跡を示す遺物は1点も検出されていないことから、断定することは難しい。銭貨の用途とその意味は不明と言わざるを得ないが、石室内で行われた火を伴う何らかの祭祀儀礼に伴う遺物である可能性が強く、当古墳における石室再利用の時期を検討する上で貴重な資料となる。

表6 平野2号墳横穴式石室内出土銭貨法量一覧

掲載番号	銭種	法量(cm)				重量(g)	残存率(%)	出土地点	備考
		直径	孔径	厚さ	縁部幅				
C1	永樂通寶	2.56	0.55×0.55	0.14	0.22	3.66	100	10区-W1 坑層(炭化物層)	富形
C2	永樂通寶	2.53	0.56×0.56	0.13	0.19	2.85	95	10区-E2 坑層(炭化物層)	ほぼ完形
C3	永樂通寶	-	-	0.14	0.2	1.41	45	9区-W1 坑層(炭化物層)	部欠損
C4	（？）元寶	2.37	0.55×0.54	0.1	0.25	2.02	100	3・4区セクション E2層 （焼褐色色鉛土層） 「正寶」の字	糸波町
C5	淳熙元寶	2.56	0.60×-	0.18	0.32	1.74	50	8区-W1 E2層 （灰褐色色鉛土層）	真書体 背面に弧状の鉛文
C6	治平元寶	-	0.61×0.60	0.1	0.28	1.06	60	10区セクション E2層(炭化物層)	篆書体
C7	洪武通寶	-	0.55×0.50	0.16	0.22	1.54	50	10区-W1 坑層(炭化物層)	部欠損
C8	政和通寶	-	0.6	0.12	0.22	1.22	45	8区-W1 坑層(炭化物層)	一部欠損
C9	無文錢	2.21	0.57×0.57	0.12	-	2.24	100	11区-E1 坑層(炭化物層)	表面鏽化が著しい
C10	無文錢	2.3	0.58×0.69	0.18	-	2.06	100	10区-E1 坑層(炭化物層)	表面鏽化が著しい
C11	無文錢	-	-	0.11	-	0.27	45	9区-W1 坑層(炭化物層)	部欠損
C12	無文錢	-	-	0.12	-	0.69	45	9区-W1 坑層(炭化物層)	ひずみ有り C13と同一個体か？
C13	無文錢	-	-	0.11	-	0.38	20	6・7区-E1 （黄褐色色鉛土層）	ひずみ有り C12と同一個体か？



0 3 cm

図62 錢貨拓影 ( $S=1/1$ )

### ③鎌 (図63、図版74)

玄室奥壁よりの調査区 (10区-E2)

の炭化物を含む<sup>30</sup>層 (暗灰色砂質土層)

から出土した鉄鎌である。刃部のみ遺存しておらず、柄部にかけては欠損している。刃部残存長11.2cm、刃部は最大幅3.9cmを計る。刃部は直線状で、背部は三日月形に緩く内湾している。刃部の、背部の棟幅は0.5cmを測る (図63、図版74)。

鉄鎌が古墳の石室内から出土する例と

しては、奈良県御所市巨勢山323号墳が

あげられる。巨勢山323号墳では横口式石槨の渓道部から出土しており、石室の再利用に伴うものと考えられている。奈良県内の中世の墓に鉄鎌を副葬する事例は、高市郡高取町佐田遺跡や奈良市古市城跡のほか、近世では御所市稻宿近世墓群が知られており、副葬品のほか、廃棄時において何らかの祭祀的な意味が付与されているものと考えられている。佐田遺跡では河内D型の瓦質土釜、青磁碗、瓦質小鉢、香炉が共伴しており、稻宿古墓では白磁盒子、染付の碗や湯呑茶碗、灯明皿、寛永通宝が共伴している。このように鉄鎌を副葬する墓の副葬品の組成を比較してみると、土釜や灯明皿、銭貨、青磁碗、鉄釘が出土するなど共通する点が多く見られる。

平野2号墳の場合、鉄鎌をはじめ、河内D型の瓦質土釜、青磁碗、土師皿他、多数の銭貨があり、ある程度共通した遺物組成も認められることから、鉄鎌は13枚の銭貨とともに墓に伴う可能性も考えられるが、前述したとおり、人骨や木棺等の火葬墓の痕跡を示す遺物は検出されていないことから、その可能性は低いものと考えられる。

### ④米粒状遺物 (写真61、図版26-2・3)

玄室右側壁の玄門付近の<sup>31</sup>層 (灰色凝灰岩粒層) では中世の土器が集中的に分布する土器集積箇所が検出されている (図39、図版25)。この土器集積箇所でも66と70・73の土師皿は、内面を伏せた状態で出土しており (図39、図版25-3、図版26-1)、その内面から米粒状遺物が集中して出土した (写真61、図版26-2・3)。

米粒状遺物は、長軸4mm、短軸2mm程度の米粒大の大きさで灰褐色を呈し、触れるところ潰れてしまう程脆く、極めて軟質である。

古墳の石室内から「凝灰米」、あるいは、「米粒状土製品」と称される米粒を模した米粒状の土製品が出土することがある。平野2号墳の米粒状遺物は、発掘当初は原形を保っていたが、図面作成終了後まで数日間放置していると、取り上げ時に触れるだけで潰れてしまうほど脆く、また、人為的な造作物ではないことから、土製品というよりも米粒等の穀類そのものと認識できる。

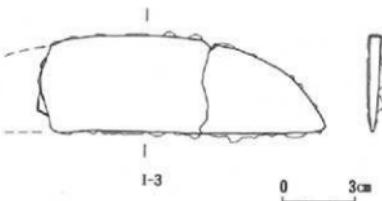


図63 鋏実測図 (S=1/2)

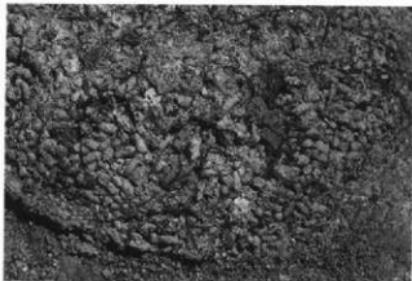


写真61 米粒状遺物

古墳に伴う米粒状の土製品は、奈良県内では、吉野郡大淀町越部古墳<sup>40</sup>、桜井市秋殿古墳<sup>41</sup>、坂ノ山古墳等で出土が確認されており、県外では兵庫県城崎町上山・ケゴヤ古墳が知られている。

この種の土製品について、河上邦彦氏は、民俗例に残る焼米祭祀などとの関連から、米の代用品として古代から近世の農耕儀礼に伴う祭祀遺物である可能性を指摘している。

しかし、最近、橋本輝彦氏は、桜井市カタハラ1号墳や秋殿古墳の石室内から出土した米粒状遺物の分析調査結果から、石室内から出土するこの種の土製品の中には、コガネムシ科の幼虫の糞が含まれている可能性があり、これまで古墳から出土している米粒状土製品と称する物質について、再検討する必要性があることを指摘している。

平野2号墳から出土した米粒状遺物の場合、その物質の成分と使用用途は不明であるが、中世に石室を再利用していた形跡がみられることや、伏せられた3点の土師皿の内面からまとまって出土しており、明らかに器の中に収納されていた状態を示していることから考えても昆虫類の糞類とは考え難く、石室の再利用時に行われていた何らかの祭祀儀礼に伴って使用されていた供物等の可能性があることを指摘しておきたい。

## 註

1) 棚の受台の定義等については本報告書本文102頁と本文118頁(註29)で詳述している。

2) 須恵器の型式は下記の文献による。

古代の土器研究会編 1992 「古代の土器 I 都域の土器集成」 古代の土器研究会

田辺昭二 1966 「高邑古窯址群 I」 平安学園考古学クラブ

3) 平野2号墳出土壇と同様に木目(板目)圧痕を残す例は、新木県真岡市神宮寺塚古墳出土壇にみられる。

後述する平野2号墳棚の受台には底部裏面の一部に成形時の布目圧痕を残しているが、壇には布目圧痕はみられない。神宮寺塚古墳出土壇については、下記註6文献に詳述されている。

4) 終末期古墳出土壇の中で、表面にこのような暗文を施す例は他にみられない。おそらく、表面の木目(板目)圧痕をナデ消すため、ミガキ調整の過程で施されたものと推定され、背後に土師器製作集団との関わりも考えられる。主に南河内地域に分布する同心円文の叩きが施される須恵質の壇とは製作工人集団の差異が感じられる。

5) 壇を短辺の大きさから大・小の2種類に分類することも可能であるが、ここでは3種類に分類しておく。

6) 小森哲也・梁木誠 1990 「真岡市根本神宮寺塚古墳出土の壇をめぐって」『古代』第89号 早稲田大学考古学会 241-243頁

7) 香芝市二上山博物館編 2002 『二上山麓の終末期古墳と古代寺院-平野古墳群と尼寺施寺跡-』 香芝市二上山博物館

8) 金基雄 1976 「百濟の古墳」 学生社

9) 宮野淳一 1990 『陶邑Ⅲ』 大阪府文化財調査報告書第37号 大阪府教育委員会 160-181頁

10) 前掲註6文献

11) 中井貞夫 1972 「初田1号墳調査概要」(第・香・泉) 第11号

12) 前掲註11文献

13) 梅原本治 1936 『揖津阿武山古墓調査報告』 大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯 大阪府

原口正三 1973 『阿武山古墳』『高槻市史』第6卷 考古編 高槻市

- 14) 横本誠一 2002 「三田市青龍寺裏山1・2号墳の調査」古代学研究会例会資料 古代学研究会
- 15) a. 伊藤聖浩 1994 「鉢伏山西峰古墳」「羽曳野市史第3巻」資料編1 羽曳野市 456-461頁  
b. 伊藤聖浩 1998 「河内飛鳥と終末期古墳」 青川弘文館 138-150頁  
c. 伊藤聖浩 2003 「鉢伏山西峰古墳」「羽曳野市内遺跡調査報告書-平成5年度-」羽曳野市埋蔵文化財調査報告書50 羽曳野市教育委員会 112-116頁
- 16) a. 上野勝巳 1984 「下陵の谷・磯長谷古墳群-太子町の古墳群-」 太子町立竹内街道歴史資料館 10頁、43-48頁  
b. 小林義孝・栗田薰・中辻亘 1998 「渡辺忠教氏採集の考古資料の意義(4)」「太子町立竹内街道歴史資料館報」第4号 太子町立竹内街道歴史資料館 40-42頁
- 17) 大阪府教育委員会編 1986 「大阪府立錦織公園内古墳群発掘調査概報」 大阪府教育委員会 21-22頁
- 18) 横山或己 2002 「お龜石古墳」「平成13年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書」富田林市埋蔵文化財調査報告書33 富田林市教育委員会 30-31頁
- 19) a. 前掲註16a文献 26-28頁  
b. 鶴島隆宏 1999 「仏陀寺古墳出土の埴について」「太子町立竹内街道歴史資料館報」第6号 太子町立竹内街道歴史資料館 63-73頁
- 20) 前掲註15文献
- 21) 羽曳野市教育委員会編 1981 「羽曳野の終末期古墳」 羽曳野市教育委員会 14-15頁  
笠井敏光 1994 「擬音塚上古墳」「羽曳野市史第3巻」資料編1 羽曳野市 449-450頁
- 22) 羽曳野市教育委員会編 2001 「小口山古墳(河内軽里の掘抜石棺)」蜂塚公園内埋蔵文化財現地調査説明会資料 羽曳野市教育委員会
- 23) 大阪府教育委員会編 1971 「柏原市旭ヶ丘4丁目の古墳」「日本考古学協会会報24 1971年度版」 日本考古学協会
- 24) 前掲19b文献
- 25) 下大追幹洋 2003 「終末期古墳出土土製棺台について」「ふたかみ12-2002(平成14)年度香芝市二上山博物館年報・紀要-」 香芝市二上山博物館  
縦横の比率や厚さ、成形技法等から数種に分類することが可能である。

中岡敬善氏は、下記文献において、終末期古墳から出土する埴について、厚さや長さから大別してA類(厚さ2cm以下の薄手の埴で、長辺20-30cmの長方形のものが多い。)、B類(厚さ2-4.5cmで、長方形のものが多い。)、C類(厚さ4.5cm以上の厚手の埴で、長方形と方形がある。)の3つのタイプに分類している。

平野2号墳出土埴は、中岡敬善氏の分類では、譽山15号墳、鉢伏山西峰古墳、神宮寺塚古墳とともにA類に含められている。A類の埴については、単次葬に使用する場合と、追葬時に使用する場合の2者に分けて解説されており、追葬・改葬時の床面造り替えに伴う施設として使用された可能性を示唆している。追葬に使用される埴の使用形態とその背景・系譜としては、土器ととの関連性を指摘されているが、比較的規格性の高い形狀を成す板状の土製品を指向・製作して棺敷や棺台を構成していることから、その見解には従い難く、私は、二上山墓における埴等の切石状の工作物を棺台・棺敷とする埋葬形態の系譜は朝鮮半島の墓制との関わりがあるものと考えている。

中岡敬善 2002 「邑久地域の古墳出土の埴について-時実黒水氏採集資料を中心に-」「環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-」 古代古墳研究会

- 26) 鉢伏山西峰古墳出土埴は、一方に布引埴を残したままで、ナテ消さずに未調査のものが多くみられる。規格や厚さも他の終末期古墳から出土する埴の中でも最も小さい。埴敷として使用されたものと推定されるが、おそらく、狭い石室内の規模にあわせるためにこのような小規模な規格の埴が必要であったものとも推定される。
- 鉢伏山西峰古墳出土埴の調査については、伊藤聖浩氏（羽曳野市教育委員会）のご教示を得た。
- 27) 菅田山15号墳からは、小判形や扇形、細長い隅丸長方形等の数種の規格・形状の埴が出土している。  
一般的に終末期古墳から出土する埴は、規格の大小はみられるものの、同一の古墳から2種類以上の数種の形状の埴が出土する例はみられない。方形や長方形等の埴は、敷設し易いように製作・使用されたものと推定することはできるが、それ以外の椿円形等の形状を呈する埴の用途について、何故、そのような形状を成す埴が必要であったのか合理的な解釈を導き出すことは難しい。一定の形状以外の数種の埴が作られていることについて、何かを象った可能性もあり、機能的な問題以外の何らかの意匠が反映されている可能性も加味しておく必要があるものと思われる。
- また、菅田山15号墳出土埴は、註23文献では、床敷に使われていたものと推定されているが、仮に床敷に使用されたとしても厚さが1cm未満では石室内進入時に物理的に重圧に耐えきれず割れてしまう。
- なぜ、重量に耐えられるような厚い埴を作らなかったのか不明であるが、菅田山15号墳から出土した埴は、もともと、割れることを前提に作られていたものとも考えられなくもない。
- 菅田山15号墳出土埴の調査については小浜成氏（大阪府教育委員会）のご教示を得た。
- 28) 小口山古墳出土埴の調査については、小口山古墳の現地調査の際に河内一浩氏（羽曳野市教育委員会）のご教示を得た。
- 29) 下大迫幹洋 2001 「平野2号墳の調査成果－大和における終末期古墳の調査－」『日本考古学』32号 日本考古学協会
- これらの土製品は、一般的に古墳時代の陶棺にみられる蓋部がなく、身部のみで構成されるもので、陶棺の身部に比して内法の高さ（深さ）が浅いため、一般的に考古学用語として認識している陶棺の範疇に含めて陶棺と称することは難しいものである。私は、上記文献において、棺を収納・安置するための外容器、すなわち、棺台の一種として使用されていることから、その機能名から「棺台」もしくは、「棺の受台」と称することを提唱している。
- 30) 調査担当者の塙邇古墳・アカハゲ古墳調査会代表の北野耕平氏は、下記のa・b文献において、縁輪が施釉された土製品について、陶棺にあたる蓋がなく、深さが浅いため、陶棺と称することについて疑問を持ちつつも便宜上「縁輪陶棺」と称されている。従って、本稿では、従来からの呼称のとおり、「縁輪陶棺」と称することとする。
- a. 北野耕平 1980 「金象嵌竜文大刀」「日本古代の国家と宗教」上巻 吉川弘文館 12頁  
「平面的規模は遺体を伸展した状態で収容するに足るとはいえ、後後に盛行した陶棺に比べると著しく浅く、かつ蓋とみなすべき遺物を認めなかつたので、検討すべき問題を残している。」
- b. 北野耕平 1989 「大阪の終末期古墳」「シンポジウム青銅器の生産／終末期古墳の諸問題」 日本考古学協会 170頁  
「縁輪の陶棺は、じつは直接遺体をおさめるための陶棺と申していいかどうか問題があります。陶棺の長さは2m内外、幅も70cmぐらいあるという非常に大きなものです。それが漆塗の籠棺とともに奥室内に、はいっていたのですが、奥室内の広さは非常に狭くて同時に並べて入れるのは不可能である

とみられます。このことから漆塗の籠棺は、縁軸の陶棺の内に納められていた、つまり、陶棺は外棺をなしていたものだとみております。これをわれわれは、穢長の聖德太子の墓の奥壁の部分に置かれていた間人皇后の石製の浅い内刳りを上面にもつ外棺とよく一致する構造であると考えております。」

c. 香芝市二上山博物館編 2002 「二上山麓の終末期古墳と古代寺院－平野古墳群と尼寺廐寺跡－」  
香芝市二上山博物館

31) 前掲註30文献

32) 前掲註30a 文献12頁の中で北野耕平氏は下記の通り述べられている。

「とりわけ奥室内部は最も盗掘を蒙っていた部分で、床面に若干の漆塗籠棺と縁軸陶棺の破片とが、棺台を構築していたかとみられる大量の様原石の板石片と共に混在し、中にガラス製扁平管玉片も認められた。」

33) 土器の型式や年代観等については下記の文献による。

川越俊一 1983 「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 奈良国立文化財研究所

菅原正明 1983 「畿内における土器の製作と流通」「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 奈良国立文化財研究所

松本洋明 1988 「十六面・薬王寺遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第54冊 奈良県立橿原考古学研究所

34) 純貨の分類や年代観は下記の文献による。

永井久次男 2002 「新版 中世出土銭の分類図版」高志書院

35) 畠田和尊 1987 「巨勢山323号墳」「奈良県御所市 巨勢山古墳群II 御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査1-」御所市文化財調査報告書第6集 御所市教育委員会

36) 木場幸弘・畠田真二 1998 「佐田遺跡群II」高取町文化財調査報告 第19冊 高取町教育委員会

37) 森下恵介・西崎拓哉・中井公・藤原農一 1981 「古市城跡」「昭和55年度奈良市埋蔵文化財調査報告書」奈良市教育委員会

38) 山田良三 1976 「稲宿古墳群と近世墓(付、ヒガンド古墳の測量調査)」「奈良県古墳発掘調査集報1」奈良県文化財調査報告書第28集 奈良県立橿原考古学研究所

39) 香芝市教育委員会編 2001 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14」香芝市教育委員会

\*上記の文献では、「米粒状土製品」と称したが、土製品ではないため、本稿以後は米粒状遺物に改める。

40) 河上邦彦・本村光保 1997 「越部古墳」奈良県文化財調査報告書第82集 奈良県立橿原考古学研究所

41) 蒜戸谷裕 1987 「上山・ケゴヤ古墳」城崎町文化財調査報告9 城崎町教育委員会

42) 前掲註40文献

43) 橋本輝彦・木村史明 2000 「カタハラ古墳群発掘調査報告書」桜井市内埋蔵文化財1999年度発掘調査報告書2 財團法人桜井市文化財協会

平野2号墳から出土した米粒状土製品については、橋本輝彦氏や馬場寛氏から有益なご教授を得た。

表7 平野2号墳第1・2次調査出土土器等観察表

図番号	出土 位置	出土 肥位	器種	重量 (g)	形態の特徴	調査法	色調	施土	焼成 度	焼成度	備考
岡40-1 岡61-1	第2 調査区	⑤層 茶褐色少 土質	須恵器 (杯盤)	11.1 3.2	天井部はハラ切り後天井部、 口縁部は直さない外側す る。	外側：圓底へテナリ、 ロコナデ 内側：ヨコナデ	2.5YR6/1 (ヨリーブ灰)	密 (砂粒含む)	良好 50%	TK - 2095式期に比定	
岡40-2 岡61-2	第2 調査区	⑥層 茶褐色少 土質	須恵器 (杯盤)	126 3.0	器厚が全体的に薄い。 天井部と天井部の隙間を要 成しない。	外側：圓底へテナリ、 ヨコナデ 内側：ヨコナデ	2.5YR6/1 (黄灰)	密	良好 20%		
岡40-3 岡61-3	第2 調査区	⑦層 茶褐色少 土質 [一層]	須恵器 (杯盤?)	103 2.3	全体的に浅く扁平であり、 受部は太平で、立ち上がり が非常に低い。	外側：圓底へテナリ、 ヨコナデ 内側：ヨコナデ	2.5YR7/3 (黄土)	密 (砂粒含む)	不十分 20%	焼成が少一分で上部質を呈す る。飛鳥1～Ⅲ式期に比定 作業の可能性あり	
岡40-4 岡61-4	第2 調査区	⑧層 茶褐色少 土質	須恵器 (杯身)	11.9 3.3	全体的に浅く扁平であり、 受部はやや上側あとは下方へ びり曲線を形成。口縁部 内縫を残す	外側：圓底へテナリ、 ヨコナデ 内側：ヨコナデ	2.5YR7 (灰白)	密	良好 25%	TK - 2095式期に比定	
岡40-5 岡61-5	第2 調査区	⑨層 茶褐色少 土質	須恵器 (杯盤)	— 3.5	天井部と口縁部の底から やかに接觸を形成。口縁部 には段を付す	外側：圓底へテナリ、 ヨコナデ 内側：ヨコナデ	7.5YR6/1 (灰)	密	良好 —	MT - 15式期に比定	
岡40-6 岡62-6	第3 調査区	⑩層 茶褐色少 土質	器 (中空三層)	4.2 2.8	底部外面は齊滅している	外側：ナデ 内側：ナゲ	10YR6/1 (灰)	密	良好 —	V形式系統	
岡40-7 岡62-7	第3 調査区	⑪層 茶褐色少 土質	鉢 (中空上型)	4.0 3.6	底部 窓付 がみられる	外側：ナデ 内側：ナデ	10YR6/4 (灰)	やや粗 —	—	V形式系統	
岡41-8 岡61-8	第4 調査区	⑫層 石井抜き取 り穴出土	須恵器 (杯身)	10.2 3.0	立ち上がりが非常に低く、 底部の上面に1度の凹縫を 持す	外側：圓底へテナリ、 ヨコナデ 内側：ヨコナデ	5R5/ (灰灰)	密	良好 20%	飛鳥1～Ⅲ式期に比定	

図番号	出土位置	出土層位	器種	法量(cm) 口径 壁高	形態の特徴	調整法	色調	胎土	焼成	保存率	備考
[441-9] [442-9]	第4 調査区	高須子田原 1石臼下段 (石臼抜き段 り穴出し)	单出器	—	外腹に平行押き目・文、内面 に同心円文を施す	外腹：タタキ 内面：ナデ	Ns/ (灰)	青	良好		
[441-10] [442-10]	第2 調査区	高須子田原 ③腰 (土槽 (ハラス)上)	丸底輪	底盤 48 32	ほど高くないしつかり した高台をもつ、内面にや やかなミカサ調燃を施し、 見込み槽に円弧状文を施す	外腹：掌圧→ガサ 内面：ヨコナナ→ミガサ (ハラス)	Ns/ (灰)	青	良好	30%	
[441-11] [442-11]	第3 調査区	高須子田原 ③腰 (土槽 (ハラス)中)	丸貫輪沫	底盤 10.1 気泡 2.1	窪む 1基底6条／2.5cmの糸綱 をめぐらす	外腹：ナデ 内面：ナデ	5Y6/1 (灰)	(形較合)	良好	底部 20%	
[442-12] [442-12]	第3 調査区	高須子田原 ③腰 (土槽 上)層	平瓦	—	内面にタチ線引き日、凹面 に布目状抵抗を残す	内面：済整なし 凹面：済整なし	Ns/ (灰)	青	良好		
[442-13] [442-13]	第2 調査区	高須子田原 ④腰 (土槽 上)層	单出器 (灰)	底盤 7.8	底部外腹に自然地と砂粒が 混入して付着する	不明	Ns/ (灰)	青	良好	—	
[442-14] [442-14]	第2 調査区	高須子田原 ④腰 (土槽 上)層	单出器	—	外腹に格子状叩き目、内面 に同心円文を残す	外腹：タタキ 内面：ナデ	Ns/ (灰)	青	良好	—	
[442-15] [442-15]	第3 調査区	高須子田原 ④腰 (土槽 上)層	丸貫十字 底盤	底盤 11.6 11.6	半らな底部から、体部が少 なくやかに立ち上がる	外腹：ケズリ 内面：ナデ	Ns/ (灰)	青	良好	—	
[442-16] [442-16]	第3 調査区	高須子田原 ④腰 (土槽 上)層	土附器蓋	底盤 20.8 3.5	内面に1周環状をもつ 凹面、段落口縁に成型す る	外腹：ヨコナナ 内面：ヨコナナ	7.5Y7/6 (灰)	青	良	10%	外沿に墨付捺、大羽目算(音 原編4)に沿う

図版号	出土位置	出土層位	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	形態の特徴	調整法	色調	胎土	焼成	積石事	備考
図42-17 26663-17	第3 調査区	③厚 黄褐色沙質 土層	土軸器蓋	直径 346	4.0	外縁：口縁部は外反し、滑部を内 裏：裏へ折り返す	外縁：ヨコナナ 内面：ヨコナナ	10YR7/4 ((2-5)黄褐色)	密 (密閉含む)	真	11縦 828%	
図42-18 26663-18	第3 調査区	③厚 黄褐色沙質 土層	土軸器蓋	直径 340	6.1	外縁：口縁部は外反し、滑部を内 裏：裏へ折り返す	外縁：ヨコナナ 内面：ヨコナナ	10YR7/4 ((2-5)黄褐色)	密 (密閉含む)	真	11縦 820%	
図45-19 26664-19	6・7区 調査区	④厚 灰褐色沙質 土層	須恵器 (杯身)	直徑 —	残存 1.9	口縁部の立ち上がりは内傾 する	外縁：脚板へタケズリ、 ヨコナナ 内面：ヨコナナ	Ns/ (赤)	密	良好	—	渠島I～II型式別に比定
図45-20 2区 調査区-20	2区	⑤-1 厚灰褐色 砂質土層	須恵器 (杯身)	直徑 —	残存 2.9	口縁部の立ち上がりは内傾 する	外縁：脚板へタケズリ、 ヨコナナ 内面：ヨコナナ	5YR1 (紫灰)	密	良好	—	渠島I～II型式別に比定
図45-21 26664-21	5区	⑥厚 灰褐色沙質 土層	須恵器 (杯身)	直徑 —	残存 2.4	口縁部の立ち上がりは内傾 する	外縁：脚板へタケズリ、 ヨコナナ 内面：ヨコナナ	5YR1 (赤)	密	良好	—	渠島I～II型式別に比定
図45-22 26664-22	表様	—	須恵器 (杯身)	直徑 —	残存 2.4	口縁部の立ち上がりは内傾 する	外縁：脚板へタケズリ、 ヨコナナ 内面：ヨコナナ	5YR1 (紫灰)	密	良好	—	渠島I～II型式別に比定
図45-23 26664-23	1・2区 調査区	⑧-2 厚灰褐色 砂質土層	須恵器 (杯身)	直徑 —	残存 2.2	脚柱のため計幅不明、底部 未確認	外縁：脚板へタケズリ 内面：ヨコナナ	Ns/ (赤)	密	良好	—	新益大井部の可能性あり
図45-24 26664-24	1・2区 調査区	⑨-2 厚灰褐色 砂質土層	須恵器 (杯身)	直徑 —	残存 2.0	—	外縁：脚板へタケズリ 内面：ヨコナナ	23Y7/2 (灰青)	密	良好	—	怀道天井部と並記される TR-269号式別に比定

空番号	出土位置	出土層位	器種	法量(cm) 口径 縦幅	形態の特徴	測定法	色調	胎土	焼成 状況	保存率	備考	
岡45-25 岡版64-25	3・4区 7区	岡32 ⑧-1層 灰瓦褐色 砂質土質	須恵器	— —	外側に格子状網目文を施す 内側に同心円文を施す	外側: タタキ 内側: タタキ→カキメ	2.5YR5/1 (赤灰)	青	良好	—		
岡45-26 岡版64-26	1・2区 7区	岡32 ⑧-1層 灰瓦褐色 砂質土質	須恵器	— —	内側に同心円文を施す	外側: タタキ→カキメ	N7/ (灰白)	青	良好	—		
岡45-27 岡版65-27	7区	岡32 ⑨層 灰褐色 砂質土質	須恵器	— —	内側に同心円文を施す	外側: タタキ→カキメ	N7/ (灰白)	青	良好	—		
岡45-28 岡版65-28	西側 調査区	岡32 ⑤-2層 明褐色砂質 1層	平瓦	— —	内面に正格子叩き目、凹凸 に突出部を施す	凸面: 部分的にナデ 凹面: 部分的にナデ	2.5G7/ (青ナリ)7灰	青	良好	—		
岡45-29 岡版65-29	内側 調査区	岡32 ③-2層 明褐色砂質 1層	土師皿	1段元 11.4	焼存 1.8	口縁部が焼付いた直前の 内面: 焼成温度が高いため 立ち上がり	外側: 腹部ヨコナナ 内面: ヨコナナ	7.5YR8/6 (浅青白)	青	良好	20%	
岡45-30 岡版65-30	内側 調査区	岡32 ⑦層 灰褐色砂質 1層	瓦器類	13.0 5.4	口縁部等に沈痕を施す。 而及ぶ内面: 深点にミガキ 調整を施す。	外側: 宝庄→ヨコナナ 内面: ヨコナナ →ミガキ →ミガキ	N4/ (灰)	青	良好	25%	大輪型瓦器焼出一个輪型(出 幅半径: 22cm, T-5, 追加层数: 12 枚判)	
岡45-31 岡版65-31	内側 調査区	岡32 ⑩層 灰褐色砂質 1層	瓦質土盞	22.6 5.2	L型脚部が内側深点に立ち上 り、口縁部から腹部にかけ て3点の凹痕をもぐらす。 口縁部等に沈痕を施す。	外側: 尾張→門司3条。 内面: ヨコナナ →門司タマツ →ミガキ	10YR4/1 (褐灰)	青 (砂粒含む)	良好	—	丸見D型ないし河内D型(質 厚層半径)に相当	
岡45-32 岡版65-32	内側 調査区	岡32 ⑦層 灰褐色砂質 1層	丸質土盞	22.3 4.9	口縁部が中深点に立ち上 り、11脚部から腹面にかけ て3点の凹痕をもぐらす。 口縁部等に沈痕を施す。	外側: 可児→門司3条。 内面: ヨコナナ →門司タマツ →ミガキ	N3/ (青灰)	青	良好	20%	「輪型 和泉D型ないし河内D型(質 厚層半径)」に相当	

団番号	出土位置	出土層位	器種	法量(cm) 口径 腹高	形態の特徴	調整法	色調	胎土	焼成	残存率	備考
1457-33 同底65-33	西側 調査区	[1432] 灰褐色砂質 土層	瓦質土器	21.0 6.8	「T」型孔が内腹板に立ち上がり、外縁に開闊3条。 内部：41.上がり斜めハ タ	5Y7/1 (灰白)	青	良好	口輪部 和泉D.型ないし河内D.型 (青 40%)		
1458-34 同底66-34	6・7区 W1	[1432] 灰褐色砂質 土層	土器皿	8.6 1.3	口縁部が外輪状に立ち上がり、断端と底端との間に後 を施形する	10YR7/4 (1.5-5.5黄)	青	良好	70%		
1458-35 同底66-35	6・7区 W1	[1432] 黄褐色砂質 土層	土器皿	8.1 1.1	口縁部が外輪状に立ち上がり、断端と底端との間に後 を施形する	7.5Y7/4 (1.5-5.5黄)	青	良好	20%		
1458-36 同底66-36	6・7区 W1	[1432] 黄褐色砂質 土層	土器皿	10.4 1.5	「T」型孔は器や外輪状の 外縁的に立ち上がり、側部 と底部の間に後を施形する	10YR7/3 (1.5-5.5黄)	青	良好	25%		
1458-37 同底66-37	6・7区 W1	[1432] 灰褐色砂質 土層	土器皿	— 10.5	外縁部ヨコナデ 内面：ヨコナデ	7.5Y6/4 (1.5-5.5黄)	青	良好	—		
1458-38 同底66-38	6・7区 W1	[1432] 灰褐色砂質 土層	土器皿	— 2.0	「T」型孔口縁 外縁に立ち上がり、外縁 口縁部部下に坐いたヨコナデ	10YR7/4 (1.5-5.5黄)	青	良好	10%		
1458-39 同底66-39	7区-E1	[1432] 黄褐色砂質 土層	土器皿	9.7 2.2	外縁に立ち上がり、外縁 口縁部部下に坐いたヨコナデ を施す。口縁部内面がや や内側狀にくびれ	5YR6/6 (1.5-5.5黄)	青 (砂粒含む)	良好	25%		
1458-40 同底67-40	6区-E1	[1432] 灰褐色砂質 土層	土器皿	10.3 2.0	口縁部が外輪状の直線的に 立ち上がる	2.5Y7/2 (灰白)	青	良好	25%		

図番号	出土位置	出土層位	基盤	法面 (cm)	形態の特徴	調査法	色調	胎土	性況	保存率	備考
図58-41 W版67-41	6区-E 1	図32 ⑧-3層 端灰褐色 砂質土層	土師瓦	口徑 — 高さ 2.2	窓 11個部は板やかに外側する 外側：輪部ヨコナダ 内面：ヨコナダ	SYR6.6 (枠)	青	良好	25%		
図58-42 W版67-42	6区-W 1	図32 ⑧-3層 端灰褐色 砂質土層	青磁輪	窓 4.3	外側に透蓋文	10Y6.2 (オリ…79)	青	良好			
図58-43 W版67-43	6区	図32 ⑧-3層 端灰褐色 砂質土層	瓦器輪	窓 9.4 3.5	口縁唇部に沈像を施す。 前見込み部に差毛状の暗文 を施す	25Y7.1 (長引)	青	良好	45%	大和焼白一七(川越屋等)ないし 日-2(笠谷)編作に相当	
図58-44 W版67-44	6区-E 1	図32 ⑧-3層 端灰褐色 砂質土層	土師輪	窓 27.0 6.0	内側した口縁唇部をさりげ なく施し段折山巻に造形する 外側：輪部ヨコナダ 内面：ナダ	10Y8.4 (浅黄)	青 (砂粒含む)	良好	10%	口縁部 人和山型(芦原屋等)に相当	
図59-45 W版68-45	9区-W 1	表面	土師圓	— 1.6	口縁唇部が外側突出して立ち る	10Y8.3 (浅黄)	青	良好	—		
図59-46 W版68-46	10区-E 2	表面	瓦質土窓	— 4.3	瓦質土窓の口縁部と見われ る	NA/ (K)	粗	良好			
図59-47 W版68-47	11区-W 2	表面	瓦質 円形板	窓 5.6	口縁部がわざかに施せざる 外側：ナダ 内面：ナダ	NA/ (K)	粗	良好	—		
図59-48 W版68-48	10区-W 1	表面	土師輪	— 2.5	内側した口縁唇部をさりげ なく施し段折山巻に造形する 外側：ナダ 内面：ナダ	10Y8.4 (浅黄)	青 (砂粒含む)	良好	—	大和山型(芦原屋等)に相当	

図番号	出土位置	出土層位	器種	法寸(㎝) 口径 器高	形態の特徴	調整法	色調	胎土	焼成	保存率	備考
[659-49] [668-49]	10区-W2	表面	下部器身	深压 22.1 3.0	内曲した口沿部をさらに 折れ曲がった上部に重ねる 外側：ナマ 内面：ナマ	75Y85/4 (浅黄)	青 (砂粒含む)	良好	口縁部 10%	大和日程(骨原編年)に相当	
[659-50] [668-50]	11区-W2	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	土軸三 —	口縁部が外輪状に立ち上がり 残存 1.2	外側：調節ヨコナード 内面：ヨコナード	35Y6/6 (青)	青	良好	—	
[659-51] [668-51]	8区-W2	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	土軸三 96	口縁部が外輪状の直輪的に 立ち上がる	外側：調節ヨコナード 内面：ヨコナード	75Y87/4 (青、小粒)	青	良好	30%	
[659-52] [668-52]	8区-W1	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	土軸三 1.6	口縁部が外輪状の直輪的に 立ち上がる	外側：調節ヨコナード 内面：ヨコナード	75Y86/4 (青、小粒)	青 (砂粒含む)	良好	—	
[659-53] [668-53]	9区-F2	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	土軸三 1.9	口縁部が外輪状に立ち上がり 残存	外側：調節ヨコナード 内面：ヨコナード	10Y86/4 (青、小粒)	青	良好	—	
[659-54] [668-54]	8区-W2	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	土軸三 102	調節部が外輪状に立ち上がり 調節部と底盤の間に食を成形 する	外側：調節ヨコナード 内面：ヨコナード	75Y88/4 (浅黄)	青	良好	25%	
[659-55] [668-55]	11区-W2	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	瓦質粘井 5.1	1基位5条／2.5cmの差標 をめぐらす	外側：ナマ 内面：ナマ	10Y88/1 (灰白)	青	やや 不良	—	
[659-56] [668-56]	8区-F2	表面	図32 66号 暗赤色 砂質土質	— 62	全体は方形で直輪的に外 張り、上縁部を内側に折り させた。口縁部外側に小孔 2条めぐらし、凸縁の則に スランプを押捺す	外側：ミガキ 内面：ミガキ	25Y6/2 (灰黄)	青	良好	—	

器番号	出土位置	出土地位	器種	法量(cm)	形態の特徴	測量法	色調	胎土	底成	焼成率	備考
IE59-57 〔昭和69-57〕	8区-E 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	瓦筒 瓦筒	15.2 3.7	口縁部内面に1条波線、底 部内面に平行線状暗文、内 面に波文、ミガキ調整を施す	外側：輪郭ヨコナナ 内側：口縁部に1条波 線	N/A (未)	青	良好	50%	
IE59-58 〔昭和69-58〕	8区-E 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	瓦筒 瓦筒	— —	やや外張状に盛った高台 を施す	外側：ヨコナナ 内側：チヤ→輪文	N/A (未)	青	良好	底部 30%	
IE59-59 〔昭和69-59〕	8区-E 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	瓦筒 瓦筒	23.6 3.8	口縁部が内傾し、口縁部に1 条のゆるい凹線をめぐらす	外側：ヨコナナ 内側：ヨコナナ	N/A (未)	青	良好	5%	相乗D型に相当
IE60-60 〔昭和70-60〕	8区-E 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	十脚皿 十脚皿	復元 92 101	口縁部が外張状に立ちが り、輪脚と底部との境に微 を底形	外側：輪郭ヨコナナ 内側：ヨコナナ	7.5YR7.6 (未)	青	良	25%	
IE60-61 〔昭和70-61〕	8区-E 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	十脚皿 十脚皿	復元 96 101	口縁部が外張状に立ちが り	外側：輪郭ヨコナナ 内側：ヨコナナ	7.5YR7.6 (未)	青	良好	25%	
IE60-62 〔昭和70-62〕	8区-E 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	十脚皿 十脚皿	復元 86 1.7	口縁部が外張状の直線的に 立ち上がる	外側：輪郭ヨコナナ 内側：ヨコナナ	10YR7.4 (未)青(未)	青	良好	25%	
IE60-63 〔昭和70-63〕	8区-W 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	十脚皿 十脚皿	復元 96 2.0	口縁部が外張状の直線的に 立ち上がる	外側：輪郭ヨコナナ 内側：ヨコナナ	7.5YR7.6 (未)	青	良好	20%	
IE60-64 〔昭和70-64〕	8区-W 1	図32 〔8号 瓦筒 瓦筒 瓦質土層 砂質土層 上層〕	十脚皿 十脚皿	復元 102 2.0	口縁部がやや外凸をなして 立ち上がる	外側：輪郭ヨコナナ 内側：ヨコナナ	2.5YR5.6 (未)	青	やや 不良	20%	

図番号	出土位置	出土層位	器種	法量(cm) 口径 器高	形態の特徴		調整法	色調	胎土	焼成	残存率	備考
					外腹：腹部ヨコナード 内腹：ヨコナード	口縁部が外輪状に立ち上がり、口縁部と底部との間に接を成形。						
IS60-65 IS60-70-65	8区-W1	岡2 ⑩焼 灰褐色 砂質土質	土師皿	復元 109 2.2	口縁部が外輪状に立ち上がり、口縁部と底部との間に接を成形。		25YR6/8 (透)	青 (多板合)1	良好	30%		
IS60-66 IS60-70-66	8区-E1	岡2 ⑩焼 灰褐色灰岩 粘土質	土師皿	復元 96 2.1	外腹は口縁端部下に強いいき コナードを施し、外縁底に丸 みを呈して立ち上がる。		7.5YR6/4 (透)(小粒)	青 (多板合)1	良好	80%	底部に焼付付着	
IS60-67 IS60-70-67	8区-E1	岡2 ⑩焼 灰褐色灰岩 粘土質	土師皿	復元 97 1.9	口縁部内面に折り返しによ る明瞭な凹線を形成する		3YR7/6 (透)	青 (無機物の多 人物合)2	良好	45%		
IS60-68 IS60-70-68	8区-W1	岡2 ⑩焼 灰褐色 砂質土質	土師皿	復元 120 2.1	口縁部が外輪状に立ち上がり、 内面：ヨコナード		7.5YR7/4 (透)	青 (無機物の多 人物合)2	良好	30%		
IS60-69 IS60-70-69	8区-E1	岡2 ⑩焼 灰褐色 砂質土質	土師皿	復元 116 2.2	口縁部が内面溝狀に丸みをも つて立ち上がり、深部を上 に底形		10YR8/2 (灰)	青 (無機物の多 人物合)2	良好	45%	口縁部に粘土接合痕を明晰に 残す	
IS60-70 IS60-70-70	8区-E1	岡2 ⑩焼 灰褐色灰岩 粘土質	土師皿	復元 113 3.7	外腹は口縁端部下に強いいき コナードを施し、外縁底に丸 みを呈して立ち上がる。		5YR6/4 (透)(中粒)	青 (無機物の多 人物合)2	良好	70%	内面に炭化物付着	
IS60-71 IS60-71-71	8区-R1	岡2 ⑩焼 灰褐色灰岩 粘土質	土師皿	復元 15.2	口縁部が外輪状に立ち上がり、 内面：ヨコナード		3YR7/6 (透)	青 (無機物の多 人物合)2	良好	45%		
IS60-72 IS60-71-72	8区-E1	岡2 ⑩焼 灰褐色 砂質土質	土師皿	復元 14.2	口縁部内面溝狀に丸みをもつ て立ち上がり、口縁端部外 に屈曲する		5YR6/6 (透)	青 (無機物の多 人物合)2	良好	50%		

図番号	出土位置	出土層位	器種	法量(cm) 口径 横幅	形態の特徴	調整法	色調	胎土	焼成	保存率	備考
図60-73 図版71-73	8区-E 1	図32 ③輪 灰色釉瓦 瓦器	土器皿	15.4 3.0	外面は口縁部等に施い外 コナデを施し、口縁部が外 板状に丸みをもつてやさ かる。	内面：輪郭ヨコナデ 外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ヨコナデ	7.5V6/4 (1.5, 3.5)	密	良好	完形 胎部含め、内面に炭化物付着	
図60-74 図版71-74	8区-E 1	図32 ③輪 灰青色 砂質土器 歩道片	土器皿	13.4 2.6	底部から断続的にかいて横 やかに内削し、口縁部は 外に突出する。	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ヨコナデ	5YR6/6 (6)	密 (歩道含む)	良好	20%	
図60-75 図版71-75	8区-E 1	図32 ③輪 灰青色釉瓦 瓦器	土器皿	15.4 3.5	口縁部が外輪状の直線的に 立ち上がる	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ヨコナデ	5YR6/6 (6)	密	良好	80%	
図60-76 図版71-76	8区-E 1	図32 ③輪 灰青色 砂質土器	土器皿	14.9 3.2	口縁部が外輪状の直線的に 立ち上がる	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ヨコナデ	5YR6/6 (6)	やや粗	良好	65%	
図60-77 図版72-77	8区-W 1	図32 ③輪 灰青色 砂質土器	瓦器碗	10.8 3.3	「輪郭部に沈線を施す。内 面に弱ちやくの文を施す」	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ナードヨコナデ →鉛文	25Y5/1 (焼灰)	密	良好	30%	人和型瓦器碗III-E (川越層 半)、ないしII-2 (近江層半) に相当すること想われる。
図60-78 図版71-78	8区 W 2	図32 ③輪 灰青色 砂質土器	瓦器碗	10.2 3.3	「輪郭部に沈線を施し、内 面に弱ちやくの文を施す」	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ナードヨコナデ →鉛文	25Y5/1 (焼灰)	密	良好	40%	人和型瓦器碗III-E (川越層 半)に相当すること想われる。
図60-79 図版71-79	8区-E 1	図32 ③輪 灰青色 砂質土器	瓦器碗	14.6 4.2	「輪郭部に沈線を施し、内 面にはやや密なくがキ折笠 を施す」	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ナードヨコナデ →鉛文	N4/ (灰)	密	良好	25%	人和型瓦器碗III-A (古相 川層半)、ないしII-2 (近江層半) に相当
図61-80 図版72-80	9区-F 1	図32 ③輪 灰青色 砂質土器	瓦器碗	— 2.2	逆三角形の窓合をもつ。見 込み部に溝を状況を施す	外斷：輪郭ヨコナデ 内面：ヨコナデ→鉛文	N4/ (灰)	密	良好	—	

器種名	出土位置	出土層位	縦横	法面 (cm) 口径 器高	形態の特徴	調整法	色調	胎土	焼成 状況	備考
図61-81 図版72-81	10区-W 1	国32 砂質灰土層 陶質灰土層	瓦器輪	—	残存 底面・側面の端台をもつ。 内面に施された假文を施す。	外腹：ナゲ 内腹：ヨコナデ・端文 (4)	青	良好		
図61-82 図版72-82	10区-W 1	国32 灰色素灰岩 粘土	土師皿	復元 8.9	1.4 「口縁部が外延状の屈曲的に 立ち上がる」	外腹：側部ヨコナデ 内腹：ヨコナデ (4.5-5.0cm)	10YR7/4 (4.5-5.0cm)	やや粗	良好	40%
図61-83 図版72-83	8区-E 1	国32 砂質灰土層 粘土	土師器 羽釜	23.6	8.1 「口縁部の脚を広く張り出しに 成形し、口縁部を下方に成 型させた深ねじり状に成 形する」	外腹：ヨコナデ 内腹：ヨコナデ (4.5-5.0cm)	75YR7/4 (4.5-5.0cm)	青 (多少含む)	良好	20% 人和B型(管原編年)に相当
図61-84 図版72-84	8区-E 1	国32 灰白色灰土層 粘土	土師器 羽釜	—	土師器蓋の穿孔	外腹：ナゲズ 内腹：ナゲ (4.5-5.0cm)	7.5YR7/4 (4.5-5.0cm)	やや粗	良好	—
図61-85 図版72-85	8区-E 1	国32 灰褐色 砂質灰土層	土師器 羽釜	1.師22	— — 上部器蓋の穿孔	外腹：ナゲ 内腹：ナゲ (4.5-5.0cm)	7.5YR7/3 (4.5-5.0cm)	青	良好	—
図61-86 図版72-86	8区-E 1	国32 灰褐色 砂質灰土層	土師器 羽釜	28.6	20.6 「側部の張りに比べて底部 の脚を狭く成形する」「極 度に内側を内側に折り返す」	口縁部の脚を広く外張せ て、側部の張りに比べて底部 の脚を狭く成形する。 「極度に内側を内側に折り 返す」	5YR6 (4.5cm)	粗	40%	大和B型に相当

\*須恵器の型式名は下記の文献による型式名を示す。

山邊範三 1966 「陶色占塗出神 11 平安寺岡考古学クラブ  
古代の土器研究会稿 1982 「古代の十器」 郡城の土器集成」 古代の十器研究会

\*川越編年とは下記の文献による瓦器編の型式名を示す。

川越俊一 1983 「大和地方出土の瓦器をめぐる」、「その問題」 「文化財論叢」 全員同立文化財研究会創立30周年記念論文集、奈良国立文化財研究所

\*近江俊年とは下記の文献による瓦器編の型式名を示す。

近江俊年 1981 「大和空見器編の編年と年代の再検討」 「古代文化」 43 野村忠八・古河大学學會

\*吉原昭明とは下記の文献による瓦器編の型式名を示す。

吉原昭明 1983 「畿内における土器の調査と被通」 「文化財論叢」 奈良國立文化財研究所創立30周年記念論文集、奈良國立文化財研究所

## 第V章 自然科学分析

### 1 平野2号墳石室石材の石種

#### (1) はじめに

平野2号墳に使用されている石材を裸眼で観察した。当古墳付近は石材の供給に恵まれない地域である。それにも関わらず巨大な石室が構築されている。石材の供給の解明に興味が持たれる古墳である。

横穴式石室の使用石材の石種は図64に示すとおりに識別できるが、以下に石種の特徴と推定される石材の採石地について述べる。

#### (2) 石種の特徴と採石地

石室に使用されている石材の石種を裸眼で観察した。石種はアブライト、輝石安山岩、流紋岩質火山礫凝灰岩、流紋岩質凝灰角礫岩、チャート、弱片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩A、片麻状斑状黒雲母花崗岩Bである。

以下、各石種の特徴と採石推定地について述べる。

#### 【アブライト】

色は白色で、礫形が亜円である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~3mm、量が中である。長石は白色、粒径が2~3mm、量が非常に多い。

このような岩相を示すアブライトは領家式化崗岩類の黒雲母花崗岩の一部分で黒雲母が非常に少なくなった岩相に似ている。礫形が川原石様であることから大阪層群の礫層の礫が流出した葛下川の川原石か王寺町付近の大和川の川原で採石されたものであろう。

#### 【輝石安山岩】

色は風化面では灰色、褐色で、礫形が角、亜角である。輝石の斑晶がごく僅かにみられる。輝石は褐色、柱状で、粒径が0.5~1mm、量がごくごく僅かである。長軸が流理の方向に並ぶ。石基はガラス質である。

このような岩相を示す輝石安山岩は王寺町の南西部にある明神山火山岩の岩相に似ている。石材は川原石様であることから、王寺町畠田付近の谷川が採石地と推定される。

#### 【流紋岩質火山礫凝灰岩】

色は灰白色で、黒色粒が点在する。構成粒は流紋岩質溶結凝灰岩、軽石である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、ややガラス質で、粒形が亜角、粒径が2~20mm、量が多い。軽石は灰白色、粒形が亜角、亜円、粒径が5~20mm、量が多い。基質は灰白色、緻密である。

このような岩相を示す流紋岩質火山礫凝灰岩は二上層群下部ドンズルボー層の北部の岩相に似ている。採石地としては太子町春日の牡丹洞東方付近が推定される。

#### 【流紋岩質凝灰角礫岩】

色は灰白色で、黒色粒が点在する。構成粒は流紋岩質溶結凝灰岩、軽石である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、ガラス質で、粒形が亜角、粒径が2~45mm、量が多い。軽石は灰白色、粒形が亜

角、亜円、粒径が2~65mm、量が多い。基質は灰白色、緻密である。

このような岩相を示す流紋岩質凝灰角砾岩は二上層群下部ドンズルボー層の北部の岩相に似ている。採石地としては太子町春日の牡丹洞東方付近が推定される。

#### 【チャート】

色は青灰色、灰色、灰白色で、礫形が亜角、亜円である。チャートは葛下川流域に分布する大坂層群の礫層として含まれる。礫層の礫が流出した二次礫が王寺から穴虫にかけての葛下川流域にみられる。場所は採石地を限定できない。

#### 【弱片麻状黒雲母花崗岩】

色は灰色で、弱い片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が囁み合っている。石英は無色透明、粒径が1~3mm、量が多い。長石は灰白色で、粒径が1~2mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1.5mm、量が僅かである。黒雲母は片麻状の方向に並んでいる。

このような岩相を示す弱片麻状黒雲母花崗岩は王寺町の南部に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。谷川に転がっているような礫であることから王寺町南部の山地で採石されたと推定される。

#### 【片麻状斑状黒雲母花崗岩A】

色は灰色で、片麻状を呈する。長石の斑晶が点在する。石英・長石・黒雲母が囁み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5~2mm、量が多い。長石は灰白色で斑晶をなすものと基質のものがある。斑晶をなす長石は短柱状で、粒径が10~40mm、量が多い。基質をなす長石は粒径が1~5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~2mm、量が僅かである。黒雲母は片麻状の方向に並んで縞状をなす。

このような岩相を示す片麻状斑状黒雲母花崗岩Aは王寺町の南部に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。谷川に転がっているような礫であることから王寺町南部の山地で採石されたと推定される。

#### 【片麻状斑状黒雲母花崗岩B】

色は灰色で、片麻状が顕著である。長石の斑晶が点在する。石英・長石・黒雲母が囁み合っている。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が中である。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶をなす長石は短柱状で、粒径が8~30mm、量が中である。基質をなす長石は粒径が1~2mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~2mm、量が中である。黒雲母は片麻状の方向に並んで縞状をなす。

このような岩相を示す片麻状斑状黒雲母花崗岩Bは王寺町の南部に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。谷川に転がっているような礫であることから王寺町南部の山地で採石されたと推定される。

#### (3) 石材の使用傾向

石室に使用されている石材の使用傾向を石室の壁石・天井石、排水施設の石、棺台基礎上面(床面)の石、玄室の敷石、羨道の敷石と使用個所ごとにみれば、石種構成と採石地が異なる。

以下、各場所の石材の使用傾向とその採石地について述べる。

#### 【玄室と側壁・天井石】

片麻状斑状黒雲母花崗岩A、片麻状斑状黒雲母花崗岩Bが多く使用され、僅かに弱片麻状黒雲

母花崗岩が使用されている。これらの石材は岩相的に僅かに異なるのみであり、このような岩相変化は數十～数百mの範囲で生じていることから、一個所で採石されたと推定される。採石地は前述のように干寺町の南部が推定される。

#### 【排水施設の石】

玄空の周間に排水用の施設があり、拳大の礫が使用されている。種類は輝石安山岩が非常に多く、1個のみが流紋岩質火山礫凝灰岩の破片である。このような安山岩礫は当古墳の北方にある明神山周辺の谷に多くみられる。また、明神山の裾野にはチャート礫を含む大阪層群が分布する。一地点で採石されたとすれば畠田付近の谷から採石されたと推定される。流紋岩質火山礫凝灰岩は牡丹洞付近の石と推定される。

#### 【棺台基礎上面（床面）の石】

僅かの石しか残存しなかったが、その多くは輝石安山岩であり、1個のみがアブライトであった。輝石安山岩は畠田付近の谷で採石されたと推定されるが、アブライトは蝶形が亜円で、葛下川の川原石か大和川の川原石か判断したい。

#### 【玄室の敷石】

僅か7個しか残存していないが、全て二上山系凝灰岩製の加工石である。石種は流紋岩質火山礫凝灰岩、流紋岩質凝灰角礫岩で、似た岩相を呈する。採石地として牡丹洞の東方付近が推定される。

#### 【狭道の敷石】

狭道の床面全面に敷かれていた敷石は、拳大以下の川原石で輝石安山岩が非常に多く、チャートが僅かである。排水施設の石に比べて礫径が小さい。これらの石材を一個所で採石するとすれば、畠田から流れ出す谷川の下流付近が推定される。

以上のように、二上山系凝灰岩を除けば、石室に使用されている石材の全てが近くの干寺町の南部で採石できる石である。

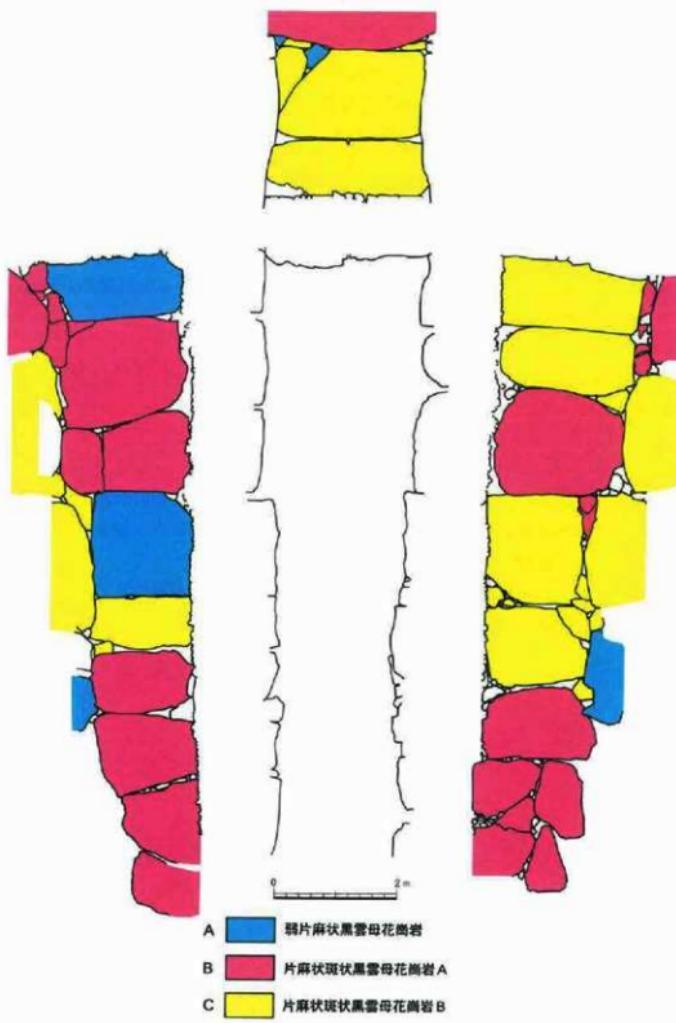


図64 平野2号墳横穴式石室の石材石種識別図 ( $S=1/80$ )

## 2 平野2号墳石室内部調査に伴う石室内外の温湿度の変化について

### (1) はじめに

平野2号墳の横穴式石室は、15世紀以降から調査時現在に至るまでの約500年の間、外気から遮断されていた。このような事例は極めて希なため、長らく封鎖されていた横穴式石室内部における温湿度の変化と発掘調査による人の出入り等が石室環境に与える影響等を探るために石室外と石室内の玄室中央部付近の合計2箇所に温湿度計を設置して石室内外の温湿度を記録した。<sup>1)</sup>

石室内外の温湿度の計測値等の測定データの詳細は表8や図65・66に委ねるとして、ここでは、測定データから得られた石室内外の環境について簡潔にまとめておきたい。

### (2) 石室内外の温湿度の変化について(図65・66、表8・9)

表8 平野2号墳横穴式石室内外の温湿度の月別平均値

\*小数点第二位以下は四捨五入

石室内外の温湿度の変化	8月の平均値	9月の平均値	10月の平均値	11月の平均値
外気温度(℃)	35.6	32.0	24.5	18.1
外気湿度(%)	44.1	40.4	50.6	51.4
玄室内温度(℃)	23.1	22.6	21.3	18.9
玄室内湿度(%)	76.9	75.9	75.7	69.7

玄室の温度は、特に夏の8～9月では外気温度が高くなるにもかかわらず、急激に変化することはなく、ほぼ一定であり、外気とは異なった環境条件下にあることがわかる。

発掘調査前に始めて玄室内に侵入した時の石室の温湿度は90%であったが、羨道部に堆積していた土砂を除去して石室が開口すると、やがて約80%に低下した。玄室の調査は、毎日調査の始まる午前9時に羨道部を被覆するシートを開封し、調査が終了する午後4時30分には入口の羨道部をシートで被覆して外気から遮断していたが、調査当日の一日の玄室の温湿度は、シートを開けてから急激にすぐには下がらず、石室の人の出入に伴う外気の流入に影響されるせいか調査を開始してしばらく経った正午以降から夕刻にかけて下がるという傾向を示している。<sup>2)</sup>

総じて外気温度が高いと玄室の温湿度が回復しやすい傾向があり、夕刻に下降した温湿度も翌朝には発掘調査期間の玄室温湿度の平均値である80%代の温湿度に自然に回復しており、6.8mの長い羨道部が緩衝地帯として玄室の保湿と保温に大きな影響を与えていているものと推測される。

### (3) まとめ

平野2号墳では、概ね、土塚古墳や高松塚古墳等の壁面を持つ石室内外の温湿度変化とほぼ同様の結果が得られた。とくに玄室の保湿・保湿については、玄室の前に設けられた長大な羨道等の空間の有無によって微妙に異なることが予測され、今後、こうした横穴式石室についても調査時における石室内外の測定データを綿密に収集して比較・検討する必要性がある。

### 註

- 1) 表9や図65・66のグラフの横穴式石室内外の温湿度の測定値の一部については補正値を記している。
- 2) 部分的に昼間でも温湿度が70%以下に急激に低下している箇所があるが、これは、玄室の調査記録の写真撮影に伴ってカメラのレンズの結露を防ぐため扇風機により人为的に温湿度を下げたことによるものである。
- 3) 福岡県教育庁管理部文化財課編 1975 『特別史跡 土塚古墳の保存』 装飾古墳保存対策研究会
- 4) 文化庁編 1987 『国宝 高松塚古墳壁画－保存と修理－』 第一法規出版株式会社

温湿度測定グラフ 8・9月

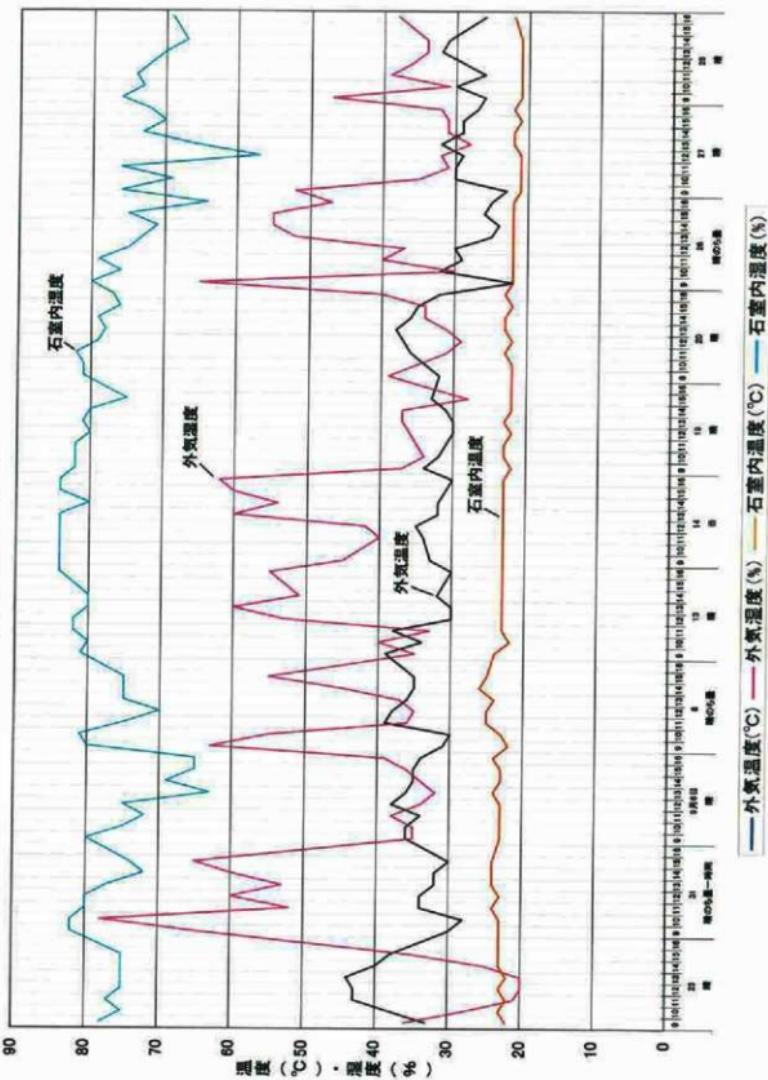


図65 平野2号墳横穴式石室の温湿度变化（8・9月）

温湿度測定グラフ 10・11月

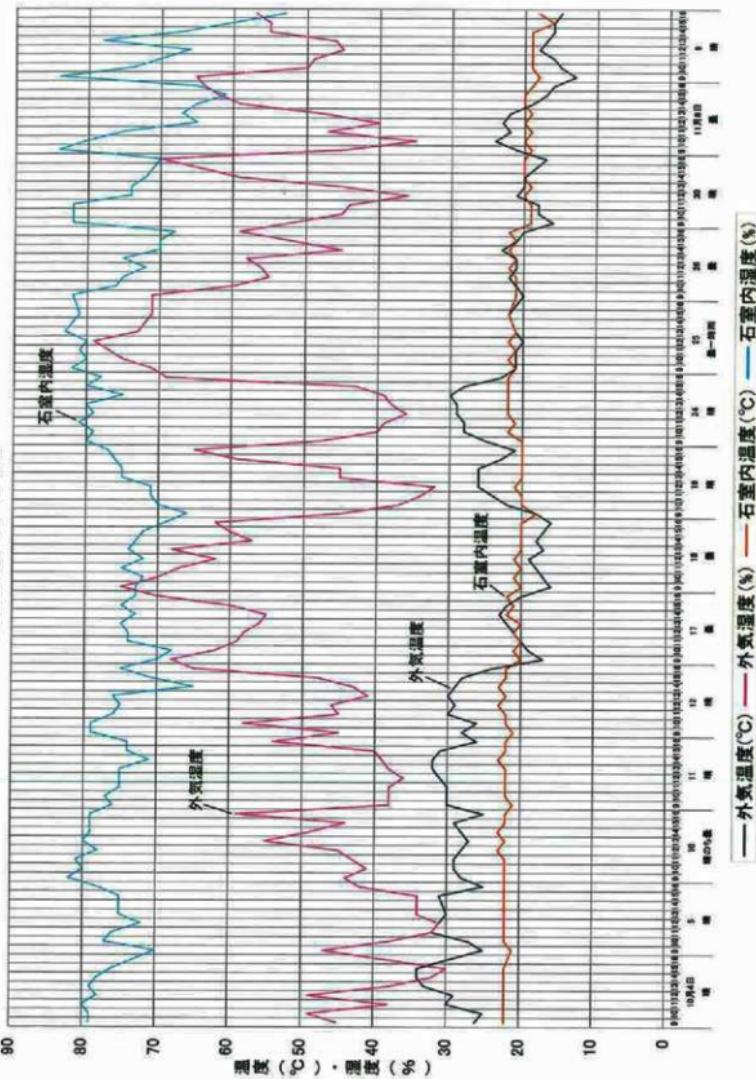


図66 平野2号墳横穴式石室内の温湿度変化 (10・11月)

表9 平野2号墳横穴式石室内調査時の温湿度変化

月 日	天 气	時 刻	外 気 温 度 (℃)	外 気 湿 度 (%)	石 室 内 温 度 (℃)	石 室 内 湿 度 (%)
8月25日	晴	9:00	33	36	22	78
		10:00	38	28	23	75
		11:00	43	21	22	77
		12:00	43	20	23	75
		13:00	44	20	22	75
		14:00	40	25	23	75
		15:00	38	35	23	75
8月31日	晴のち曇 一時雨	9:00	30	65	23	82
		10:00	28	78	23	82
		11:00	31	52	24	80
		12:00	34	60	23	80
		13:00	32	53	24	77
		14:00	32	60	24	72
		15:00	30	65	24	74
9月6日	晴	9:00	36	35	23	80
		10:00	36	35	23	75
		11:00	34	38	23	72
		12:00	38	34	23	75
		13:00	36	32	24	63
		14:00	35	34	23	69
		15:00	35	36	23	65
9月8日	晴のち曇	9:00	34	39	24	65
		10:00	31	63	22	80
		11:00	30	55	23	81
		12:00	39	36	25	75
		13:00	36	37	24	75
		14:00	35	45	26	75
		15:00	35	55	25	75
9月13日	晴	9:00	39	35	24	81
		10:00	34	40	22	80
		11:00	38	33	23	82
		12:00	30	53	23	82
		13:00	30	60	23	80
		14:00	32	51	23	80
		16:00	30	55	23	84
9月14日	曇	9:00	33	43	24	80
		11:00	34	40	23	84
		12:00	35	42	23	84
		13:00	32	60	23	84
		14:00	32	54	23	80
		15:00	31	60	23	84
		16:00	30	62	23	84
9月19日	晴	9:00	34	37	22	82
		10:00	32	34	23	82
		11:00	31	35	23	82
		12:00	30	36	22	80
		13:00	30	37	23	81
		14:00	31	37	22	80
		15:00	33	28	22	75
9月20日	晴	9:00	32	39	22	81
		10:00	34	35	22	81
		11:00	36	31	23	82
		12:00	37	29	22	79
		13:00	38	31	23	78
		14:00	36	34	23	79
		15:00	35	34	22	76
		16:00	32	40	23	77

月 日	天 気	時 刻	外 気 温 度 (℃)	外 気 湿 度 (%)	石 室 内 温 度 (℃)	石 室 内 湿 度 (%)
9月26日	晴のち曇	9:00	22	65	22	80
		10:00	32	30	22	76
		11:00	29	40	22	79
		12:00	30	37	22	75
		13:00	25	52	22	73
		14:00	24	55	22	71
		15:00	26	55	22	75
		16:00	25	47	22	64
9月27日	晴	9:00	23	52	21	76
		10:00	30	35	21	69
		11:00	30	31	21	76
		12:00	29	32	21	57
		13:00	32	28	22	66
		14:00	29	31	22	73
		15:00	29	31	21	70
		16:00	27	32	22	72
9月28日	晴	9:00	26	47	21	76
		10:00	30	31	21	73
		11:00	26	39	21	74
		12:00	29	36	21	72
		13:00	32	34	21	70
		14:00	31	34	21	67
		15:00	26	38	22	69
		9:00	26	45	22	79
10月4日	晴	10:00	25	49	22	79
		11:00	30	38	22	80
		12:00	29	49	22	78
		13:00	33	38	22	79
		14:00	34	32	22	78
		15:00	34	30	22	76
		9:00	25	47	21	70
		10:00	27	38	22	77
10月5日	晴	11:00	32	32	22	76
		12:00	31	31	22	72
		13:00	30	34	22	75
		15:00	31	34	22	75
		16:00	25	42	22	78
		9:00	28	44	22	82
		10:00	29	41	22	80
		11:00	29	43	22	81
10月10日	晴のち曇	12:00	28	45	23	78
		13:00	27	35	22	80
		14:00	28	49	23	79
		15:00	29	44	22	79
		16:00	25	59	22	79
		9:00	30	38	21	76
		10:00	30	38	22	77
		11:00	30	38	22	75
10月11日	晴	12:00	31	36	22	75
		13:00	32	38	22	75
		14:00	32	39	23	71
		15:00	31	40	22	74
		16:00	26	54	22	74
		9:00	28	45	21	79
		10:00	26	58	22	79
		11:00	30	45	22	76
10月12日	晴	12:00	29	46	23	75
		13:00	30	41	22	76
		14:00	29	43	23	65
		15:00	28	48	22	71
		16:00	24	65	22	75

月 日	天 气	時 刻	外 気 温 度 (℃)	外 気 湿 度 (%)	石 室 内 温 度 (℃)	石 室 内 湿 度 (%)
10月17日	曇	9:00	17	68	20	70
		10:00	19	62	21	68
		11:00	20	59	20	74
		12:00	21	58	21	71
		13:00	22	56	20	75
		14:00	23	55	22	73
		15:00	22	60	21	75
		16:00	20	70	22	73
10月18日	曇	9:00	16	75	20	73
		10:00	17	70	21	72
		11:00	18	67	20	75
		12:00	19	62	21	72
		13:00	17	68	20	74
		14:00	18	57	20	73
		15:00	17	60	20	72
		16:00	16	62	20	69
10月19日	晴	9:00	18	45	18	66
		10:00	22	37	20	70
		11:00	24	34	20	71
		12:00	26	32	21	71
		13:00	26	45	20	75
		14:00	26	45	20	75
		15:00	23	59	20	76
		16:00	21	63	20	77
10月21日	晴	9:00	25	48	20	80
		10:00	28	40	22	79
		11:00	28	39	21	81
		12:00	29	36	22	79
		13:00	29	38	22	80
		14:00	30	39	22	75
		15:00	28	43	22	80
		16:00	23	69	22	78
10月25日	曇-時雨	9:00	21	71	21	82
		10:00	21	75	22	80
		11:00	21	77	21	81
		12:00	20	79	22	80
		13:00	21	73	21	83
		15:00	22	71	22	81
		16:00	20	71	21	82
		9:00	20	71	21	82
10月26日	曇	10:00	21	60	21	76
		11:00	22	55	21	75
		12:00	21	56	22	72
		13:00	21	58	21	75
		14:00	23	45	22	70
		15:00	21	52	21	70
		16:00	20	59	22	68
		9:00	16	52	19	82
10月30日	晴	10:00	18	45	19	82
		11:00	18	44	19	82
		12:00	21	36	20	74
		13:00	20	45	19	74
		14:00	20	59	20	72
		15:00	17	70	20	70
		16:00	17	70	20	70
		9:00	21	45	19	84
11月 8日	曇	10:00	24	35	20	80
		11:00	22	47	19	75
		12:00	23	40	20	65
		13:00	22	48	19	67
		14:00	19	59	20	65
		15:00	17	62	20	61
		16:00	16	64	19	65
		9:00	13	65	18	84
11月 9日	晴	10:00	15	50	19	74
		11:00	16	49	19	71
		12:00	18	45	19	66
		13:00	17	46	19	78
		14:00	16	55	19	67
		15:00	16	55	16	60
		16:00	15	57	18	53

### 3 平野2号墳石室内部に残る滯水線について

#### (1) はじめに

平野2号墳の横穴式石室内の羨道・玄室の左右両側壁には黒い線が付着していた。当初はそれが何かはわからなかったが、ようやく玄室内に浸入して間近にそれを見た時、黒い物体は炭化物であることが判明した。なぜ、このような炭化物の滯水線が石室内に付着しているのか不明であったが、調査が進むにつれ、玄室内から炭化物の集積層（⑦層）が検出され、豪雨や洪水等によって石室内に水が浸入した際に玄室内に堆積していた炭化物が浮上して側壁に付着し、石室の水が排水溝を通じて石室外に徐々に排出された際に側壁に残されたものであることが判明した。

石室内にこのような炭化物が付着する例は極めて珍しい事例であるので、石室の調査時の記録として石室内に残された滯水線の概要と、その形成時期等について簡潔にまとめておきたい。

#### (2) 石室の滯水線について（図67、写真62）

玄室の滯水線は合計6条認められた（図67、写真62、巻頭原色図版8-2・9、図版21）。調査前の玄室の表面の標高が53.70cmに対して玄室左右両側壁に付着した一番高位の滯水線は標高54.37cmであることから、玄室には最大で67cmの高さまで水が滯水していたことになる。このような滯水線は平野2号墳から北東約6kmに位置する生駒郡斑鳩町藤ノ木古墳でも確認されている。藤ノ木古墳は未盗掘の家形石棺内から大刀や馬具等の多数の豪華な副葬品が出土したことで著名な古墳であるが、玄室の側壁に水が浸入したことを示す泥水で形成された滯水線が付着しており、家形石棺内にも5条の滯水線の痕跡が残されていた。

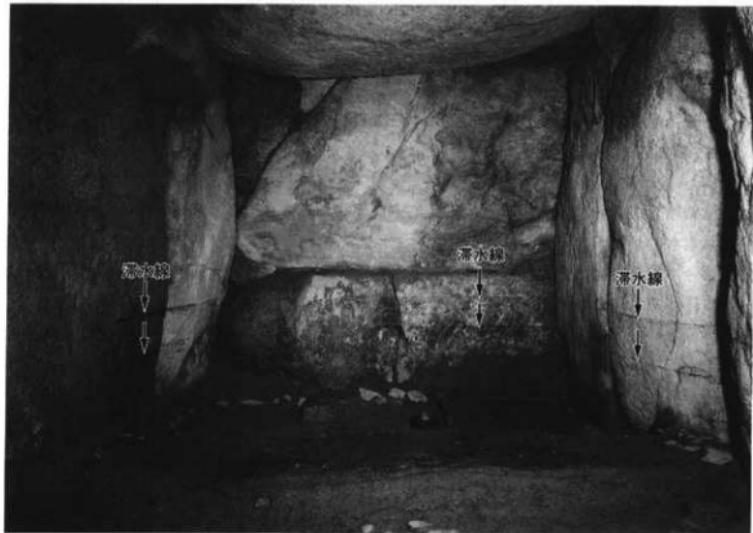


写真62 平野2号墳横穴式石室の玄室側壁・奥壁の滯水線

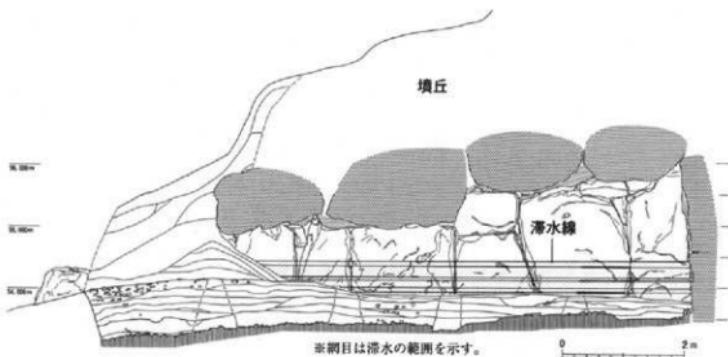


図67 平野2号墳横穴式石室内の滯水線

藤ノ木古墳の発掘調査報告書では平安時代後期頃から墳丘盛土の流失が始まる同時に漏水により、水が徐々に石室内に浸透して滯水したものと解釈しているが、藤井利章氏は、奈良県内の気象災害史の記録や地元の古文献を基に、戦後の開墾による墳丘の削平以後、第1次調査時現在に至るまでの新しい時期に形成された可能性を指摘している。<sup>31)</sup>

平野2号墳も石室内に大量の水が侵入した要因としては、藤ノ木古墳と同様に付近一帯の開墾等に伴う墳丘の削平以後、一時的な集中豪雨等によって墳丘の隙間から石室内に多量の雨水が侵入したものと推定される。石室内への雨水の侵入時期については、土砂の堆積によって羨道部が閉塞され、石室が閉ざされた15世紀以降から現代までのある時期とする以外は確実な時期は不明と言わざるを得ないが、藤ノ木古墳の石室を滯水させる規模の水量は、北葛城地域付近一帯に影響を及ぼす程の大規模な豪雨であったものと推定され、藤ノ木古墳と地域的にも比較的近い位置にある平野2号墳の滯水線も藤ノ木古墳と同時期に形成されたものである可能性も考えられる。

### (3)まとめ

石室内への雨水の侵入は、入念に版築土で密閉・構築された石室内においてもその立地によつては後世の墳丘の人為的な改変等の結果、集中豪雨等の外的気象の影響により、墳丘の僅かな隙間から雨水等が侵入する可能性があることを示唆している。

平野2号墳の場合は、偶然にも中世の石室の再利用時に玄室内に堆積していた炭化物層が雨水の流入に伴って水の浮力によって浮上し、石室の側壁に付着して黒い滯水線を形成していたため、石室内に雨水が侵入していたことが判明したが、このような肉眼で観察できる確実な痕跡がなければ認識することは難しく、当古墳以外にも近隣の古墳の石室内を注視すれば、当時の気象災害を物語る何らかの痕跡がみられる可能性もある。石室内に残された滯水線は、奈良県内における気象災害史を研究する上でも貴重な資料と成り得るものと思われる。

### 註

1) 奈良県立橿原考古学研究所編 1995 「斑鳩藤ノ木古墳第2次・3次調査報告書」 斑鳩町

2) 堀井甚一郎 1961 「最新奈良県地誌」 大和史蹟研究会

3) 藤井利章 1997 「藤ノ木古墳石棺水位線の疑問」「神女大史学」14号 神戸女子大学史学会

## 第VI章 平野1号墳の横穴式石室

### 1 はじめに

平野1号墳（平野車塚古墳）については、既に『香芝町史』編纂に伴って石室の実測図面が作成・公開されているが、新たに確認された平野2号墳の横穴式石室と比較・検討するにあたってより詳細な石室のデータが必要となり、平成13年度国庫補助金事業として、改めて横穴式石室の平面図や側面図等の詳細な実測図面を作成することとした。

平野1号墳の古記録等については、第II章4に委ねるとして、ここでは実測調査による横穴式石室の概要等について概観することとする。

### 2 横穴式石室

#### (1) 横穴式石室の概要 (図68・69、図版7~10)

平野1号墳は、平野古墳群の中でも最も東側の丘陵の東端部に築造されている。古墳の北側と東側は、既に宅地造成の際に削平されており、墳丘南側の渓道部付近や墳丘の西側の大半も土砂採集によって削平されて墳丘は著しく崩壊している。これまででは、一辺20m、高さ3.5mの方墳と考えられていたが、平成11年度に作成した地形測量調査からは方墳ではなく、平野2号墳と同様に直径24~26m前後の円墳である可能性が強くなっている。

平野1号墳の主体部は、両袖式の横穴式石室で、石室は墳丘の中心からやや南側に構築されている。開口方向は南南東方向で主軸は国土座標北に対し西へ14度前後振れを持つ。

石室は玄室・渓道から成り、玄室は完存しているが、渓道は現在の渓道先端部の前方に、さらに1石程度あったものと推定され、その残りの石材と推定される石材3石が前方に散乱している。

横穴式石室の全長（残存長）は約9.2mで、玄室は、長さ3.5m、幅2.8m、高さ（現存値）2mを測り、渓道は、長さ（残存長）5.7m、幅1.8mで、高さ（現存値）1.5mを測る（図69）。

#### (2) 玄室の規模・構造 (図69、図版8・9)

玄室は、幅2.8m、長さ3.5mで、現在の床面からの高さは約2mを測る。左側壁の玄門よりの1石（列）目の上段がやや不揃いの石を組み合わせた乱石積になるが、基本的に左右両側壁とともに表面は比較的面の整った花崗岩の巨石2石を横位に使って上下2段積で構成されており、上段で内側へ緩やかに内傾させて持ち送りを行っている。

玄室左側壁は、前方から1石目の下段は縦約1.3m以上、横幅約2mの不定形の基底石の上に上段は基底石の不定形の隙みの箇所に合致するように縱横約0.5m前後の数個の自然石を詰めている。2石目は下段縦約0.9m以上、横幅約1.4mの基底石の上に縦約1.2m、横幅約1.4mの石材を横位に使って内傾させて積んでおり、天井石との隙間に小石を詰めている（図版9-2・3）。

玄室右側壁は、前方から1石目の下段は縦約0.7m以上、横幅約2mの長方形の基底石の上に縦約1m、横幅約1.5mの長方形の石材を横位に使って内傾させて積んでいる。2石目の下段は縦約

0.9m以上、横幅約1.6mの基底石の上に縦約1m、横幅約1.4mの方形の石材を横位に使って内傾させて積んでおり、さらに天井石との隙間に石材を詰めている（図版8-2・3）。

2石で構成される左右両側壁の目地は上下段とも微妙にずれており、玄室を構築するに際して石材の目地はさほど意識していなかったように思われる。

玄室左右両側壁の天井石の高さを水平に調節するためか、あるいは、玄室空間の奥行きや高さを広く見せるために意図的な行われたのかどうかは不明であるが、平野2号墳の玄室と同様に奥壁沿いの左右両側壁2石目の上段上部には、高さ約30cm程度の石材を継ぎ足して天井を高くしており、天井部の断面形状は階段状を呈する（図版8-3）。

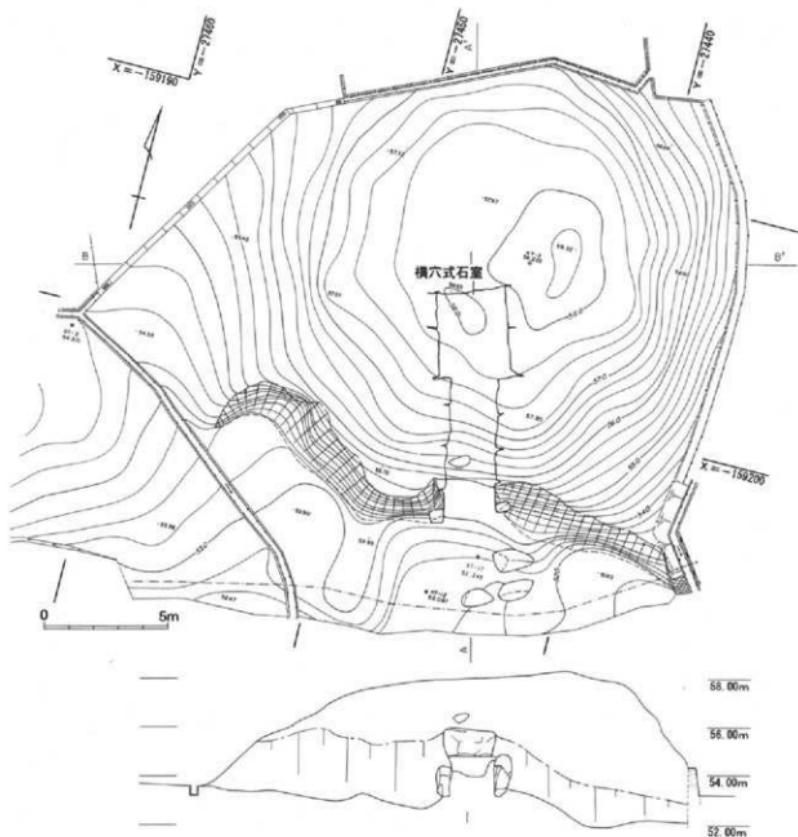


図68 平野1号墳横穴式石室 (S=1/200)



图69 平野1号填横穴式石室实测图 (S=1/40)

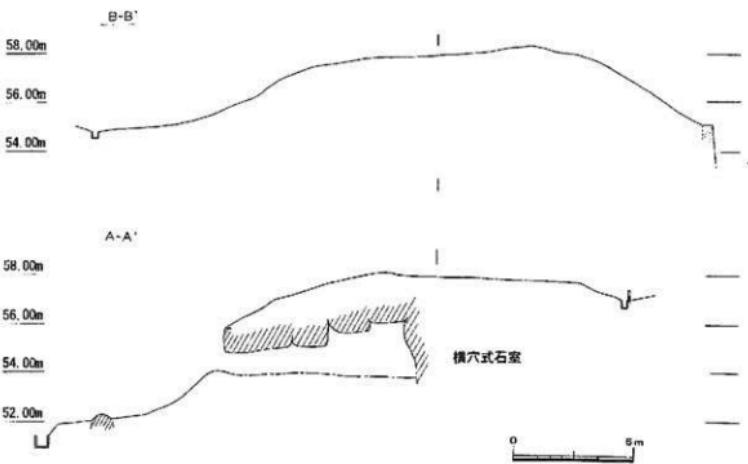


図70 平野1号墳墳丘断面図 ( $S=1/200$ )

玄室奥壁は、2段積みで縦0.6m以上、横幅2.8mの巨石1石を基底石として据え、その上に縦1.2m、横幅1~1.5m前後の方形の石を左右に積んで内傾させて持ち送りを行っており、1段目の基底石や天井石の隙間には空間を補填するかのように間詰石を詰めている(図版9-1)。

玄室の天井には長さ2m、幅3m以上の2枚の巨石を横架しており、左右両側壁の石材の隙間に小石を詰めている。

### (3) 羨道の規模・構造(図69、図版10)

羨道部は、長さ5.7m、幅1.8mで、現状の堆積土から高さは1.5mを測る。左右両側壁とも先端部は土砂が堆積しているため、実態は不明であるが、基本的に3~4石(列)で構成される。

左側壁は、現状では4石が遺存しているものと思われる。前方から1石は縦1.2m以上、横約1.2m、2石は土砂の堆積により正確な規模は不明で、3石は縦約0.8m以上、横約1.6m、袖石にあたる4石は縦約1.2m以上、横約1.1mを測る。いずれも花崗岩の巨石3~4枚を縦長に使って垂直に立てて構築している(図版10-1)。

右側壁は、現状では4石が遺存する。前方から1石は縦1.3m以上、横1.2m、2石は土砂の堆積により正確な規模は不明で、3石は縦約0.8m以上、横約1.3m、袖石にあたる4石は縦1.1m以上、横約1.5mを測り、花崗岩の巨石4枚を縦長に使って垂直に立てて構築している(図版10-2・3)。

全体的に花崗岩の自然石を使用しているが、表面となる部分は比較的平坦で、表面をある程度平らに加工していたことが窺える。

羨道部の左右両側壁の石列の目地は全体的に微妙にズレており、合致しないが、羨道の中央部にあたる2石目と3石目は目地が通るように設置されている(図69)。

天井には玄門袖石を含め3石分にかかるように長さ約2m前後、幅約2.2m以上の平坦な花崗岩

の巨石2枚をほぼ水平に横架している。

羨道左側壁の前方から1・2石目の側壁がやや外方へ設置されているため、左側壁は直線ではなく、石室の平面観は玄室と羨道の中軸線が合致せず、玄室に対して羨道がやや西偏したアンバランスな様相を呈している。

羨道左右両側壁とも、南方にさらに一石～二石程度あったものと推定されるが、後世の石材採取により遺存していなかった。

未調査であるため、平野1号墳の正確な築造時期は不明であるが、これまでの見解のとおり、石室の石積技法や石室形態等から西側に隣接する平野2号墳よりもやや古い7世紀前半の築造時期が考えられ、平野古墳群の中でも最初か、あるいは、初期に築造された古墳と考えられる。

### 3 まとめ

横穴式石室の石積技法や石室形態等から平野1号墳が平野2号墳よりも先に築造された古墳と考えられるが、今回の測量調査で石積技法等に差異がみられるものの両古墳の石室は、極めてよく似た規模・規格をもつ古墳であることを認識するに至った。

隣接する平野2号墳は、玄室床面中央部に上で構築した棺台の基礎を設け、床面全面に二上山産の凝灰岩の切石を敷きつめた特殊な構造をもつ横穴式石室であり、棺は凝灰岩製の石棺ではなく、木棺等の有機質の棺と推定されるが、平野1号墳も平野2号墳と同様の石室構造・棺の埋葬形態を持つ古墳であるならば、改めて両古墳の計画性が証明されることであろう。

平野古墳群では、この平野1号墳と平野2号墳の他に、現在は消滅して検討の余地はなくなってしまったが、第Ⅱ章4で詳述した『御陵之絵図』や『武烈帝陵牛垣取建等ニ付請書付絵図』等の古絵図には古墳群の中央部に築造された平野3号墳と平野4号墳の2基の古墳が並列して築造されている様が描かれている（図版88～91）。

このように平野古墳群は、同等規模・形状の2基の古墳が近接・並列して築造されていることが特徴的であり、墓域としても計画的に選地して築造されていた可能性が考えられる。

現段階では、平野1号墳の石室構造・棺（柩）の埋葬形態等については全くの謎であり、今後将来の発掘調査に委ねたい。

#### 註

1) 泉森皎 1976 「古墳時代」「香芝町史」 香芝町役場

2) 前掲註1文献

泉森皎 1977 『竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32号 奈良県教育委員会

3) 香芝市教育委員会編 2000 「平野2号墳第1次調査」「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報13」 香芝市教育委員会

## 第VII章 考察

### 1 終末期古墳出土の土製棺台について

#### (1) はじめに

前章でもふれたように平野2号墳からは壇と棺の受台が出土しており、この2者の土製品を組み合わせて棺台を構築して棺（柩）が埋葬されている可能性を指摘した。このような埋葬形態をもつ古墳は、現在知り得た範囲では全国的に見ても同じ二上山麓に位置する平野2号墳と大阪府塚廻古墳出土緑釉陶棺の2例を知るのみであり、これ以外に国内では類例ではなく、実に特殊な棺台であると言える。

以前、これらの二上山麓の終末期古墳から出土する2者の土製の棺台について比較・検討を行ったが、その後の新しい知見もふまえて本頁にて改めて検討することとする。

#### (2) 塚廻古墳出土緑釉陶棺について

##### ①塚廻古墳の概要

二上山西麓の磯長谷には向山古墳（用明陵）や山出高塚古墳（稚古陵）をはじめ、上ノ山古墳（孝德陵）、上城古墳（聖德太子墓）などの天皇・皇族級の墳墓が集中している。この磯長谷の古墳群の南方の葛城山西麓にあたる大阪府南河内郡河南町平石には数基の古墳からなる平石古墳群が分布している。

平石古墳群は、石川流域に沿う台地に向かって開析した狭い平石谷の南向きの丘陵傾斜面の中腹に位置しており、約200~400mの間隔をおいて西からシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、塚廻古墳などの7世紀代の数基の終末期古墳が営まれている。

アカハゲ古墳の主体部は、花崗岩の切石で構築した横口式石槨で、漆塗籠棺の破片とガラス製扁平管玉をはじめ、褐釉円面鏡等が出土している。

シヨツカ古墳は、近年の調査で東西約34m、南北約26m、高さ約5mの三段築成の横長の方墳であることが確認されている。主体部は、奥室・前室・羨道からなる横口式石槨で、須恵器の帰属時期から従来の横口式石槨の初現の年代観を大きく遡る6世紀後半の築造と推定されている。横口式石槨内からは、漆塗籠棺をはじめ、亀甲繫单鳳凰文銀象嵌凹頭大刀柄頭、銀袋刀子、挂甲小札、金銅装馬具、銀製帶金貝、金糸、銀糸、ガラス下等の豪華で多彩な遺物が出土している。

塚廻古墳は、奥室と前室、羨道で構成される横口式石槨で、全長7.65mを測る。奥室は、長さ2.4mで、幅・高さともに1.32mを測る。天井と側壁、床面は平滑に加工された花崗岩の切石をそれぞれ1石ずつ組み合わせて構築しており、奥壁の隅角部には白色の漆喰が施されている。

前室は、奥室よりも大きく、長さ約4.7m、幅・高さともに約1.6mを測る。表面を平滑に整形した花崗岩の切石を3個ずつ布積みしており、床面には地山上に一辺30~40cm、厚さ3~5cmの方形または長方形状に加工した奈良県宇陀郡室生村や榛原町で産出する通称「榛原石」の板石を二重に敷いている。奥室と前室との間には二上山西方に分布する安山岩を加工した高さ約1.5m、幅約1.6m、厚さ25cmの方形板の原石が仕切石として嵌め込まれた状態で検出されている。前室の

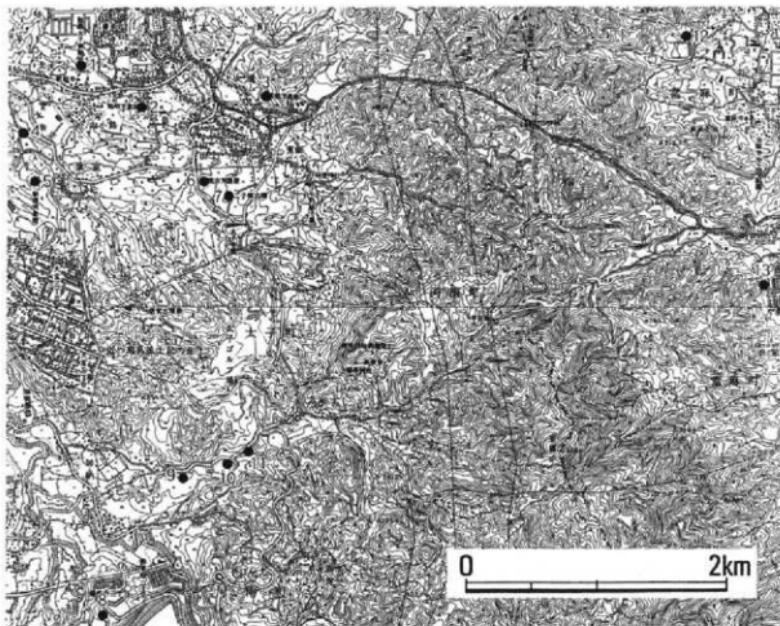
先端部から羨道にかけては人頭大の石を多数積み上げて閉塞しており、閉塞石の間に木製の板扉を挟んで立てて石室内部を閉塞していた可能性があることが指摘されている。<sup>6)</sup>

最近実施された墳丘部の発掘調査で、東西の幅約80m、南北約45m以上の盛土で構築した巨大な壇の上に、一辺が下段43m、中段35m、上段23mの3段構造で墳丘が築かれており、壇と墳丘を合わせて高さ11mを測る国内でも最大級の大型方墳であることが確認されている。出土土器等から従来考えられてきた年代観よりもやや古い7世紀中頃の築造と考えられている。<sup>7)</sup>

横口式石槨内は徹底的に盜掘されていたため、原位置を保った遺物はないが、前室を中心に金製小コイル状金具7個、金糸残欠10本、金銅金具残欠約30本、七宝飾銀製刀子飾金具2個、ガラス管玉破片15片、ガラス丸玉破片5片、金象嵌鉄刀片22片、綠釉陶製棺台片約100片、瓦器椀1点、破片10片、寛永通宝銭10枚等多数の遺物が出土している。

この他に、塚廻古墳の棺材と推定される部材として、約500片以上の漆塗龍棺と夾紵棺の2種類の漆塗製品の破片が出土している。

塚廻古墳から出土した漆塗龍棺破片・夾紵棺を巡る解釈については、調査担当者の北野耕平氏は下記のとおりの見解を示されている。<sup>8)</sup>



1. 上城古墳（聖德太子墓） 2. 向山古墳（光明天皇陵） 3. 上ノ山古墳（孝德天皇陵） 4. 伽山古墳  
5. 奥城古墳（敏達天皇陵） 6. 山田高塚古墳（推古天皇陵） 7. 二子塚古墳 8. 白木古墳  
9. シヨツカ古墳 10. アカハゲ古墳 11. 塚廻古墳 12. 烏谷口古墳 13. 兵家古墳

図71 塚廻古墳周辺の古墳分布

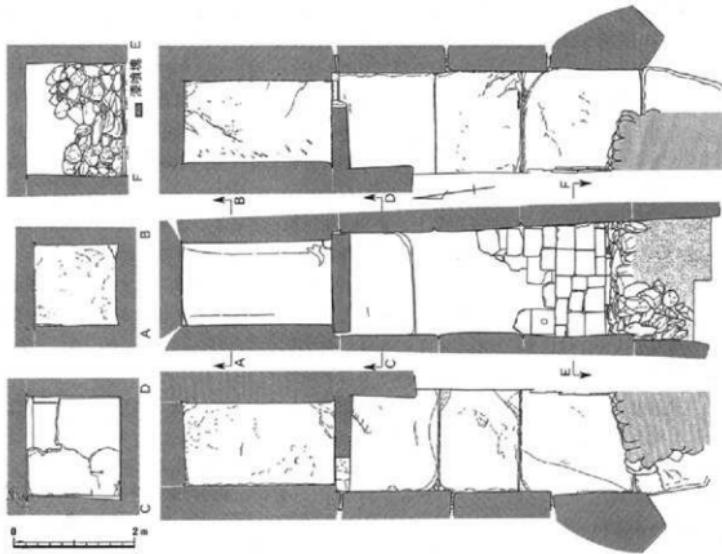


図72 墳廻古墳横口式石槨実測図 ( $S=1/80$ )

「被葬者の遺体を収めた特異な棺容器である。残念なことに盗掘に際してバラバラに粉砕されたらしく、破片として発見された。大きな破片で10cm角にすぎず、小片も含めて500片以上ある。破片から棺体の規模、形状を復原するのは困難であるが、本来は長方形箱形の棺身であったと推定できる。後述する縁軸陶製棺台を漆塗籠棺が収納された外容器と考えた場合、内法が長さ182cm、幅61cmあるので籠棺の平面の大きさはこれ以内、高さは40~50cm内外の規模を想定できよう。

漆塗籠棺とは終末期古墳の時期に畿内を中心として流行した漆製棺の一種である。他に乾漆棺・夾紵棺・漆塗陶棺・漆塗石棺などがある。この種漆製棺は地域的には奈良県飛鳥・同西部・大阪府南東部・同北部の阿武山に集中する。漆塗籠棺は内部に植物質の繊維を編みこんで箱状のものを作り、その表裏両面に厚く漆を塗り固めたもので、外面は黒褐色であるが、内面にはさらにな鮮やかな朱漆を塗って仕上げている。

基体となる編組品には幾つかの仕様があるようで、角山幸洋氏によると香芝市平野塚穴山古墳出土の資料は「三ツ組」を基礎としたものとする考察がある。塚廻古墳の籠棺破片の外面が剥離した例を見ると、太い撓紐を横に並べて縦とし、細い撓紐を交互に上下に通して経とした席編のごとき基体であるが、細部の技法は今後の検討を待ちたい・・・。

この種漆塗籠棺の類例は奈良県香芝市平野塚穴山古墳の1例を除くと、現在までに判明している3例の出土地は、ことごとく大阪府南東部の平石谷に集中している。すなわち、塚廻古墳・アカハゲ古墳・シヨツカ古墳に限られているので、極めて使用者の限られた製品ということができる・・・。

漆塗籠棺は厚さ1cmに近く、要所に棧を配して棺体の強化を計っている。これに対して厚0.3cmというごく薄い夾紵を漆塗した遺物がある。量的には籠棺と比べると少なく、かつ細片であるが、いずれも薄い平板状をなしてて屈折した角部を持たない。強いてこの用途を推測すると棺蓋として用いられたものであろう。木板の上に貼り付けて使用することも可能であるが、現存する夾紵片には木質の付着はない。いずれにしても棺体の一部にのみ夾紵の製品を用い、棺体自体は籠の内外面に漆塗した容器であるとすると、奈良県明日香村牛子塚古墳例の夾紵棺に比べると身分差を思われる……。」

香芝市二上山博物館が平成14年に開催した第18回特別展に伴って、漆塗籠棺と火紵棺と推定される2つの漆塗製品を詳細に観察したところ、新たに幾つかの知見を得ることができた。

まず、漆塗籠棺と推定される漆塗製品は、平均的に厚さは約1cm前後で、大別して、屈曲した角を持たない平坦なものと、平坦面の一方に屈曲した角を持つものの2種類があることが識別でき、平坦なものの中には、要所に棧を配して棺体の強化を計るために、一方の面に幅約1.5cmの棧状の突起部を設けるものがあることを再確認することができた。

また、火紵棺と推定される漆塗製品は、漆塗籠棺に比して厚さ約0.3cmと器壁が薄く、漆塗籠棺と同様に、屈曲した角を持たない平坦なものと、平坦面の一方に屈曲した角を持つものの2者があることが識別でき、さらに、これ以外にも僅か1例であるが、梢の端部（縁辺部）と推定される部材も認められた。

漆塗籠棺と夾紵棺とも明確な形状や規模は不明であるが、これらの部材が組み合わさって長方形の棺状の形状を成していたことが推察できる。

2者の漆塗棺の中でも、器体の厚い漆塗籠棺が棺身とすると、物理的に器体の薄い夾紵棺は棺蓋として使用されていたものと推定される。

表10のとおり、このような7世紀代の飛鳥時代の古墳から出土する漆塗棺は、奈良県や大阪府を中心に全国で約20例が<sup>10)</sup>確認されている。

一基の古墳の石室内から出土する漆塗棺材は、基本的に1種類のみであり、漆塗棺の中でも漆塗籠棺の夾紵棺等の2種類の複数の漆塗棺を1対として使用する例は、全国的に見ても同じ二上山墓に位置する平野古墳群中の平野塚穴山古墳と塚廻古墳の2例以外には類例は見られず、両者は棺材の構成・使用方法について何らかの関連性が予測される。

表10 国内の漆塗棺一覧

種類	古 墓 名	時 期	所 在 地
夾紵棺	天武・持統陵古墳 (野口玉巣古墳)	——	奈良県高市郡明日香村
	孝子塚古墳	7世紀末	奈良県高市郡明日香村
	平野塚穴山古墳	7世紀中～後半	奈良県香芝市
	櫻垂太子墓 (飯福寺北古墳)	7世紀前半	大阪府南河内郡太子町
	塚廻古墳	7世紀中頃	大阪府南河内郡河南町
	河武山古墳	7世紀後半	大阪府高槻市
	八幡山古墳	7世紀中～後半	埼玉県行田市
	安福寺遺品	——	大阪府柏原市
漆塗棺 (本漆塗籠棺)	石のカタ古墳	7世紀後半	奈良県森川市山陵町
	高松塚古墳	7世紀末	奈良県高市郡明日香村
	マルゴ山古墳	7世紀末	奈良県高市郡明日香村
	東明神古墳	7世紀末	奈良県高市郡高取町
	脚崩山古墳	7世紀後半	大阪府南河内郡太子町
	初田2号墳	7世紀末	大阪府茨木市
	岩内1号墳	7世紀後半	和歌山县御坊市
	八幡山古墳	7世紀中～後半	埼玉県行田市
漆塗籠棺	平野塚穴山古墳	7世紀後半	奈良県香芝市
	アカハゲ古墳	7世紀中頃？	大阪府南河内郡河南町
	塚廻古墳	7世紀中頃	大阪府南河内郡河南町
	シショツカ古墳	6世紀後半	大阪府南河内郡河南町
漆塗石棺	御坊山3号墳	7世紀前～中葉	奈良県生駒郡斑鳩町
	菖蒲池古墳	7世紀前半	奈良県橿原市

## ②塚廻古墳出土の綠釉陶棺（棺台）について

塚廻古墳出土の綠釉陶棺については、北野耕平氏は下記のとおりの見解を示されている。<sup>12)</sup>

「長さ約1.9m、幅約72cm、高さ21cmの長方形の平たい受台状をした土製品である。厚さは底面が約2.7cm、側面は垂直に立ち上がって上縁は厚さ2.3cmとなる…。製作にあたって底部に刻線による割付けを行い、支脚を一時的に接合していることが判明した。陶製棺台の胎土は淡褐色の粘土を硬質に焼成したもので、焼成後表面を磨研調整した後、綠釉を施して再度低火度で焼成している。綠釉は内面の四壁と底部上面、および外側面に施している。綠釉は、ほとんどが淡青色を呈する薄さであるが、内壁の下方は釉薬が厚く溜ったため濃い緑色を呈する。底面の下側には施釉はない。底面には長辺に平行して四本、短辺には七本の割付けした直線が基盤目状に部分的に残り、その間隔は約20cmある。この直交する部分には、直径8cm内外の粘土製の円柱を貼付けていた圧痕がある。圧痕からみると円柱は中実で管状をしていない。おそらく焼成にあたって棺台底部を窓体の床面に直接据えずに計28本の支脚で支えて、焼成後脚を切断したものとみられる。施釉の陶製棺台は奥室中央に据えられ、内部に漆塗籠棺を安置したのであろう。木米籠棺は器胎が薄いため、それを保護する受台として焼成されたものであろう。棺台の据え方としては内部の凹面を下にして、台状においてその上に漆塗籠棺を載せる方法が考えられる。しかし、本古墳の場合、施釉は内部の凹面にもあって底面の下側には綠釉を認めないので、棺台は受台としての機能を有したと判断した。」

平成14年に開催した香芝市二上山博物館第18回特別展に伴って、改めて綠釉陶棺の器体表面の探査を行い、平面図と断面図の実測図面を作成するなど詳細に観察する機会を得た（図73）。<sup>13)</sup>

規模や形態的な特徴は、上記の通りであり、調整は、内外面とも全体的に原体幅約4cmの比較的丁寧なハケ調整が施されている。

綠釉が施されているということ以外に注目すべきこととしては、綠釉陶棺の底部裏面の数箇所にみられる脚の剥離痕があげられる。この剥離痕を詳細に観察すると、幅2mmの線刻があり、その交点に直径8cm、内径5cmの脚台が貼り付けられている。脚は、調整の状況から綠釉陶棺底部外面のハケ調整を施した後に設置されており、また、接合の方法も脚の基部を粘土で完全に塗り固めて貼り付けるのではなく、一時的に仮に貼り付けられたような状況を呈している。

したがって、脚は、横口式石室の奥室内に棺を収納する際に高さの問題で収納できないことなどの不具合が生じたために綠釉陶棺本体から外されたのではなく、もともと、綠釉陶棺の焼成のためだけに付けられたものと解釈できる。

また、今回の実測図作成に伴って綠釉陶棺を詳細に観察したところ、底部内面の数カ所にわたりて漆塗籠棺と推定される漆状の塗膜痕が付着しているのを確認することができた。

漆状の塗膜痕は、全面的に付着しているのではなく、比較的、綠釉陶棺の側板の基部（立ち上がり部）に沿って数カ所に部分的に遺存している。とくに、底部内面に直行して付着する塗膜痕は、漆塗籠棺の棟部の幅とほぼ等しいことから、長年にわたって綠釉陶棺の中に安置されていた漆塗籠棺の棟部の痕跡と推定される。塗膜痕は、綠釉陶棺の内側から数cm間隔を空けて余裕を持って付着しているのではなく、比較的、側板基部に沿って付着していることから、漆塗籠棺は、ほぼ、綠釉陶棺の形状・規模と近似している可能性が強く、本来の大きさは綠釉陶棺の規模から数cm程度短い大きさになるものと推定される。

緑釉陶棺に付着していた塗膜痕が漆塗籠棺と同一の成分の漆であるとするならば、予想通り、緑釉陶棺の中に灰紺棺を棺蓋として漆塗籠棺を棺身とする2種を一対とする漆塗棺が収納されていたことを示す重要な証拠になるものと思われるが、この点は、今後、将来的科学的分析による研究成果の進展に委ねたい。

### (3) 平野2号墳出土棺の受台について

平野2号墳出土棺の受台については、第IV章3(2)で詳述しているので、ここでは、要點のみ再録することとする。<sup>19)</sup>

棺の受台の破片は、一辺に側面を持ち、L字形を呈するものと、一方の端部が面取りされたものの2種に分けられ、これらの破片を繋ぎ合わせると、三辺は側面を持ち、一辺は側面を持たず<sup>20)</sup>に端面を持つ49.5cm×72cmの大きなひとまとまりの部材を復元することができた(以下、第1区と呼ぶ)(図53・74、写真64、図版83・84)。棺の受台は、第1区のようなまとまりを「単位」として、3つの単位・部材を組み合わせて構成されていたものと考えられる。

棺の受台は、欠失した部位もあるため、完全に復元できた訳ではないが、規格が判明した第1区や面取りした端面を持つ側面の部材等を元に復元すると、第1区は長さ49.5cm、幅72cm、第2区は長さ79.5cm、幅72cm、第3区は長さ55.0cm、幅72cmとなり、全体としては、長さ(長辺)約184cm前後、幅(短辺)約72cm前後、内法の高さ約8cm、外法の高さ約9.8cm、長短両側辺厚さ約1.2~2.2cm、底板厚さ約1.2~2.2cmの長方形の浅い箱形を呈する土製品に復元できる(図53・74、写真64、図版83)。

全体的に赤褐色の上質を呈する精良品で、調整手法は底面及び長短両側辺の内面は全体的にハケやナデ調整が施され、長短両側辺の外側には幾重にも丁寧なヘラ磨きを施して光沢感を増している。いっぽう、底部外側(裏面)と推定される面は全体的にヘラケズリが施されているものの、部分的に成形時の布日压痕を残すなど未調整の箇所を多く残しており、部分的に表面には見られない焼成時の黒斑がみられる(図版84)。この未調整を多く残す面が表面、すなわち、棺台の上(表)面と解釈することも不自然であることから、円状の盆状を呈する浅い箱型の土製品として認識するに至った。

棺の受台と共に出土した埴は、製作・技法的にも色調や焼成状況等が極めて類似しており、また、風格や形状も密接な関わりがあることから、何らかの規格にもとづいて作られている可能性が強く、両者はともに棺を安置するための棺台を構成する部材として共通の製作「人」により計画的に製作されたものと考えられる。

平野2号墳棺の受台は、前述した大阪府塚廻古墳緑釉陶棺に見られるような漆塗籠棺の漆膜痕跡等は付着していないかったが、埴と棺の受台の具体的な使用用途としては、棺の受台が玄室中央部に構築された棺台基礎と同等の規模に復元することができたことや塚廻古墳緑釉陶棺の使用例から、玄室の床面中央部に構築された棺台基礎の上面に埴を敷き、この上に棺の受台を木棺等の棺を収納するための外容器として安置されていたものと推定される。

具体的な埴の使用枚数については、規格が判明している長辺46~47cm×短辺21~24cmのA類の埴を基準にすると、棺の受台の表面積を敷設するには、縦4枚×横3~4枚で合計約12~16枚程度の埴が必要となり、数種類の規格の埴が棺の受台の規模や形状に合うように敷設されていたものと推定される。

#### (4) 土製棺台の比較・検証

表11は、塚廻古墳縁釉陶棺と平野2号墳棺の受台、そして、土製棺台の参考資料として奈良県生駒郡斑鳩町竜田御坊山3号墳出土陶棺の規格等をまとめた一覧表である。規模的にみると、塚廻古墳縁釉陶棺と平野2号墳棺の受台とも長辺184～190cm（推定復元）、短辺約72cmとはほぼ同等の規模に復元できる。器体の厚さは、平野2号墳棺の受台に比して塚廻古墳縁釉陶棺が約1cm程度厚く、また、内面の高さは約11cm高い。構造的には塚廻古墳縁釉陶棺は、器体は均一的に一括成形されているのに対して、平野2号墳棺の受台は3分割に分割して別々に成形・焼成されているせいか、分割区域により数mm程度器体の厚さも微妙に異なる。

調整技法からみると、塚廻古墳縁釉陶棺は、内外面とも比較的丁寧なハケ調整が施されており、縁釉陶棺の表面にあたる内面に限って縁釉が施されている。平野2号墳棺の受台は、内面はハケ調整、側面外面には丁寧なヘラ磨きが施されているが、底部外面は全体的に粗いヘラケズリのみで一部に成形時の布目压痕を残す箇所もみられる。両者とも製作技法的には、底部縁に板状に整形した粘土板を貼り付けて側面を成形していることが推定され、調整技法としては、器体の内面、すなわち、目に見える部分のみ入念に調整が施されているが、見えない部位は調整も粗く、未調整の箇所を多く残しているという共通点があげられる。

また、平野2号墳棺の受台は、3分割成形であるために棺台の中に多少水分が耐水したとしても僅かに空いた分割区域の隙間から自然に排水することが可能と思われるが、塚廻古墳縁釉陶棺は、一体成形であるため、水抜孔がなければ石室内の棺台の内部に漏水した水分を排水することは難しく、両者共通の構造上の問題点として、土製の棺台は、腐りやすい有機質の棺（柩）を保護するための防湿の目的も兼ねて設置されているにも関わらず、多湿で水気の高い環境下にある石室内から湧き出す水分を除去するための水抜き孔等の排水装置がなく、防湿性に問題があることが指摘できる。

両者の土製の棺台の帰属時期については、最近の塚廻古墳の墳丘の調査で、従来の年代観を遡る7世紀中頃の築造とする見解が示されたことから、平野2号墳とあまり時期的な隔たりがない可能性も考えられる。両者の前後関係について、現段階で断定はできないが、素焼の3分割成形の平野2号墳棺の受台に比して、塚廻古墳縁釉陶棺は、一体成形で当時としては高度な縁釉が施されていることなどの製作技術的な要素から後出的で新しい印象を受ける。

表11 塚廻古墳縁釉陶棺と平野2号墳棺の受台の法量等一覧

古墳の名称	埋葬施設の規模 ・内法(cm)			棺の受台・陶棺の法量(cm)					成形技法 と構造	焼成	備考			
	長辺	短辺	高さ	<長辺>	<短辺>	高さ	底面厚	側面厚						
平野2号墳 棺の受台	380	250	220	<184>	<72>	9.8 (8)	1.2 (8)	1.2 2.2	三分割成形	素焼 土師質	棺台下位 に塗被を敷く			
塚廻古墳 縁釉陶棺	240	132	132	<190>	72	21 3	2.7 2.7	2.3 2.7	一体成形	縁釉	棺台下位 に傳被を敷く			
竜田御坊山 3号墳 陶棺(身部)	225	71	52	157 (146)	43.2 47.8 (34～36)	25 (20)			一体成形	須恵質 黒漆塗	人骨有 身長 160cm			

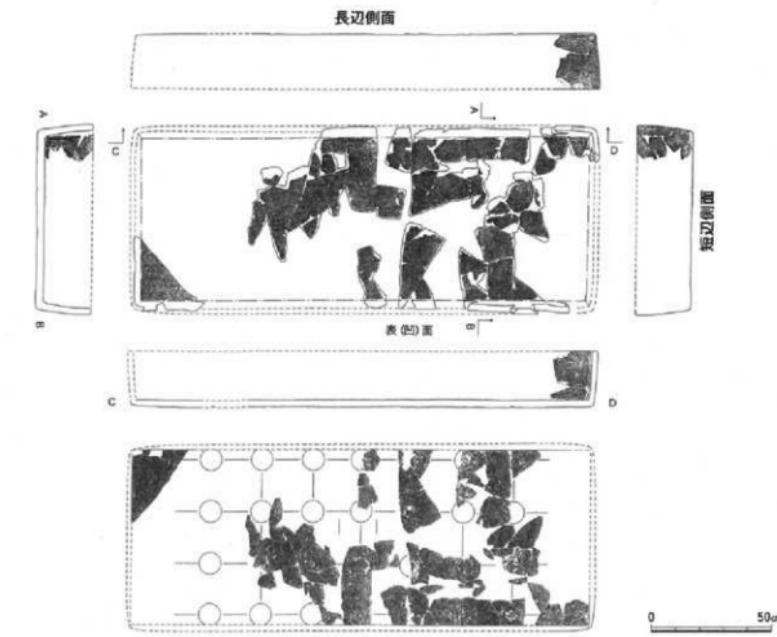


図73 塚廻古墳綠釉陶棺実測図



写真63 塚廻古墳綠釉陶棺全容（東京国立博物館蔵）

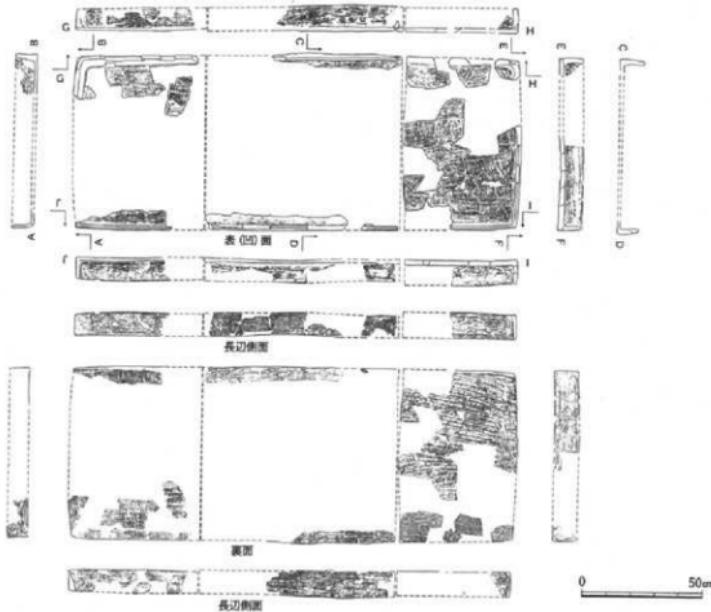


図74 平野2号墳棺の受台実測図

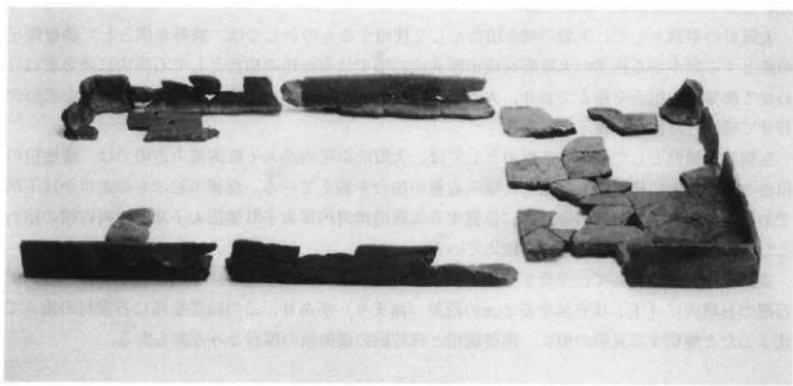


写真64 平野2号墳棺の受台全容

平野2号墳棺の受台の具体的な使用用途としては、前述したとおり、玄室床面中央部に構築された棺台基礎（土壇）の上面に高さを調節するために平板状に成形した塙を敷き、塙の上に棺の受台を外容器として置いて棺の受台の中に木棺等の有機質の棺を安置していたものと推定される（図75）。

塙廻古墳綠釉陶棺の具体的な使用方法としては、前述したとおり、北野耕平氏は、漆塗能棺と夷紹棺の2種類の漆塗棺を組み合わせて一对で構成された漆塗棺の外容器（棺台）として奥室内の中央部に安置されたものと推定されている。

平野2号墳と棺台の構成方法を比較した場合、塙廻古墳には塙等の綠釉陶棺の棺敷に相当する部材がみられないが、北野耕平氏は、塙廻古墳の奥室床面には榛原石が多数散乱しており、前室床面にも磚状の方形に加工された榛原石の切石が2重に敷いて磚として使用されていた形跡がみられることから（写真66）、磚状の方形に加工した榛原石が綠釉陶棺の棺敷として使用されていた可能性を指摘している（図76）。塙廻古墳と同じ平石古墳群に位置するアカハゲ古墳では横口式石槨の奥室床面中央部に長方形の棺状の大きさで漆喰が付着しており（写真65）、方形に加工された榛原石の切石数枚を重ねて漆喰で固めて棺台としていた可能性が考えられることからみても磚として榛原石の切石が塙廻古墳の綠釉陶棺の棺敷として使用されていた可能性は充分考えられる。

上記のことから、塙廻古墳綠釉陶棺や平野2号墳棺の受台の2者は、ともに土製の棺台の棺敷として一定の規格に加工した土製の塙や模塙石等のいずれか2者を組み合わせて構成されており、木棺や漆塗棺等の有機質の棺を収納・保護するための外容器、棺台の一種として機能していたものと推定される。

これらの二上山麓の2者の土製棺台の他、7世紀中頃以降、棺に漆を塗布した大陸山米の漆塗棺という新しい棺材の出現・流行に伴って石室（埋葬施設）内に何らかの形で棺台を構築・設置した古墳が多くみられる。一度置けば持ち運びができない石棺に対して漆塗棺は持ち運ぶことが可能であり、単に棺の材質が変化したということのみならず、そこには葬送観念・葬送儀礼の変化が生じていたことがうかがえる。

大阪府の事例として、土製の塙を棺台として使用するものとしては、被葬者像として藤原鎌足の幕とする説がある摂津の大坂府高槻市阿武山古墳では夷紹棺の棺台として石槨内に塙を重ね合わせて構築した棺台を備えており、大阪府茨木市初田1号墳でも漆塗棺の棺台として塙を重ね合わせて構築した棺台を備えている。

石製品を棺台として使用するものとしては、大阪府南河内郡太子町御領山古墳では、漆塗棺の棺台として側面に格狭間を彫刻した凝灰岩製の棺台を備えている。埋葬当初のものか否かは不明であるが、二上山麓西側の磯長谷に位置する大阪府南河内郡太子町聖徳太子墓では夷紹棺の棺台として2基の石製の棺台の存在を伝えている。

奈良県内の事例として、平野2号墳と同じ平野古墳群に位置する平野塙穴山古墳では、横口式石槨の石槨内に「I」状を呈する2cmの段差（高まり）があり、この段差を単に石室材の重みで沈下したと解釈する見解の他に、漆塗籠棺と夷紹棺の漆塗棺の棺台とみる説もある。

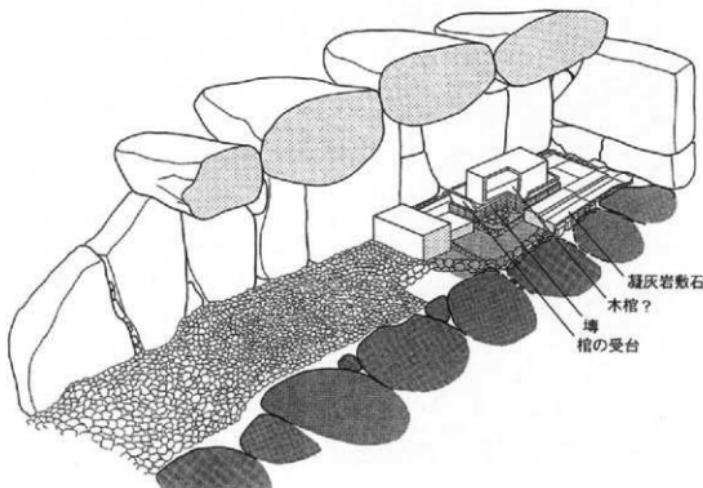


図75 平野2号墳の埴棺の埋葬形態想像図

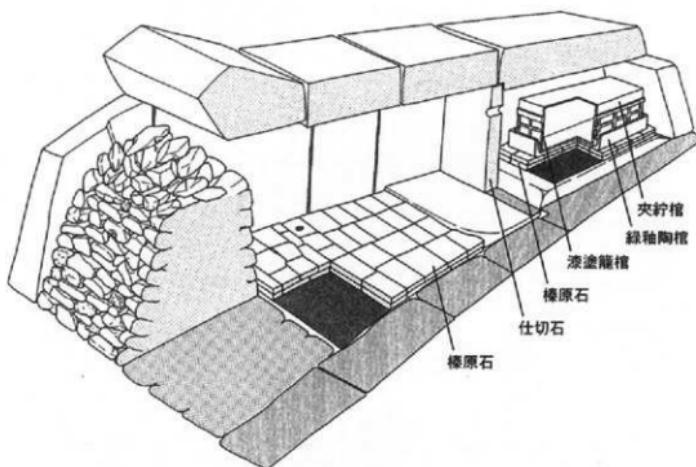


図76 塚廻古墳の埴棺の埋葬形態想像図

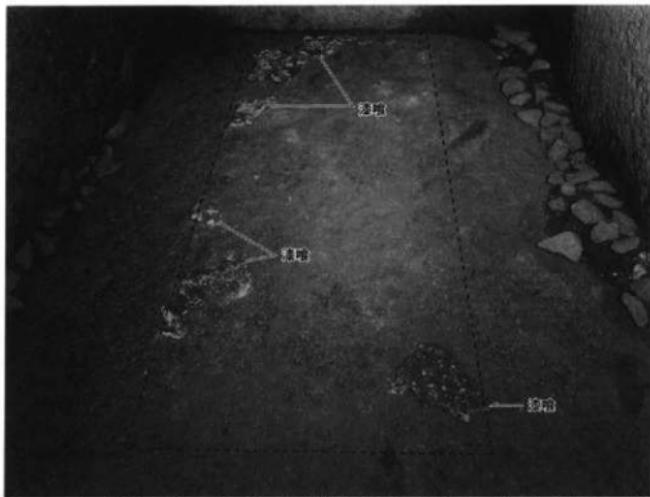


写真65 アカハゲ古墳の横口式石槨・奥室床面に付着した漆喰（北野耕平氏撮影・提供）  
※破線が檜台の推定範囲



写真66 塚廻古墳の横口式石槨・前室床面の磚數（北野耕平氏撮影・提供）

多くの皇族級の墳墓が集中する飛鳥地域では、明日香村牽牛子塚古墳に凝灰岩削抜式の横口式石槨に夾紵棺に伴う棺台が設置されており、明日香村東明神古墳では漆塗木棺の棺台として木製の棺台が想定されている。<sup>29)</sup>また、文献史料の記録のみで実態は不明であるが、明日香村天武・持統天皇陵（野口王墓）<sup>30)</sup>でも天武天皇を埋葬した夾紵棺の棺台として側面に格狭間を刻んだ棺台の存在が伝えられており、持統天皇の火葬骨を納骨した蔵骨器の棺台として側面に格狭間を彫刻した金銅製棺台の存在を伝えている。

これらの棺台は、ただ棺を置くための台としてではなく、漆塗棺の出現・盛行に伴って腐りやすい有機質の漆塗棺を床面の湿気等から保護することや時には見せる棺として棺を安置する空間を清浄に、そして、莊嚴に演出するための視覚的な効果も兼ね備えていたものと思われる。

坂廻古墳縁軸陶棺や平野2号墳の受台の2者の土製棺台も漆塗棺の盛行に伴って、飛鳥時代に削出された数種の棺台の中の一形態と考えられるが、このような土製の棺台は、全国的にみてもともに二上山麓の両古墳から出土した2例以外に類例はみられない。

これらの土製棺台の系譜として、古墳時代の陶棺から派生する国内での自生発生的な見方と、飛鳥時代の墓制に大きな影響を及ぼした朝鮮半島の墓制等外来的な影響からの系譜を考える見方の2者が想定される。

表12 近畿地方の棺台を持つ終末期古墳一覧

番号	古墳の名称	石室の種別	棺の種別	棺台の材質	棺台とする根拠	文献
1	平野2号墳 (奈良県香芝市)	横穴式石室	木棺?	上製（棺の受台） 塼	現物遺存 復元推定	本報古書
2	御須山古墳 (大阪府河南内郡太子町)	横口式石槨	漆塗木棺	凝灰岩製 格狭間を刻む	原位置で現物遺存	註25
3	阿武山古墳 (大阪府茨木市)	横口式石槨	夾紵棺	塼 漆喰で固める	原位置で現物遺存	註23
4	初田1号墳 (大阪府高槻市)	横穴式石室	塼	塼 塼を重ねて構築	現物遺存 復元推定	註24
5	牽牛子塚古墳 (奈良県高市郡明日香村)	横口式石槨	夾紵棺	凝灰岩製2基 石室と一体	原位置で現物遺存	註28
6	坂廻古墳 (大阪府河南内郡河南町)	横口式石槨	漆塗籠棺 夾紵棺	上製（綠釉陶棺） 棒原石	現物遺存 復元推定	註2 註6
7	アカハゲ古墳 (大阪府河南内郡河南町)	横口式石槨	漆塗籠棺 夾紵棺	棒原石 漆喰で固める	痕跡遺存 復元推定	註4 註6
8	平野塚穴山古墳 (奈良県香芝市)	横口式石槨	漆塗籠棺 夾紵棺	凝灰岩製 石室と一体	調査担当 者の見解	註11
9	東明神古墳 (奈良県高市郡明日香村)	横口式石槨	漆塗木棺	木製	調査担当 者の見解	註29
10	聖德太子墓（上城古墳） (大阪府河南内郡太子町)	横穴式石室	夾紵棺	石製 3基の棺台	右の文献	註26
11	天武・持統天皇陵 (野口王墓) (奈良県高市郡明日香村)	横口式石槨	夾紵棺	金銅製? 格狭間を刻む	右の文献	註30

棺台の系譜については、直接的な関係はないものと考えられるが、時期や地域を無視すると形態的に類似するものとして、古墳時代前期末の福岡県福岡市鶴崎古墳の陶棺があげられる。この陶棺は、箱式石棺を模したものと推定されており、側面のみで底面を持たずに一緒に出土した半板状土製品と組み合わせて使用したものと推定されているが、これ以外に類例はなく、祖型と考えることは難しい。

また、同じ7世紀代の事例として、聖德太子墓では聖德太子と妃の膳女郎の遺骸を安置したと伝える2基の石製棺台の他に、間人皇后を埋葬した棺材として上面を浅く切り抜いた受皿状を呈する1基の右棺が報告されている。事実であれば、同じ二上山麓の終末期古墳の類例として平野2号墳棺の受台に先行することから棺の受台の祖型候補となり得るが、この棺台については、上野勝己氏のように中世の太子信仰の興隆にともなって生じた三骨・廟思想の普及とともに右室内が徐々に改変された際に造作・配置されたものであり、石製の棺台を中世に行われた後世の造作とする懐疑的な説をとる見解もあり、現在までのところ決定的な根拠がない限りその関連性を解明することは難しい。

棺の受台を陶棺からの系譜・派生を考えた場合、形態的に最も類似するものとしては、竜田御坊山古墳の須恵質の陶棺があげられる（図77）。陶棺は、当時流行していた漆塗棺の影響を受けたものであろうか、須恵質の陶棺の表面に漆が塗布されており、通常の陶棺に比して身部の高さや表面の脚部が低く、陶棺が退化した末期の様式を残すものである。おそらく、狭い横口式石槨に納まるようにこのような小規模な陶棺が作られたのものと推定される。帰属時期については、報告書では7世紀後半とするが、陶棺内から出土した中国製の綠釉碗から7世紀前半から7世紀中頃とみる説もある。

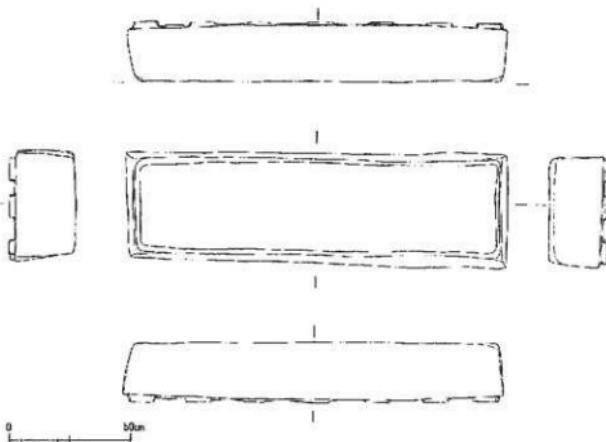


図77 竜田御坊山3号墳陶棺の身部（S=1/20）（註11文献より一部改変）

塚廻古墳縄釉陶棺身部の裏面には、前述したとおり、古墳時代の陶棺に一般的にみられる脚部を貼り付けた円形の剥離痕跡があることや表11のとおり、竜田御坊山3号墳陶棺の身部の深さが塚廻古墳縄釉陶棺身部の深さに近いことから、現段階ではこの種の棺台は、陶棺からの系譜・派生を考えることが最も自然な解釈であるものと思われるが、塚廻古墳縄釉陶棺とはほぼ同時期と推定される平野2号墳棺の受台には脚部を貼り付けた痕跡が全くなく、塚廻古墳よりもさらに身部の深さが浅いため、両者の直接的な系譜を解明することは難しい。

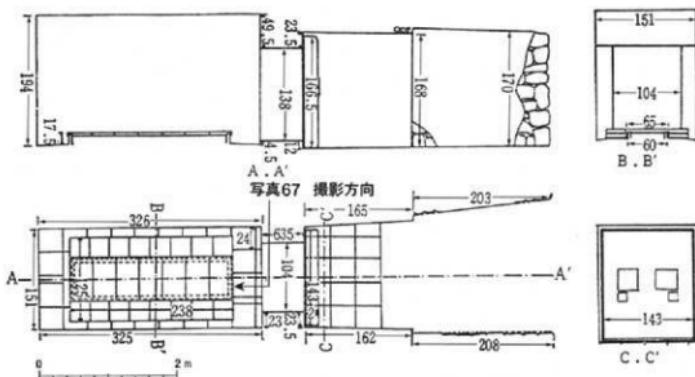


図78 陵山里東下塚古墳（註36 d 文献より一部改変）



写真67 陵山里東下塚古墳石室床面の磚と棺台（北野耕平氏撮影・提供）

棺の受台を日本国外の朝鮮半島の墓制からの系譜・派生を考える場合、現在までのところ、朝鮮半島では棺の受台と同様の形状を成すものはみられないが、朝鮮半島南部の百済の陵山里古墳群や宋山里古墳群では、石室内の床面に方形に加工した土製の壇や石製の磚をはじめ板石等の切石状の工作物を敷設して棺台を構築する古墳が多々見られる。壇や磚等を敷設して棺台を構築する古墳として、陵山里東下塚古墳や宋山里第5・6・29号墳、熊津洞古墳等があげられ、板石等の切石状の工作物を設置して棺台を構築する古墳として、陵山里東上塚古墳、陵山里中上塚古墳、益山大王墓等があげられる。

このうち、百済の王陵と推定されている陵山里東下塚古墳では、床面全面に磚を一重～二重に敷き詰めており、石櫛中央部に設けられた棺台も磚で構築されている。図78や写真67から棺台の構築方法を観察すると、磚を数枚重ねて棺台を構築するのではなく、棺台の高まりとする部位のみ磚の側面を縦位に配して長方形状の外枠を作り、この外枠の縁に沿って磚で蓋をして棺台を構築している。棺の受台と逆の構造になるが、この磚で構築された長方形状の枠に底板を付ければ棺の受台と形状が似たものとなり、想像をたくましくすれば棺の受台の相型候補の一つと考えられなくもない。

平野2号墳では、直接的に朝鮮半島の墓制と何らかの関連性を持つ考古学的資料は見られないが、同じ古墳群に属する平野塚穴山古墳の石室構造は、直接的に陵山里東下塚古墳の石室構造を模したものと考えられており、石室構築に際して朝鮮半島の墓制との関わりが想定されている。

私は、南河内地域の終末期古墳に多い壇や磚等の方形状に加工した切石状の工作物を棺台とする埋葬形態の系譜は、陵山里古墳群や宋山里古墳群等を中心とする百済の墓制からの影響を考えており、間接的には平野2号墳の棺台として使用された壇や塚廻古墳の横口式石槨の前室床面に敷設された磚状の捺原石の切石等についても朝鮮半島の墓制との影響・接点があるものと推察している。

2者の土製の棺の受台（棺台）は、国内で陶棺から自生的に創出されたのか、あるいは、朝鮮半島の外来的な墓制の影響を受けて創出されたのか、現段階で合理的な解釈を導き出すことは難しく、朝鮮半島を含めて今後の類例の増加を待ってあらためて検討したい。

#### （5）まとめ

塚廻古墳綠釉陶棺と平野2号墳棺の受台の実測成果をもとに全国的にも希少な2者の土製の棺台（棺の受台）について比較検討を行った。

塚廻古墳綠釉陶棺については、実測作業過程の中で、肉眼観察ではあるが、漆塗籠棺と同質と推定される塗膜痕が底面の内面に付着していることを確認することができ、從来からの予想通り、出土した夾紵容器と漆塗籠の2種類の漆塗製品は棺材であり、綠釉陶棺は、火紵棺を蓋として、漆塗籠棺を身とする1対で構成された漆塗棺の外容器（棺台）として使用されていたことを再認識するに至った。また、平野2号墳棺の受台については、共伴した壇の規格から、壇と棺の受台は、棺台を構成する部材として当初から計画的に製作・使用されていた可能性があることを検証することができた。

両者の土製棺台は、規模の大小等の若干の差異があるものの、形態や使用方法等は極めて類似しており、棺を収納・安置するための外容器・棺台として使用されていたものと推定される。

とくに、平野2号墳の調査成果から埋葬施設内における土製の棺の受台と壇の使用例がほぼ解

明されたことにより、これまで北野耕平氏によって提唱されていた塚廻古墳の縄軸陶棺を夾紵棺と漆塗籠棺の2種一对で構成された棺台とする見解をより確実なものとする成果を導き出した意義は大きい。

これらの土製の棺台は、7世紀代に偶發的に何の関わりもなく突如として創出されたとは考え難く、終末期古墳の埋葬施設を構成する部材として、二上山麓の平野古墳群と平石古墳群との密接な関連性を背景として、共通の埋葬觀念のもとに製作・使用されたものと考えられる。

この種の棺台の系譜については、古墳時代の陶棺に求められるのか、あるいは、全く別の系譜として、壇で構築した棺台等を多用する百濟や新羅等の朝鮮半島南部の墓制・埋葬形態からの系譜を持つものなのか、合理的な解釈を導き出すことはできなかったが、現状では資料不足であり、今後、将来的研究成果の進展に委ねたい。

#### 註

- 1) 下大迫幹洋 2001 「平野2号墳の調査成果－大和における終末期古墳の調査－」『日本考古学』32号 日本考古学協会

私は、上記文献において、これらの土製品は、一般的に古墳時代の陶棺にみられる蓋部がなく、身部のみで構成されるもので、陶棺の身部に比して内法の高さ（深さ）が浅いため、考古学用語として認識している陶棺の範疇に含めて陶棺と称することは無しいことや棺を収納・安置するための外容器、すなわち、棺台の一種として使用されていることから、その機能名から「棺台」もしくは、「棺の受台」と称することを提唱している。

- 2) 調査担当者の塚廻古墳・アカハゲ古墳調査会代表の北野耕平氏は、下記の文献において、縄軸が施釉された土製品について、陶棺にあたる蓋がなく、深さが浅いため、陶棺と称することについて疑問を持ちつつも便宜上「縄軸陶棺」と称せられている。従って、本稿では、従来からの呼称のとおり、「縄軸陶棺」と称することとする。

a. 北野耕平 1980 「金象嵌竜文大刀」、井上薰教授退官記念日本古代の国家と宗教 上巻 吉川弘文館 12頁 「平面的規模は遺体を伸展した状態で収容するに足るとはい、後期に盛行した陶棺に比べると著しく浅く、かつ蓋とみなすべき遺物を認めなかつたので、検討すべき問題を残している。」

b. 北野耕平 1989 「大阪の終末期古墳」『シンポジウム青銅器の生産／終末期古墳の諸問題』 日本考古学協会 170頁

「縄軸の陶棺は、じつは直接遺体をおさめるための陶棺と申していいかどうか問題があります。陶棺の長さは2m内外、幅も70cmぐらいあるとう非常に大きなものです。それが漆塗の籠棺とともに奥室内にはいっていたのですが、奥室内の広さは非常に狭くて同時に並べて入れるのは不可能であるとみられます。このことから漆塗の籠棺は、縄軸の陶棺の内に納められていた、つまり、陶棺は外棺をなしていたものだとみております。これをわれわれは、磯長の型帝太子の墓の奥壁の部分に置かれていた間人皇后の石製の浅い内割りを上面にもつ外棺とよく一致する構造であると考えております。」

- 3) 下大迫幹洋 2003 「終末期古墳出土の土製棺台について－塚廻古墳縄軸陶棺と平野2号墳棺の受台の比較・検討－」『ふたかみ12-2002（平成14）年度香芝市二上山博物館年報・紀要』 香芝市二上山博物館

- 4) 岡本清成・松村哲一 1968 「河南町の古墳」『河南町誌』 河南町役場 19頁

- 北野耕平 1970 「大阪府河南町平石第1号墳」「日本考古学年報」第18冊 日本考古学協会  
前掲註5文献 34頁
- 5) 横木哲 2003 「加納・平石古墳群発掘調査概報Ⅱ -中山間地域総合整備事業(南河内こごせ地区)に伴う-」 大阪府教育委員会
- 6) 香芝市二上山博物館編 2002 「二上山麓の終末期古墳と古代寺院-平野古墳群と尼寺廃寺跡-」 香芝市二上山博物館
- 当文献には、北野耕平氏により、塚廻古墳とアカハゲ古墳の詳細な調査報告とともに両古墳の石室の実測図面が掲載されている。この他、塚廻古墳の調査の概要については、前掲註2a・2b文献等に両者を概要が報告されている。
- 7) 大阪府教育委員会編 2005 「ツカマリ古墳発掘調査現地説明会資料」 大阪府教育委員会文化財保護課
- 8) 前掲註6文献 28-29頁
- 9) 前掲註3文献 60頁
- 10) 下記文献を基に加筆・作成した。
- a. 塚口義信 1991 「平野塚穴山古墳の被葬者について-いわゆる大化の薄葬令の問題を中心として-」 『有坂隆道氏古紀念日本文化史論集』 同朋社 111-114頁
- b. 塚口義信 1994 「大化の新政府と終末期古墳-いわゆる「大化の薄葬令」と横口式石棺-」 『堺女子短期大学』第29号 愛泉学会 47-50頁
- 11) 泉森岐・猪熊兼勝 1977 「竜山御坊山古墳付 平野塚穴山古墳」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県教育委員会 84-85頁  
上記文献の中で、猪熊兼勝氏は、藍胎と夾紵の2者の漆塗製品の用途について、①夾紵を棺材とし、藍胎を副葬品か副葬品の容器とみる説。②夾紵棺が身で、藍胎を蓋とする説。③藍胎棺に夾紵の棺台、もしくは、外棺とする説。④棺の外枠を夾紵で作り、蓋面を藍胎で作ったとみる合成棺とみる説。の4つの見解を示されており、2種類の技法を組み合わせて1棺を構成されたものと推定されている。
- 12) 前掲註6文献 29頁
- 13) 前掲註3文献 63-67頁
- 14) 下記文献に仏陀寺古墳等の南河内地方の終末期古墳から出土する壇には十文字の割付線を報じるものが多くみられることが指摘されている。
- 鍋島隆宏 1999 「仏陀寺古墳出土の壇について」『太子町立竹内街道歴史資料館報』第6号 太子町立竹内街道歴史資料館 63-73頁  
塚廻古墳縁袖陶棺の底部裏面に施されている格子状の割付線は、製作にあたった工人の意匠・技法として、脚部を正確に均一に設置するための目安として刻まれたものと推定されるが、仏陀寺古墳等の壇にみられる十文字の割付線と何らかの関連性がある可能性も考えられる。
- 15) 平野2号墳から出土した棺の受台については、本報告書本文102-105頁で詳述している。
- 16) 棺の受台と共に棺台を構成する平野2号墳から出土した壇については、本報告書本文92-101頁で詳述している。
- 17) 前掲註11文献 2-40頁
- 18) 前掲註3文献を執筆した時点においては、塚廻古墳の帰属時期は7世紀後半とする見解が主流を占めていたため、7世紀中頃と推定される平野2号墳棺の受台が塚廻古墳縁袖陶棺よりも先行し、土製の棺台とし

ては先駆形態となる可能性を指摘した。近年の塚廻古墳の墳丘の発掘調査により、塚廻古墳の墓造時期が平野2号墳と同時期の7世紀中頃まで遡る可能性があることが判明したが、確実に縄輪陶棺が国宝品であるという前提に立つならば、この見解は変わらない。塚廻古墳の縄輪陶棺については、同内の縄輪の初源を検討する上でも重要視されており、今後の研究の進展に従って改めて検討したい。

- 19) 前掲註2b文献、前掲註6文献
- 20) 前掲註2a文献の中で北野耕平氏は下記の通り述べられている。  
「とりわけ奥室内部は最も盗掘を蒙っていた部分で、床面に若干の漆漆籠棺と縄輪陶棺の破片とが、棺台を構築していたかとみられる大量の櫛原石の板石片と共に混在し、中にガラス製扁平管玉片も認められた。」
- 21) 岡本清成・松村哲一 1968 「河南町の古墳」『河南町誌』 河南町役場 19頁  
北野耕平 1970 「大阪府河南町平野第1号墳」『日本考古学年報』第18冊 日本考古学協会  
前掲註6文献 34頁
- 22) 和田晴吾 1995 「棺と古墳祭祀－「据えつける棺」と「持ち運ぶ棺」－」『立命館文学』542 立命館大學
- 23) 梅原末治 1936 『摂津阿武山古墓調査報告』大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯 大阪府  
原口正三 1973 「阿武山古墳」「高槻市史」第6卷 考古編 80-84頁
- 24) 中井貞夫 1972 「初田1号墳調査概要」「節・香・泉」第11号  
初田1号墳壕のほか、大阪府内の終末期古墳から出土した壺の調査に際しては、小浜成氏（大阪府教育委員会）のご協力とご教示を得た。
- 25) 水野正好 1972 「近飛鳥遺跡分布調査概要II」 大阪府教育委員会
- 26) 梅原末治 1914 「聖德太子磯長の御廟」「聖德太子論纂」 平安考古会  
聖德太子墓の玄室内には、玄室の前方東側の壇徳太子と前方西側の紀體郎女の遺骸の安置所として2基の石製棺台の存在を伝える。
- 27) 註11文献では、石都内中央部床面の工字形に2cm突出した高まりを当初からの棺台の工作物とみるか、側壁・天井石の加重によって側壁に接する床石が沈下したことにより、側発的に生じたものと解釈するか、調査者・報告者の間で見解が分かれている。  
猪熊兼勝氏は、前掲註11文献84頁で、「平野塚穴山古墳の2cm高い切石は、幸牛子塚古墳の2cm高く削り出された棺台と同性格をもつものであり、この工字形切石は構築時に意識された棺台としての施設であろう。」と記しており、棺台と認識している。
- 28) 綱干善教他 1977 「史跡幸牛子塚古墳」 明日香村教育委員会
- 29) 河上邦彦 1999 「東明神古墳の研究」高取町文化財調査報告第18冊 高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 67頁  
終末期古墳の棺台として、石製や土製品の棺台以外にもこのような木製の棺台が存在していた可能性も充分考えられる。
- 30) 秋山口出雄 1979 「繪院人内陵の石室構造」『橿原考古学研究所論集』第5 奈良県立橿原考古学研究所
- 31) 加藤一郎ほか 2002 「錦崎古墳2号墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集 福岡市教育委員会 99頁、115-117頁 直接的には箱形石棺を模したものと推定されているが、このような土製品の類例は他にみられない。

- 32) 前掲註26文献。北野耕平氏は、この間人皇后の石棺について、前掲註2 b文献において、石棺の上面に施された浅い刻抜が塚廻古墳の縁軸陶棺の形状と類似することから、その祖型となる可能性を指摘されている。
- 33) 上野勝己 1996 「聖德太子墓を巡る動きと三骨一廟の成立」『太子町立竹内街道歴史資料館報』第3号 太子町立竹内街道歴史資料館  
上野勝己氏は、間人皇后の石棺について、具体的には手水鉢の転用である可能性を指摘している。
- 34) 前掲註11文献 2 - 40頁
- 35) 河上邦彦 1995 「後・終末期古墳の研究」 雄山閣 120-121頁
- 36) a. 梅原末治 1938 『昭和十二年度古蹟調査報告』 朝鮮古蹟研究会  
b. 稲部滋恩 1946 『百濟美術』 宝雲舎  
c. 関野貞 1948 『朝鮮の建築と芸術』 岩波書店  
d. 金基雄 1976 『百濟の古墳』 学生社  
e. 姜仁求 1977 『百濟古墳研究』 一志社  
f. 有光教一 1979 『扶余陵山里伝百濟王陵・益山双陵』『樺原考古学研究所論集』第4 奈良県立櫻原考古学研究所
- 37) この方法であれば棺台内部が空洞となり、やや不安定であり、塊がずれると棺内に落ち込む可能性があるため、内部に土を充填して棺台基礎を構築していた可能性も考えられる。
- 38) 前掲註11文献
- 39) 下大迫幹洋 2003 「奈良県平野古墳群をめぐる二、三の憶説」『統文化財学論集』 文化財学論集刊行会

## 2 平野1号墳・平野2号墳の築造規格

### (1) はじめに

平野1号墳（車塚古墳）と平野2号墳は、石室形態が類似し、石室標高もほぼ同一であることから、共通の規格で築造されたことが類推される。ここでは、両古墳の共通性をより具体的に明らかにするために、石室と墳丘の築造規格、および使用尺度について考察する。

### (2) 平野1号墳・平野2号墳の石室築造規格

#### ①基準長の推定

1号墳と2号墳が共通の基準長で設計されたと仮定した上で、両古墳の石室実測図を検討し、基準長と考えられる長さを探した。すると、以下で示すように、約50cm、あるいはその半分の約25cmの長さが石室各所に見出せることが判明した。

#### 【平野1号墳石室】

漢道天井と玄室東壁の横目地の高低差は約50cmである。また、玄室天井には北が高く南が低くなる段差があるが、この段差の高低差も約50cmである。さらに、玄室南側天井高さと漢道天井高さの差も約50cmである。また、玄門の袖の幅が東西ともに約50cmである。さらに、東壁の石材には、平面形が約100×150cm、および約100×200cmのものが多く見られ、約50cmを基準に石材を加工したことが推定できる。このように、石室の各所に約50cmの数値を見出すことができる。

#### 【平野2号墳石室】

玄室天井には1号墳と同様に段差がある。石材が自然石に近いのでわかりにくいが、玄室天井北側、玄室天井南側、漢道天井のそれぞれの高低差は1号墳と同様に約50cmである。また、玄門の袖の幅が、東西ともに50cmの半分である約25cmである。

#### ②石室築造規格の復原

前述のように、1号墳、2号墳ともに約50cmか、その半分の約25cmの長さを石室各所に見出すことができた。このことから、約50cmか、その半分の約25cmが築造の際の基準長であったと推定できる。

そこで、約25cmを基準長と仮定すると、両古墳の石室築造規格を以下のように割り出せる。

#### 【平野1号墳石室】(図79)

基準長に換算すると、玄室平面は長さ14、幅11、玄門の袖幅は東西ともに2である。玄室天井の段差の高低差、および玄室南側天井と漢道天井との高低差は、いずれも基準長にして2である。奥壁幅は、天井部分で基準長にして9に通減する。奥壁高さは、床面が埋まっているので推定になるが、基準長にして10であろう。東側壁は中央に横目地が通り、天井が高くなる北側には南側天井と同じ高さで横目地が通る。床面（推定）から中央の横目地まで、および、中央の横目地から南側天井と同じ高さの横目地までの高さは、いずれも基準長にして4である。石材は、基準長にして縦4×横6、あるいは縦4×横8になるように意識して加工されたと考えられる。玄室の横目地は玄室構築の際の作業単位と考えられるので、基準長にして4の高さで順に石材を積み上げていったことが推定できる。また、西側壁にも東側壁とほぼ同じ高さの横目地を考えることが可能であるが、東側壁ほど明瞭ではない。このように、一方の側壁にのみ明瞭に横目地が通る例としては、奈良県橿原市丸山古墳、同桜井市秋殿南古墳（図87）などがある。

羨道は、基準長にして幅が8、高さが推定で6。羨道に使用された石材は、基準長にして縦6×横6、および縦6×横4になるように加工されたと考えられる。

#### 【平野2号墳石室】(図80)

基準長に換算すると、玄室平面は長さ15、幅10、玄門の袖幅は東西ともに1である。玄室天井の段差の高低差、および玄室南側天井と羨道天井との高低差は、いずれも基準長にして2である。奥壁高さは基準長にして10(凝灰岩敷石から天井石までの高さ)、奥壁幅は天井部分で基準長にして9に遞減する。羨道は、基準長にして幅8、高さ6である。

また、水平ではなく外に向けて徐々に低くなるように規格されている。排水を意識したものと考えられる。類例としては奈良県広陵町牧野古墳<sup>13)</sup>が挙げられる。

#### 【平野2号墳敷石・棺台】(図81)

2号墳からは、敷設された凝灰岩切石や棺台の基部が出土した。これら石室床面の構造物の配置も、この基準長に従っていたことが判明した。

まず凝灰岩切石に着目する。玄室東側に残った凝灰岩切石には玄室中心側が高くなる段があるが、玄室の中軸線からこの段差までの距離は基準長にして3である。玄室西側の凝灰岩切石は失われているが、仮に左右対称であったとすれば、玄室中央に基準長にして幅6の壇が凝灰岩切石の高低差によって形成されていたことになる。また、この壇のさらに中央に位置する棺台の幅は基準長にして4である。

また、玄門部分の溝みも注目される。玄門部分の床面には一定の幅を持った直線状の溝みが掘られており、何らかの材を嵌め込んだものと推定できる。この幅は基準長にしてちょうど2である。前述のように羨道幅は基準長にして8であるから、基準長にして2×4の材が2枚分嵌め込まれていた可能性が考えられる(ただし、図82・図83では、玄門中央に基準長にして2×4の材を1枚、その左右に基準長にして2×2程度の材を1枚ずつ設置する形に復原した)。なお、この材が仮に凝灰岩であったとすれば、この基準長にして2×4という大きさの切石が玄室に敷設するのに使われる凝灰岩の標準であったと推定できる。残存する凝灰岩切石はいずれも基準長にして2×4の大きさよりやや小ぶりがあるので、基準長にして2×4の大きさの凝灰岩切石を玄室内で再加工しながら敷設したことが推定できる。

#### 【平野1号墳と平野2号墳の比較】

上記分析から、平野1号墳と2号墳の石室築造規格に共通性があることがわかった。玄室は長さ・幅とともに基準長にして1ずつの違いがあるだけであり、高さは同じである。また、羨道の規格も共通である。

一方で、石材の積み方には違いがある。1号墳は石材を横長にして積んでおり、玄室壁面に横日地が通る。これに対し、2号墳は石材を縦長にして積み、特に玄室側壁は床面から天井まで一石であるため横目地が通らない。石材を縦向きに積む積み方は新しい様相とされることから、2号墳の方が1号墳よりも新しい様相を示していると言える。両古墳は一連の計画のもとで築造されたとはいえ、時期差を持って構築されたことがうかがえる。この時期差は墳丘形態にも表れており、1号墳は墳頂に平坦面があるのに対し、2号墳の墳頂は平坦ではなくドーム状である、という差異がある(図85)。2号墳と類似したドーム状の墳頂を持つ古墳としては奈良県天理市峯塚古墳<sup>14)</sup>がある。峯塚古墳は岩屋山式石室とされる石室群の中でも新しい年代が想定されており、

のことから、ドーム状の墳頂は新しい古墳に見られる要素と考えられる。したがって、墳丘の面からも、2号墳の方が1号墳よりも新しい様相を示していることが指摘できる。このように、平野1号墳と2号墳は、築造規格に共通性がある一方で、時期差に伴う形態的差異があることがわかった。

ただし、石材の加工具合を見ると、逆に2号墳の方が古風な印象を与える。1号墳にはほぼ直方体になるように加工された石材が使われているのに対し、2号墳には全く加工されていない自然面を残した石材が使われているためである。しかしながら、詳細に見ると2号墳の方により高度な石材加工技術が使われていることがわかる。2号墳の玄室側壁の石材は各々の接合部分が平滑に整形され、隙間無く密着している。このことから、平野2号墳は高度な石材加工技術を要所に用いながらも、一見した印象が自然石積みに見えるように、意図的に使用石材に自然面を残した可能性がある。

### (3) 平野1号墳・平野2号墳の墳丘築造規格

#### ①墳丘築造規格の復原（図84・図85）

平野2号墳は今回の発掘調査によって直径約26mの円墳であることがわかった。この直径は、誤差を広く認めれば、基準長（約25cm）にして100になるように規格されたと推定できる。発掘調査による確認はなされていないが、1号墳の直径も同程度の規模であると考えられる。石室床面からの高さを墳丘の高さとすると、1号墳の墳丘高さと墳頂平坦面の半径は等しく、その規模は基準長にして20である。2号墳の墳頂は1号墳とは異なり、平坦面の無いドーム状を呈する。また、両古墳の墳丘の中心と中心の間の距離は約40mであるが、これは基準長にして160に相当する。このように、1号墳、2号墳とともに石室と同じ基準長を用いて墳丘が規格されたと考えられる。また、1号墳・2号墳ともに、玄室東側壁ラインの延長上に墳丘の中心点がある。このことから、墳丘と石室の位置関係の点でも、1号墳と2号墳に共通性があることがわかった。

#### ②平野1号墳墳丘と平野2号墳墳丘の相互関係（図84）

両古墳の石室の中軸線は平行にならず、開口する南側から見て逆ハの字状になっている。これは両古墳の羨門をより近く見せようという意図によるものと考えられる。1号墳の羨道が、玄室の中軸線よりも2号墳側に偏っているが、これも同じ意図によるものと言える。1つの方形墳に2つの横穴式石室が築かれた奈良県橿原市植山古墳も、両石室の羨門が近寄るように石室が逆ハの字状に配置されている。こうした点からも、平野1号墳と2号墳は1つのセットとして捉えられるべきであり、計画的に築造された「双墓」と呼ぶべきものである。

なお、この平野1号墳・2号墳のような双墓、あるいは植山古墳のような1墳丘に複数の石室を持った古墳は、1つの石室に複数の棺を納めるのではなく、複数の棺を納めるために複数の石室を造ったことになる。従って、追葬可能な埋葬施設という一般的な横穴式石室の概念とは異なり、追葬しない個人墓として横穴式石室を使ったことを意味している。こうした個人墓としての横穴式石室の使用は、横口式石槨と共に通するものである。

### (4) 平野1号墳・平野2号墳の使用尺

#### ①古墳時代の尺度研究の整理

本章では、平野古墳群の使用尺について考える。その前提として、古墳の築造に使用されたと考えられる尺について概説する。

## 【中国の尺について】

中国では、周代から漢代にかけて1尺=23~24cmの尺が公定され、それを裏付ける遺物も見つかっている。なお、晋代の後期になると、北魏ではより長い1尺=約28cmの尺も用いられる。一方、民間ではもっと長い1尺=約29cmの尺が使われ、隋代に入ると1尺=24.5cmの尺とともに1尺=29.4cmの尺も公定された。唐もその2種の公定尺を用いる制度を受け継ぎ、1尺=約24cmの尺を「小尺」、その「1尺2寸」(1.2尺)である1尺=約30cmの尺を「大尺」とする。しかし、小尺の使用は楽器の調律・製薬・天文学といった用途に限定され、実用尺としては大尺が使われた。

これらの尺が日本に伝わって使用されていた可能性が考えられる。なお、古墳時代よりも時代が下るが、権本朴人は正倉院や法隆寺などに伝世するモノサシや楽器(尺八)などから奈良時代の尺について研究している。これらの伝世品のほとんどは1尺=約30cmの尺であるが、例外的に1尺=約24cmの尺もある。それら1尺=約24cmの尺は、佩飾用の尺・楽器(尺八)・律尺(僧の衣を作る際に用いられる基準尺)といった、儀礼色・權威色の強いものに限られ、精度も低く、実用的な尺ではなかった可能性が高い。

## 【高麗尺について】

「高麗尺」の概念は「令集解」卷第十二の記事を根拠とする。これによると、令で一旦決められた「5尺平方=歩」とする丈量法が、和銅6年の格で「6尺平方=歩」に改められるが、両者の「歩」(面積)は同じであるとされる。そこで、和銅6年の格における尺を1とした場合、令で定められた段階の尺を1.2とすれば双方の「歩」は同じになることから、和銅6年以降に使われ続けた尺(1尺=約30cm)の1.2倍に当たる1尺=約35cmの尺の存在が想定された。さらにこの「令集解」の記事では、「5尺平方=歩」とする丈量法を「高麗法」と呼んでいる。ここから、1尺=約35cmの尺を想定し、これを「高麗尺」と呼ぶようになった。このように「高麗尺」は解釈から生まれた尺であり、「高麗尺」に該当するモノサシは現存しない。

なお、「高麗尺」が「唐尺」(1尺=約30cm)とともに古墳の築造に使われたと推定した先駆者の一人に、尾崎喜左雄がいる。尾崎は、多数の横穴式石室の細部の寸法から帰納した結果、35cmと30cmという数値が「基準数」になっていると考え、「高麗尺」と「唐尺」が使用されたとした。ただし、「高麗尺」「唐尺」の呼称を使ったのは「研究に便利だから」に過ぎず、「横穴式古墳の尺度は、高麗尺1尺は35厘、唐尺1尺は30厘であるときまっていたとか、きめてしまつたとか考えられる怨れがあり、そのような考え方は誤解である」としている。

## 【そのほかの長さの尺について】

権本によれば、1尺=約24cmの尺、1尺=約30cmの尺のほかに、1尺=約28cmの尺も若干数であるが伝世している。

また新井宏は、4~8世紀の韓国・日本の構築物(古墳墳丘・古墳石室・宮殿跡・寺跡・都城の条坊など)の基準長を26.8cmと解析し、これを「古韓尺」と命名した。さらに、この「古韓尺」から「唐尺」(1尺=約30cm)への転換点はだいたい7世紀中ごろと位置づけた。

また、宮川徳らは、大陸山米の尺ではなく日本独自の身度尺を考察している。宮川らは、古墳の築造企画分析から基準尺度を案出した。その基準尺度は150cm前後の「小尋」(女性が腕を広げた長さ)と160cm前後の「大尋」(男性が腕を広げた長さ)という身度尺になるとしている。

なお、尺を名称で標記する場合、1尺=約24cmの尺の場合は「晋尺」「唐小尺」など、1尺=約

30cmの尺の場合は「唐尺（唐人尺）」「曲尺」など、多様な標記方法がある。以下の文章では、混乱を避けるため、先行研究からの引用の場合以外は尺を名称で標記せず、1尺=約24cmの尺の場合を「約24cmの尺」、1尺=約30cmの尺の場合は「約30cmの尺」と標記することにする。

#### ②平野1号墳・平野2号墳の使用尺

前述のように、平野1号墳・2号墳はともに約25cmの基準長を使用していると推定した。この基準長の長さを正確に計算することで、使用された尺の長さを求めることができる。

1号墳の石室の中からより良く基準長を反映している部分を選び出し、その部分の長さから基準長を割り出すと、以下のようなになる。西側壁長さ（横目地部分）は345cmであり、基準長にして14であるので、基準長は $345 \div 14 = 24.6$ （cm）と計算できる。東側壁長さ（横目地部分）は343cmであり、基準長にして14なので、基準長は24.5cmと計算できる。奥壁幅（上部）は224cmであり、基準長にして9なので、基準長は24.9cmと計算できる。奥壁幅（下部）は273cmであり、基準長にして11なので、基準長は24.8cmと計算できる。これらの平均値は24.7cmとなる。よって、1号墳の基準長は24.7cmと考えられる。

2号墳については、出土した凝灰岩切石に規格に沿った加工がなされたものがあるので、ここから基準長を算出できる。完形で残った切石の法量は85.8×48.7cmである。この切石の規格は基準長にして3.5×2であると考えられる。ここから、 $85.8 \div 3.5 = 24.5$ （cm）と $48.7 \div 2 = 24.4$ （cm）と計算でき、これらの平均値は24.4cmとなる。よって2号墳の基準長は24.4cmと考えられる。

以上のように、平野1号墳の基準長は24.7cm、平野2号墳の基準長は24.4cmと推定できる。このことから、平野1号墳・2号墳はともに約24cmの尺を使用して規格されたと考えられる。前述のようにこの約24cmの尺は、中国でも日本でも、日常生活で使う尺ではなく權威を示すのに適した尺であったと考えられる。また、後述するように百濟の王陵でも約24cmの尺が使用された可能性がある。

#### （5）同時代の古墳との比較

最後に、平野1号墳・2号墳を考える上で参考となる同時代の古墳について考察する。

##### ①牧野古墳（図86）

奈良県北葛城郡広陵町牧野古墳<sup>14</sup>は直径約60mの円墳である。主体部は、玄室の長さ6.7m、同幅3.2m、同高さ1.5mの横穴式石室である。墳丘と石室の位置関係において、平野1号墳・2号墳との共通性が見られる。墳丘の中心点はちょうど玄室の奥壁西端に位置しており、玄室西側壁が墳丘の中心線と重なっている。（3）①で述べたように平野1号墳・2号墳は玄室東側壁が墳丘中心線と重なっている。円墳に横穴式石室を構築する際に、玄室の一方の側壁が墳丘の中心線に重なるように配置する規格方法が存在したことが推定できる。

##### ②秋殿南（秋殿）古墳（図87）

奈良県桜井市秋殿南古墳<sup>15</sup>は玄室長さ4.48m、同幅2.26m、同現況高さ2.4mの横穴式石室である。平野1号墳の玄室の祖形と考えられる。玄室天井高さや横目地、羨道高さの高低差に着目すると約32cmの基準長を導くことができる。玄室平面規格は基準長にして長さ14、幅7に、玄室高さは土砂に埋もれた部分を考慮すると基準長にして9に復原できる。基準長にして玄室長さが14、高さが9になる規格や側壁の横目地の位置は平野1号墳と近似する。また、段差のある玄室天井形態も平野1号墳と共通する特徴である。

なお、秋殿南古墳に類似した石室に、奈良県高市郡明日香村塚本古墳<sup>10</sup>がある。玄室長さ4.6m、同幅2.25m、同高さ2.8mの横穴式石室であり、基準長、石室建築規格とともに秋殿南古墳とほぼ同じである。また、棺台を備えている点は平野2号墳と共通する特徴である。

### ③平野塚穴山古墳（図88）

奈良県香芝市平野塚穴山古墳<sup>11</sup>は平野1号墳・2号墳と同じ尾根上に立地しており、両古墳の被葬者の後裔によって築造されたことが類推される。凝灰岩切石で築造された横口式石室である。

表13 平野塚穴山古墳基準尺

部位	実長(cm)	尺での数値	尺の実長(cm)
玄室長さ	304	12	25.3
玄室幅	150	6	25.0
玄室高さ	176	7	25.1

平野塚穴山古墳の玄室長と玄室幅が2:1になること、玄室幅と玄室高さが6:7になることに着目すると、玄室長さ:玄室幅:玄室高さ=12:6:7と建築規格が割り出せる。報告書記載の実測長は、玄室長さ304cm、玄室幅150cm、玄室高さ176cmである。ここから基準長を割り出すと、玄室長さ $304 \div 12 = 25.3$ (cm)、玄室幅 $150 \div 6 = 25.0$ (cm)、玄室高さ $176 \div 7 = 25.1$ (cm)、と計算できる。これらの平均値は25.1cmであり、長めではあるが約24cmの尺を使用したと考えられる。平野1号墳・2号墳の使用尺も24.4~24.7cmであるから、平野古墳群のいずれの古墳も約24cmの尺で規格されていたと考えられる。

ただし報告書においては、石室を構成する個々の石材や石室内法計測値の分析を通して「唐大尺」(約30cmの尺)の使用が推定されている。これを尊重するならば、石材の切り出しは約30cmの尺で、石室の設計は約24cmの尺で、という尺の使い分けがなされていたことも考えられる。切石積横穴式石室は現場において適宜石材を加工しながら構築されたと考えられるので、石材と石室の使用尺が異なっていても石室構築に不都合はない。たとえば、右島和夫は切石積横穴式石室である群馬県北群馬郡吉岡町南下<sup>12</sup>号墳を検討し、石室には「唐尺」(約30cmの尺)による規格が見られるのにに対し使用石材には必ずしも「唐尺」の使用が認められないことから、石室を構築する際に石材を現場で随時加工したと推定している。

また、平野塚穴山古墳の平面規模は平野2号墳の凝灰岩による壇状の高まり部分に等しく(図82)、平野4号墳の復原平面規模は平野2号墳の棺台規模にほぼ等しい(図83)。建築規格の継承や、遺体を安置するのに最低限必要な面積を考える上で注目される。

なお、この平野塚穴山古墳は百濟の王陵・陵山里東下塚古墳(壁画古墳)(大韓民国忠清南道扶餘郡)<sup>13</sup>との類似性が指摘されている。そこで、東下塚古墳と塚穴山古墳の比較をおこなった。東下塚古墳と塚穴山古墳の石室図を同縮尺にして重ねると、玄室の幅が全く同じであり、高さや長さも近いことがわかった。東下塚古墳玄室と塚穴山古墳玄室が共通の規格で築造された可能性がある(図89)。

東下塚古墳は、玄室の長さ:幅:高さが7:3:4となる。これをもとに東下塚古墳の建築規格を考えると、1尺を24.2cmとすれば玄室の長さ、幅、高さがそれぞれ14尺、6尺、8尺となる。また、玄室の平面規格は10尺×5尺と復原できる(図90)。

なお、百濟の公用尺が約24cmの尺であった可能性がある。『三国史記』に、武寧王の身長が8尺であったと記されているが、もし1尺が30cm以上であれば、身長が2.4m以上になり、武寧王の長身を強調する美辞麗句といえども荒唐無稽な数値である。しかし、1尺が約24cmであれば身長190cm台という妥当な大男の身長になる。

このように、平野塚穴山古墳の玄室は、東下塚古墳の玄室を、長さを2尺、高さを1尺だけ縮めた築造規格である。使用尺や築造規格の面において共通性が見られることから、平野古墳群と百濟の王陵・陵山里古墳群との間に直接的な関係があったことをうかがわせる。

#### (6)まとめ

以上のように平野1号墳と平野2号墳の石室と墳丘の築造規格、および使用尺度について考察した。その成果をまとめると以下になる。

- ①使用尺は両古墳ともに1尺=約24cmである。この尺は權威を示すのに適した尺と考えられる。
  - ②1号墳玄室の築造規格は長さ14尺、幅11尺、高さ10尺、2号墳玄室は長さ15尺、幅10尺、高さ10尺であり、類似する。
  - ③墳丘と石室は同じ尺を使用し、両古墳の墳丘の直径は100尺、両古墳の中心間の距離は160尺である。
  - ④両古墳ともに、玄室東側壁ラインの延長上に墳丘の中心点がある。墳丘と石室の位置関係を考える上で注目される。
  - ⑤両古墳は築造規格に共通性がありながらも、石材の積み方や墳丘形態に時期差に伴う差異が認められる。
  - ⑥両古墳の近隣にある平野塚穴山古墳とは使用尺度が共通である。この平野塚穴山古墳は百濟の王陵・陵山里古墳群との間に直接的な関係があったことをうかがわせる。
- このうち、①⑥は平野古墳群の被葬者の性格を考える上で重要な成果である。また、②のように石室築造規格を分析したことにより、類似する他の横穴式石室との比較がより厳密にできるようになったと言える。③④に関しては、今後、墳丘と石室の位置関係が正確にわかる発掘調査事例が増加し、それらの成果と合わせて、古墳の築造過程をより具体的に明らかにする素材として平野古墳群が活用されていくことが期待される。⑤については、古墳を型式学的に研究する上で、今後、平野古墳群が重要な役割を果たしていくと考えられる。

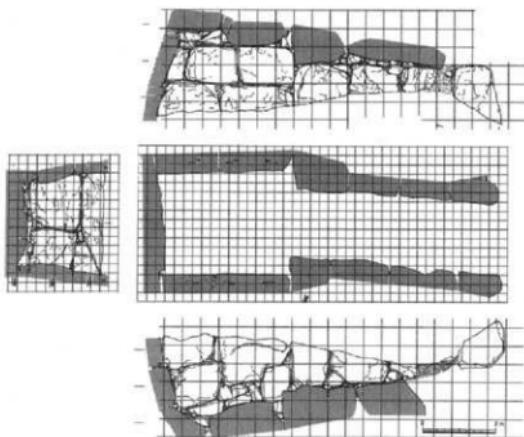


図79 平野1号墳石室築造規格  
平面図・奥壁図：1目盛＝1尺（24.7cm） 側壁図：1目盛＝2尺

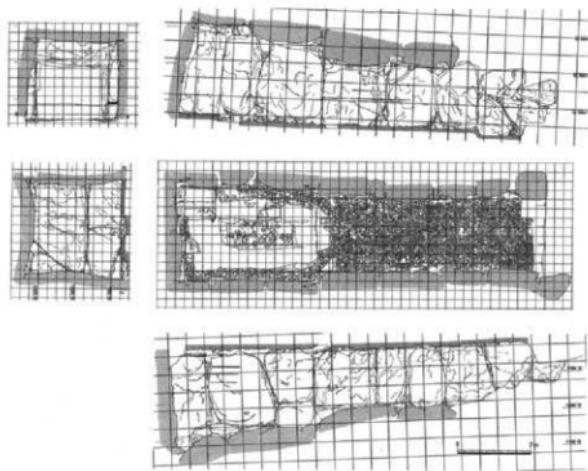


図80 平野2号墳石室築造規格  
平面図・奥壁図：1目盛＝1尺（24.4cm） 側壁図：1目盛＝2尺

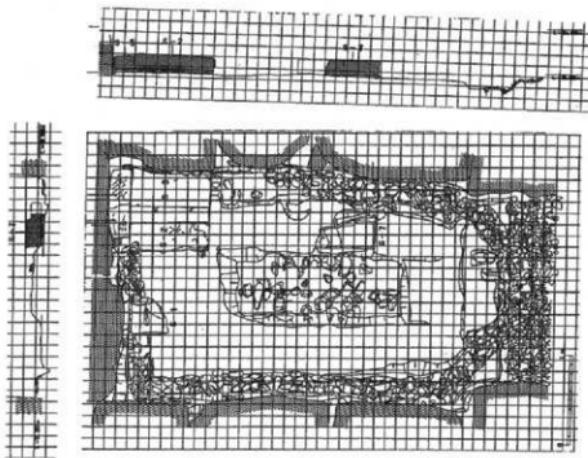


図81 平野2号墳床面構築物

1目盛=1/2尺(約12cm)

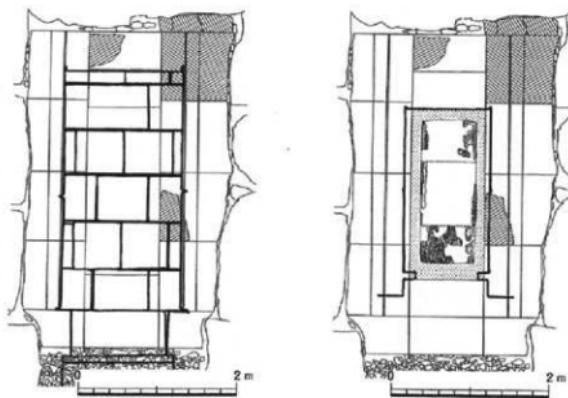


図82 平野2号墳と平野塚穴山古墳(太線)

図83 平野2号墳と平野4号墳(太線)

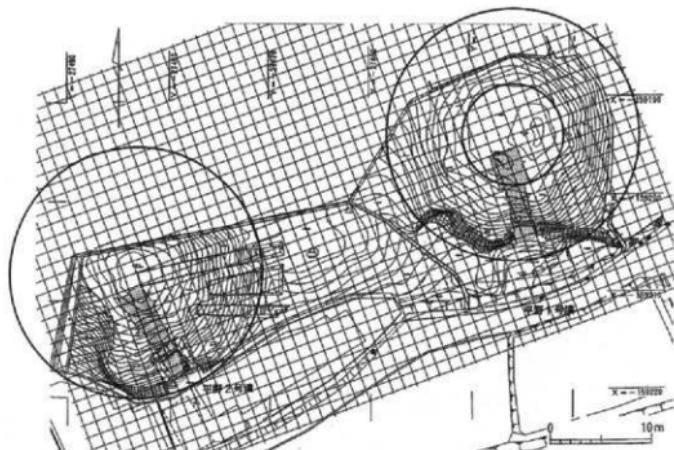


図84 平野1号墳（右）と平野2号墳（左）の墳丘築造規格

1 目盛 = 5 尺（約1.23m）

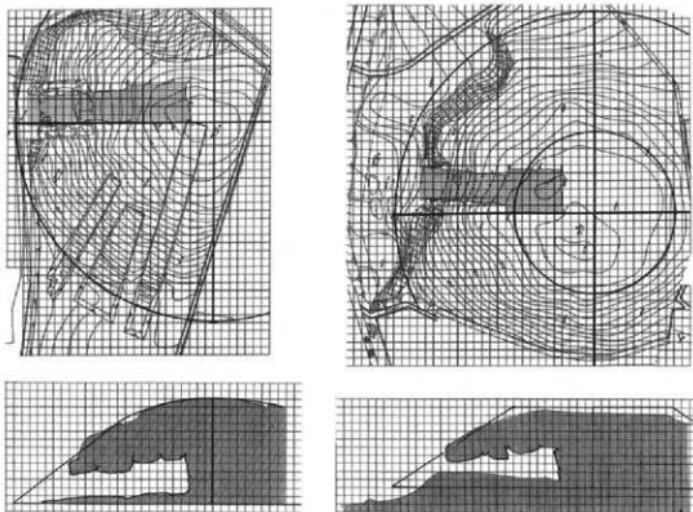


図85 平野1号墳（右）と平野2号墳（左）の墳丘築造規格

1 目盛 = 2 尺（約50cm）

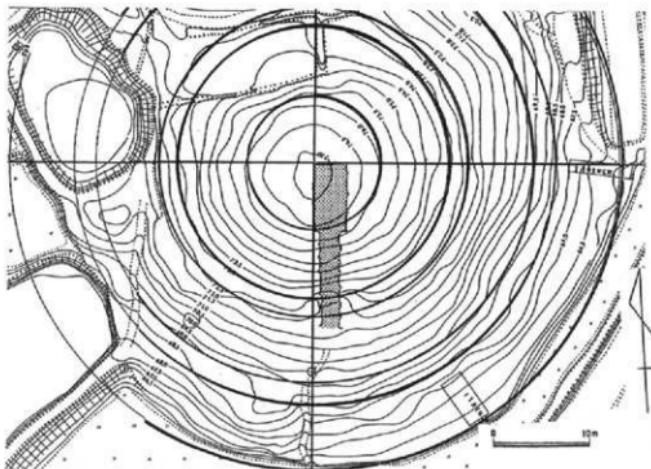


図86 牧野古墳墳丘と石室の位置関係

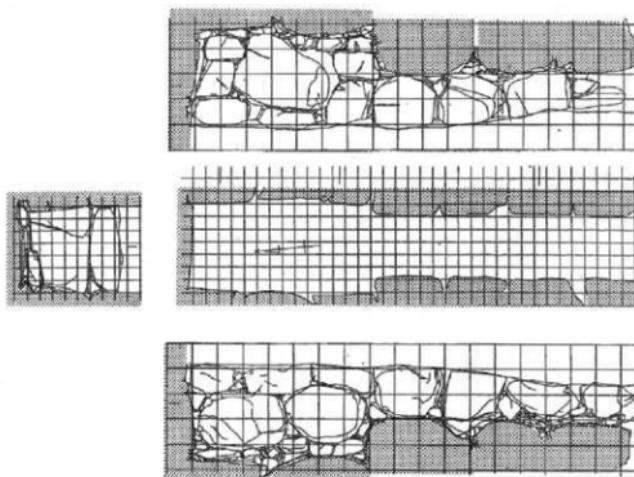


図87 秋殿南古墳石室築造規格

平面図・奥壁図：1目盛＝1尺（約32cm） 側壁図：1目盛＝2尺

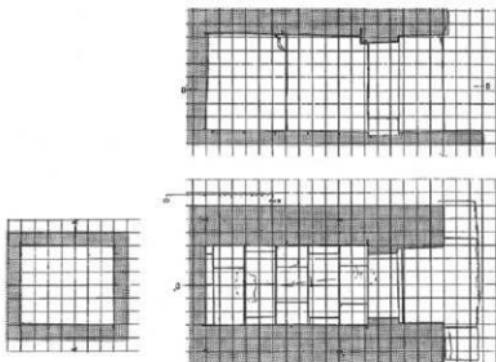


図88 平野塚穴山古墳石室築造規格

1 目盛 = 1 尺 (25.1cm)

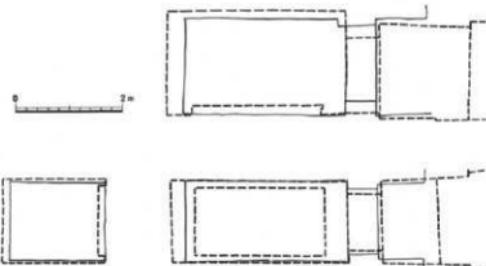


図89 平野塚穴山古墳（実線）と陵山里東下塚古墳（破線）の比較

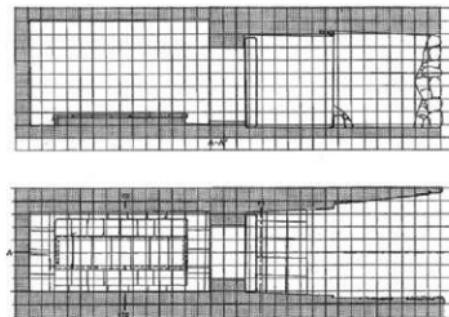


図90 陵山里東下塚古墳石室築造規格

1 目盛 = 1 尺 (24.2cm)

## 註

- 1) 奈良県橿原市丸山古墳や奈良県桜井市糸塚古墳は、逆に外に向って高くなるように規格された可能性が考えられる。これは窓門から内部に入る際の視覚的効果を意識したものと考えられる。
- 2) 太田宏明 2001 「畿内地域の後期古墳」[第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える] 東海考古学フォーラム実行委員会事務局
- 3) 山内紀嗣 1992 「天理大学歴史研究会調査研究報告1 奈良県天理市峯塚古墳・西糸塚古墳・鍬子塚古墳測量調査報告」天理大学歴史研究会
- 4) 増田一裕 1996 「畿内大型横穴式石室の技術的展開と歴史的動向」『日本考古学』3号 日本考古学協会
- 5) なお、筆者は、古墳時代を通じて24cmや30~35cm(「唐尺=30cm」「高麗尺=35cm」といった厳密な2つの尺ではなく、30~35cm程度の大柄みな長さの単位であったと考えている)の尺、27cm尺、身度尺など複数の尺を併用する状況にあったと考えている。
- 6) 後漢の光武帝が奴隸に贈った「漢委奴国王」金印の1辺の長さ2.3cmも、1尺23cmにおける1寸に相当する。
- 7) a. 小泉契姿 1977 「東洋尺度史の諸問題」『日本歴史』351 日本歴史学会  
b. 小泉契姿 1977 「ものと人間の文化史22・ものさし」法政大学出版局  
c. 亀田隆之 1955 「日本古代に於ける田租田積の研究—度量衡制との關聯を通して—」『古代学』4-2 古代学会  
d. 桑本杜人 1959 「奈良時代の尺度について」『MUSEUM ミュージアム』99号・100号 東京国立博物館の各文献を参照した。
- 8) 前掲註7 d文献
- 9) 前掲註7文献
- 10) 尾崎喜左雄 1977 「上野国の古墳と文化」尾崎先生著書刊行会
- 11) 新井宏 1992 「まぼろしの古代尺 高麗尺はなかった」吉川弘文館
- 12) 宮川涉 1979 「前方後円墳兼造企画の「基準尺度」について」『橿原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館
- 13) 1/10スケールの実測原図を用いて石室の該当部分の長さを計測した。
- 14) 奈良県立橿原考古学研究所 1978 「史跡 牧野古墳」広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会
- 15) 泉森峻 1982 「秋殿古墳」「飛鳥・磐余地域の後、終末期古墳と寺院跡」奈良県文化財調査報告書第39集 奈良県立橿原考古学研究所
- 16) 東潮、米田文孝ほか 1983 「明日香村塙本古墳発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1982年度」奈良県立橿原考古学研究所
- 17) 泉森峻 1977 「意田御坊山古墳付 平野塙穴山古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県立橿原考古学研究所・奈良県教育委員会
- 18) 前掲註17文献
- 19) 松本浩一、桜場一寿、右島和夫 1980 「裁石切組積横穴式石室における構築技術上の諸問題 上—いわゆる朱線をもつ南下E字古墳を中心として—」『群馬県史研究』11 群馬県史編さん委員会
- 20) 前掲註17文献
- 21) 有光教 1979 「扶余陵山里伝百濟王陵・益山双陵」『橿原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館
- 22) 『三国史記』卷第二十六「百濟本紀」第四 「武寧王。(中略)身長八尺。眉目如画。仁慈寛厚。民心帰附。」

### 3 平野古墳群の研究

#### (1) 平野1号墳と平野2号墳 (図91・92)

約6基の古墳で構成される平野古墳群の古墳の配列を検討すると、古墳群の西端に単独で立地したと推定される平野塚穴山古墳を除いて、古墳群中央部にかつて所在していたものの現在は消滅した平野3・4号墳や古墳群の東端に所在する平野1・2号墳の1基の古墳は、それぞれ、2基づつセッタとなって並列するかのように築造されている。このうち、2基並列する古墳の中では、平野1号墳と平野2号墳が唯一石室の規模や形状等が判明しているので、この2基の古墳の石室形態・規模等について比較・検討することとする。

平野1・2号墳の墳丘を比較すると、図91のとおり、古墳の墳丘は平野1号墳が後世に著しく削平されているため、平野2号墳の墳丘に比して墳頂部で約2mの比高差があるが、両古墳とも墳丘の中軸よりやや南側に横穴式石室を構築しており、墳丘における石室の構築位置が類似している。平野1・2号墳の横穴式石室を比較すると、図92のとおり、平野1号墳の玄室は、基本的に2枚の石材を横位に使って2段積で構築されているのに比して、平野2号墳は、一部を除いて基本的に玄室・羨道とも1枚の巨石を縱位に使ってほぼ垂直に立てて石室を構築する点で新しい要素がみられる。また、平野1号墳は、持ち送りの傾斜角度が平野2号墳に比して強く、袖の幅が広いことなど、とくに玄室の石積技法等において明らかに時期的な差異が認められる。

しかし、表13や図92に示すとおり、両古墳とも全体的に極めてよく似た石室規模・形態を持つ古墳であり、平野1号墳の床面が未調査で石室規模が完全に把握されていない段階ではあるが、羨道や玄室の平面形態や規模等が極めて酷似していることがうかがえる。

また、両古墳とも丘陵の末端部の傾斜面に立地するにも関わらず、石室の床面をはじめ済道鋪石上面や天井石下面等の各部位がほぼ同じ標高を指向していることからみても、古墳の構築面をある程度並行になるように意識して築造されていた可能性が強い。従って、これらの観点からみても平野1・2号墳は時期的な差異が認められるものの、極めて緻密な計画性に基づいて設計・築造された古墳であることが考えられる。

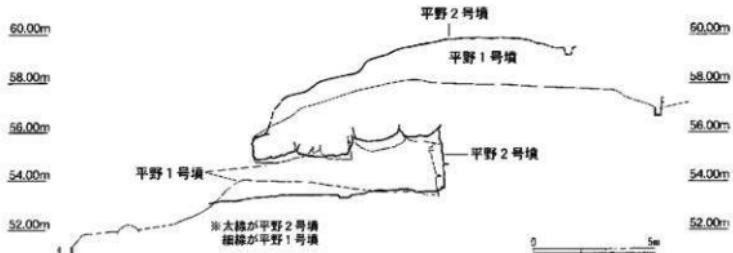
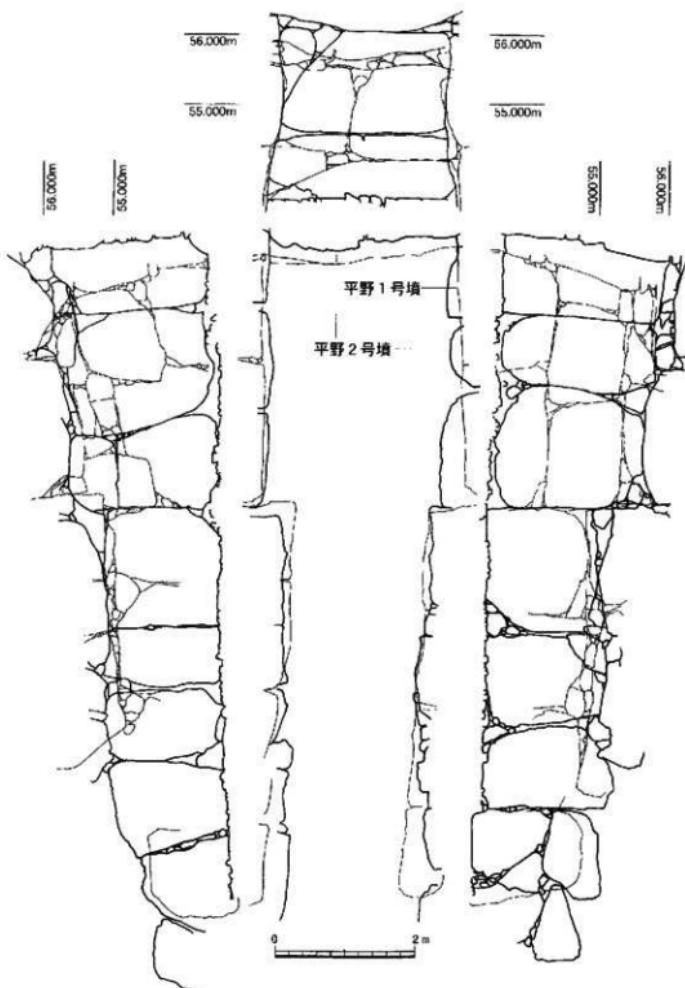


図91 平野1・2号墳墳丘縦断面合成図 (S=1/200)



※太線が平野2号墳  
細線が平野1号墳

図92 平野1・2号墳横穴式石室合成図 (S=1/70)

## (2) 平野古墳群における各古墳の築造時期と変遷 (図93)

第Ⅱ章3・4でも述べたように、地元に残された江戸時代の絵図等から平野古墳群には、少なくとも6基の古墳が存在したと考えられる。このうち、現存するのは平野1号墳、平野2号墳、平野塚穴山古墳の3基のみで、それ以外の平野3号墳、平野4号墳、「岩屋」と記された3基の古墳は絵図によってその位置や形状をかろうじて知るのみで、現在では消滅しているため詳細は不明である。

現在、知り得る限りの考古学的知見から平野古墳群の古墳の変遷を検討すると、平野古墳群で最初、あるいは、初期に作られたのが平野1号墳と考えられる。平野2号墳は、僅かに出土した須恵器の破片や石室の形態等から平野1号墳よりは後出することは確実であり、まず、横穴式石室を主体部とする7世紀前半（7世紀第1四半期）の平野1号墳から7世紀中頃（7世紀第2四半期）の平野2号墳への変遷が考えられる。

平野3号墳は、実態は不明であるが、泉森敏氏によって図面上で復元された凝灰岩の切石で構築された横口式石室の形態や規模からは、後述する平野塚穴山古墳よりも後出することはほぼ確実であり、7世紀第4四半期に位置付けられる<sup>11</sup>。

平野4号墳は、花崗岩を石材とする石室と想定されていること以外は横口式石室か横口式石室であるのか不明であるが、平野古墳群で横口式石室を主体部とする古墳は全て凝灰岩で構築されていることからみても、花崗岩を石室材とする古墳は横穴式石室である可能性が強く、石室材が花崗岩であるならば、並列して築かれている平野3号墳と平野4号墳の2者の間では平野4号墳から平野3号墳という変遷が推定される。

横口式石室を主体部とする平野塚穴山古墳は、百濟の王陵である陵山里東下塚古墳（大韓民国忠清南道扶餘邑）の帰属時期から7世紀第1四半期～7世紀第2四半期まで遡らせることも可能であるが、一般的には唐尺の使用から7世紀後半と考えられていることや、また、二上山麓の終末期古墳に多くみられる凝灰岩使用石室の帰属時期等の関係から7世紀第2四半期まで遡らせることは難しく、7世紀第3四半期以降に位置付けるのが妥当と思われる。

また、実態が不明な「岩屋」と記された古墳の帰属時期を強いて述べるならば、「平野村絵図」（図版85・86、図版87-1）の筆の質感や彩色等から凝灰岩の切石ではなく、横穴式石室である可能性が強いことから、確實に平野塚穴山古墳以前に位置付けられ、同じ横穴式石室である平野1号墳と平野2号墳と同等の時期まで遡らせることも可能である。

このように平野古墳群は、根拠がほぼ確実なものとしては、平野1号墳→平野2号墳→平野塚穴山古墳→平野3号墳への古墳の変遷が考えられ（図93）、7世紀前半から7世紀末にかけてのはば1世紀にかけて断続することなく、連続と形成された古墳群であるといえる。

平野古墳群では、築造当初は平野1・2号墳のような古墳時代以来の伝統的な硬質の花崗岩の巨石を用いた横穴式石室であったが、7世紀第3四半期と推定される平野塚穴山古墳の出現・築造を契機に、横穴式石室から朝鮮半島由来の新しい墓制である横口式石室へと変質する。しかも、平野塚穴山古墳の横口式石室は、何の脈絡もなく、突如として百濟の陵山里東下塚古墳と同様の石室規模・構造を持つ石室が採用されており、石室の全てを地元の二上山で産出する軟質の凝灰岩の切石を組み合わせて構築している。これ以後、平野古墳群の中で最後の古墳と推定される平野3号墳までは石室は凝灰岩で構築されている。

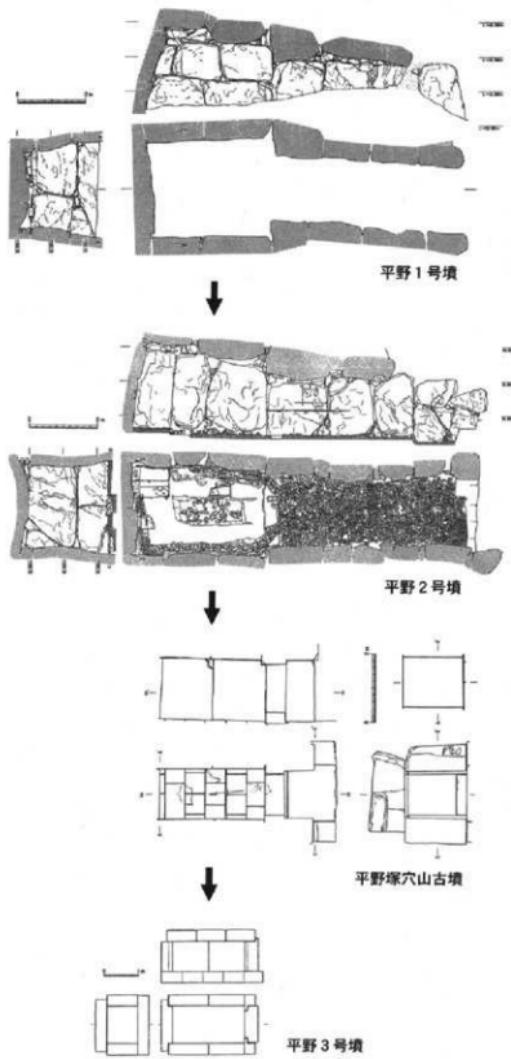


図93 平野古墳群における古墳の変遷

表14 平野古墳群の石室規模の比較

古墳の名称	石室の全長	玄室長 (埋葬施設の広さ)	玄室幅 (埋葬施設の幅)	玄室高 (埋葬施設の高さ)	羨道長さ	羨道幅	羨道高さ	袖幅	埋葬施設(玄室)の広さ
平野1号墳 (平野平塚古墳)	(9.2)	3.5	2.8	(2.0)	(5.7)	1.8	(1.5)	0.5	9.8
平野2号墳	(10.6)	3.8	2.5	2.2	(6.8)	2.0	1.5 1.7	0.2	9.5
平野塚穴山古墳	4.47	3.05	1.5	1.76	0.84	1.4	1.76	0.1	4.57
平野3号墳	2.84	2.12	1.08	0.88	—	—	—	—	2.28

※（ ）は現況値・残存値を表す。埋葬施設(玄室)の広さ以外はm。

また、表14のとおり、7世紀代の石室規模の縮小化に対応するかのように石室の規模も横穴式石室を主体部とする平野1号墳や平野2号墳以降、凝灰岩で構築した横口式石室を主体部とする平野塚穴山古墳、平野3号墳へと時代を経るにつれて石室の規模も縮小化していく傾向がある。埋葬施設(玄室)の表面積の規模から比較・検討すると、平野1・2号墳の玄室の1/2の大きさが平野塚穴山古墳で、さらに平野3号墳は平野塚穴山古墳の1/2の大きさになり、かろうじて1棺を納める程度の空間しかなくなる。平野1・2号墳が7世紀第1四半期から7世紀第2四半期、そして、平野3号墳を7世紀第4四半期と考えた場合、平野古墳群では約50年足らずの期間に埋葬施設の表面積は約1/4に縮小していることになる。

このような石室規模の縮小化が、大化2(646)年3月に出土されたとする説がある大化薄葬令に呼応するものか否かは不明であるが、平野古墳群の場合、埋葬空間の規模が一機に急激に縮小するのではなく、時期によって段階的に縮小していることが注目される。

中でも平野塚穴山古墳は、玄室規模が一機に1/2縮小するのをはじめ、石室の全てを二上山産の凝灰岩で構築する点や陵山里東下塚古墳の石室形態を直接的に移入した点等においても平野古墳群をはじめ、終末期古墳の中でも画期となる古墳である。

### (3) 平野古墳群の地域的特質

平野古墳群の地域的特色として埋葬施設の石室材に凝灰岩を使用した古墳が多いことや平野2号墳のように埋葬施設内に埠と棺の受台で棺台を構築するなど二上山麓の終末期古墳にみられる地域的特質がある。これまで述べてきたことと重複する内容もあるが、以下、平野古墳群の地域的特質について整理しておきたい。

#### ①凝灰岩使用石室の系譜(図94)

平野2号墳の石室は、玄室床面の中央部に上と凝灰岩の碎片で構築した棺台の基礎(突出部)を設け、横穴式石室の玄室床面全面に整美に加工した二上山産の凝灰岩の切石を敷きつめた類例のない石室構造を持つ古墳であった。次代の平野塚穴山古墳や平野3号墳では、石室(横口式石室)の全てに整美に加工した凝灰岩の切石を使用している。一つの古墳群の中に伝統的な横穴式石室から凝灰岩を使用する石室へと変質する古墳群は現在までのところ、平野古墳群以外には類例は無く、主体部の石室材に凝灰岩を多用する古墳群として注目される。

7世紀代の凝灰岩を石室材、あるいは、石室の一部を構成する部材として使用する終末期古墳

は、奈良盆地北部、飛鳥地域南部、奈良盆地西部、河内飛鳥の四地域に分布しており、中でも河内飛鳥を中心とする二上山麓には、凝灰岩を使用した石室が集中して分布している（図94）。

凝灰岩を使用する古墳は、床敷等の石室を構成するための補助的な部材として部分的に限定して使用されるものと古墳の主体部、埋葬施設として石室（石槨）を構成する部材に使用されるものの大別して2つに分けて考えることができる。

前者の石室を構成するための補助的な部材として部分的に使用されるものとして、7世紀中頃の平野2号墳では横穴式石室の玄室の床面全面に凝灰岩の切石が敷かれており、7世紀後半と推定される大阪府柏原市安堂第6支群第3号墳では不揃いの凝灰岩の切石が棺を置く部分に限って敷設されている。また、横口式石槨では7世紀初頭のシヨツカ古墳では、前室床面の入り口付近の仕切石に使用されており、7世紀中頃の鉢伏山西峰古墳では前室の床面全面に凝灰岩が敷かれている。

後者の主として埋葬施設の石室（石槨）を構成する部材に凝灰岩を使用するものとしては、河内飛鳥では、いずれも家形石棺からの系譜・派生が考えられている陀寺古墳、小口山古墳、德樂山古墳、ヒチンジョ池西古墳、松井塚古墳などがある。奈良盆地北部では、石のカラト古墳があり、奈良盆地西部では、平野塚穴山古墳、平野3号墳をはじめ、兵家古墳、烏谷古墳がある。

また、飛鳥地域では7世紀後半以降と推定されるキトラ古墳、東明神古墳、牽牛子塚古墳、中尾山古墳、マルコ山古墳、高松塚古墳等がある。これらの古墳では、いずれも横口式石槨を構成する部材の全てに二上山産の凝灰岩が使用されており、とくに凝灰岩使用石室は7世紀末頃から8世紀前半にかけて、飛鳥地域の王陵級の古墳の石室の主流となることが注目される。

数ある二上山麓の終末期古墳の中でも、平野古墳群中の平野塚穴山古墳の横口式石槨は石室の全ての部材を二上山産の凝灰岩の切石で組み立てて構築した石室の初現・転機として位置づけられており、天皇・皇族級の高位の被葬者像が想定される天武・持統天皇陵（野口王墓）や高松塚古墳等の7世紀後半以降に飛鳥地域に盛行する凝灰岩使用石室の祖型と考えられている。平野塚穴山古墳の石室材としての凝灰岩の導入に際して、直接的には平野2号墳の横穴式石室の玄室床面全面に凝灰岩を敷き詰めた石室構造が先駆形態として何らかの影響を与えた可能性が強く、平野古墳群は、凝灰岩使用石室の成立・展開を研究する上で極めて重要な古墳群として位置付けられる。凝灰岩使用石室の系譜は、二上山産の凝灰岩を使用した石室が大阪府の河内飛鳥を中心に分布していることや飛鳥地域よりも早い7世紀前半頃には出現していることから、その祖型は平野古墳群を含めた二上山麓の終末期古墳に求められる。

河上邦彦氏は、凝灰岩使用石室の出現・流行について、壬申の乱後の天武政権の成立に伴って、それまで大和で花崗岩を使って石室作りを行っていた近江系の石工集団を始めとする近江系勢力が排除され、変わって凝灰岩を使って石棺作りを行っていた二上山の石工集団に石室作りを行わせたことによるものとする見解を示している。平野塚穴山古墳等の飛鳥地域の終末期古墳の凝灰岩使用石室の石室材の接合技法等にみられる構築技法は、特に古墳時代後期以降に香芝市内や葛城市をはじめ、二上山麓に多く分布する組合式（家形）石棺の製作・構築技法と共通性が認められ、また、埋葬技法的にも組合式石棺を直葬する古墳との関連性も認められることから、凝灰岩使用石室は、潜在的には組合式（家形）石棺を始め、凝灰岩を多用する二上山麓の終末期古墳の石室の構築経験・過程の中で創出されたものと考えられる。

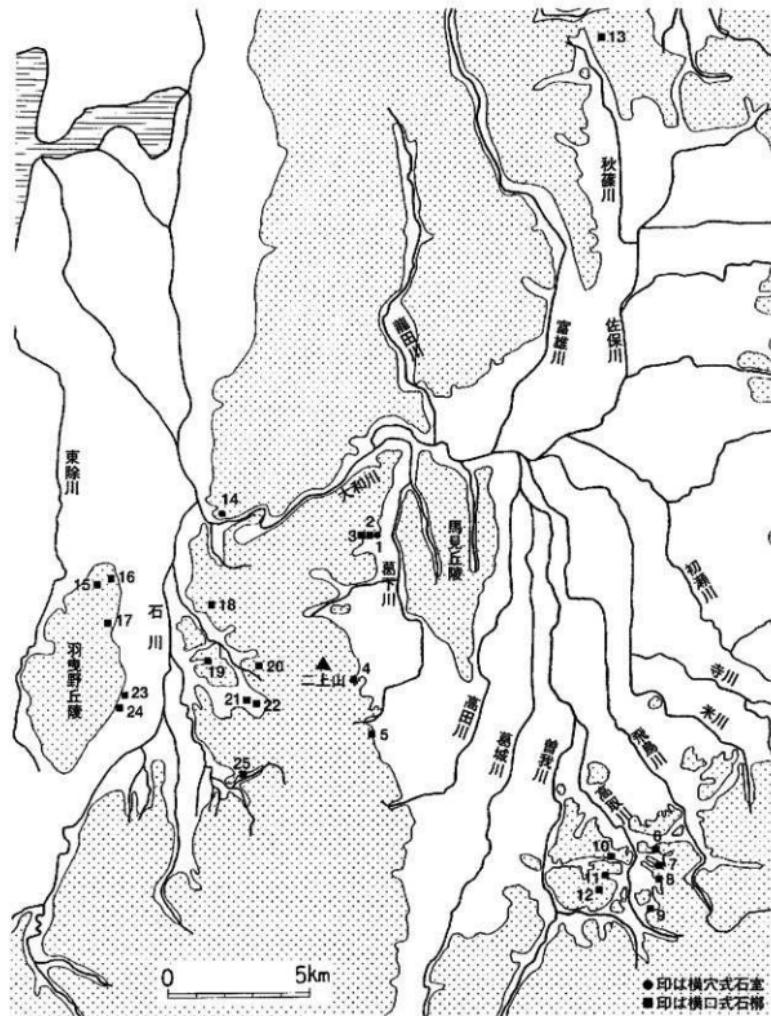


図94 河内・大和の凝灰岩を使用する終末期古墳の分布

- |            |           |             |                |               |
|------------|-----------|-------------|----------------|---------------|
| 1. 平野2号墳   | 2. 平野3号墳  | 3. 平野塚穴山古墳  | 4. 鳥谷口古墳       | 5. 兵家古墳       |
| 6. 野口玉墓    | 7. 中尾山古墳  | 8. 高松塚古墳    | 9. キトラ古墳       | 10. 幸牛子塚古墳    |
| 11. マルコ山古墳 | 12. 東明神古墳 | 13. 石のカウト古墳 | 14. 安堂第6支群第3号墳 | 15. ヒナンジョ池西古墳 |
| 16. 小口山古墳  | 17. 德樂山古墳 | 18. 鉢伏山西群古墳 | 19. 御嶺山古墳      | 20. 田須谷1号墳    |
| 21. 松井塚古墳  | 22. 仏陀寺古墳 | 23. 宮前山古墳   | 24. お危右古墳      | 25. シショツカ古墳   |

## ②塙と棺台（図95）

平野2号墳からは塙と棺の受台の棺台を構成する土製品が出上している。棺の受台は、木棺等の有機質の棺を保護・収納するための外容器として、塙は、棺の受台の高さを調節するための棺敷と考えられ、両者が一对になって棺台を構成する部材として使用されていたものと推定される。終末期古墳から出土する塙は、全国で約25例が知られており<sup>29)</sup>、そのうちの約半数の10例が二上山麓の南河内地域の終末期古墳から出土している（図95）。塙の中でも平野2号墳出土塙は、質的にも羽曳野丘陵の終末期古墳から出土する塙と類似しており、また、塙状の工作物と土製の棺台を組み合わせて同様の棺（柩）の埋葬形態を持つ例は、全国的にみても平野2号墳と大阪府南河南部河南町塙廻古墳の2例しかなく、南河内地域の終末期古墳との関連性がうかがえる。

塙で構築した棺台の類例として、平野塙穴山古墳の横口式石柳の床面には主軸に沿って玄室の中央部に棺台と推定される「工」状を呈する2cmの段差（高まり）がある（図12、図版100-2）。平野塙穴山古墳の粗型である陵山里東下塙古墳の石室の床面は磚敷きで中央部に磚を組み合わせて棺台を構築しているが（図78、写真67）、平野塙穴山古墳では床面と棺台には塙や磚は使用せず、床面は石室と一緒に一定の規格で加工された方形ないしは、長方形をする凝灰岩の切石21枚がモザイク状に敷き詰められている。後続する飛鳥地域の凝灰岩使用石室の中でも床面にこのような敷石配列を持つ事例ではなく、また、不自然であることから、おそらく、平野塙穴山古墳の床面の切石の配列・構造は、陵山里東下塙古墳の床面の磚敷を模したものであり、「工」状の高まりは当初から棺台として意図的に設置されていた可能性が強いものと考えられる。

平野2号墳にみられるような塙や上製の棺台を組み合わせる埋葬形態は、二上山西麓を中心とする南河内地域の終末期古墳との関連性がうかがえ、埋葬施設への塙の使用についても系譜としては陵山里古墳群等を中心とする百濟の墓制からの影響が考えられる。

## ③漆塗棺（表10）

平野塙穴山古墳では、漆塗籠棺を棺身、夾紵棺を棺蓋として2種類の漆塗棺を一对とする棺材の使用方法が推定される。漆塗棺は、第Ⅳ章1の表10のとおり、全国で約20例が知られており<sup>30)</sup>、このうち、半数の9例は二上山麓の終末期古墳から出土している。二上山麓の終末期古墳から出土する漆塗棺の内訳として、夾紵棺は、平野塙穴山古墳や塙廻古墳、大阪府柏原市安福寺所蔵品があり、この他にも実態が不明な聖德太子墓を含めると4例がみられる。漆塗籠棺は、現在までのところ、全国でも平野塙穴山古墳やアカハゲ古墳、塙廻古墳、シショツカ古墳等の二上山麓に所在する4つの古墳にのみしかみられず、漆塗棺の中でも極めて地域性の強い漆塗棺であると考えられる。しかも、漆塗籠棺と夾紵棺の2種類を一对の棺材として使用する事例は全国でも平野塙穴山古墳と塙廻古墳の2例のみであり、南河内地域の終末期古墳との関連性が認められる。

このように、平野古墳群の地域的特質として、凝灰岩を石室材として多用する石室構造をはじめ、平野2号墳にみられる塙と棺の受台の2者の土製品で棺台を構成して棺を安置する埋葬形態、平野塙穴山古墳にみられる漆塗籠棺や夾紵棺を一对の棺材とする漆塗棺の構成方法等について、二上山麓に立地する南河内地域の終末期古墳の墓制との関連性を濃厚に示唆している。

さらに、その系譜・源流として、陵山里古墳群や宋山里古墳群等を中心とする百济の墓制からの影響も認められ、凝灰岩使用石室の系譜や変遷、棺の埋葬形態等の終末期古墳を研究する上で重要な要素が秘められている。

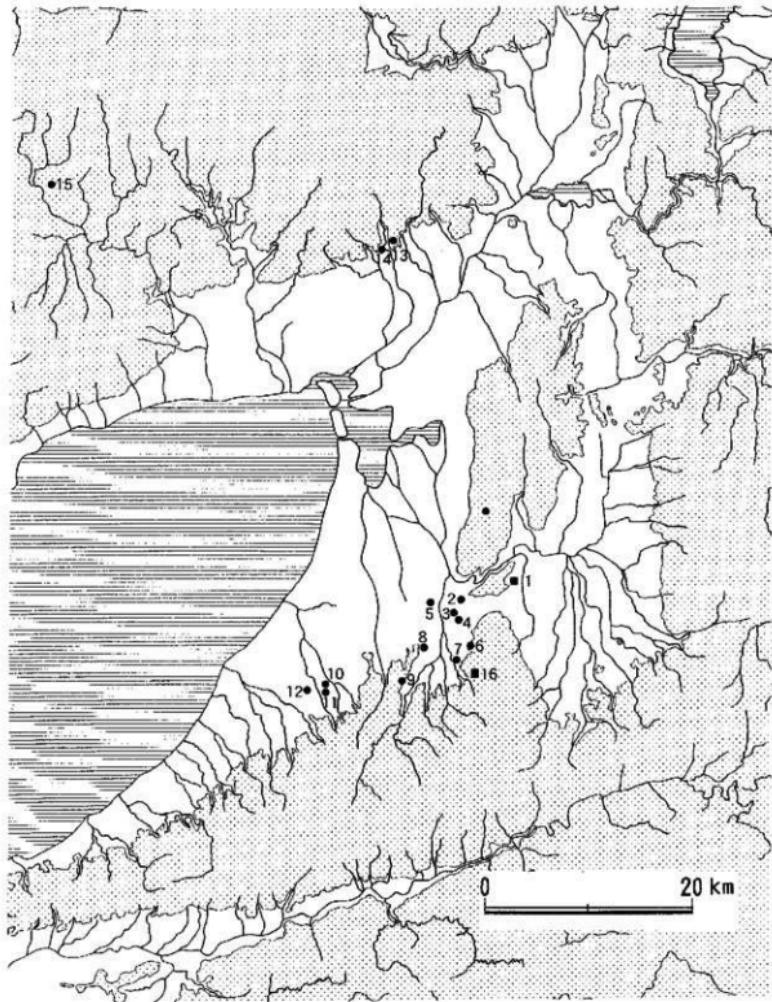


図95 塚と土製の檜台を使用する終末期古墳の分布

- |            |             |            |           |              |
|------------|-------------|------------|-----------|--------------|
| 1. 平野2号墳   | 2. 誉田山15号墳  | 3. 鈴伏山西峰古墳 | 4. 観音塚上古墳 | 5. 小口山古墳     |
| 6. 仏陀寺古墳   | 7. 須賀古墳群    | 8. お龜石古墳   | 9. 南坪池古墳  | 10. 牛石13号墳   |
| 11. 牛石14号墳 | 12. 檜尾塚原2号墳 | 13. 阿武山古墳  | 14. 初田1号墳 | 15. 青龍寺裏山1号墳 |
| 16. 塚廻古墳   |             |            |           |              |

#### (4) 平野古墳群の被葬者像について

平野古墳群では、7世紀前半になって北葛城地域でも突如として人型の横穴式石室を有する平野1・2号墳の出現以降、7世紀末頃まで規模を縮小しながらも連續して合計約6基の古墳が築造される。古代の香芝市、北葛城郡王寺町・河合町・上牧町、大和高田市一帯を指す総称である「片岡（傍丘）」の中でも、葛下川流域一帯で7世紀代としては平野古墳群以外には複数の古墳で構成された大規模な古墳群はみられないことから、同古墳群の被葬者は当地域一帯を基盤として約1世紀にわたって安定した勢力を維持することができた有力集団の墓域と推定される。

古墳の被葬者像を検討するにあたって「延喜式」には、香芝市を含む葛下郡内に孝明天皇の「片丘馬坂陵」、顯宗天皇の「傍丘磐杯丘南陵」、武烈天皇の「傍丘磐杯丘北陵」、茅渟王の「片岡葦田墓」等の数名の皇族の陵墓が所在することを記している。第Ⅱ章3・4でも詳述したとおり、江戸時代に平野塚穴山古墳は顯宗天皇陵として、平野3号墳は武烈天皇陵として取り扱われてきた時期がある。また、「片岡葦田墓」については、江戸時代の亨保21(1757)年の『大和志』では香芝市南方の大和高田市榮山に所在する榮山古墳（全長210mの前方後円墳）としているが、<sup>49)</sup>蒲生君平の『山陵志』では、「葦田」は片岡の北隅に推定されることから「大和志」の見解を否定するなど他の陵墓と同様に江戸時代からその所在地を巡って論争が繰り広げられている。

上記の葛下郡内の陵墓の中では、「光城東西五町 南北五町 無守戸」と記された茅渟皇子の「片岡葦田墓」が平野古墳群の形成時期と最も年代的に合致しており、地名からも矛盾がないことから、これまで、小泉俊夫氏、塙口義信氏、泉森皎氏の3氏を中心には平野古墳群の被葬者像として茅渟皇子の「片岡葦田墓」を始めとする茅渟王一族とする見解が示されてきた。

小泉俊夫氏は、平野古墳群の被葬者は、石室の構造や出土遺物から、皇極（齐明）・孝徳天皇の父である茅渟王一族とする見解をはじめて示した。また、近年では娘の皇極（齐明）天皇の前夫の高向王との間に生まれた漢皇子などを含む茅渟王一族とする見解を示している。

塙口義信氏は、横口式石棺に天皇や皇子、高級官僚級の柩であった央紺棺と漆塗籠棺の2棺が棺材として使用されており、被葬者像として政治的ないし社会的地位の高い人物が考えられるこ<sup>50)</sup>とや「延喜式」に記された茅渟王の片岡葦田墓が営まれた葛下郡の「片岡」・「葦田」という地域は、現在の王寺町から上牧町の西部を中心とする葛下川流域の北葛城地域付近一帯を指し、平野古墳群以外にこの地域に7世紀代の高位の集団が形成したと推定される古墳群がないこと。茅渟王は当地北部の片岡正寺の創建に深い関わりを有することのみならず、572年に始まる敏達天皇の百濟大井宮の造営と共に敏達天皇の皇子で茅渟王の父にあたる押坂彦人皇子や義兄弟にあたる舒明天皇が当地と至近距離にある北葛城郡広陵町百濟近辺を中心に葛城地域北部と深い関わりを持っていることなどから平野塚穴山古墳の被葬者を茅渟王とする見解を示した。

泉森皎氏は、平野2号墳の発掘調査成果をふまえ、茅渟王の推定没年代から平野塚穴山古墳の被葬者は茅渟王ではなく、7世紀前半から中頃にかけて築造された双墓と考えられる平野1・2号墳こそが茅渟王とその弟の桑田上であるという新説を展開している。

茅渟王は、生没年代等不明な点が多いが、祖父は敏達天皇、父は押坂彦人兄皇子で、符明天皇の異母兄弟にあたる。また、実子は皇極（齐明）天皇・孝徳天皇で、天智天皇や天武天皇にとつては外祖父にあたり（表15）、茅渟王一族は、7世紀の古代律令国家体制の形成に大きな影響を与えた人物を輩出した日本の歴史上重要な皇族であったことができる。

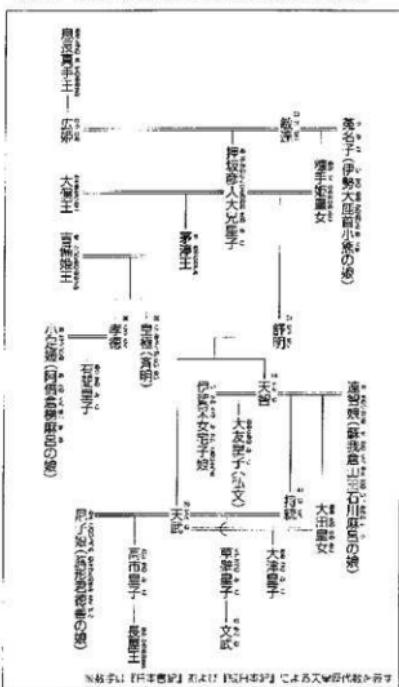
考古学的見地から平野古墳群の被葬者像を検討した場合、これまで述べてきたように平野2号墳の埋葬施設への塙の使用方法や平野塙穴山古墳の漆塗棺の構成方法等についても南河内地域の終末期古墳との関係を示唆しており、さらにその系譜の源流として百濟を中心とする墓制との関連性が認められる。特に平野塙穴山古墳の石室は百济の上陵である陵山里東下塙古墳の石室規模・構造を模していることから、平野塙穴山古墳の被葬者は663年の百济王家滅亡に伴って米日した渡来系氏族とする説も考えられなくもないが、平野古墳群の形成は、伝統的な横穴式石室から始まることからみても7世紀代にわたって同一集団が形成した古墳群である可能性が強く、渡来系氏族よりは百济の干族と何らかの交流があり、その墓制に通じた人物と考えられる。

塙口義信氏は、当地域と百済の関わりのある人物として、ともに百済最後の王の義慈王の子である善光（余禪廣）と頼岐の2人をあげている。善光は、日本と百済の同盟関係強化のために631年に兄の余豐璋とともに日本に送られた人物で、持統朝に「百済王」姓と693年に正広參を贈られており、694年には敏達天皇の末裔で大原真人氏の氏寺とされる片岡上寺に善光一族の令弁法師が止住するという趣旨の記事がある。また、頼岐は、642年に妻とともに来日して敏達天皇の572年に造営された百済大井宮（北葛城郡広陵町）近くの「百済大井家」に移るという記事があり、6世紀後半以降、敏達天皇系土族や末裔の勢力下であった当地域と百済系王族の末裔との接点がみられる。

茅渟王についても「片岡草田墓」が葛下郡内に所在することや父の押坂彦人大兄皇子が葛下郡と隣接する広瀬郡「成相墓」(北葛城郡広陵町)に埋葬され、水派宮(北葛城郡広陵町)を营造していることからみても当地域との深い繋がりが推測される。茅渟王と苦光や岐岐の直接的な関係を示す史料はないが、3者とも古代の片岡や周辺地域を介して何らかの関係を持っていた可能性は強く、百济の干陵の石室構造との類似性がみられる平野塚穴山古墳を茅渟王の「片岡草田墓」とする先学者の説は現在考え得る限りの資料の中では最も妥当な見解であるものと思われる。

7世紀前半から形成が始まる平野1・2号墳を含めた平野古墳群の被葬者は奈良県内でも最古級の須恵器焼成窯を有する平野窯跡群の造営を契機として、6世紀後半以降に当地へ進出してきた敏達天皇系王族である茅渟王一族の可能性が強く、北方の至近距離に隣接し、時期的にも併存する尼寺寺跡の造営者と同一集団と考えられる。

表15 茅渟王関係系図（註43b文献より転載）



• 格局：日本書記 | 王朝：日本書記 | 仁木義不 | 優代教子語

註

- 1) 泉森峻・猪熊蒙勝 1977 『竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県教育委員会
- 2) 河上邦彦 1995 「後・終末期古墳の研究」 雄山閣出版 112-117頁
- 3) 下大迫幹洋 2003 「奈良県平野古墳群をめぐる二、三の憶説」『統文化財学論集』 文化財学論集刊行会
- 4) 本報告書本文73頁-77頁参照
- 5) 安村俊史・石川成年 1986 「高井田遺跡」『柏原市文化財概報1985-Ⅳ』 柏原市教育委員会
- 6) 桑本哲 2003 「加納・平石古墳群発掘調査概報Ⅰ・中山間地域総合整備事業(南河内ごせ地区)に伴う-」 大阪府教育委員会
- 7) 伊藤聖浩 2003 「鉢伏山西峰古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書-平成5年度-』 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書50 羽曳野市教育委員会
- 8) 上野勝巳 1974 『太子町の古墳』 太子町教育委員会 22-23頁
- 9) 北野耕平 1994 『小口山古墳』『羽曳野市史第3巻』資料編1 羽曳野市 436-440頁
- 10) 北野耕平 1994 『徳業山古墳』『羽曳野市史第3巻』資料編1 羽曳野市 443-444頁
- 11) 北野耕平 1994 『ヒチンジヨ池西古墳』『羽曳野市史第3巻』資料編1 羽曳野市 432-433頁
- 12) 大阪府教育委員会編 1958 『松井塚古墳調査概要』 大阪府教育委員会
- 13) 金子裕之 1979 「奈良山-平城ニュータウン予定地内遺跡調査概要」 奈良県教育委員会
- 14) 伊藤勇輔 1978 『兵家古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第37冊 奈良県教育委員会 159-170頁
- 15) 佐々木好直 1994 「鳥谷古墳-奈良県北葛城郡當麻町染野所在の終末期古墳-」奈良県文化財調査報告第67集 奈良県立橿原考古学研究所
- 16) 西光慎二他 1999 「キトラ古墳学術調査報告書」「明日香村文化財調査報告書」第3集 明日香村教育委員会
- 17) 河上邦彦 1999 「東明神古墳の研究」高取町文化財調査報告第18冊 高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- 18) 綱干善教他 1977 『史跡赤牛子塚古墳』 明日香村教育委員会
- 19) 綱干善教他 1975 『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』 明日香村教育委員会
- 20) 明日香村 1978 『マルコ山古墳発掘調査概報』 明日香村教育委員会
- 21) 橿原考古学研究所編 1972 『壁面古墳 高松塚 調査中間報告』 奈良県教育委員会・奈良県明日香村
- 22) 秋山日出雄 1979 「繪置大内陵の石室構造」『橿原考古学研究所論集』第5 奈良県立橿原考古学研究所
- 23) 前掲註2 文獻122頁  
※河上邦彦氏は註2 文獻の中で「河内飛鳥はこの種の石室起源ということはできるものの大和の古墳へ直接的な影響があったかについては形態から疑問である。結局この種の石室は7世紀中頃以降に現われると言える。」と記している。
- 24) 前掲註2 文獻126頁
- 25) 小森哲也・染木誠 1990 「真岡市根本神宮寺塚古墳出土の埴をめぐって」『古代』第89号 早稲田大学考古学会 貢241-243
- 26) 香芝市二上山博物館編 2002 「二上山麓の終末期古墳と古代寺院-平野古墳群と尼寺廃寺跡-」 香芝

市二上山博物館

- 27) 二上山籠の終末期古墳から出土する壇については、本報告書本文92頁-94頁で詳述している。
- 28) 前掲註1文献84頁  
※前掲註1文献ではこの段差を単純に石室材の重みで沈下したと解釈するか、漆塗籠棺と夾紵棺の漆塗棺の棺台とみるとするのか見解が分かれている。
- 29) 飛鳥地域を始めとする凝灰岩使用石室の中でも石室を構成する部材の全てを組み合わせて構築する組合式の凝灰岩使用石室の床石は、通常、数枚の切石を石室の主軸と直行して敷かれている。
- 30) 本報告書162頁参照
- 31) 前掲註1文献
- 32) 下記文献を基に作成  
塙口義信 1991 「平野塚穴山古墳の被葬者について－いわゆる大化の薄葬令の問題を中心として－」『有坂隆道氏古記念日本文化史論集』 同朋社 111-114頁
- 33) a. 北野耕平 1980 「金象嵌竜文大刀」『井上薰教授退官記念日本古代の国家と宗教。上巻』吉川弘文館  
b. 北野耕平 1989 「大阪の終末期古墳」『シンポジウム青銅器の生産／終末期古墳の諸問題』 日本考古学協会  
c. 前掲註26文献
- 34) 泰良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 「飛鳥時代の古墳」飛鳥資料館図録第6冊 泰良国立文化財研究所飛鳥資料館 99頁
- 35) 梅原本治 1914 「聖德太子磯長の御廟」「聖德太子論纂」平安考古
- 36) 岡本清成・松村哲一 1968 「河南町の古墳」「河南町誌」河南町役場 19頁  
北野耕平 1970 「大阪府河南町平石第1号墳」「日本考古学年報」第18冊 日本考古学協会  
前掲註26文献
- 37) 前掲註6文献
- 38) 前掲註3文献
- 39) 正宗敦夫他 1978 「復刻日本古典全集第2期14卷 延喜式」現代思潮社
- 40) 並河永 1987 「大和志・大和史料」蘿川書店
- 41) 遠藤鏡雄 1974 「史料天皇陵」新人物往来社 41-42頁、112頁、125頁
- 42) a. 小泉俊夫 1988 「平野塚穴山古墳とその被葬者像」「石器のふるさと香芝」小泉俊夫  
b. 小泉俊夫 2002 「平野塚穴山古墳と平野1・2号墳の被葬者に対する諸見解について」「ふたかみ史遺」  
26 香芝市二上山博物館友の会ふたかみ史遺会
- 43) a. 塙口義信 1990 「奈洋王伝考」「葬子女短期大学紀要」第25号 埼女子短期大学 愛泉学会  
b. 塙口義信 1998 「平野塚穴山古墳の謎(上)」「香芝遺学」⑦ 香芝市役所・企画政策課 7-13頁
- 44) 泉森駿 2000 「香芝市平野塚穴山古墳の再検討－最近の被葬者論に関する－」『古代学研究』第150号  
古代学研究会
- 45) 前掲註1文献
- 46) 前掲註43a文献18-19頁  
平林章仁 「聖德太子と敏達天皇後裔王族」「日本古紀研究」第16冊 横田健一先生古稀記念会

## 4 平野2号墳における石室再利用とその史的背景

### (1) はじめに

平野2号墳は発掘調査により、中世に石室内が再利用されていたことが明らかになった。そこで、中世における平野古墳群周辺の環境を概観し、再利用のあり方と再利用されるに至った史的背景を大和の他の古墳石室再利用例も交えて探っていきたい。

### (2) 当該期における平野古墳群周辺の環境（図96）

延久2（1070）年までに興福寺領莊園である片岡庄が成立していたことが『興福寺大和国雜役免坪付帳』によって知られる。これによると、片岡庄は真野条五里から七里にかけてと、幕門条の四里だったと記されている。所在地については諸説あるが、王寺町域から香芝市域にかけての葛下川流域の片岡谷付近に存在していたものと思われる。この段階では平野古墳群周辺は片岡庄に含まれず、西側に接していたようである。応永6（1399）年『興福寺造営料大和国八郡段米田數注進状』の葛下郡に「寺方 般若寺四十二町九反小」とある。この般若寺（庄）は片岡庄のことを指しているものと考えられている。般若寺は後述するが、古代寺院である尼寺南廬寺の後身とされ、現在の般若院につながるものとされている。このように考えると、当地域は般若寺に近接しているので、この時期には片岡庄に属していた可能性もある。

片岡庄及びその周辺を治める在地領主は片岡氏であった。興福寺一乘院方国民で、筒井氏を中心とする戊辰脇党に属していたとされる。史料上の初見は正和4（1315）年『春日若宮神主祐臣進日記写』の「流鏑馬十騎片岡一騎」という記載である。次に史料に現れるのは至徳元（1384）年『長川流鏑馬注進日記写』の頼主人交名だが、いずれも、大和一国の国人をあげての祭礼だった春日若宮祭礼の流鏑馬に関する記事であり、のことから、遅くとも鎌倉後期には片岡武士團が

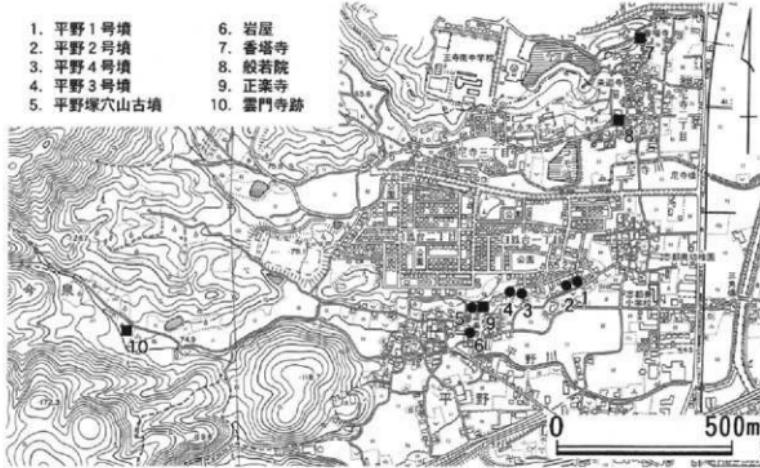


図96 中世の平野古墳群周辺の環境

形成されていたことが確認できる。以降、片岡氏は基本的に戦国末期まで当地域を治めている。

次に中世の当地域周辺に所在した寺院について、弘導寺（王寺町畠田）・般若寺（香芝市尼寺）・正樂寺（同平野）・雲門寺（同今泉）を概観する。

まず弘導寺を挙げる。弘導寺は中世に興福寺一乘院門跡の莊園名としても登場し、畠田の香塔寺につながると考えられる。尼寺北廢寺を引き継ぐように中世の弘導寺が存していいたものと思われる。貞和3（1347）年「興福寺造営料大和国八郡段米田數并清否注進状」に、「弘導寺十町八段九十歩」とあり、このころには弘導寺は確実に存在していたことがわかる。応永27（1420）年の「一乘院方坊人用銭支配状」に、「片岡 弘導寺庄 牧山上下庄」とあることから、片岡氏は弘導寺庄の莊官として、弘導寺とも関係があったものと思われる。同寺所蔵の文化7（1810）年『香塔寺略縁起』によれば、香塔寺は聖德太子によって開創された寺院で、堂塔伽藍、数箇の僧坊、堂を並べ、禪と密教を兼修する禪密兼修寺院であったとしている。禪密兼修については「加持ノ鈴磐遠近ニ響キ緑素老若愛ニ群ラナシテ得益ス、修法ノ渡摩団々トシテ天外ニカ、ヤキ、沈煙粉々トシテ香氣堂内ニ薰郁ス、故ニ寺号ノ香堂禪寺ト賜」を記し、本格的なものであったとしている。ただし、禪密兼修がいつごろ行われていたかについては明らかにならない。弘導寺は同縁起によれば、永祿期（1558～1569年）頃、松永久秀と片岡氏の争乱に巻き込まれ一字を残して焼亡したため衰退したようである。ちなみに香塔寺は江戸時代後期に浄土宗の僧東阿によって再興されていることから、現在浄土宗である。なお、10世紀末～11世紀前半頃に製作されたと推定されている觀音菩薩像が安置されている。聖徳太子建立に関しては伝承に過ぎないだろうが、のことから平安時代後期にはすでに創建されていたものと思われる。

般若寺は片岡寺とも呼ばれ、片岡氏の菩提寺として存在していたが、これは、香塔寺の南、尼寺に所在する、現在は融通念佛宗の般若院とのつながりが考えられる。般若寺は片岡般若寺と考えられ、これが尼寺南廢寺の可能性が高いことから、それを引き継ぐように中世の般若寺が存在していたと思われる。

正樂寺は平野塚穴山古墳の東側に隣接する。現在は淨土宗である。その境内には古墳石棺の一部転用と思われる石造線刻阿弥陀如来坐像（写真68）があるが、その様式から平安時代後期のものとされている。当時、当地域で阿弥陀仏信仰が芽生えていたことを窺うことができる。なお、長亨四年（長享は2年までしかないが、西暦にすれば1490年に該当）八月の銘のある五輪塔地輪がある。

雲門寺は今泉小字雲門寺に所在していた。史料上の初見は管見の限りでは『大乘院寺社雜事記』文明14（1482）年9月15日条で、「一片岡雲門寺藏主八十二歳、入滅、当國天魔三人之内也云々」である。15世紀後半には雲門寺藏主は片岡氏が継いでいたことがわかる。創建時期については、明らかにならない。伝承ではその門前は「平野千軒」と伝わっており、大いに栄えていたという。享保9（1724）年『今泉村諸色明細帳写』によると、雲門寺はかつて72坊をも有していたと記されており往時は大規模な寺院であったようである。江戸時代前期までに廃絶したことがわかる。

それでは、最後に平野古墳群そのものがどのように認識されていたかについて述べる。平野古墳群について、まず延長5（927）年「延喜式 卷二十一・諸陵察」で顯宗天皇陵とされる「傍丘磐杯丘南陵」が、元禄10（1697）年には「山陵記録」により、平野塚穴山古墳に比定されており、そして同じく「延喜式 卷二十一・諸陵察」で武烈天皇陵とされる「傍丘磐杯丘北陵」が「山陵記録」

により、平野3号墳に比定されていることを挙げることができる。すなわち、「山陵記録」には、平野村庄屋・年寄が南都奉行所に提出した覚書が記載されており、平野塚穴山古墳は「字石上 一顯宗御陵山 但顯宗之御廟と申傳候、然共鑿成儀不奉存候」とあり、平野3号墳は「字岩之北 一武烈御陵 但武烈御廟所と申傳候得共鑿成儀不奉存候」とあることから、「延喜式」成立以後から「山陵記録」成立までの間、平野塚穴山古墳・平野3号墳がそれぞれ顯宗天皇陵・武烈天皇陵と地元で認識され続けていた可能性が高いものといえる。つまり、当該期についてもそのように認識されていたといえよう。

おそらく、平野2号墳についてもそれに次ぐ墳墓であると認識されていたと思われる。

このように、当地域は片岡庄（般若寺庄）に近接もしくは属し、おそらくとも14世紀初頭には片岡氏が治めていたものと思われる。そして、周辺には片岡氏にゆかりの深い弘導寺・般若寺・雲門寺が所在していた。正樂寺については創建時期が明らかではないが、平安時代後期の石造線刻阿弥陀如来坐像が所在していることから、この時期まで遡る可能性を指摘できる。のことから、當時この地域で阿弥陀仏信仰が芽生えていたことを窺うことができる。そして、いつごろまで遡るかは明らかではないが、弘導寺の禪密兼修のあり方も、当地域に影響を及ぼしていたものといえよう。そして、平野塚穴山古墳・平野3号墳がそれぞれ顯宗天皇陵・武烈天皇陵と地元で認識され続けていた可能性を指摘することができ、平野2号墳についてもそれに次ぐ墳墓であると認識されていたものと思われる。

### （3）平野2号墳における石室再利用

次に平野2号墳における石室再利用について述べる。中世遺物は土師皿・瓦器椀・土師質土釜・瓦質土釜・瓦質火鉢・青磁碗・錢貨・刀子・鉄鎌・鉄釘などが出土している。時代は大きく分けると、瓦器椀の年代観から11世紀末～14世紀前半（第1期）と土釜の年代観から14世紀後半～15世紀（第2期）の2時期に分かれる。中世遺構面は「第1遺構面：表層（石室開口時）」・「第2遺構面」・「第3遺構面」の3面あるが、度重なる再利用による擾乱のため、同一個体が各層にまたがって出土しているものや、上層・下層で年代の逆転する土器が出土しているものもみられることから、層位的には捉えがたい。よって、主に遺物の年代観を足掛りとして、遺構面もできうる限り検討に加えながら、その状況を推察する。

第1期では11世紀末～14世紀前半頃にかけての土器が断続的に石室内から出土している。遺物組成は土師皿を中心に瓦器椀等が出土し、そのうち土師質土釜（大和B型）は11世紀～13世紀前半のものがいくつかみられる。特に第3遺構面において12世紀中頃の土師皿が伏せられて一括廃棄され、その内面から米粒状遺物が出土していることから、おそらくこの時期に石室内で祭祀的



写真68 石造線刻阿弥陀如来坐像

行為がなされていたものと考えられる。

第2期は土師質土釜(人和H型)・瓦質土釜(和泉・河内型)を中心に、瓦質火鉢・瓦質擂鉢・永楽通寶(初鑄1408年)などが出土している。第1遺構面は玄室奥で約2~5cmの大きさの礫が集積し、中央北西側で一群の炭化物層の抜がりが検出されている。炭化物層直上の天井石に煤が付着していることからも石室内で何かを燃やしていたことがわかる。このうち、永楽通寶は炭化物層上面と礫上面から2枚出土している。炭化物層は第2遺構面においても玄室中央北側から南側にかけて数群のまとまりで検出されている。第1遺構面よりもその状況は顕著である。その上面では無文銭、炭化物層内からは永楽通寶などが出土している。<sup>19)</sup>このように炭化物層から銭貨が出土している事例は人和では確認できないが、おそらく祭祀的行為によるものであろう。炭化物層に関しては他の石室再利用例でも多くみられるが、そのなかでも鳥塚古墳(生駒郡平群町)では密教的傾向の強い儀礼の場、すなわち護摩堂的岩窟として捉えられている。よって、当墳においても同様の状況を想定できるかもしれないが、密教祭祀と結び付けるには実証性に欠ける。このように、平野2号墳における第2期の再利用は炭化物層と銭貨のセットによる祭祀的行為が行われ、遺物組成も土釜が中心となる。よって、第1期と比べ再利用のあり方に変化があったといえよう。

なお、土釜については、第1期・第2期を通して口縁部・口縁部・体部が残存しているものが10個体ほどあるが、体部の破片は少なく、底部が残存している個体もない。よって、これらは体部・底部を打ち欠いた後に搬入された可能性を指摘できる。<sup>20)</sup>よって、これら土釜は蔵骨器として使用された可能性は低いものと思われる。

また、第1~3調査区の墳に掘部で検出したバラス層中から瓦器碗や瓦質擂鉢が出土している。このことから、このバラスは基本的に第1期・第2期を通して分布していたものといえる。石室内部だけでなく、古墳全体が再利用されていたものといえよう。

#### (4)まとめ

最後に平野2号墳の石室再利用とその史的背景をまとめる。

第1期については、おそらくも11世紀末頃には石室再利用が始まり、12世紀中頃には土師皿が伏せられて一枯廐乗され、その内面から米粒状遺物が出土するなど、祭祀的行為がみられる。先述したが平野塚穴山古墳に近接する正樂寺の境内に平安時代後期の古墳石棺の一部転用と思われる石造線刻阿弥陀如来坐像があることから、この時期に平野古墳群中のいづれかの古墳の石室から石棺が抜き取られた可能性がある。もしそうならば、平野2号墳の再利用初期の段階と平野古墳群中のいづれかの古墳から石棺が抜き取られた時期はほぼ同時代であったといえる。阿弥陀仏信仰が石棺材を利用した石造線刻阿弥陀如来坐像の制作と結び付いていたことが推察できることから、平野2号墳の再利用当初はその影響を受けていた可能性がある。そして、平野塚穴山古墳・平野3号墳がそれぞれ顯宗天鳳陵・武烈天鳳陵と地元で認識され続けていた可能性があり、もしそうならば、平野2号墳もそれに次ぐ墳墓であると認識されていた上で石室内において祭祀的行為が行われたものといえよう。ただ、弘導寺の禪密兼修の活動がこの時期まで遡るならば、弘導寺との関わりも考慮されるべきであろう。

そして、第2期になると、炭化物層と銭貨のセットでの祭祀的行為が明らかになる。遺物組成は土釜が中心になるが、その用途に関しては慎重を要する。当期の石室再利用は大和ではあまり確認されておらず確かなことは言えないため、今後の事例の増加を待ちたい。なお、当期の再利

用についても先述したような地域的環境が大きく作用したであろう。

大和では13世紀前半以降、古墳を中心とした造墓活動の活性化など、庶民信仰の変化に伴って、石室再利用のあり方が大きく変化するようだが、平野2号墳ではそのあり方から、その両期を第2期に見出しうる。ただ、第1期・第2期を通してその中心は祭祀的利用であったと思われる。

以上、第1期・第2期とも平野2号墳における石室再利用の直接的要因は明確にはできなかつたが、このような地域的環境が石室再利用の背景としてあったことは間違ひなかろう。

#### 註

- 1)『平安遺文』(王寺町史編集委員会 2000 『新訂王寺町史』資料編 王寺町 31-32頁)
- 2)山村雅史 2000 「中世の王寺」『新訂王寺町史』本文編 王寺町
- 3)(財)春日頌影会編 1984 『春日大社文書』4 (財)春日頌影会 797号
- 4)朝倉弘 1984 『奈良県史』10 名著出版
- 5)前掲註2文献
- 6)奈良県 1915 『大和志料』下 奈良県教育会 357頁
- 7)王寺町史編集委員会 2000 『新訂王寺町史』資料編 63-64頁
- 8)前掲註2文献
- 9)前掲註3文献 796頁
- 10)王寺町史編集委員会 2000 『新訂王寺町史』資料編 45-46頁
- 11)前掲註10文献 583-586頁
- 12)鈴木喜博 2000 「王寺町の仏教美術」『新訂王寺町史』本文編 王寺町
- 13)前掲註2文献
- 14)香芝市二上山博物館編 2004 『かしばの文化財14 香芝市指定文化財目録』香芝市教育委員会
- 15)香芝町史編纂委員会編 1976 『香芝町史』史料編 香芝町役場 784-789頁
- 16)正宗敦夫他 1978 『覆刻日本古典全集 第2期14巻 延喜式』現代思潮社
- 17)秋山日出雄・廣吉壽彦編 1994 『元禄年間山陵記録』(財)山良古代文化研究協会
- 18)大和における古墳石室再利用を考古学・文献史学とともに考察しているものとして、佐藤重聖氏の一連の研究があげられる(佐藤重聖 2000 「考古資料からみた重源上人の行動とその背景-猿山池出土石棺の背景-」「南都佛教」80、同2002 「狹山池川土石棺と重源上人」「重源のみた中世-中世前半期の特質」シンポジウム「重源のみた中世」実行委員会)。これによると、大和では古墳石室再利用事例は現段階で40例近く確認されている。そこで、平野2号墳との比較のため、両論文を参照して大和における古墳石室再利用について、特に11世紀後半以降の状況を概観する。

11世紀後半～13世紀前半頃の古墳石室再利用状況については、前段階と比較して石室内から焼土・炭・土器が出土する事例や、土器がまとまって配置される事例が増加し、何らかの祭祀的様相が顕在化する。11世紀以降大寺院を中心に寺院の由緒や所領の由緒を保障するため、古人を奉贊・神化してゆく動きが広がっており、これに伴う古墳の聖地化も見られる。その背景には、中央寺社の論理を身につけた上で在地に食い込んだ聖や修驗者の活動が存在したとも考えられるが、その宗教活動に参加し、その論理を利用した在地農民の信仰の変化も見過ごせない。そして13世紀前半以降、古墳を中心とした造墓活動の活性化や、太子信仰を元にした寺と古墳の結合、舍利信仰にもとづく古墳発掘など、庶民信仰をその原理に内包

した古墳再利用が行われるようになる。なお、13世紀には古墳を中心にその廻りに造墓を行う事例が増加し、これらが整墓につながる場合がある。

- 19) 銭貨は、これらの他に炭化物層を中心に、治平元年（初鎔1064年）・政和通寶（初鎔1111年）・淳熙元年（初鎔1174年）・洪武通寶（初鎔1368年）が出土している。銭貨自体の年代からいえば、第1期まで遡るが、銭貨は後世にも使用されるため、必ずしも初鎔年に近い時期に使用されたとは限らない。むしろ、出土のあり方からは水密通寶と同時に使用された可能性が考えられよう。
- 20) 伊達宗奈他 1972 「鳥塚古墳・ツボリ山古墳・三里下垣内・椿井・竜田山出土の陶棺・平隆寺旧境内等調査」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 奈良県教育委員会
- 21) 高井田横穴群第4支群39号墳では墓道付近から13世紀後半頃の土師質土釜が出土しているが、口縁部から鉢部にかけての破片から10個体近く存在したと考えられるにもかかわらず、体部の破片が少ないとから、体部を欠いた土釜を使用した祭祀的行為が想定されている（柏原市教育委員会 1992 「高井田横穴群IV」『柏原市文化財概報1992-Ⅱ』 柏原市教育委員会）。
- 22) 上井光一郎氏は「石室再利用の墓地は13世紀中葉から後葉頃に発生し、13世紀代に石組墓から14世紀代に土師質土釜の藏骨器へと展開し、早い所は13世紀末期から14世紀前葉頃には終焉を迎える、遅い所は、15世紀前葉頃に終焉を迎える状況がうかがえる」とし、土釜の藏骨器としての利用を想定している（上井光一郎 1992 「中世墓に対する一考察－奈良県内における古墳石室再利用の中世墓について－」『花岡史学』13）。
- しかし、佐藤圭重氏は前掲註21の事例から、「大和でも13世紀に入ると再利用に使用される土器にそれまでの椀・皿に加え、釜が加わるが、その使用法に関しては注意を要しよう」と指摘していることから（前掲註18、佐藤2002）、土釜を藏骨器として使用したと妥当に結び付けることはできないであろう。実事、当墳より骨片が出土していないことがこのことを傍証する。ただし、墓の遺物組成としてよくみられる土釜・青磁・土師皿・刀子・鉄釘・鉄鎌・銭貨が出土していることから、その可能性も捨てきれない。詳細は本報告書115頁を参照されたい。
- 23) この時期の石室再利用例は大和では少ないが、例として仮塚古墳（斑鳩町）を挙げる。当古墳は12世紀後葉前後から瓦器碗・土師器皿を用いた燃燈供養が行なわれ、その後空白期間を経て14世紀末～15世紀前半葉にかけて、密教莊嚴を備えた華・香・供食・燈供養が行なわれたとされている。そして、これが法隆寺郡における郷墓形成における供養の場とされ、特にこれに関与したのが法隆寺寺辯律僧であったと考えられている（今尾文昭 2001 「斑鳩・極楽寺墓地と仏教古墳墓室の再利用－郷墓形成過程の「形態」－」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』 国立歴史民俗博物館）。

## 第Ⅷ章 総括

平野地区に残されていた江戸時代の古文書から平野2号墳が古墳であることは知られていたものの、現代まで石室は閉ざされており、石室の有無や形態等について全く不明であったが、平野2号墳で実施した第1次調査と第2次調査の合計2次にわたる発掘調査によって未だなる横穴式石室の発見とともに終末期古墳を研究する上で数々の貴重な成果が得られた。

平野2号墳は復元推定直径26m前後、高さ6.5m前後の円墳で、墳丘の中心部よりやや南側に横穴式石室が構築されている。横穴式石室の規模は、全長（残存長）約10.6mで、玄室の長さ約3.8m、幅約2.5m、高さ約2.2m、羨道の長さ（残存長）約6.8m、幅約2.0m、高さ約1.6mを測る。大和川の支流である葛下川流域の北葛城地域でこれまで確認されている7世紀代の終末期古墳の中では最大級の規模を誇る。全体的にみて、横穴式石室は、羨道・玄室ともに花崗岩の巨石を縦位に使ってほぼ垂直に立てて構築していることが特徴的であり、玄室床面の中央部に上で構築した土台（突出部）を棺台基礎として設け、玄室の床面全面に二上山で産出する凝灰岩の切石を敷き詰めた横穴式石室としては類例のない石室構造を持つ古墳であった。玄室内における棺台基礎の位置や規模から單体埋葬であり、また、家形石棺に伴う石棺の部材は無いことや石室構造からみても棺材は木棺等の有機質の棺（柩）であったものと推定される。

横穴式石室内部には無数の凝灰岩の碎片とともに各所に多数の中世土器や錢貨が散乱しており、特に玄室内部は徹底的に搅乱されていた。石室内で執り行っていた具体的な祭祀の内容は不明であるが、出土土器から、11世紀後半から15世紀にかけて玄室内部と古墳墳丘を含めて古墳全体が何らかの祭祀的行為を行なう祭祀場・祭祀空間として再利用されていた跡跡がうかがえる。

一般的に7世紀代の終末期古墳の副葬品は減少することが指摘されているが、当古墳でも土器をはじめ、副葬品というべき遺物は極めて少なく、改めてこの現象を追認することができた。

古墳の明確な帰属時期は不明であるが、石室の石積技法や石室の形態、石室内に僅かに残された須恵器の破片等から勘案して、隣接する平野1号墳（7世紀第1四半期）よりもやや新しい7世紀中頃（7世紀第2四半期）の築造時期が推定される。平野3号墳を7世紀第4四半期に、平野塚穴山古墳を7世紀第3四半期に比定すると、平野古墳群の中で考古資料を通して確認できる古墳の中では、横穴式石室を主体部とする平野1号墳から平野2号墳、そして、横口式石槨を主体部とする平野塚穴山古墳、平野3号墳へと平野古墳群中の古墳の変遷を解明することができたのをはじめ、横穴式石室から横口式石槨へと同一の古墳群における7世紀代の終末期古墳の石室構造の変質・変遷過程を考える上で貴重な考古学的資料を得ることができた。

平野2号墳の第1の特徴として石室の一部に凝灰岩を使用する石室構造があげられる。平野古墳群の中でも平野塚穴山古墳の横口式石槨は、石室を構成する全ての部材を二上山産の凝灰岩の切石で組み立てて構築した石室の初現・転機として位置づけられており、天皇・皇族級の高位の被葬者像が想定されるキトラ古墳やマルコ山古墳、天武・持統天皇陵、高松塚古墳等の7世紀後半以降の飛鳥地域に盛行する凝灰岩使用石室の祖型と考えられている。平野2号墳の横穴式石室の石室構造は、玄室内に床石等の床面構造を持たない横穴式石室でありながらも玄室床面に凝灰

岩の切石を設置して石室の一部を構成するという意味において、後続する平野塚穴山古墳等の二上山産の凝灰岩の切石を組み立てて構築した横口式石槨に続く先駆的な要素が認められる。

平野2号墳の第2の特徴として壇と棺の受台を棺台として使用する棺の特異な埋葬形態があげられる。棺の受台は、木棺等の有機質の棺を保護・収納するための外容器として、壇は、棺の受台の高さを調節するための棺敷として使用されていたものと推定され、両者の土製品を組み合わせて玄室床面の棺台基礎の上面に設置し、棺の受台の中に木棺等の有機質の棺を安置していたものと推定される。このような土製の棺台に棺を安置する埋葬形態は、平野2号墳以外では塚廻古墳出土綠釉陶棺に類例があり、埋葬施設内に壇を棺台、棺敷として使用する事例も南河内地域を中心とする近畿地方の終末期古墳に多くみられる。中でも、平野2号墳と同様の赤褐色の土師質の薄いタイプの壇は、羽曳野丘陵や周辺地域を中心に分布する傾向があり、南河内地域の終末期古墳との関連性がうかがえる。さらに、石室床面に壇や磚等で加工した切石状の工作物で棺台を構築する石室の祖型として大韓民国の陵山里古墳群の東下塚古墳や中下塚古墳、宋山里古墳群の熊津洞古墳等に類例があることから、潜在的には百濟の墓制からの影響も考えられる。

平野2号墳の玄室床面の棺台基礎や二上山産の凝灰岩切石敷の床面構造、土製の壇と棺の受台で構成される棺台は、いずれも棺を埋葬するための棺台を構成する装置として一体となって設置されており、平野2号墳の玄室には死者を埋葬するための空間として棺台を強く意識した石室構造がとられているように感じられる。石室内への棺台の設置は、漆塗棺等の有機質の棺材の盛行に伴って7世紀中頃以降の飛鳥地域の横口式石槨を主体部とする終末期古墳に盛行する埋葬形態の一つであり、平野2号墳は、石室内に棺台を設置した古墳の先駆形態として注目される。

平野古墳群全体の地域的特質として石室材に二上山産の凝灰岩を多用する石室構造があげられる。凝灰岩使用石室は南河内地域を中心とする二上山麓の終末期古墳に多くみられ、平野古墳群は凝灰岩使用石室の成立・展開を研究する上で重要な古墳として位置づけられる。

また、平野2号墳の壇や磚状に加工した切石状の工作物と棺の受台で棺台を構成して棺を安置する埋葬形態や平野塚穴山古墳の漆塗籠棺と夾紵棺の2種類の漆塗棺を一对として使用する棺材の構成方法は、全国でも唯一、塚廻古墳に類例があり、壇も南河内地域の7世紀の二上山麓の終末期古墳との関係が認められる。さらに、平野塚穴山古墳と百済の王陵である陵山東下塚古墳との石室構造の類似性が認められるのをはじめ、南河内地域を含めた構築棺台の祖型として陵山里古墳群や宋山里古墳群等の百済の墓制との影響も認められる。

このように、平野2号墳の調査により、平野古墳群全体を検討することが可能となり、二上山麓の南河内地域における終末期古墳との関係を始め、凝灰岩使用石室の系譜や変遷、棺の埋葬形態の変遷等の7世紀の終末期古墳を研究する上で貴重な考古学的知見を得ることができた。

平野古墳群の被葬者は、從来から時期的に併存する北方の尼寺廢寺の造営者と同一集団と考えられており、6世紀後半以降に当地へ進出してきた敏達天皇系王族末裔の苅渟王一族の可能性が指摘されている。平野古墳群と尼寺廢寺は、ある程度、造営者像が把握でき、同一集団の造営と推定される古墳と寺院が近接して併存する数少ない事例であり、大和における7世紀の権力者の動向や政治的関係等の北葛城地域北部の地域史を研究する上で貴重な資料となり得る。今後、平野古墳群と尼寺廢寺をはじめ、周辺地域の発掘調査に基づく考古資料と文献史料も交えた総括的な研究により、当地域の歴史像が解明されることを期待したい。

---

# 図版

---



平野2号墳墓道からみた玄室内



1. 二上山麓を中心とする大阪府と奈良県境付近の航空写真(昭和22年撮影)と東西の主要街道及び道跡の分布 (上が北)



1. 奈良盆地西部の航空写真（昭和22年撮影）と遺跡の分布（上が北）



1. 香芝市北部の航空写真（昭和40年撮影）と遺跡の分布（上が北）



1. 平野古墳群と尼寺北廐塚周辺の航空写真（昭和40年撮影）と遺跡の分布（上が北）



1. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（昭和38年撮影、上が北）



2. 平野古墳群（平野1号墳・平野2号墳他）周辺上空の航空写真（平成12年撮影、上が北）



1. 平野1号墳・平野2号墳  
航空写真  
(東上空から、上が西)



2. 平野1号墳・平野2号墳  
航空写真  
(南上空から、上が北)



3. 平野1号墳墳頂部より  
平野2号墳と二上山を  
臨む (北東から)



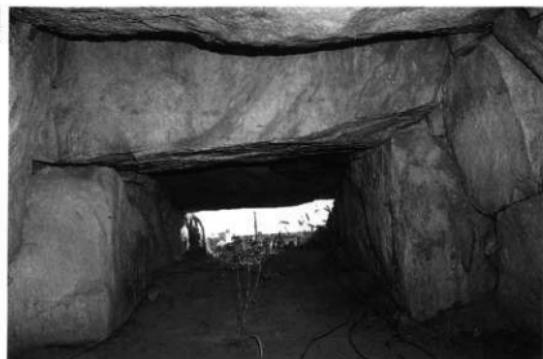
1. 平野1号墳（平成6年頃）  
の状況（南から）



2. 平野1号墳樹木伐採後・  
測量時の状況（南から）



3. 平野1号墳横穴式石室  
現況（南から）



1. 平野1号墳横穴式石室  
玄室から漢道を臨む



2. 平野1号墳横穴式石室  
玄室右側壁（南西から）



3. 平野1号墳横穴式石室  
玄室右側壁（西から）



1. 平野 1 号墳横穴式石室  
奥壁（南から）



2. 平野 1 号墳横穴式石室  
羨道左側壁（北東から）



3. 平野 1 号墳横穴式石室  
羨道左側壁（南東から）



1. 平野1号墳横穴式石室  
羨道左側壁（北東から）



2. 平野1号墳横穴式石室  
羨道右側壁（北西から）



3. 平野1号墳横穴式石室  
羨道右側壁（西から）



1. 平野 2 号墳昭和56年当時の状況（北西から）



2. 平野 2 号墳樹木伐採後、調査前の状況（東から）



3. 平野 2 号墳調査区全景（東から）



1. 平野 2 号墳第 1・2・3  
調査区埴丘の櫛集積箇所  
検出状況（東から）



2. 平野 2 号墳第 1・2・3  
調査区埴丘の櫛集積箇所  
検出状況（北東から）



3. 平野 2 号墳第 3 調査区  
埴丘裾部の櫛集積箇所  
検出状況（東から）